秋田県文化財調査報告書第443集

沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡

－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－

２００９・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市白坂(しろざか)遺跡出土
の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭。1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

沖田遺跡（おきたいせき）・沖田Ⅱ遺跡（おきたにいせき）

－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－

２００９・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に先だって、平成19年度に実施した沖田遺跡と平成20年度に実施した沖田Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

調査の結果、沖田遺跡からは平安時代の掘立柱建物跡、土坑などの遺構とともに、墨書された土師器や須恵器などの遺物が発見され、当時の人びとの生活の一端が明らかになりました。

また、沖田Ⅱ遺跡からは江戸時代の掘立柱建物跡、かまど状遺構、井戸跡などの遺構とともに、陶磁器や煙管などの遺物が発見されました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成21年３月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　　言

1　本書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の３冊目である。

2　本書は、平成19(2007)年度に調査した秋田県大仙市北楢岡字沖田に所在する沖田遺跡と、平成20(2008)年度に調査した沖田Ⅱ遺跡の調査成果とを収めたものである。

3　調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。

4　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の１『大曲』・『刈和野』、25,000分の１『大曲』・『刈和野東部』、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1,000分の１工事路線計画図である。

5　遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2004年版に依拠した。

6　沖田遺跡の空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

7　自然科学的分析は、株式会社加速器分析研究所とパレオラボに委託し、その分析結果を掲載した。

8　本書の草稿執筆は、沖田遺跡を栗澤光男、杉井克之、佐々木公法が、沖田Ⅱ遺跡を山村剛、袴田道郎、菅原博志、長谷川幹子が行った。

9　本書の編集は、栗澤光男、山村　剛、菅原博志が行った。

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、柱穴様ピットが掘立柱建物跡や柱列を構成すると判断できた場合は欠番とし、掘立柱建物跡に新たな番号を付した。

ＳＱ・・・配石遺構　　ＳＢ・・・掘立柱建物跡　　ＳＫ・・・土坑　　ＳＥ・・・井戸跡
ＳＯ・・・かまど状遺構　ＳＮ・・・焼土遺構　　ＳＬ・・・河道跡　ＳＤ・・・溝跡
ＳＡ・・・柱列　　ＳＸ・・・性格不明遺構　　ＳＫＰ・・・柱穴様ピット

2　遺跡基本土層にはローマ数字を、遺構土層には算用数字を使用した。

3　古代の土器のうち、須恵器には断面にスクリーントーンを貼って土師器と区別した。

4　陶磁器の施釉範囲にはスクリーントーンを貼ったが、染付の文様が隠れてしまう恐れがある場合は省略した。

5　土器の拓影配置は、表裏を採拓した場合は、断面の左側に裏面、右側に表面を配置した。表面だけ採拓した場合は、断面の左側に配置した。

6　挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。

焼土

炭化物

須恵器断面

釉

黒斑

目　　次

序
例言・凡例
目次
はじめに……1
　調査に至る経過……1
　調査要項……3
遺跡の環境……4
　遺跡の位置と立地……4
　歴史的環境……5
沖田遺跡
第１章　発掘調査の概要……11
　第１節　遺跡の概観……11
　第２節　調査の方法……11
　第３節　調査の経過……16
　第４節　整理作業の方法と経過……18
第２章　調査の記録……19
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……19
　　１　検出遺構……19
　　２　遺構外出土遺物……19
　第２節　平安時代の遺構と遺物……23
　　１　検出遺構と遺物……23
　　２　遺構外出土遺物……55
　第３節　近世以降の遺構と遺物……62
　　１　検出遺構と遺物……62
　　２　遺構外出土遺物……75
第３章　まとめ……76
図版

沖田Ⅱ遺跡
第１章　発掘調査の概要……83
　第１節　遺跡の概観……83
　第２節　調査の方法……84
　第３節　調査の経過……85
　第４節　整理作業の方法と経過……87
第２章　調査の記録……88
　第１節　遺構と遺物……88
　　１　検出遺構と遺物……88
　　２　遺構外出土遺物……124
第３章　まとめ……127
図版
報告書抄録

はじめに

調査に至る経過

一般国道13号神宮寺バイパス建設事業は、大仙市花館から大仙市北楢岡に至る全長9.6㎞を自動車専用道路として整備する事業である。

神宮寺バイパスが整備されることにより、交通混雑の解消と冬期における道路交通の安全性の向上が図られるとともに、平成13年度に完成した刈和野バイパス及び大曲バイパスと一体的に機能することで、大曲都市圏の産業・経済・文化の一層の発展が期待される。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査を実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

平成14(2001)年度に薬師遺跡の確認調査を行い、中世の遺構と遺物を確認したことから、翌15(2002)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、12世紀後半から13世紀半ばにわたる掘立柱建物跡13棟、かまど状遺構11基、井戸跡１基、道路跡３条、溝跡19条、土坑61基など111遺構と、須恵器系中世陶器や瓷器系中世陶器が出土し、中世の集落跡と確認した。

平成17(2005)年度に布田谷地遺跡の確認調査を行い、平安時代の遺構と遺物を確認したことから、翌18(2006)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の陥し穴２基、平安時代の竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡９棟、井戸跡７基、土坑19基、焼土遺構９基、溝跡２条などの遺構と、縄文土器、石器、土師器、墨書土器、須恵器、曲げ物などが出土し、縄文時代には狩猟場として使われ、平安時代には集落として使われたことがわかった。

平成18(2006)年度に沖田遺跡の確認調査を行い、縄文時代の遺物及び平安時代の遺構と遺物を確認したことから、翌19(2007)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の配石遺構１基、平安時代の掘立柱建物跡１棟、土坑４基、河道跡３条、近世の井戸跡８基などの遺構と、縄文土器、土師器、須恵器、墨書土器、陶磁器、曲げ物などが出土し、平安時代には集落として使われたことがわかった。また、近世にも集落の一部として使われたと考えられる。

平成19(2007)年度に沖田Ⅱ遺跡の確認調査を行い、近世の遺構と遺物を確認したことから、翌20(2008)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、近世の掘立柱建物跡18棟、かまど状遺構９基、井戸跡４基、柱列４条、溝跡22条、河道跡２条などの遺構と、近世の陶磁器や煙管などが出土したことから、近世の集落跡の一部であると考えられる。

参考文献

秋田県教育委員会　「薬師遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」　秋田県文化財調査報告書第388集　2005（平成17）年

秋田県教育委員会　「布田谷地遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－」秋田県文化財調査報告書第433集　2007（平成19）年

第１図　神宮寺バイパス建設予定地内の遺跡位置

調査要項

遺　跡　名	沖田遺跡(おきた いせき)　遺跡略番号：７ＯＴ
遺跡所在地	秋田県大仙市北楢岡字沖田60番地外
調査期間	平成19年５月31日～11月15日
調査目的	一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る事前調査
調査面積	8,040㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	栗澤　光男（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　副主幹兼調査班長）
	菅原　幹夫（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事）
	杉井　克之（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事）
	伊藤　佳瑞（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査研究員）
	佐々木公法（秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査研究員）
総務担当者	千田　喜博（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）
	佐々木和幸（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
	(担当者・職名は調査時のものである)

遺　跡　名	沖田Ⅱ遺跡(おきた に いせき)　遺跡略番号：７ＯＴⅡ
遺跡所在地	秋田県大仙市北楢岡字沖田387番地外
調査期間	平成20年６月９日～９月10日
調査目的	一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る事前調査
調査面積	2,900㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	山村　　剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事）
	袴田　道郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事）
	菅原　博志（秋田県埋蔵文化財センター南調査班　調査研究員）
	佐々木公法（秋田県埋蔵文化財センター南調査班　調査研究員）
	長谷川幹子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　調査研究員）
総務担当者	千田　喜博（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）
	高村知恵子（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所・大仙市教育委員会

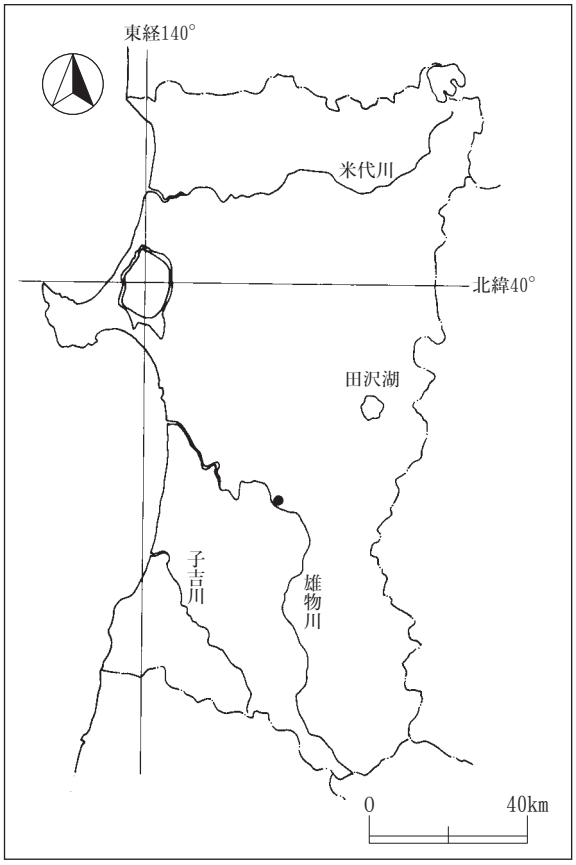
遺跡の環境

遺跡の位置と立地

沖田遺跡及び沖田Ⅱ遺跡のある大仙市は、秋田県の南東部に位置する。平成17(2005)年３月、大曲市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町の一市六町一村が合併し、現在の大仙市が誕生した。東は仙北市・岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市と、南は横手市・美郷町と、北は仙北市と接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道などの陸路・鉄路の結節点として拠点機能の強化が進んでいる。

沖田遺跡は旧神岡町のＪＲ奥羽本線神宮寺駅から北西約2.5㎞の北緯39度30分08秒、東経140度24分11秒、沖田Ⅱ遺跡は沖田遺跡の西側約400ｍの北緯39度30分25秒、東経140度23分36秒に位置する(第２図)。

遺跡の南約２㎞を、横手盆地南端の山地を源流にする雄物川が西流しており、出羽山地を先行的に横断し、秋田平野に出て日本海に注いでいる。遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、台地(段丘地)、低地によって構成される。遺跡の北側一帯は、高野台地が広がっている。高野台地の段丘面は、かつては草地として重視された歴史もあるが、近年は田地や畑地の耕地化が進み、また段丘崖とともに杉の人工林が目立っている。



第２図　沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡位置図

一方、雄物川を挟んだ南東側には出羽山地に属する姫神山山地があり、姫神山(387.6ｍ)や神宮寺嶽(277ｍ)がそびえ、その側辺は段丘や低地になっている。遺跡の東西および南側の低地(中央低台地)は雄物川によって形成された先行谷の中にあり、独特の幅狭い狭窄部低地といった峡谷の景観ではなく、広々とした氾濫平野の感じを強く印象づける眺望である。現在は水田地帯として整備されているが、先行谷最下位の低地には、河原、氾濫平野、砂堆地、旧河道などが散在する。先行谷の広がりは、雄物川下流の刈和野地区や強首地区まで続き、特に強首地区の左岸一帯は、曲流部の緩やかな滑走斜面で、そこには広大な七段の砂礫段丘が、反対の攻撃的斜面には河触崖がみられる。

両遺跡は、西流する雄物川右岸に形成された標高約20～21ｍの河岸段丘上に立地している。地質は、第四紀洪積世に形成された礫・砂および泥層である。

歴史的環境

沖田遺跡(26)は平安時代を主体とする遺跡で縄文時代後期や近世の遺物も出土している。沖田Ⅱ遺跡(27)は近世の遺跡である。二つの遺跡の周囲に所在する縄文時代から近世までの主要な遺跡について概観する。なお、遺跡名の次の(　)内の数字は、第１表と第２図の表示番号に対応している。

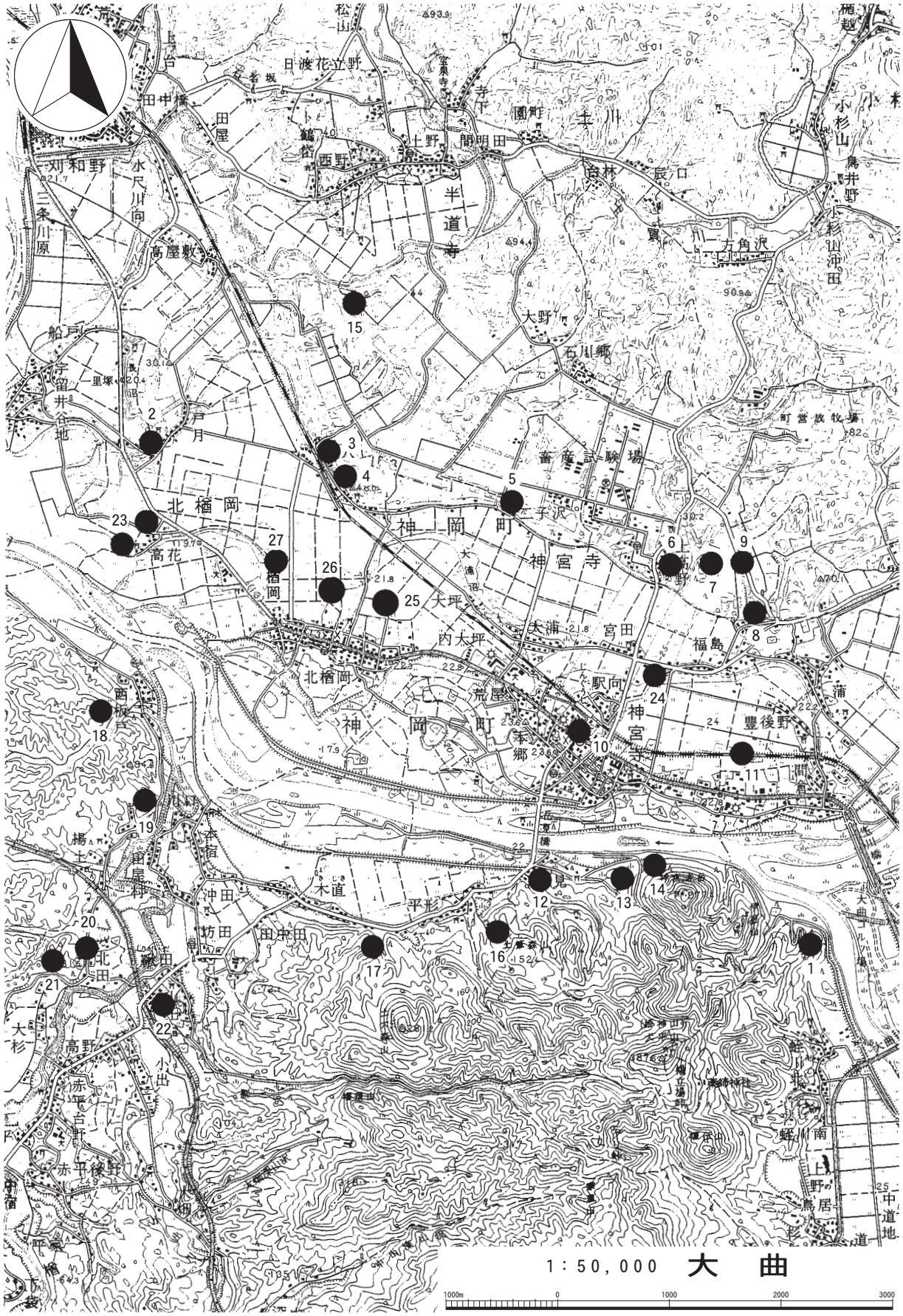
縄文時代の遺跡では、中期から晩期までの計12遺跡が確認されており、晩期の遺跡が多い。中期の高野Ⅰ遺跡(６)・笹倉遺跡(９)、中期～後期の愛宕下遺跡(12)、後期～晩期の薬師遺跡(23)、晩期の萩の台遺跡(３)・上高野遺跡(５)・小沢遺跡(13)・落貝遺跡(14)・茨野遺跡(24)、時期不詳の八石遺跡(４)・北田遺跡(20)・山王台遺跡(22)がある。高野Ⅰ遺跡と笹倉遺跡は、昭和28・29(1953・1954)年に武藤鉄城氏によって発掘調査が行われ、高野Ⅰ遺跡では中期の大木式土器が出土し、笹倉遺跡では７基の組石遺構を検出した。薬師遺跡は平成15(2003)年に発掘調査が行われ、後期と晩期の土器、石鏃・石匙・磨製石斧などの石器類が出土した。小沢遺跡は昭和60(1985)年に確認調査、平成元(1988)年に発掘調査が行われ、晩期の大洞Ｂ～Ａ式の土器が出土し、時期不明のかまど跡が検出されている。落貝遺跡は、昭和40(1965)年に豊島昴氏によって発掘調査され、２基の組石棺を検出し、晩期の粗製土器も出土した。茨野遺跡は、平成14・15(2002・2003)年に旧神岡町教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代後期と中世の集落跡が発見された。愛宕下遺跡からは、青龍刀形石器、石鏃、石棒が出土している。

弥生時代の遺跡は、二つの遺跡周辺では確認されていない。

古代の遺跡では、高野Ⅱ遺跡(７)・坊ヶ沢遺跡(８)・布田谷地遺跡(25)の計３遺跡が確認されている。坊ヶ沢遺跡では須恵器の大甕が出土した。布田谷地遺跡は平成18(2006)年に発掘調査が行われ、平安時代の集落跡から、「大」「万」を縦に重ね合わせた吉祥文字を記した墨書土器が出土した。

また、図幅外であるが沖田遺跡から東南東に約13.3㎞の位置に、平安時代の城柵である国史跡払田柵跡がある。

中世の遺跡では、昭和50年代に行われた分布調査などにより、丘陵上または平地に立地する多数の中世城館が確認されており、松山城(１)・龍蔵寺館(２)・富樫館(10)・神宮寺掃部館(11)・朝夷奈古柵(15)・平形館(16)・木直沢館(17)・猿倉沢館(18)・楢岡城(19)・壇ノ平館(21)が知られている。出羽山地の北東に突出した丘陵端に位置する松山城は、北東方向に並列する２つの嶺上にあり、２つの郭からなる城跡で、前九年の役の頃、阿部貞任・宗任が居城していたと言われている。馬場跡や湧水の存在も指摘されており、須恵器が出土している。龍蔵寺館は、比高およそ５ｍの単郭の館で、郭はほぼ台形である。北東隅に大山祇神社が祭られ、その近くに井戸跡がある。郭の北縁に、土塁が築かれ、その下方には空堀が存在する。郭の西麓には長沼があって内濠の役目を果たしたと推定されている。この館には、長禄(1457～60年)の頃、雄勝松岡城主柴田平九郎の老臣龍蔵寺伯耆守が移り住み、永禄８(1565)年落城したという。昭和50(1975)年に、この館付近で直径30～40㎝、長さ３ｍの、下部が削られ上部が朽ちた杉丸太がほぼ５ｍ間隔で出土した。富樫館は、かつて四方を川や沼沢で囲まれた天然の要塞であったと伝えられる。館を築いたのは富樫佐衛門佐誠白で、文和３(1254)年には氏神白山権現を勧請し、永徳２(1382)年に宝蔵寺を建立している。館跡の東側には蓮沼、北から西へ栗谷田に字名があり、栗谷田は厨田の当て字とも言われる。栗谷田との境には濠跡といわれる用水路があ



第３図　沖田遺跡(26)・沖田Ⅱ遺跡(27)と周辺遺跡位置図

り、また、駅前を東西に横切る水濠があったといわれ、台地の両側にはその跡と思われる幅約30mのくびれが見られる。神宮寺掃部館は長方形の単郭で、周囲の水田より３ｍほど高くなっている。北西の隅に土塁らしき土盛り、東側に犬走り状の低地がある。四周水濠によって囲まれていたと伝えられるが、現在は水田となっており痕跡不明である。館は正慶(1332～34年)の頃に築かれたという。また、平成15(2003)年に発掘調査が行われた薬師遺跡では、12世紀後半から13世紀半ばにわたる掘立柱建物跡、道路跡、かまど状遺構などからなる集落跡が検出され、須恵器系中世陶器や瓷器系中世陶器が出土した。

近世の遺跡では、三本杉経塚・三本塚一里塚・龍蔵台経塚・小豆沢一里塚がある。三本塚一里塚は県史跡になっている。

引用・参考文献

神宮寺公民館 『笹倉・東高野遺跡発掘調査報告書』 1955(昭和30)年
秋田県 『土地分類基本調査　大曲』 1977(昭和52)年
秋田県 『土地分類基本調査　刈和野』 1979(昭和54)年
秋田県文化財保護協会 『秋田県の中世城館』 1981(昭和56)年
秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1987(昭和62)年
秋田県神岡町教育委員会 『小沢遺跡発掘調査報告書』 神岡町文化財調査報告書　1990(平成２)年
秋田県教育委員会　『薬師遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書388集　2005（平成17）年
秋田県教育委員会 『布田谷地遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』 秋田県文化財調査報告書第433集　2007(平成19)年

第１表　沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺 跡 名	遺跡地図登録番号	種　別	主な遺構・遺物
1	松山城	212－８－30	館跡	須恵器
2	龍蔵寺館	212－45－３	館跡	土塁・空堀・井戸跡(陥没)
3	萩の台	212－45－５	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石鏃・石棒
4	八石	212－45－６	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石鏃・石匙・石斧
5	上高野	212－45－７	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石斧
6	高野Ⅰ	212－45－９	遺物包含地	縄文土器(後期・晩期)・土版・石匙・石錐・石錘・石斧
7	高野Ⅱ	212－45－10	遺物包含地	須恵器
8	坊ヶ沢	212－45－11	遺物包含地	須恵器完形甕
9	笹倉	212－45－12	遺物包含地	縄文土器(後期・晩期)・凹石
10	富樫館	212－45－13	館跡	
11	神宮寺掃部館	212－45－14	館跡	
12	愛宕下	212－45－15	遺物包含地	青竜刀型石器・石鏃・石棒
13	小沢	212－45－16	遺物包含地	縄文土器(晩期)・石匙・石棒
14	落貝	212－45－18	遺物包含地	石棺、縄文土器・石鏃
15	朝夷奈古柵	212－46－35	館跡	
16	平形館	212－55－１	館跡	主郭・竪堀
17	木直沢館	212－55－２	館跡	空堀
18	猿倉沢館	212－55－３	館跡	
19	楢岡城	212－55－４	館跡	主郭・腰郭・馬場跡・井戸跡、青磁
20	北田	212－55－５	遺物包含地	縄文土器・有柄石鏃・石匙・石錘・磨製石斧
21	壇ノ平館	212－55－６	館跡	主郭
22	山王台	212－55－７	遺物包含地	竪穴住居跡、縄文土器・石匙・石なた・石棒
23	茨野	212－45－19	集落跡	竪穴住居跡・掘立柱建物跡、縄文土器・石器・青磁・青白磁・須恵器系中世陶器・フイゴ羽口・銭貨
24	薬師	212－45－20	集落跡	掘立柱建物跡・かまど状遺構・土坑・溝跡、縄文土器・須恵器系中世陶器・瓷器系中世陶器
25	布田谷地	212－45－21	狩猟場、集落跡	陥し穴・竪穴住居跡・掘立柱建物跡、縄文土器・土師器・須恵器
26	沖田	212－45－22	集落跡	配石遺構・掘立柱建物跡・土坑・河道跡・井戸跡・溝跡、縄文土器・土師器・須恵器・墨書土器・陶磁器
27	沖田Ⅱ		集落跡	掘立柱建物跡・かまど状遺構・井戸跡・溝跡、土師器・須恵器・陶磁器

沖 田 遺 跡

（７ＯＴ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

沖田遺跡は、ＪＲ奥羽本線神宮寺駅から北西へ約2.5㎞に位置し、遺跡の南方を西流する雄物川右岸に形成された標高約21ｍの河岸段丘上に立地している。雄物川は古来幾度となく氾濫を繰り返し、遺跡周辺には旧河道や砂堆地、河原、氾濫平野などが散在する。遺跡の北側一帯には丘陵地が広がり、北東には雄物川の残存湖である大浦沼がある。また、南東には姫神山や神宮寺嶽の連なる姫神山山地を望む。遺跡の南東約500ｍには、平成18年度に調査を行った布田谷地遺跡がある。

遺跡の現況は休耕田であり、ほぼ平坦な地形である。なお、調査区内を南北に走る市道北楢岡山岸線により調査区が二分されており、便宜的に市道より西側の調査区をＡ区、東側をＢ区、市道をＣ区と呼称した。

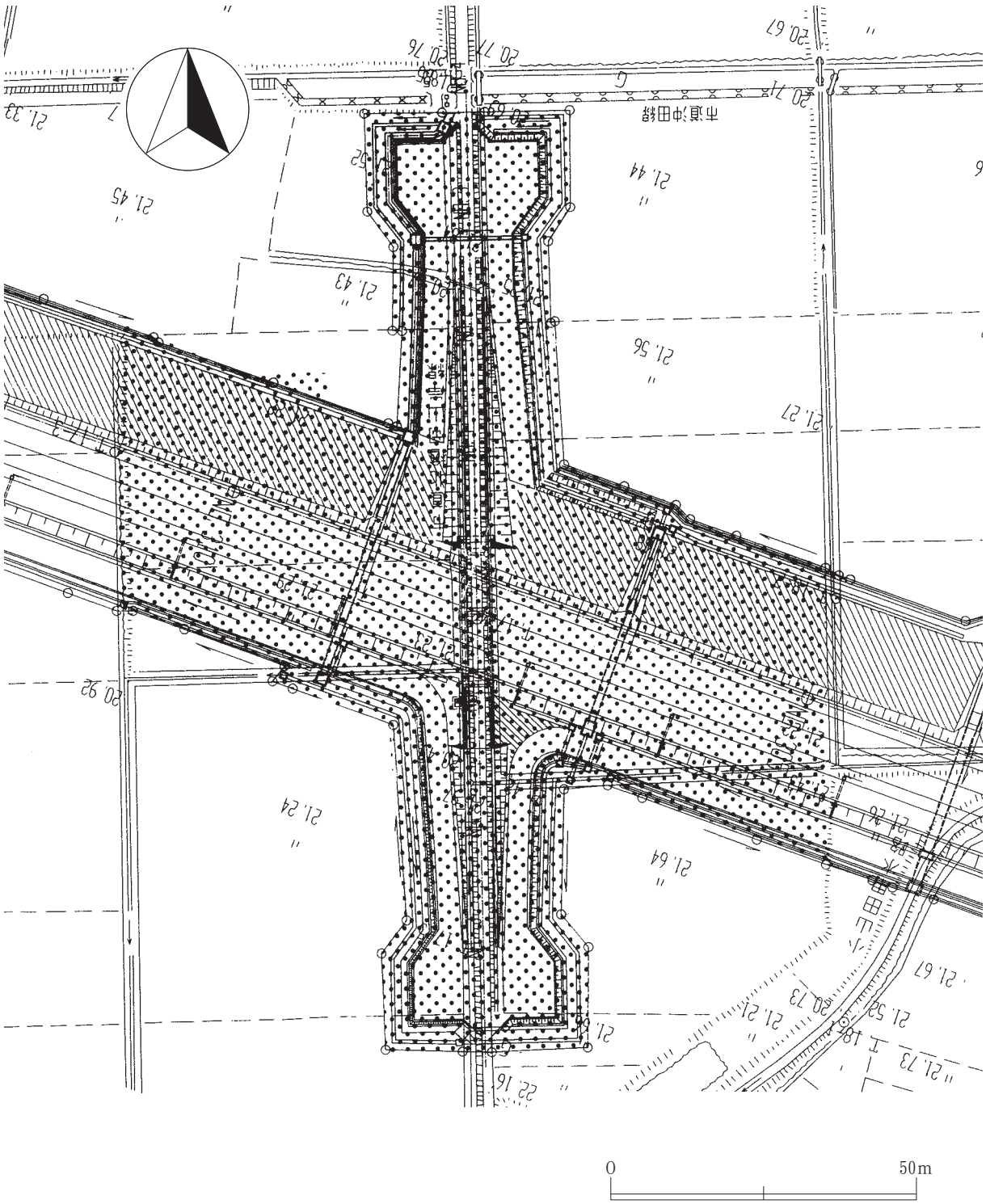
調査区の基本土層は、ＬＴラインに設けた土層観察用トレンチで５層に分層できた(第３図)が、調査区には第Ⅲ層と第Ⅳ層を欠如する箇所が多く見受けられた。おそらく、過去の水田造成などによって削平されたものと思われる。

第２節　調査の方法

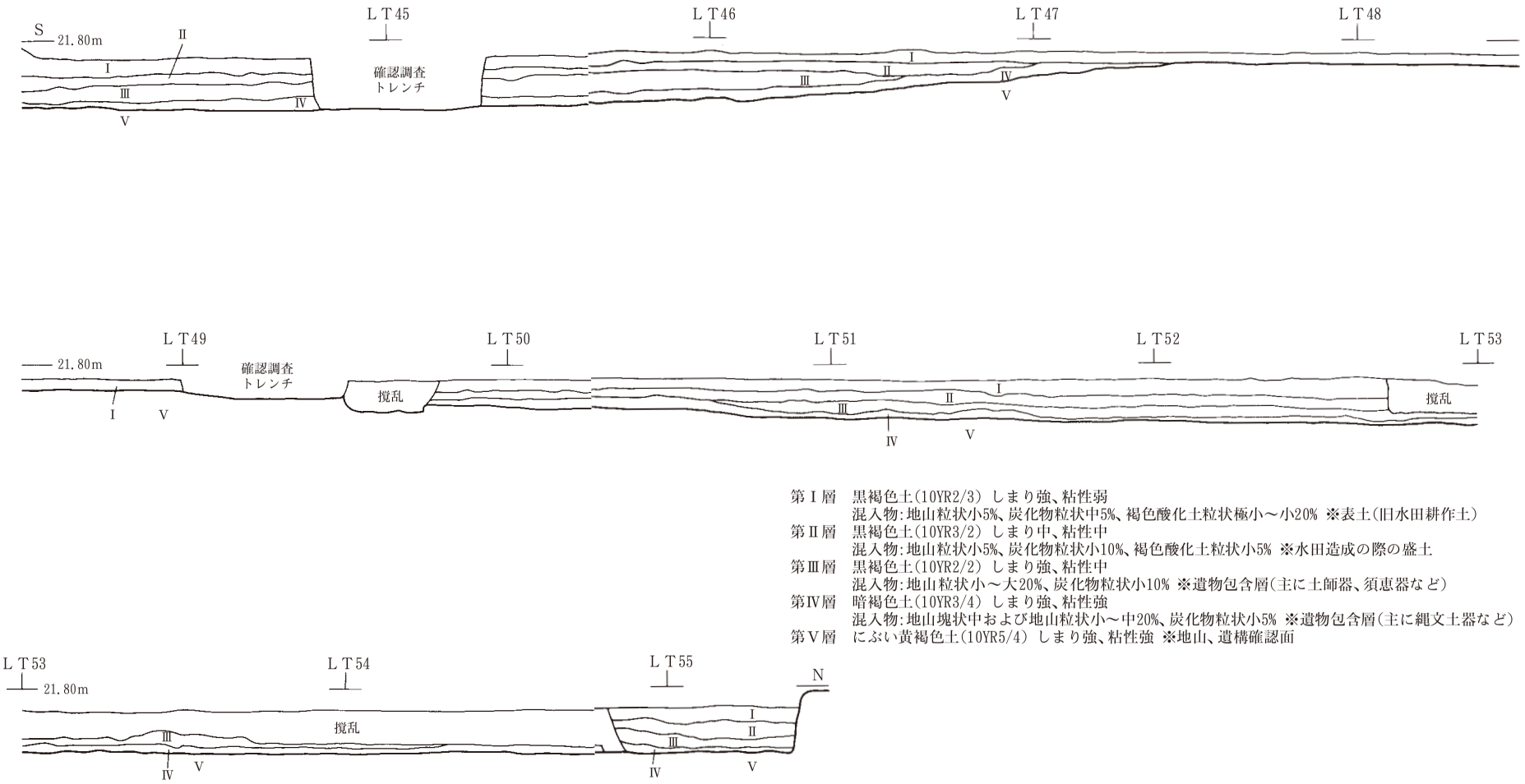
計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は調査区に設置されていた一般国道13号神宮寺バイパス建設の道路中心杭(NO.307、Ｘ＝－54816.565、Ｙ＝－37313.970)をグリッド原点ＭＡ50として、この杭から国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って４×４ｍのグリッドを設定し、グリッド原点ＭＡ50を起点に、東西方向には東から西へ４ｍごとに「ＬＫ・ＬＬ・・・・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・・ＭＲ・ＭＳ」という２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４ｍごとに「33・34・・・・48・49・50・・・・69・70」という２桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４ｍ間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

調査は確認調査の結果に基づき、調査区の東側と西側の一部を除き、バックホーにより表土除去を行った。包含層の掘り下げは大半は手作業で行い、Ｂ区の北側の一部で重機を使用した。遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には35㎜モノクロ・カラー・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラを使用した。



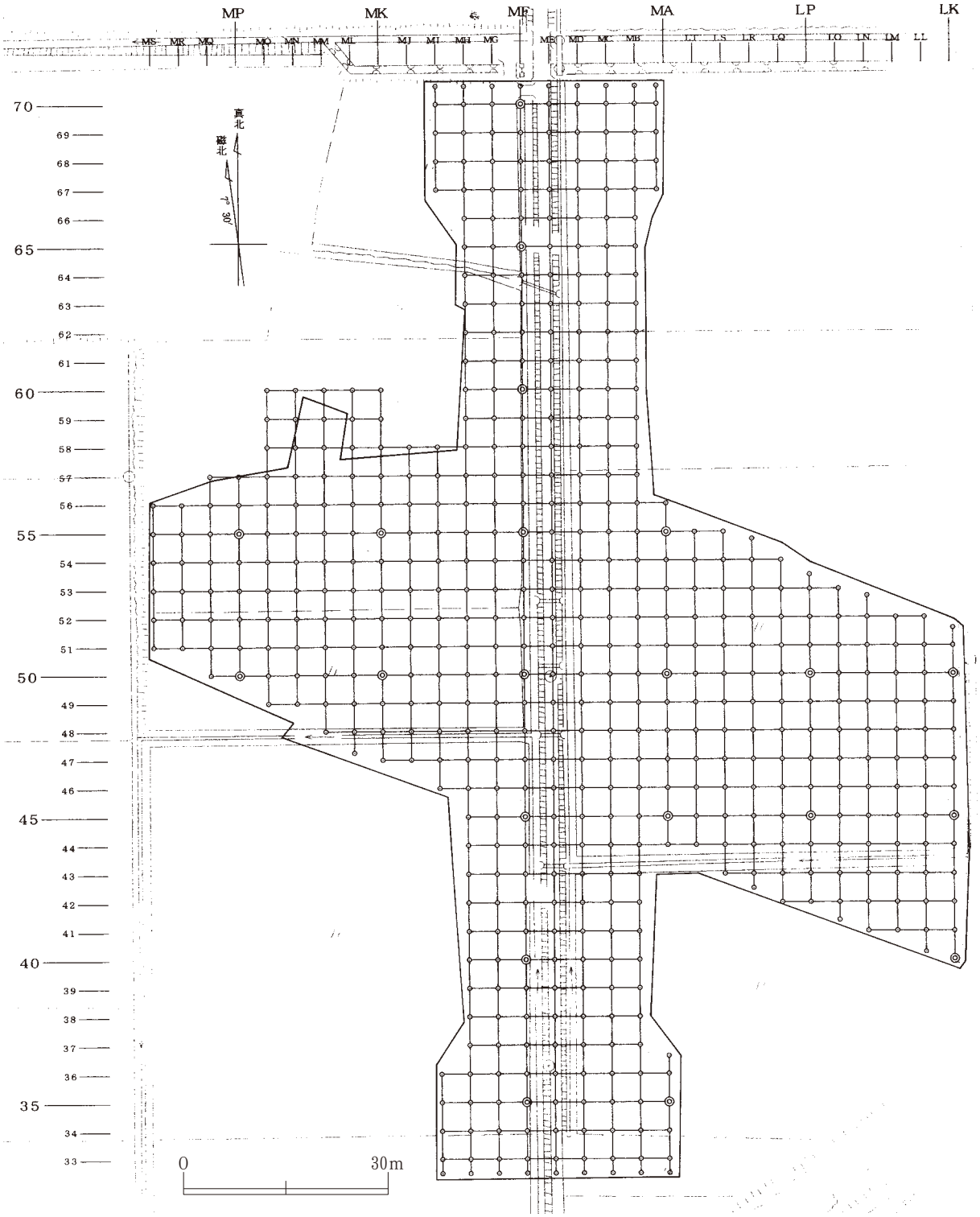
第１図　沖田遺跡発掘調査対象範囲図



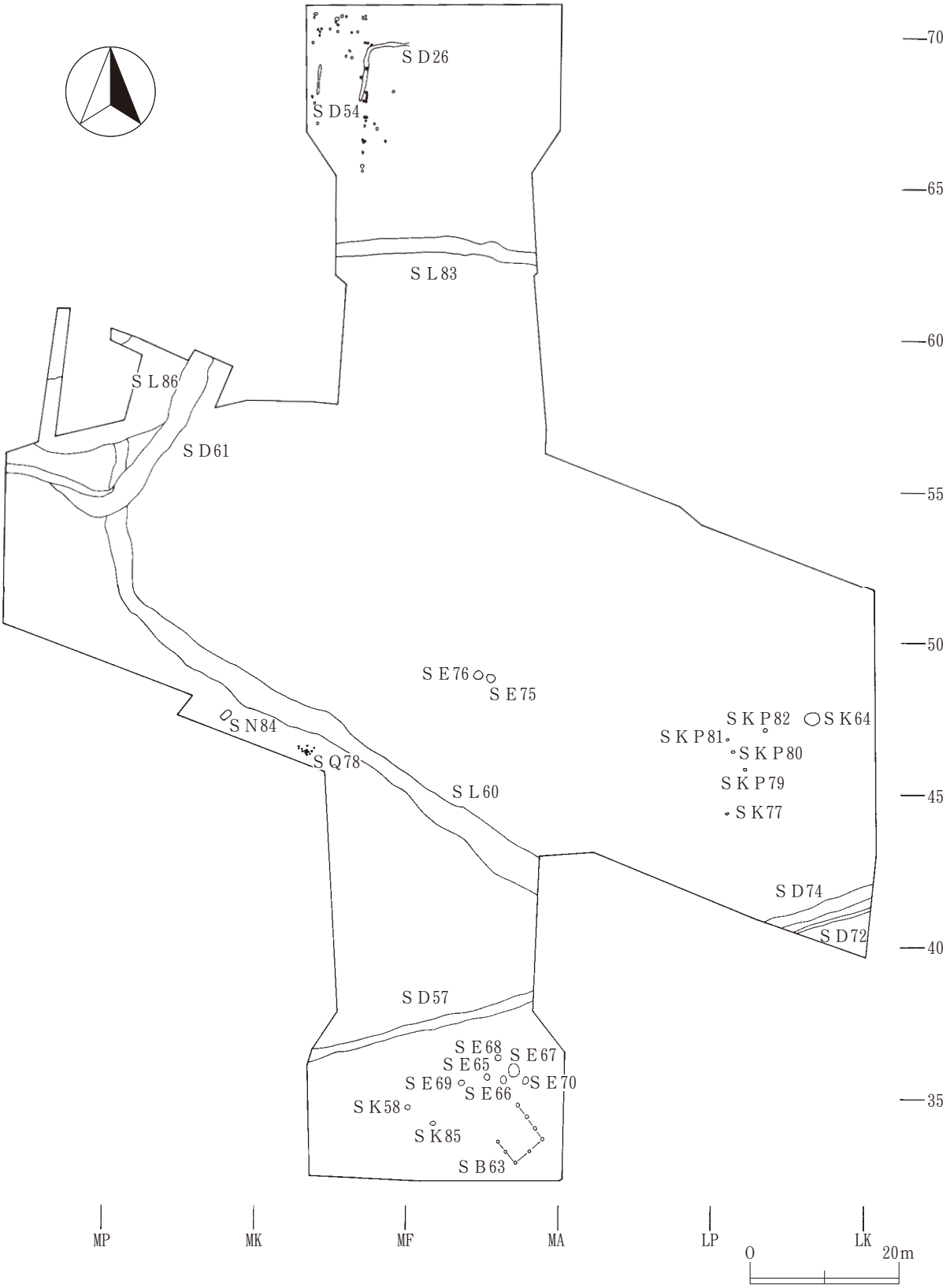
第Ⅰ層　黒褐色土(10YR2/3) しまり強、粘性弱
混入物:地山粒状小5%、炭化物粒状中5%、褐色酸化土粒状極小～小20% ※表土(旧水田耕作土)
第Ⅱ層　黒褐色土(10YR3/2) しまり中、粘性中
混入物:地山粒状小5%、炭化物粒状小10%、褐色酸化土粒状小5% ※水田造成の際の盛土
第Ⅲ層　黒褐色土(10YR2/2) しまり強、粘性中
混入物:地山粒状小～大20%、炭化物粒状小10% ※遺物包含層(主に土師器、須恵器など)
第Ⅳ層　暗褐色土(10YR3/4) しまり強、粘性強
混入物:地山塊状中および地山粒状小～中20%、炭化物粒状小5% ※遺物包含層(主に縄文土器など)
第Ⅴ層　にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり強、粘性強 ※地山、遺構確認面

0　4m

第２図　沖田遺跡基本土層図



第３図　沖田遺跡グリッド設定図



第４図　沖田遺跡遺構配置図

第３節　調査の経過

沖田遺跡の発掘調査は、平成19年５月31日から11月15日まで実施した。以下に各週ごとの調査経過を記述する。

【第１週】５月31日～６月１日

31日、現場事務所の引き渡しを発掘委託業者である宮原組より受けた。１日、大仙市神岡支所、嶽雄館、警察、消防へ調査開始の挨拶を行った。

【第２週】６月４日～６月８日

４日、発掘機材の搬入と環境整備、ベルトコンベアーの搬入・設置作業を行った。５日、Ａ区北端から調査を開始する。７日は、Ａ区中央部に基本土層観察ベルトの設定作業を開始した。４日、埋蔵文化財センター熊谷所長が作業員へ調査開始の挨拶のため来跡。

【第３週】６月11日～６月15日

Ａ区北側と中央部市道沿いで調査を行い、北端部で溝跡２条と柱穴様ピット50基ほど検出した。中央部に設定した東西基本土層の作図を行った。また、東西土層に直交させて南北に土層観察用ベルトを設定した。

【第４週】６月18日～６月22日

Ａ区北側で遺構精査を行った。また、ベルトコンベアーを移動して、Ａ区南側の調査を開始した。さらに、Ｂ区南端でも調査を開始し、土坑１基、溝跡１条を検出した。

【第５週】６月25日～６月29日

Ａ区中央部の調査、北側と南側で遺構精査を行った。また、Ａ区南北方向の土層観察用ベルトの精査を行い、写真撮影をした。

【第６週】７月２日～７月６日

Ａ区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第Ⅴ層面までの掘り下げを行った。北端部では検出した遺構の精査と実測を行った。降雨で冠水するとＡ区は発掘調査ができないため、Ｂ区にベルトコンベアーを移動し粗掘りを行った。

【第７週】７月９日～７月13日

Ａ区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第Ⅴ層面までの掘り下げを行った。北端部では検出した遺構実測を行った。11日と12日の両日は降雨でＡ区が冠水したため、Ｂ区中央部の粗掘りを行った。ＭＯ54グリッドより「人」と書かれた墨書土器が出土した。

【第８週】７月17日～７月20日

Ａ区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第Ⅴ層面までの掘り下げを行った。北端部で平面図を作成した。20日は降雨でＡ区が冠水したため、Ｂ区南端と中央部の粗掘りを行った。18日、中国甘粛省交流員の趙建龍氏、埋蔵文化財センター南調査課長、発掘調査見学のため来跡。19日、大仙市立豊成中学校２年生２名、体験学習のため来跡して発掘調査を体験する。

【第９週】７月23日～７月27日

Ａ区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第Ⅴ層面までの掘り下げを行い、河道跡１条を検出した。また、北端部で遺構の作図を全て完了し、調査を終了した。24日、国交省湯沢河川国道工事

事務所の齊藤建設監督官が現場視察のため来跡。

【第10週】７月30日～８月３日

Ａ区の東西ベルトの除去と北西部で第Ｖ層面までの掘り下げを行った。また、南側で検出した遺構の実測を行った。Ｂ区中央部と南端部で遺構確認作業を行い、南端部で掘立柱建物跡１棟を検出した。７月31日から８月２日まで県立大曲工業高校土木建築科２年生５名がインターンシップを行った。８月１日、埋蔵文化財センター所長、大曲工業高校教諭２名、視察のため来跡。

【第11週】８月６日～８月10日

Ａ区全体の調査範囲及び遺構配置図を作成した。また、Ｂ区中央部と南部で、粗掘りと遺構確認作業を行った。今週は降雨の日が多く、Ａ区は常に冠水状態であり、Ｂ区での作業が中心となった。

【第12週】８月21日～８月24日

Ｂ区中央部と南部で粗掘りと遺構確認作業を行った。21日の午後と22日は雷を伴う豪雨のため、遺物や写真整理を行った。22日、神岡嶽雄館へ沖田遺跡の発掘状況を撮影した写真パネルを展示した。

【第13週】８月27日～８月31日

Ｂ区中央部と南部で粗掘りと遺構確認作業を、北部で粗掘を行った。Ａ区南部の精査を行い、調査後の全景写真を撮影して調査を終了した。また、Ｂ区東端で多数の土器片が入っている焼土遺構(後に土坑)を１基検出した。28日、中国甘粛省交流員の趙建龍氏が調査視察のため来跡。29日、文化財保護室菊池主任学芸主事、秋田大学の学生２名遺跡見学のため来跡。

【第14週】９月３日～９月７日

Ｂ区全体で遺構確認作業を行った。東端で検出した土坑の精査を行い、200片以上の土器片が出土した。７日は台風接近のため作業を休止し、遺物や写真の整理を行った。

【第15週】９月10日～９月14日

Ｂ区全体で遺構確認作業を行った。Ｂ区北側でバックホーにより表土除去を実施した。Ｂ区南端で土坑(後に井戸跡)を、東端で溝跡を検出した。

【第16週】９月18日～９月21日

Ｂ区全体で遺構確認作業を行った。Ｂ区南端の遺構の実測図を作成した。中央部で井戸跡２基を検出した。

【第17週】９月25日～９月28日

Ａ区中央部と北西部で河道跡の堆積土除去を行い、遺物の取り上げをした。また、Ｂ区南端の遺構の実測図を作成した。

【第18週】10月１日～10月５日

Ｂ区南側で遺構の実測を全て完了し、調査を終了した。Ｂ区北側と中央部で遺構確認作業を行った。ＳＬ60河道跡の堆積土中から「寺」と墨書された土器が出土した。２日、取付道路の打ち合せのため、国交省湯沢河川国道工事事務所齊藤建設監督官、文化財保護室菊池主任学芸主事、埋蔵文化財センター南調査課長が来跡。

【第19週】10月９日～10月12日

Ａ区でＳＬ60河道跡の精査を行い、遺物の取り上げをした。Ｂ区北側と中央部で遺構確認作業を行い、河道跡１条を検出した。Ｃ区を調査するための取付道路の工事を開始した。Ａ区北西部で河道跡

が延びる方向を確認するため、調査範囲を拡張した。12日、大仙市教育委員会煙山文化財保護課長、渡邊主事、大仙市文化財巡りの参加者21名、見学のため来跡。

【第20週】10月15日～10月19日

市道の付け替え工事が完了し、Ｃ区の調査を開始した。Ａ区でＳＬ60河道跡と拡張部分の精査を、Ｂ区北側でＳＬ83河道跡の精査を行い、遺物の取り上げをした。Ａ区南端中央部で焼土遺構１基を検出した。

【第21週】10月22日～10月26日

27日に実施予定の沖田遺跡見学会と30日の航空写真撮影に備えて、環境整備を行った。またＣ区で遺構確認作業を行い、南端で土坑を１基検出した。27日、遺跡見学会を実施した。

【第22週】10月29日～11月２日

調査区全体で遺構の精査と実測、遺物の取り上げ作業を行った。30日、(株)シン技術コンサルにより空中写真撮影を実施した。

【第23週】11月５日～11月９日

全調査区で遺構の精査と実測、遺物の取り上げ作業を行い、全ての調査を終了した。ＳＬ60河道跡の堆積土から「寺」「人」の２文字が書かれた墨書土器が出土した。安全対策として、深い箇所の埋め戻しを重機で行った。９日、埋蔵文化財センター熊谷所長が作業員へ調査終了の挨拶のため来跡。

【第24週】11月12日～11月15日

安全対策として深い箇所の埋め戻しを重機で行った。13日、シン技術コンサルが空中写真パネル選定のため来跡。14日、午前10時より埋蔵文化財センター南調査課長立ち会いのもと、国交省湯沢河川国道工事事務所齊藤建設監督官へ調査終了の確認と現場引き渡しを行った。同日午後３時、発掘機材を撤収し埋蔵文化財センターへ搬送した。翌15日、大仙市神岡支所、嶽雄館、警察、消防へ調査終了の挨拶を行った。同日、発掘業務を委託した宮原組へコンテナハウス等の引き渡しを行い、調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター南調査課で行った。出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測・採拓・トレースなどを行った。また、遺構図面については、発掘現場で実測した実測図をもとに第２原図を作製し、それをトレースした。放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

第２章　調査の記録

本調査で検出された遺構は、縄文時代の配石遺構１基、平安時代の掘立柱建物跡１棟、土坑４基、焼土遺構１基、河道跡３条、近世以降の井戸跡８基、溝跡５条、柱穴様ピット55基である(第２図)。これらの遺構は調査区全体にかけて検出された。このうち縄文時代の配石遺構は第Ⅳ層中で検出されたが、以外の遺構は第Ⅴ層(地山)上面で検出された。

遺物は主に第Ⅰ・Ⅱ層で近世以降の陶磁器、第Ⅲ層で平安時代の土師器、須恵器、第Ⅳ層で縄文時代の土器などが出土した。また、遺構堆積土中から平安時代の土師器、須恵器、近世の陶磁器などが出土した。

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　検出遺構

配石遺構

ＳＱ78配石遺構(第５図、図版２－１)

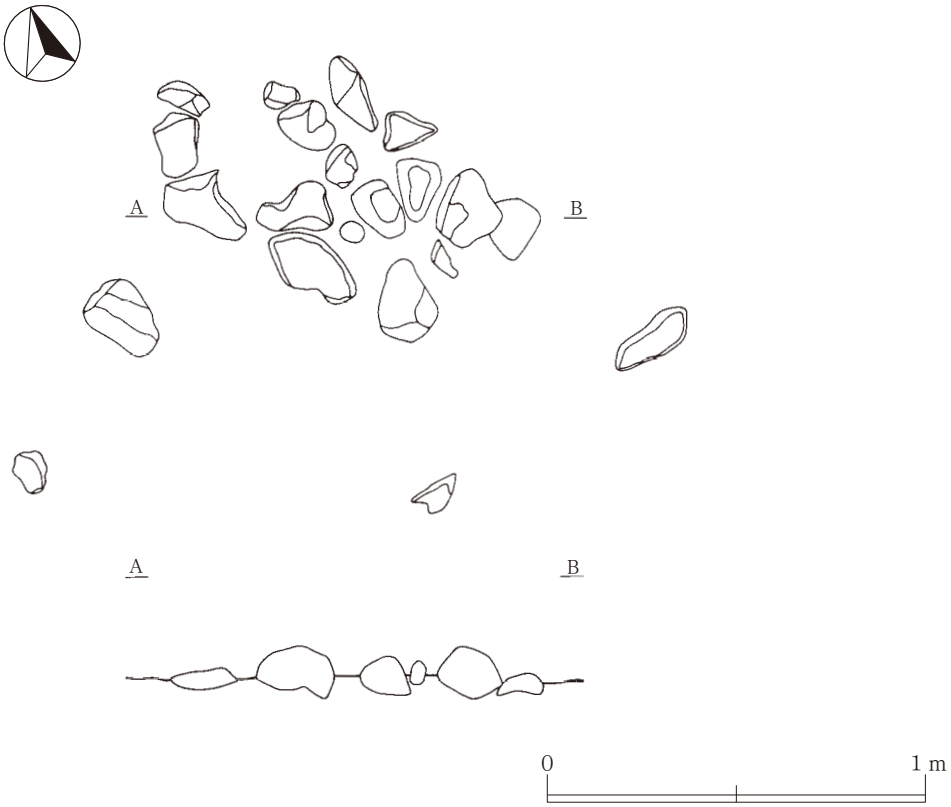
ＭＩ46グリッドの第Ⅳ層中で検出した。長軸(北西－南東)1.52ｍ×短軸(北東－南西)1.4ｍの楕円形の範囲内に、長さ20～55㎝・幅10～33㎝の扁平な礫と拳大～人頭大の角礫計21個が集められていた。いずれの礫にも加工痕や被熱痕跡は見られない。礫群を取りあげた後に掘り込みは検出されなかった。

遺構に伴う遺物は出土しなかったが、本遺構を検出した付近の第Ⅳ層中で縄文時代後期の土器細片が出土していることから、本遺構の所属時期は縄文時代後期に位置するものと考えられる。

２　遺構外出土遺物

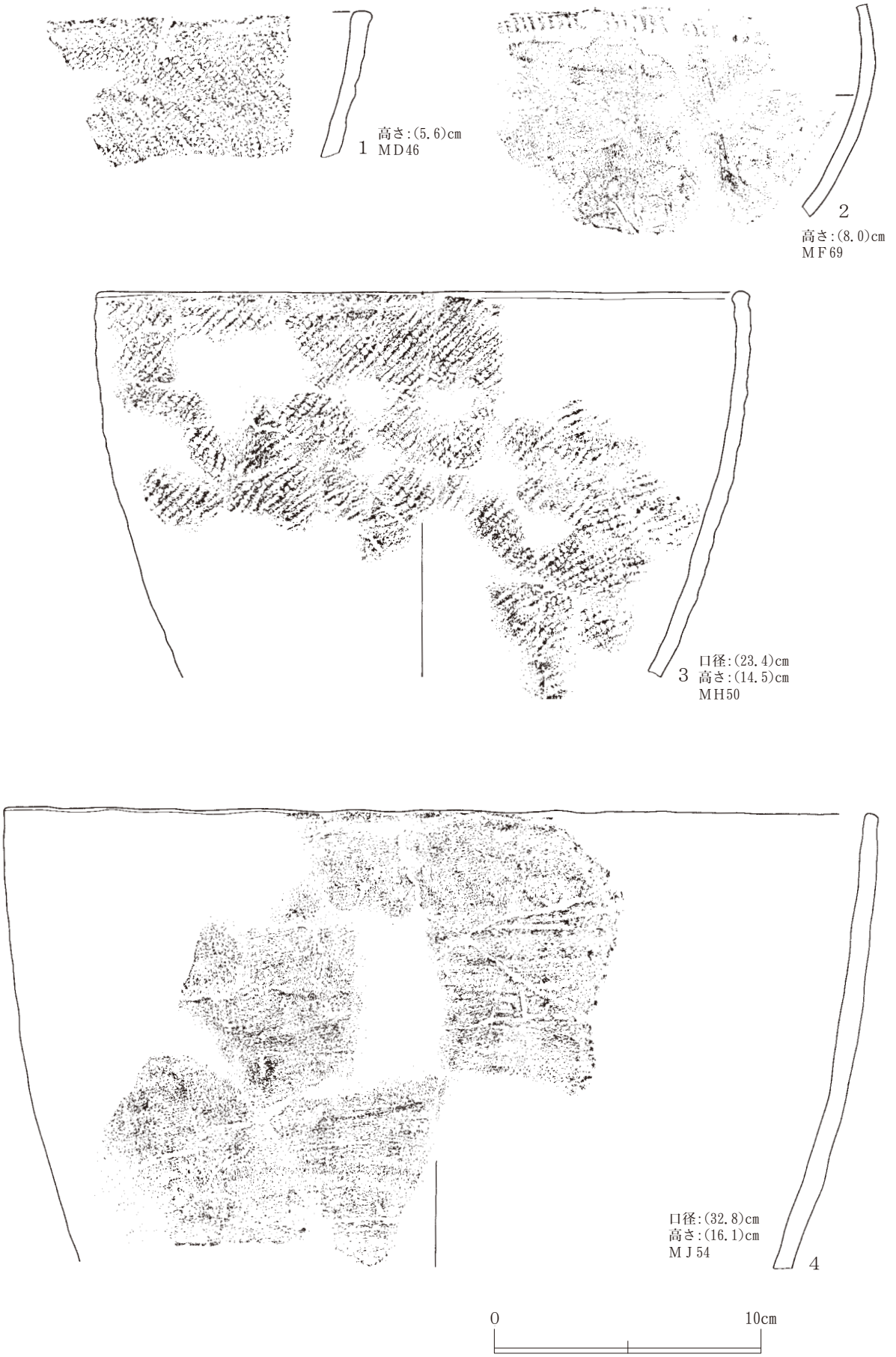
遺構外からは、縄文時代後期の土器片が240点ほど出土した。なお、全体の形状を把握できる接合資料はなかったが、接合復元した土器資料を９点掲載した(第６図１～４、第７図５～９)。

１は深鉢形土器の口縁部の破片である。ＲＬ縄文が横位回転施文されている。２は深鉢形土器の胴部下半の破片である。胴部上位には横位に２条施された沈線間に刻み目が施され、その刻み目上の１カ所には瘤状の小突起が付けられている。この文様下の胴部は無文である。３と４は深鉢形土器の口縁部～胴部上半の破片である。３にはＲＬ縄文が縦位回転施文されているが、４は無文である。５と６は深鉢形土器の胴部下半～底部の破片である。５は胴部に結節のあるＬＲ縄文が縦位回転施文されており、底面には木葉痕が認められる。６の胴部は無文である。底部はその下面内周側がくぼんでおり、いわゆる輪高台状もしくは上げ底をなしている。７と８は深鉢形土器の破片で、同一個体である。７は口縁部の破片である。ＲＬ縄文を縦位回転施文した後で、口縁と平行する沈線が２条施され、その沈線間には横位に断続的に沈線が施されている。この下部には縄文を地文として、やや傾いた状態で沈線が施されている。また、口縁には山形の小突起がある。８は口縁部下半から胴部の破片である。口縁部にはＲＬ縄文が縦位回転施文された後に入組状の文様が施されている。また、口縁部下位には横位に２条の平行沈線が施されおり、この沈線間には横位に断続的に沈線が施されている。胴部には

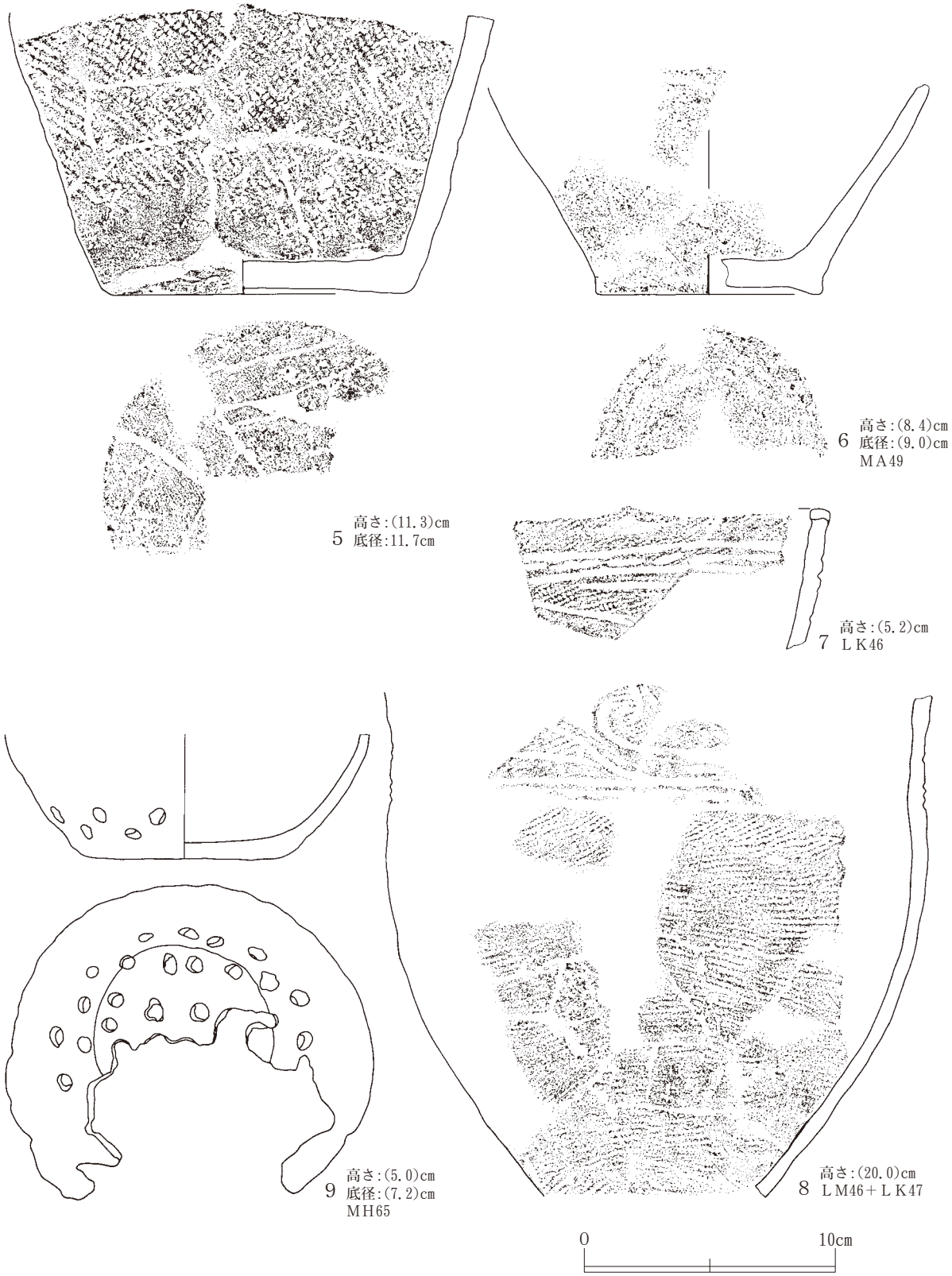


第５図　ＳＱ78配石遺構実測図

ＲＬ縄文が縦位と斜位に回転施文されている。９は小型の鉢形を呈する多孔底土器の底部破片である。無文の底部破片の下位側面から底面には孔が20コ穿たれており、孔は内側から外側に向けて穿たれたものと思われる。



第６図　縄文土器実測図（１）



第７図　縄文土器実測図（２）

第２節　平安時代の遺構と遺物

１　検出遺構と遺物

（１）掘立柱建物跡

ＳＢ63掘立柱建物跡（第８図、図版２－２）

ＭＢ32、ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ33、ＭＡ・ＭＢ34グリッドの第Ⅴ層の地山上面において、規則的に配列する８基の柱穴を検出した。本来は北西側にもう２基の柱穴があったと思われるが、田地の耕作等によって地山まで削平されていたため検出できなかった。

桁行３間×梁行１間の掘立柱建物跡である。桁行総長は東側柱列（Ｐ１～Ｐ４）で5.62m、柱間距離は北からＰ１－Ｐ２間1.94m、Ｐ２－Ｐ３間1.86m、Ｐ３－Ｐ４間1.82m、梁行総長は南側柱列（Ｐ４～Ｐ６）で5.0m、柱間距離は東からＰ４－Ｐ５間2.46m、Ｐ５－Ｐ６間2.54mである。柱掘形は径0.42～0.55mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.15～0.32mである。堆積土は黒褐色土の１層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は東側柱列でＮ－38°－Ｗである。

遺物は出土しなかったが、周辺から土師器甕の破片が出土しており、本遺構の所属時期は平安時代と考えられる。

（２）土坑

ＳＫ58土坑（第９図）

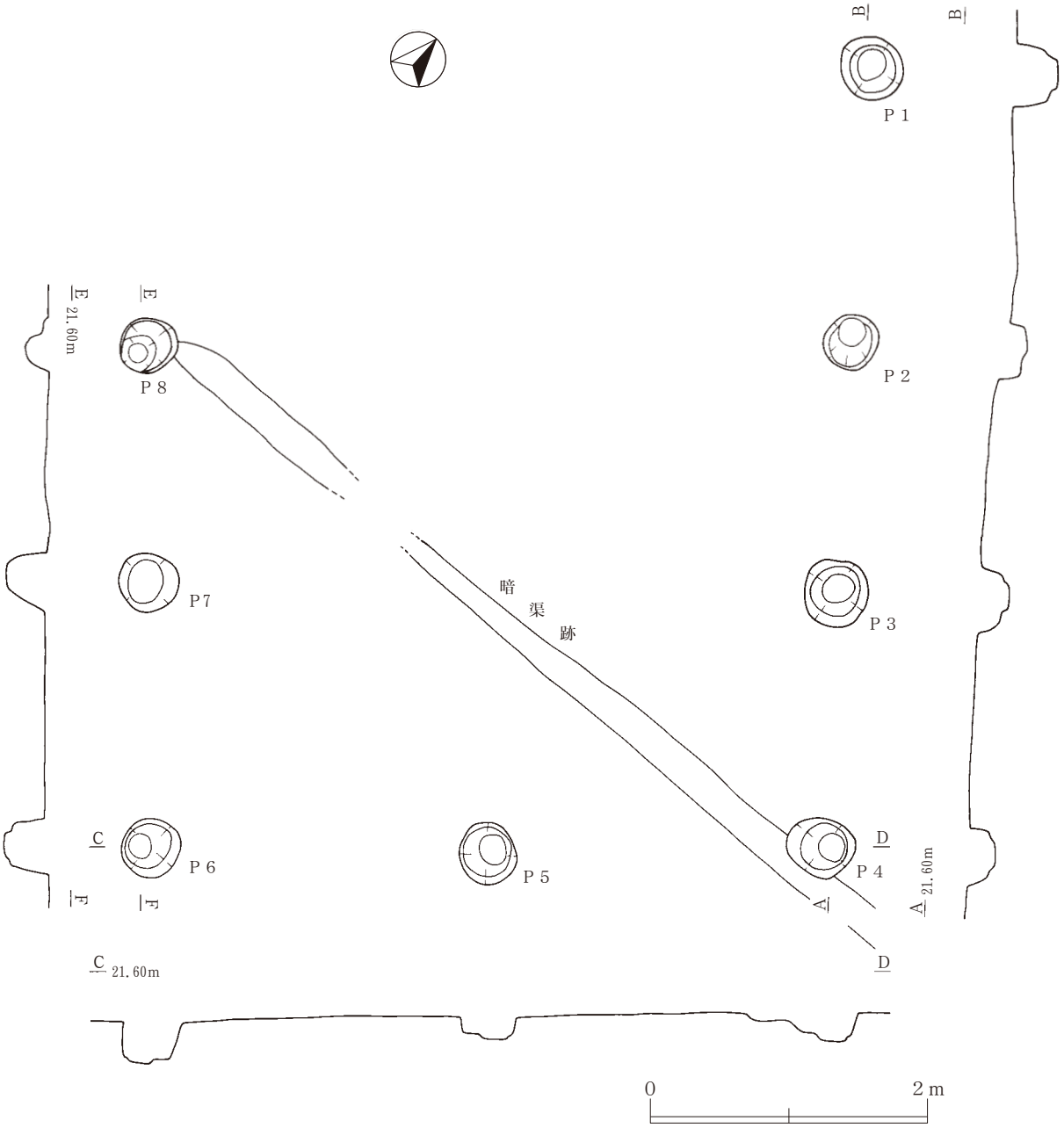
ＭＥ・ＭＦ34グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。周辺にはＳＫ85土坑がある。平面形は長軸（北東－南西）0.77m×短軸（北西－南東）0.77mの不整円形を呈し、検出面からの深さは0.1mである。底面は凸凹しており、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層である。１～２cm大の黒褐色土塊、炭化物粒、土器片が混在している。なお、土抗内に被熱痕は認められず、焼土や土器片などは本土坑に投棄されたものと考えられる。遺物は土師器甕の破片が32点出土した。

ＳＫ64土坑（第９図、図版２－３・４）

ＬＬ47グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。北側の３分の１程度を確認調査トレンチのため、欠損している。平面形は長軸（北西－南東）1.95m×短軸（北東－南西）1.76mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.36mである。底面は部分的に凸凹している。壁の傾きは北と南側がやや急で、東と西側は緩やかである。堆積土は13層に分けられた。全層ともかたくしまっており、堆積土の上位層から下位層にかけて土器片が混入している。これらの土器片は投棄されたものであり、本土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器坏の破片、土師器甕の破片、土師器鍋の破片、須恵器坏の破片、土製品（土錘）１点を含め計257点出土した。そのうち11点を掲載した（第10・11図）。

ＳＫ77土坑（第９図、図版２－７）

ＬＯ44グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。平面形は長軸（東－西）0.57m×短軸（北－南）0.45mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.15mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは東側がやや急で、西側は緩やかである。堆積土は４層に分けられた。全層に土器片が混入しており、３層には焼土

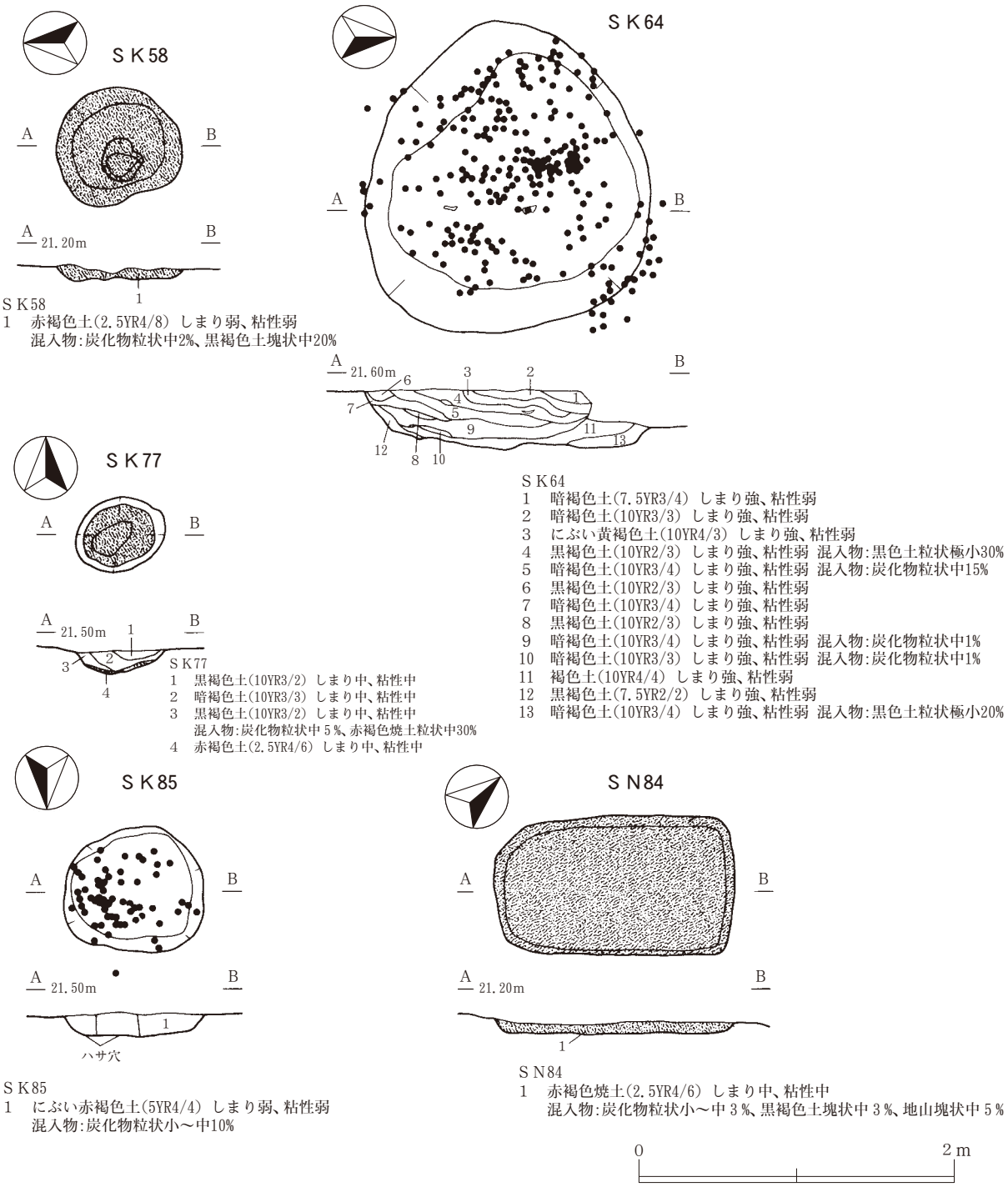


第８図　ＳＢ63掘立柱建物跡実測図

粒が多量に混入している。また、４層は赤褐色焼土であるが、土抗内に被熱痕は認められなかったことから、焼土や土器片は本土坑に投棄されたものと考えられる。遺物は土師器坏の破片、土師器甕の破片などが９点出土した。遺物は２点掲載した(第12図１・２)。なお、本遺構の３層中から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は1110±30yrＢＰ(890～925AD、935～980AD)であった。

ＳＫ85土坑(第９図、図版２－５・６)

ＭＥ34グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。周辺にはＳＫ58土坑がある。東側を近現代の柱穴に切られている。平面形は長軸(北東－南西)0.9m×短軸(北西－南東)0.8mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は４層に分けられた。１～３層は近現代の柱穴の埋土である。４層は本土坑の堆積土である。本層には土器片が混在しており、人



ＳＫ58
1　赤褐色土(2.5YR4/8) しまり弱、粘性弱
　　混入物:炭化物粒状中2%、黒褐色土塊状中20%

ＳＫ64
1　暗褐色土(7.5YR3/4) しまり強、粘性弱
2　暗褐色土(10YR3/3) しまり強、粘性弱
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり強、粘性弱
4　黒褐色土(10YR2/3) しまり強、粘性弱 混入物:黒色土粒状極小30%
5　暗褐色土(10YR3/4) しまり強、粘性弱 混入物:炭化物粒状中15%
6　黒褐色土(10YR2/3) しまり強、粘性弱
7　暗褐色土(10YR3/4) しまり強、粘性弱
8　黒褐色土(10YR2/3) しまり強、粘性弱
9　暗褐色土(10YR3/4) しまり強、粘性弱 混入物:炭化物粒状中1%
10　暗褐色土(10YR3/3) しまり強、粘性弱 混入物:炭化物粒状中1%
11　褐色土(10YR4/4) しまり強、粘性弱
12　黒褐色土(7.5YR2/2) しまり強、粘性弱
13　暗褐色土(10YR3/4) しまり強、粘性弱 混入物:黒色土粒状極小20%

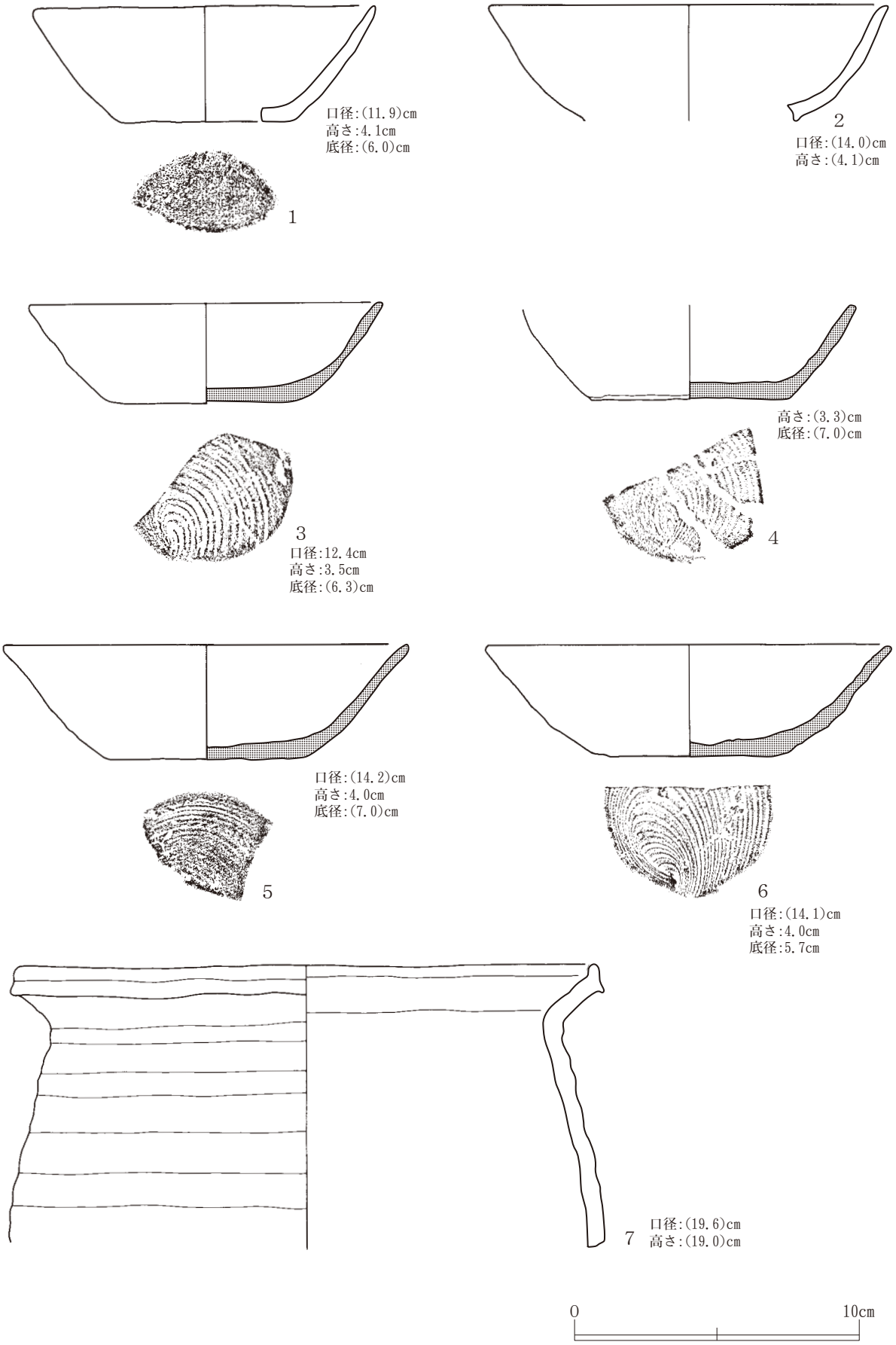
ＳＫ77
1　黒褐色土(10YR3/2) しまり中、粘性中
2　暗褐色土(10YR3/3) しまり中、粘性中
3　黒褐色土(10YR3/2) しまり中、粘性中
　　混入物:炭化物粒状中５%、赤褐色焼土粒状中30%
4　赤褐色土(2.5YR4/6) しまり中、粘性中

ＳＫ85
1　にぶい赤褐色土(5YR4/4) しまり弱、粘性弱
　　混入物:炭化物粒状小～中10%

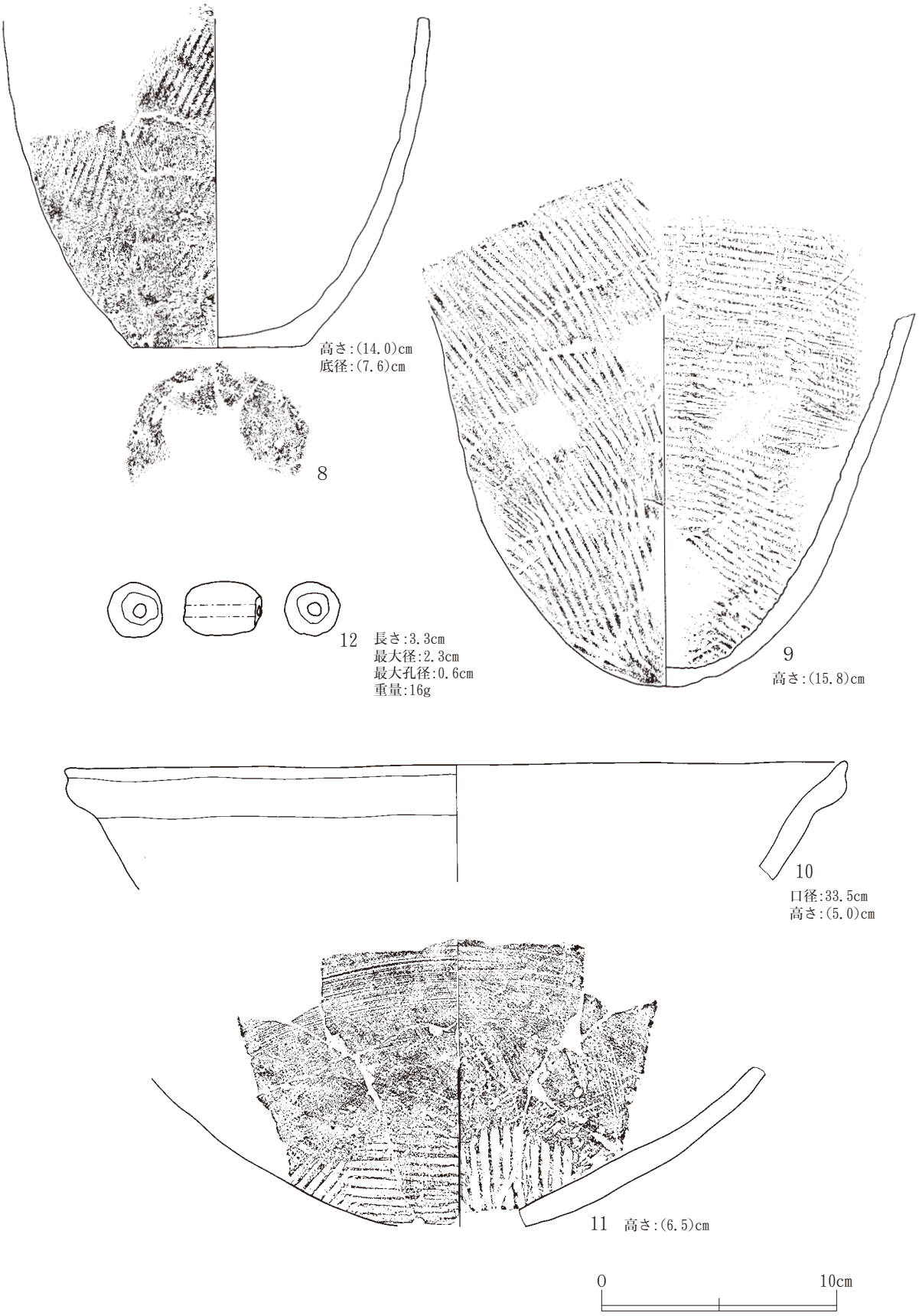
ＳＮ84
1　赤褐色焼土(2.5YR4/6) しまり中、粘性中
　　混入物:炭化物粒状小～中３%、黒褐色土塊状中３%、地山塊状中５%

第９図　ＳＫ58・64・77・85土坑、ＳＮ84焼土遺構実測図

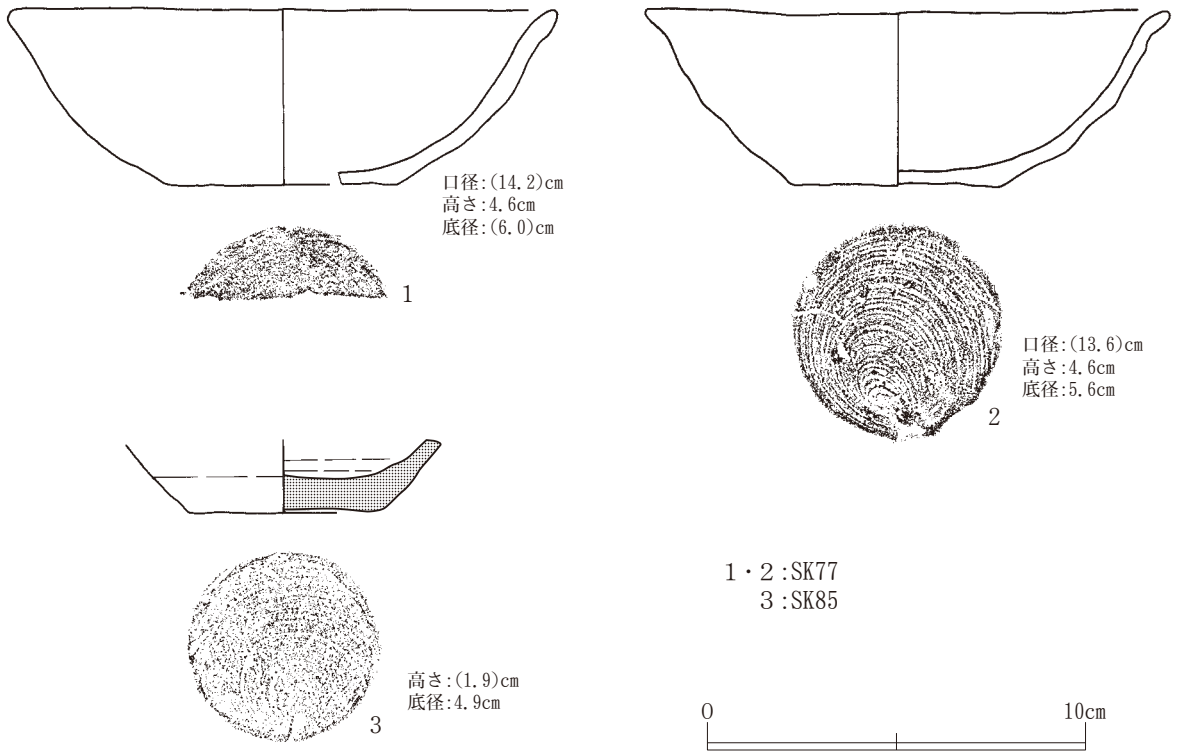
為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器坏の破片、土師器甕の破片などが62点出土した。そのうち１点を掲載した(第12図３)。



第10図　ＳＫ64土坑出土土師器、須恵器実測図（１）



第11図　ＳＫ64土坑出土土師器、土製品実測図（２）



第12図　ＳＫ77土坑出土土師器、ＳＫ85土坑出土須恵器実測図

（３）焼土遺構

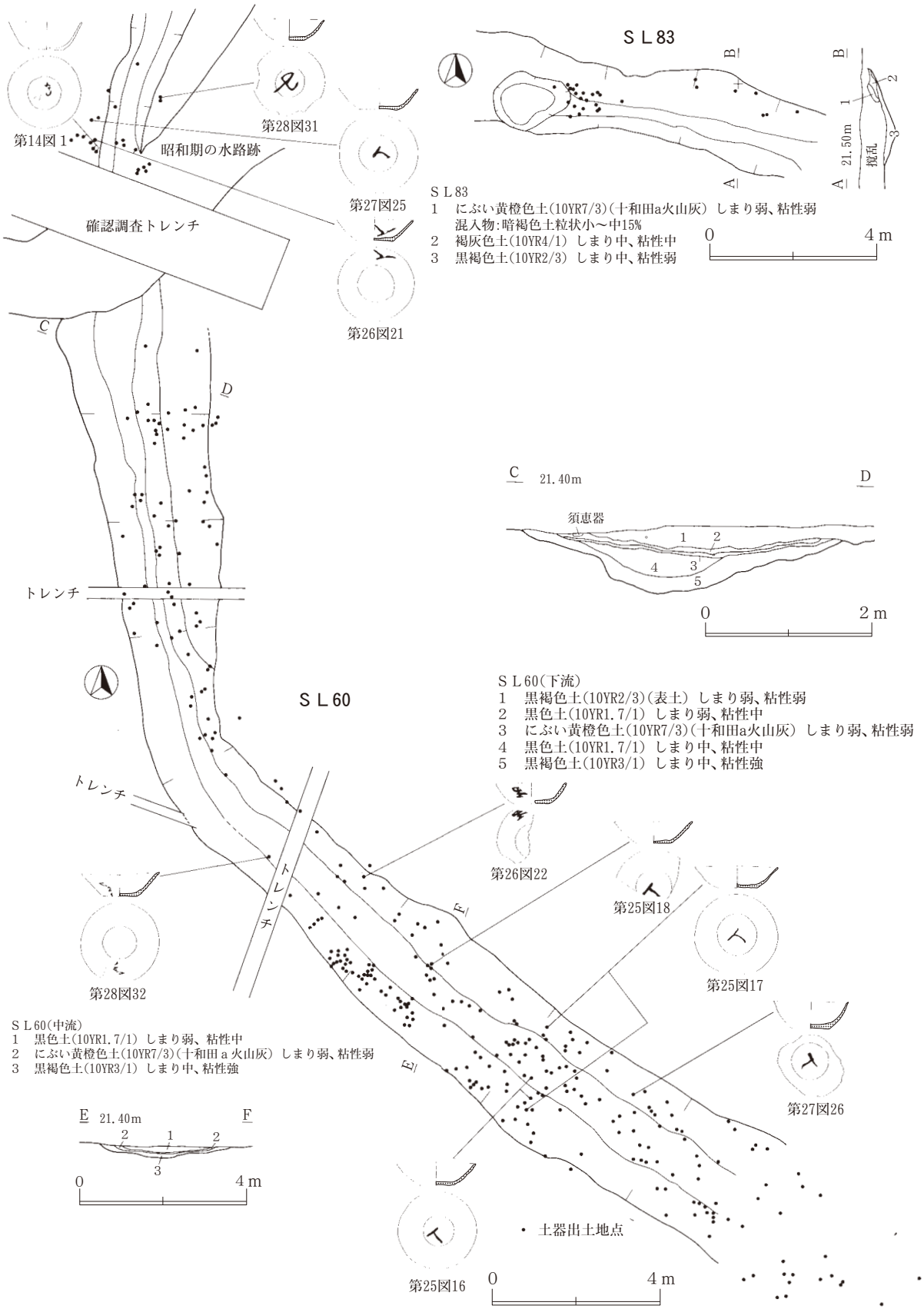
ＳＮ84焼土遺構（第９図、図版２－８）

ＭＫ・ＭＬ47グリッドの第Ｖ層上面で検出した。ＳＬ60河道跡に隣接している。被熱範囲は長軸（北東－南西）1.53ｍ×短軸（北西－南東）0.93ｍの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.07ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。この底面や壁面には被熱を受けて硬化した箇所が部分的に認められた。堆積土は１層である。炭化物粒と黒褐色土塊や地山塊が混入している。遺物は出土しなかった。なお、本遺構の層下部から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は1190±30yrＢＰ（780～890AD）であった。

（４）河道跡

ＳＬ60河道跡（第13図、図版３－１～４）

ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ42、ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ43、ＭＤ・ＭＥ44、ＭＥ・ＭＦ・ＭＧ46、ＭＨ・ＭＩ・ＭＪ・ＭＫ47、ＭＩ・ＭＪ・ＭＫ・ＭＬ48、ＭＫ・ＭＬ・ＭＭ・ＭＮ49、ＭＭ・ＭＮ・ＭＯ50、ＭＮ・ＭＯ51、ＭＮ・ＭＯ52、ＭＮ・ＭＯ53、ＭＮ・ＭＯ54、ＭＯ55、ＭＯ56グリッドの第Ｖ層上面で検出した。調査区の南東から北西にかけて延びる河道跡で、下流部はＳＬ86河道跡に流れ込んでいる。検出した範囲で長さ約86.6ｍ、幅1.0ｍ～3.6ｍ、最深0.8ｍである。平均の河幅は約2.3ｍである。上・中流部の底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。勾配も緩やかで、検出面からの深さは0.3ｍ～0.4ｍである。堆積土は３層に分けられた。このうち２層はにぶい黄橙色を呈する十和田ａ火山灰の堆積層であった。レンズ状に堆積していることから自然流入の堆積と考えられる。下流部の上部は昭和時代の水路や確認調査トレンチによって欠損している。底面は小さな凹凸が



第13図　ＳＬ60・83河道跡実測図

見られやや丸みを帯びており、壁の傾きは東側は急で段差もあるが、西側は緩やかである。勾配は上・中流部に比べて急であり、検出面からの深さは0.5m～0.8mである。堆積土は５層に分けられた。このうち３層は厚さ３～６㎝で、にぶい黄橙色を呈する十和田ａ火山灰の堆積層であった。上・中・下流部とも河川の堆積であることを示すようにやや色を変えながら層状にしま模様が見られる。

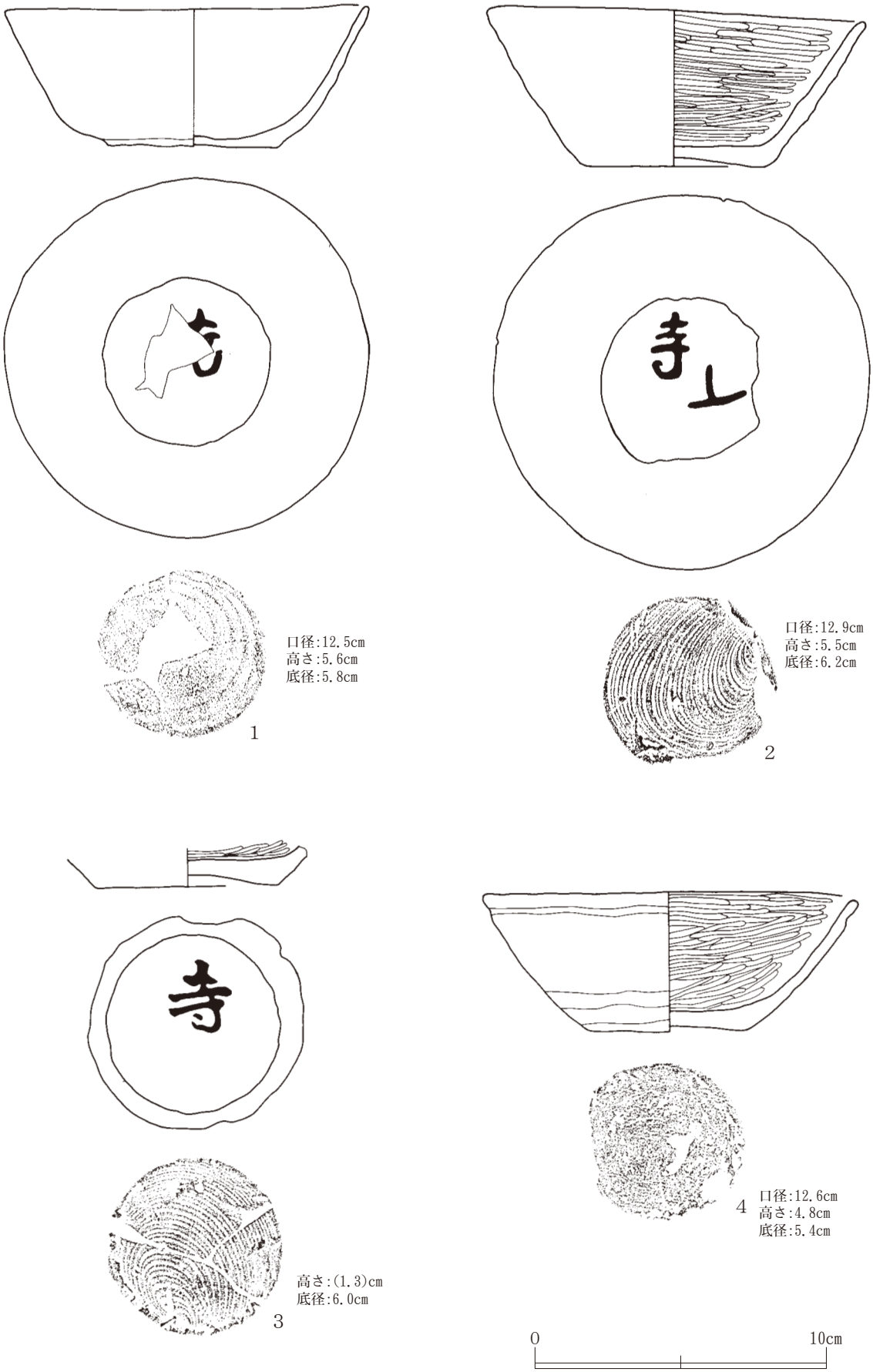
遺物は本遺構の上位～下位層全体から出土した。上流部では土師器坏の破片、土師器甕の破片、須恵器甕の破片等が少量出土した。中流部のＭＫ48、ＭＬ・ＭＭ49、ＭＭ・ＭＮ50、ＭＮ51グリッドでは土師器坏の破片、土師器高台付坏の破片、土師器蓋の破片、土師器甕の破片、土師器鍋の破片、須恵器坏の破片、須恵器高台付坏の破片、須恵器甕の破片、須恵器壺の破片が多量に出土し、これに混じって土製品(土錘)が４点、石製品(砥石)が１点出土した。下流部ではＭＯ55グリッドを中心に、土師器坏の破片、土師器蓋の破片、土師器甕の破片、須恵器坏の破片、須恵器甕の破片、須恵器壺の破片などが多量に出土した。出土した遺物のうち139点を掲載した(第14～35図)。これらのうち土師器坏３点(第14図１～３、図版３－７・８、図版４－１)と須恵器坏12点(第25・26図20～23、第27図25・26、第28図31・32、図版４－２～６)の計15点は墨書土器である。なお、本遺構から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は1210±30yrＢＰ(775～875AD)であった。

ＳＬ83河道跡(第13図、図版３－５・６)

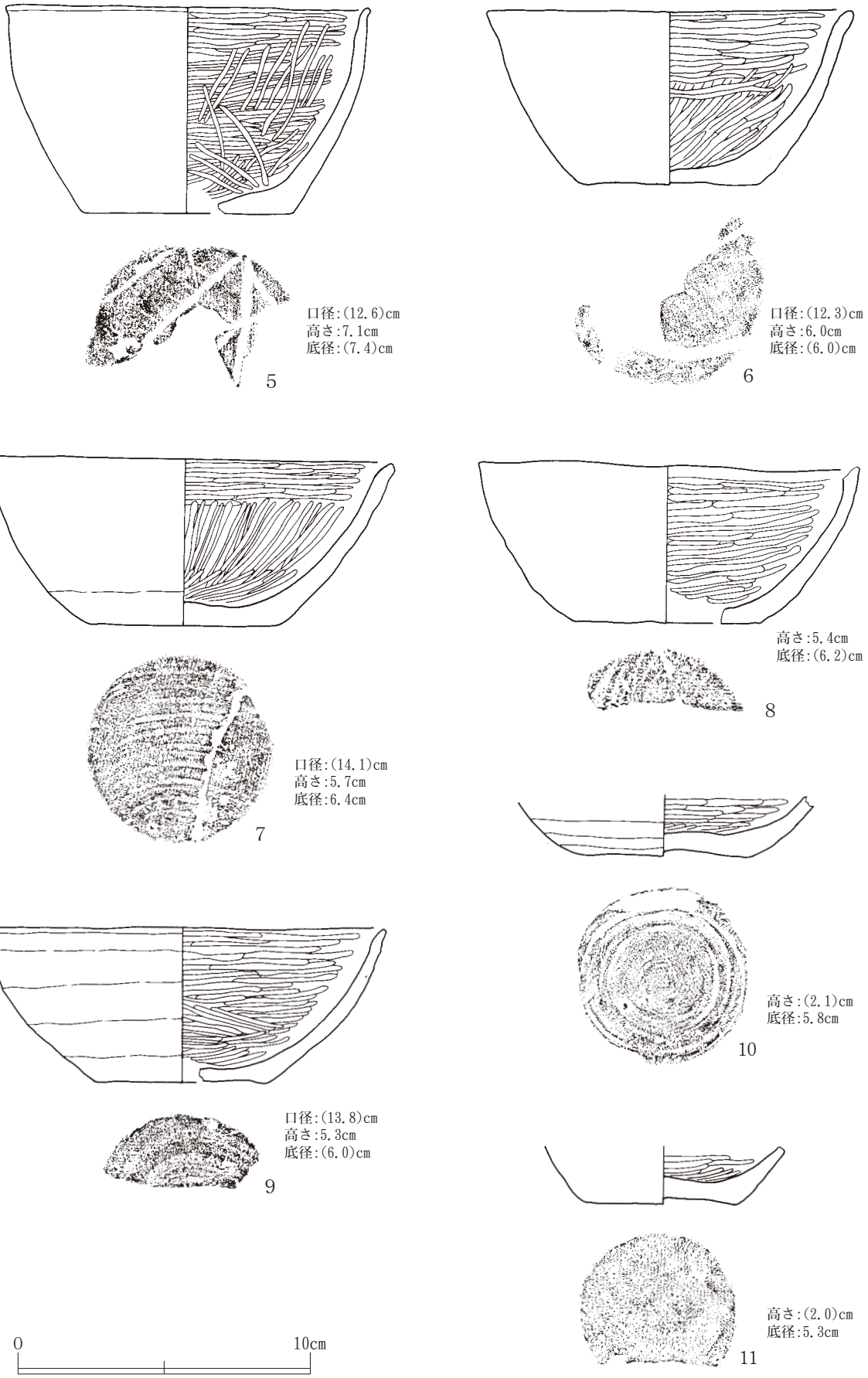
ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ62、ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ63グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。調査区北側を東－西に直線的に延びる河道跡で、東端・西端はそれぞれ調査区外に延伸している。本遺構の上部は土地造成によって削平されている。検出した範囲で長さ約８ｍ、幅1.28m～2.2m、深さ0.86mである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は３層に分けられた。このうち１層は十和田ａ火山灰の堆積層であった。遺物は底部西端の凹み部分を中心にして、土師器坏の破片、土師器甕の破片、須恵器甕の破片、須恵器壺の破片などが多量に出土した。そのうち12点を掲載した(第36・37図)。

ＳＬ86河道跡(第38図)

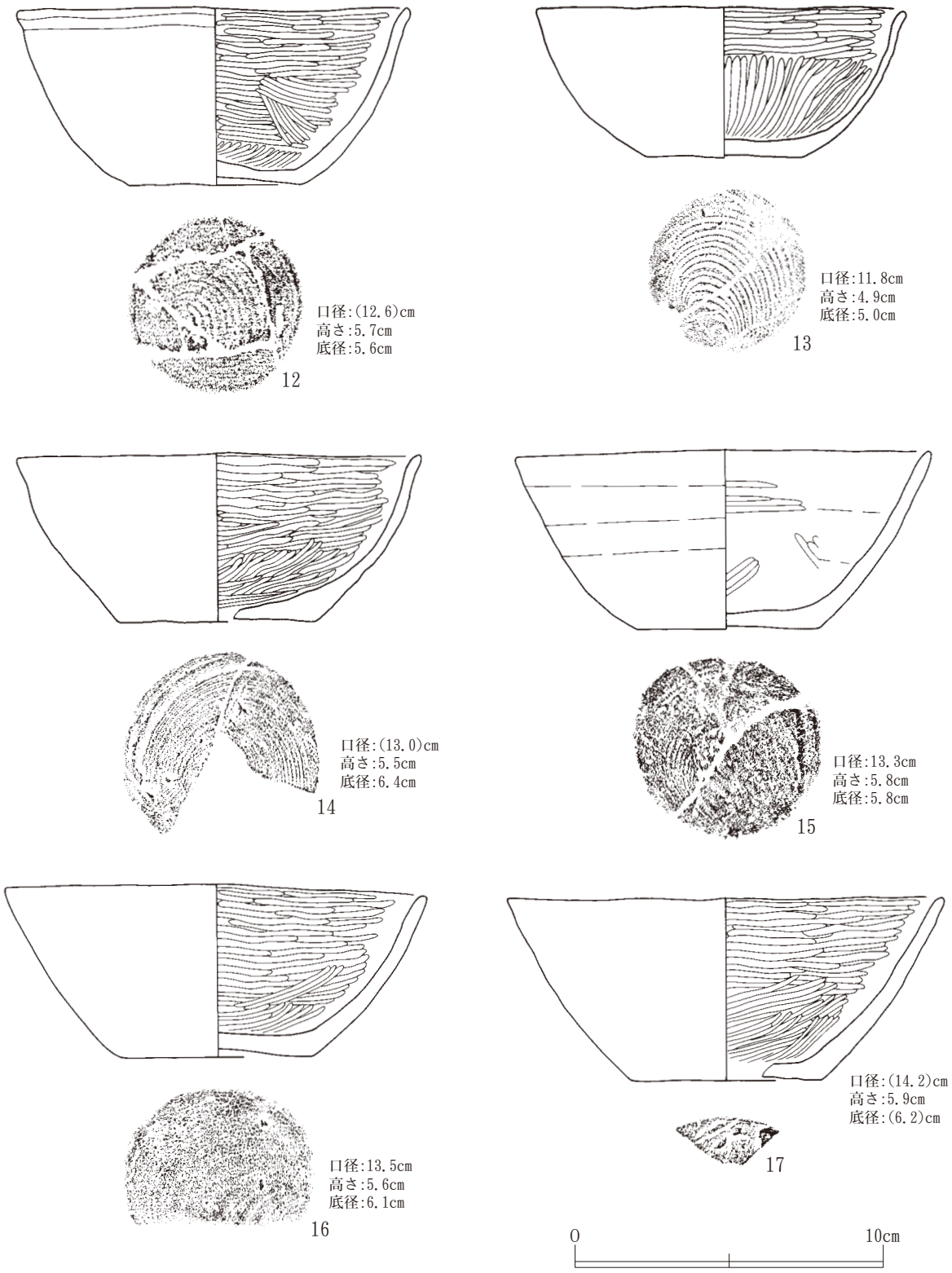
調査区北西端部のＭＮ・ＭＯ・ＭＰ・ＭＱ・ＭＲ・ＭＳ56、ＭＭ・ＭＮ・ＭＯ・ＭＰ・ＭＱ57、ＭＮ・ＭＯ・ＭＰ・ＭＱ58、ＭＮ・ＭＯ・ＭＰ・ＭＱ59グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。北東から南西にかけてＬ字状に延びる河道跡で、下流部は調査区外南西に延伸しているものと思われる。東側上端は昭和の水路に切られている。長さ19.6m、幅12.48m、検出面からの深さは1.68mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は９層に分けられた。本堆積土中において十和田ａ火山灰は確認されなかった。遺物は土師器坏の破片、須恵器坏の破片などが９点出土した。なお、本遺構から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は1510±30yrＢＰ(535～605AD)であった。



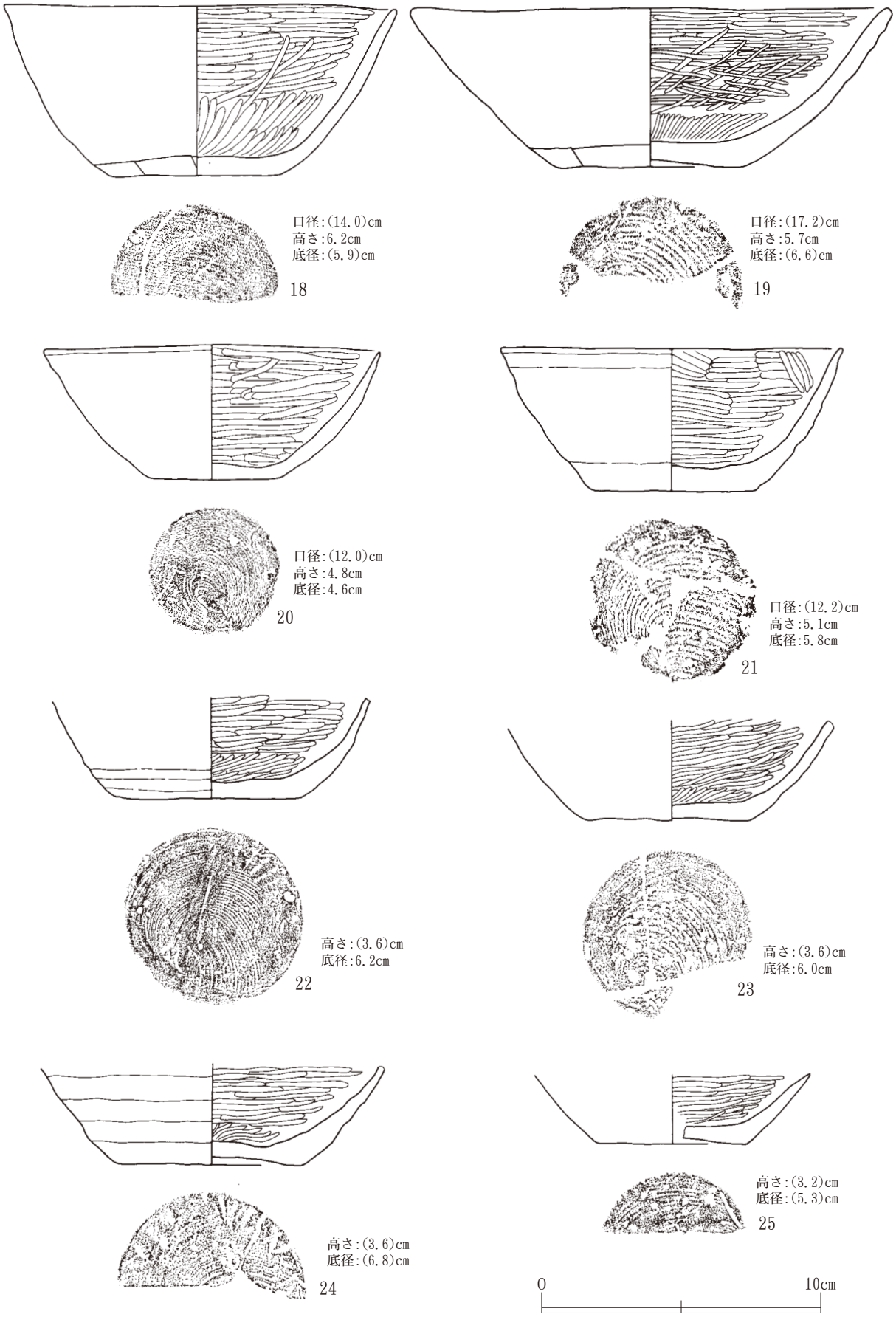
第14図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（１）



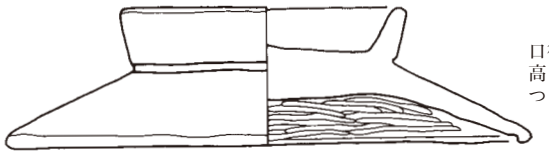
第15図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（２）



第16図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（３）

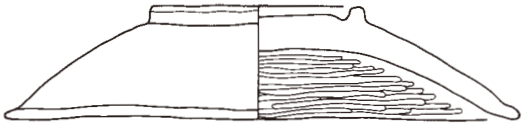


第17図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（４）



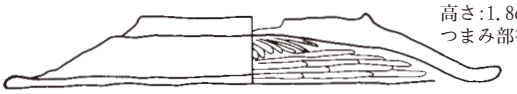
口径:(13.1)cm
高さ:3.7cm
つまみ部径:7.2cm
26

口径:(13.6)cm
高さ:3.0cm
つまみ部径:5.6cm

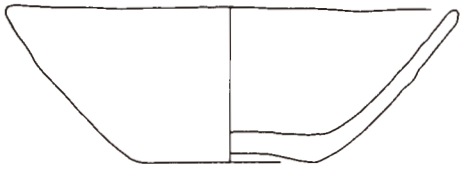


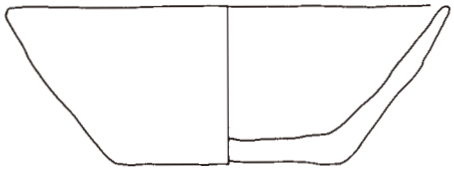
27

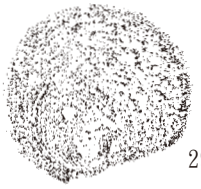
口径:(6.0)cm
高さ:1.8cm
つまみ部径:(13.1)cm



28

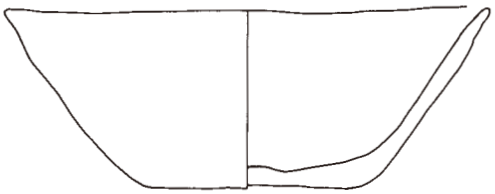


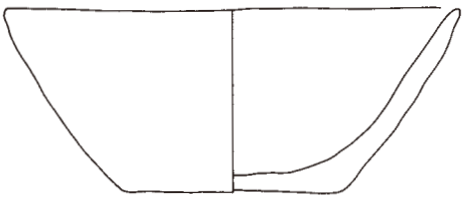




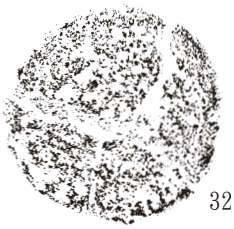
口径:(11.8)cm
高さ:4.1cm
底径:4.8cm
29

口径:(11.6)cm
高さ:4.2cm
底径:5.8cm
30

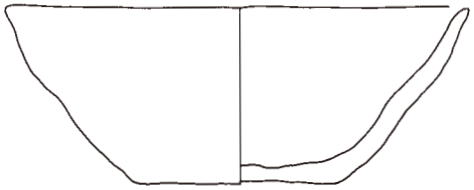




口径:12.8cm
高さ:4.8cm
底径:5.4cm
31



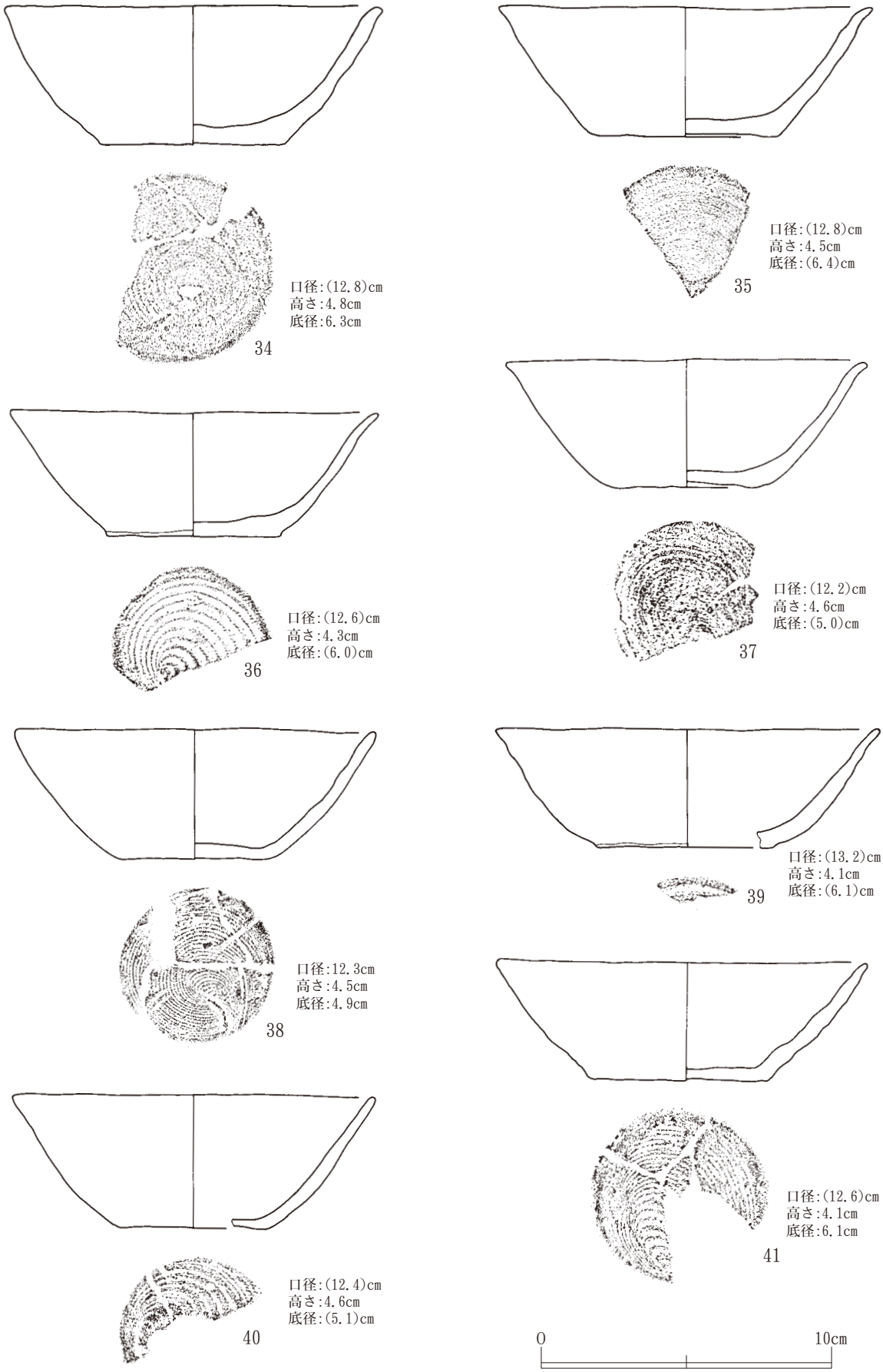
口径:(12.0)cm
高さ:4.9cm
底径:5.5cm
32



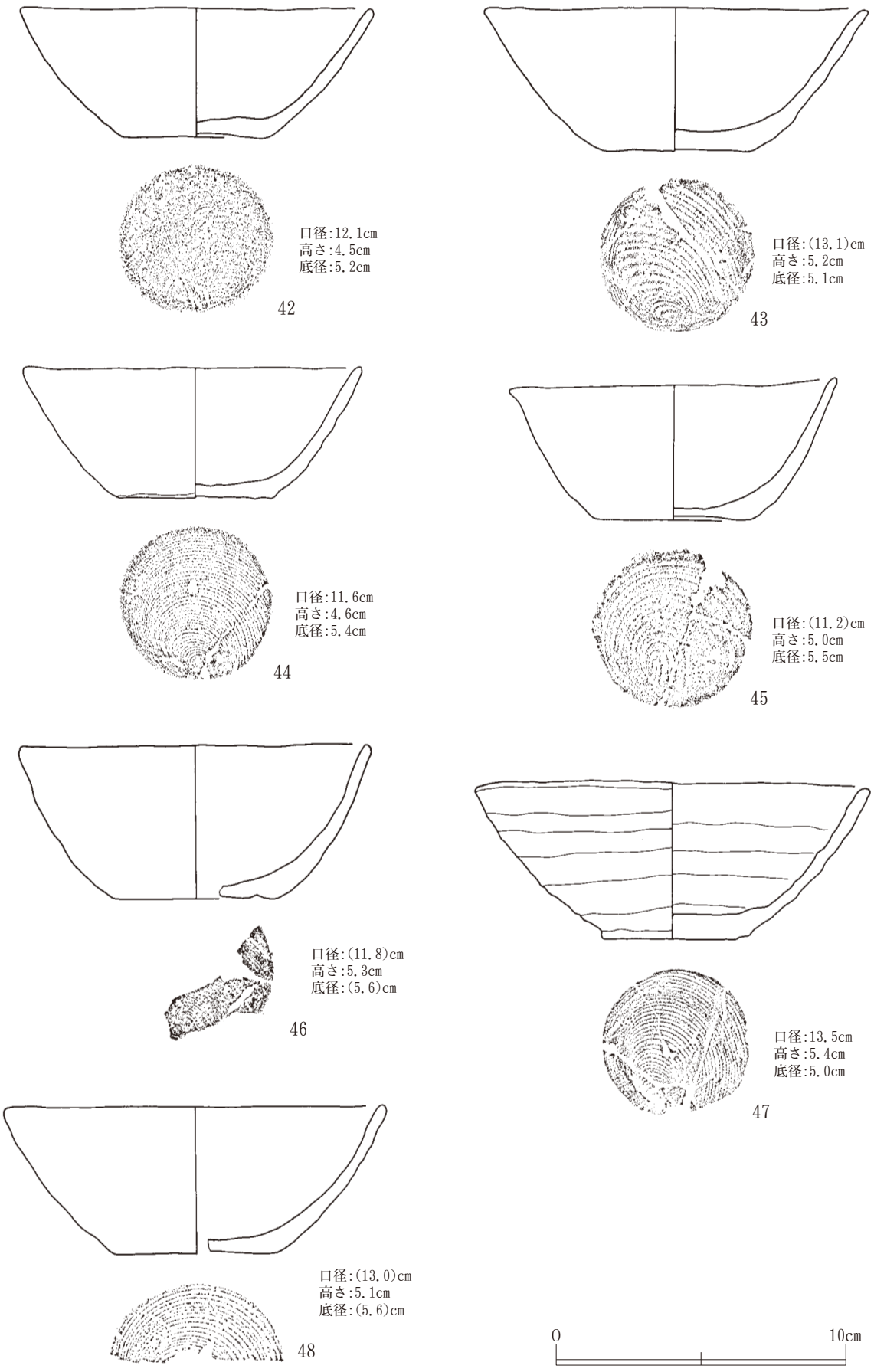
口径:(12.1)cm
高さ:4.7cm
底径:5.4cm
33

0　　10cm

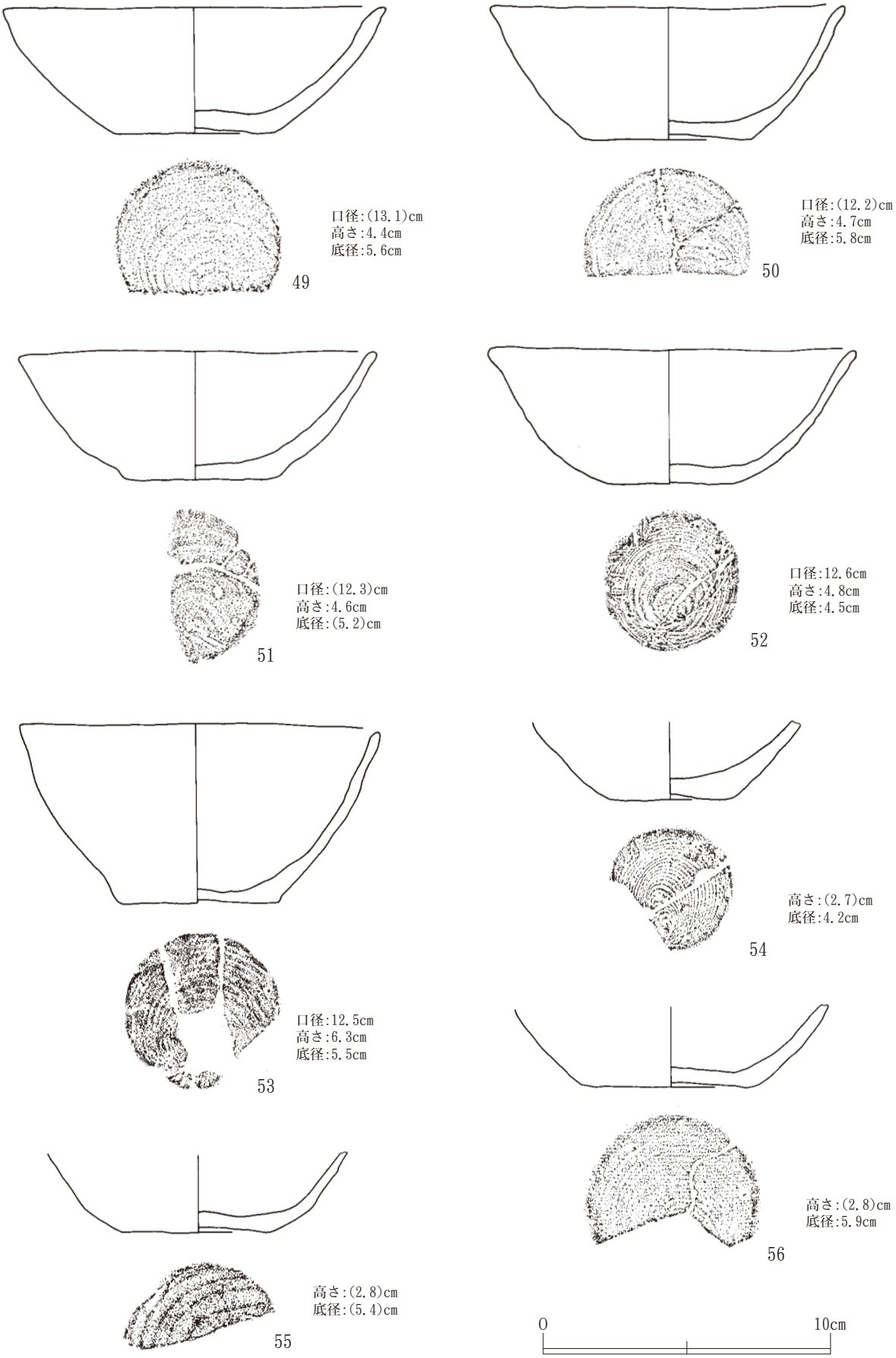
第18図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（５）



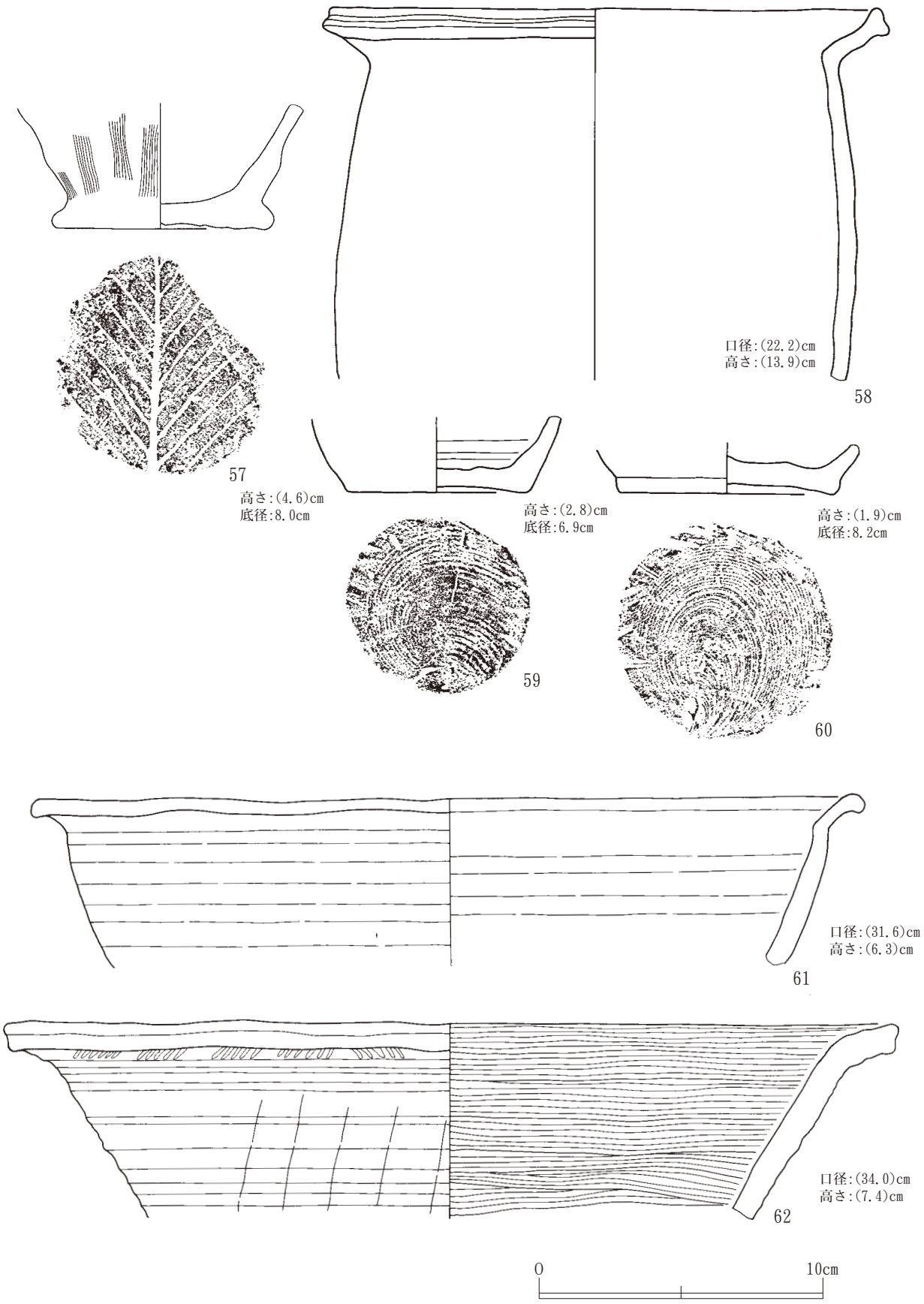
第19図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（６）



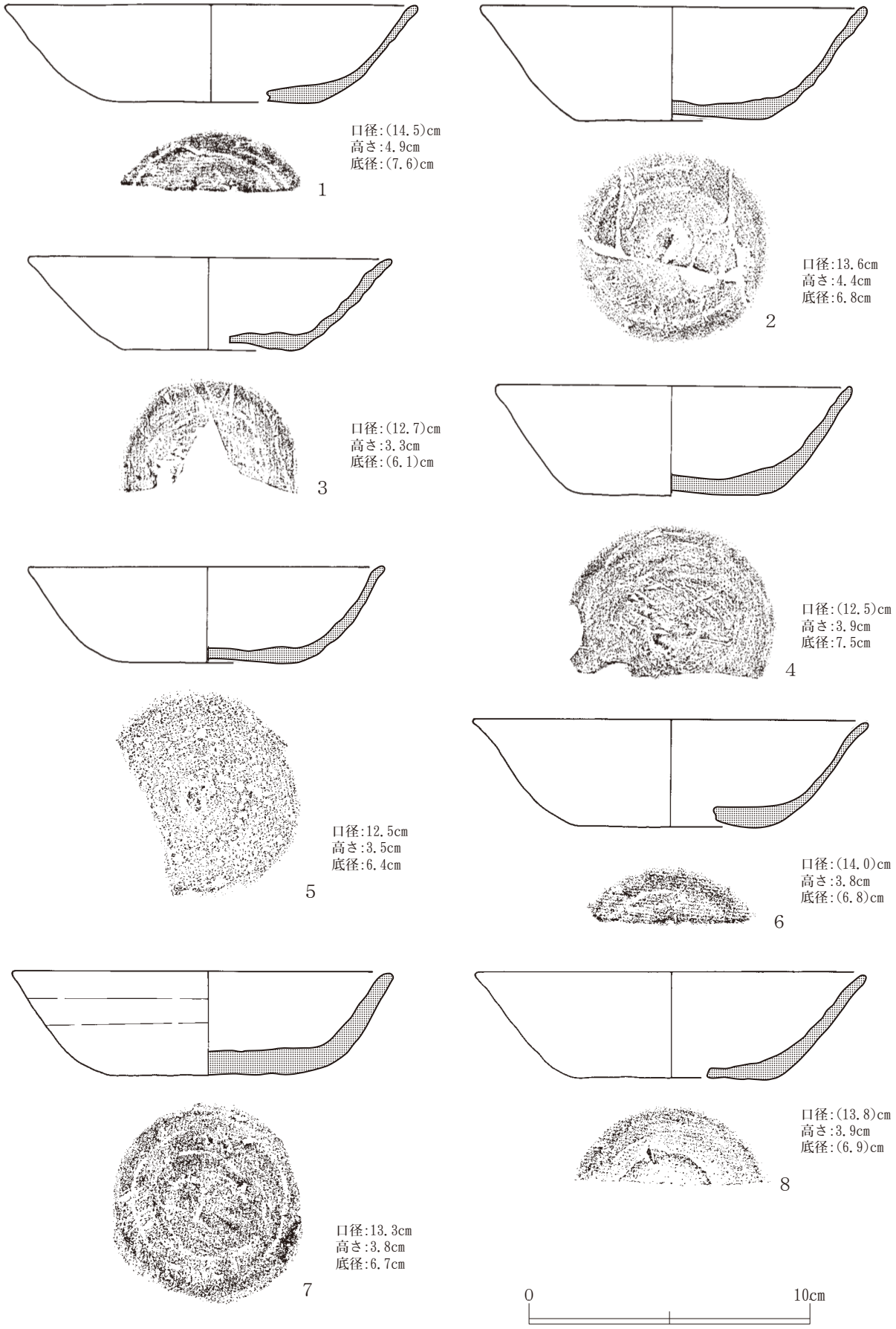
第20図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（７）



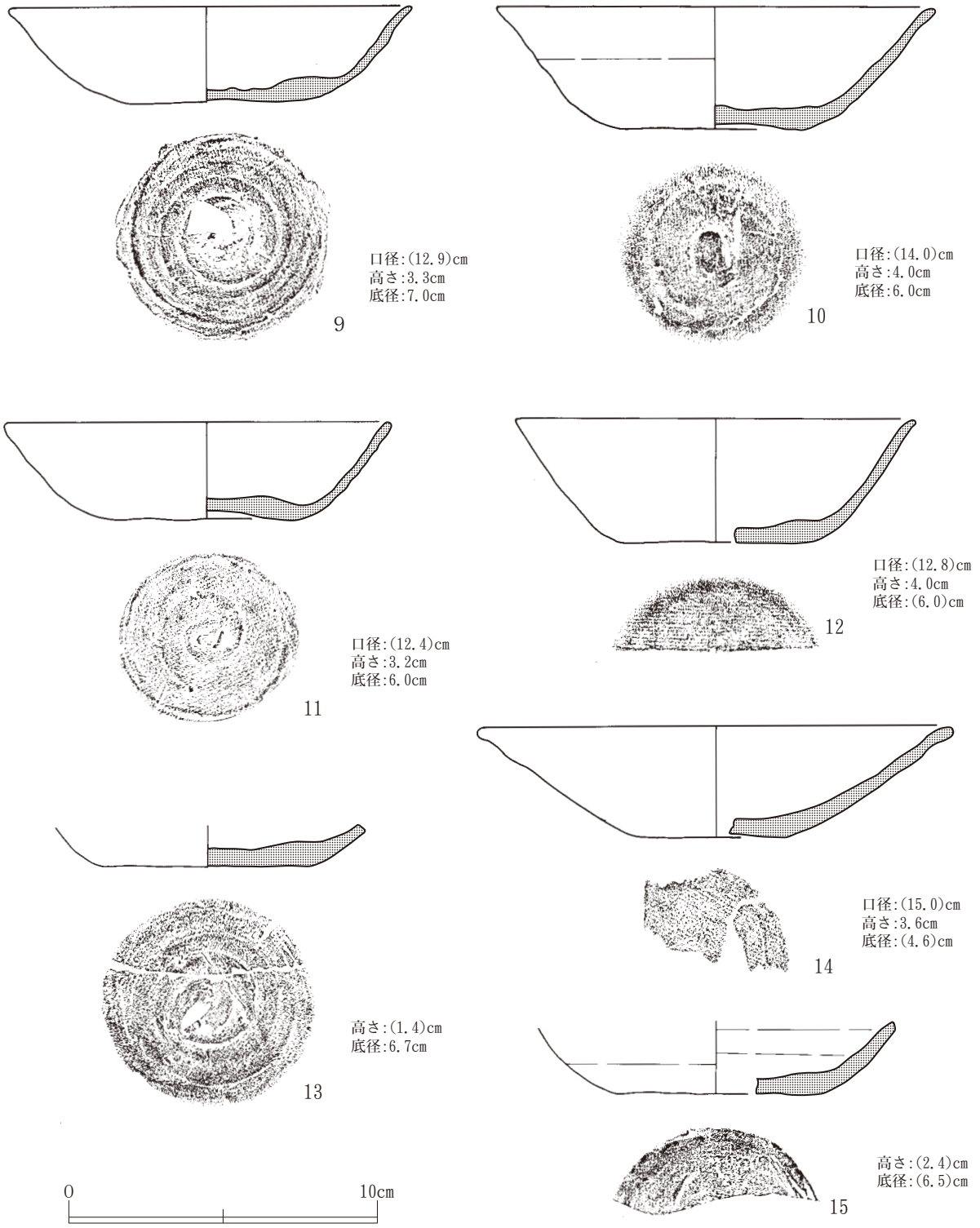
第21図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（８）



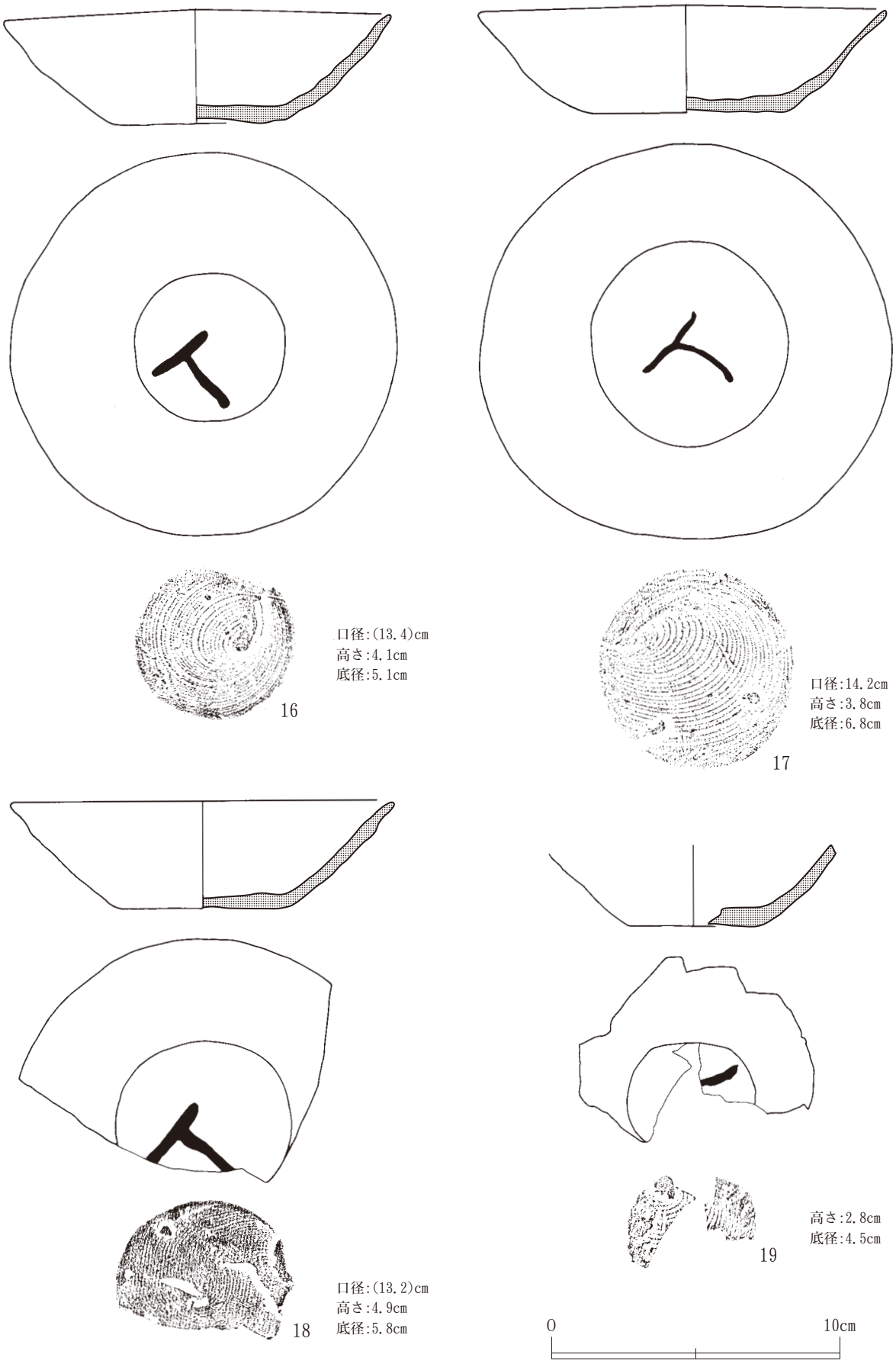
第22図　ＳＬ60河道跡出土土師器実測図（９）



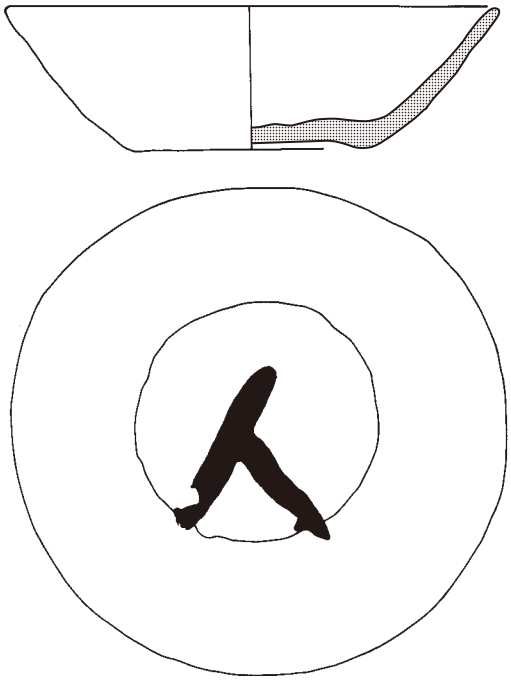
第23図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（１）



第24図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（２）

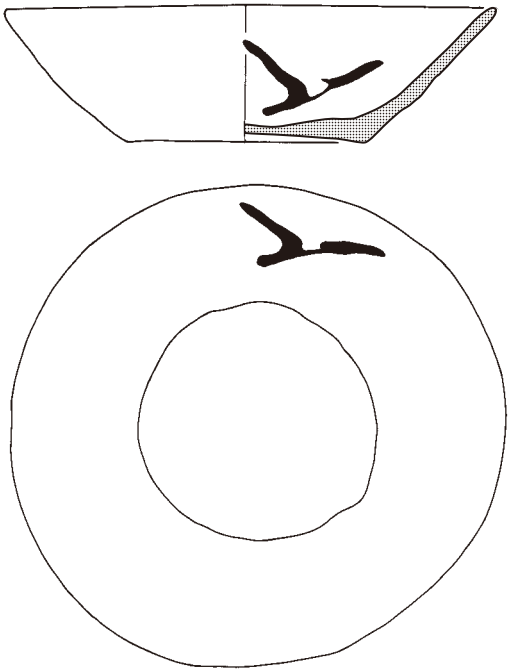


第25図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（３）



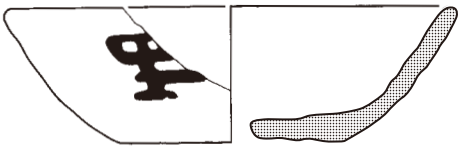
口径:13.1cm
高さ:3.9cm
底径:6.4cm

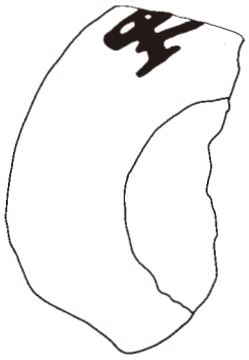
20



口径:12.9cm
高さ:3.6cm
底径:6.4cm

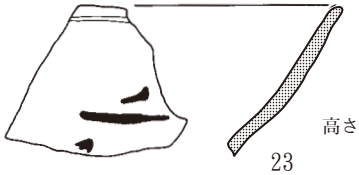
21





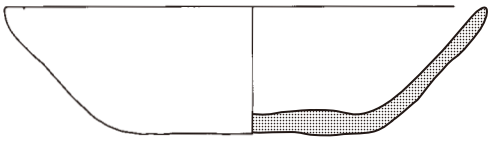
口径:(11.7)cm
高さ:3.6cm
底径:(5.9)cm

22



高さ:(4.0)cm

23

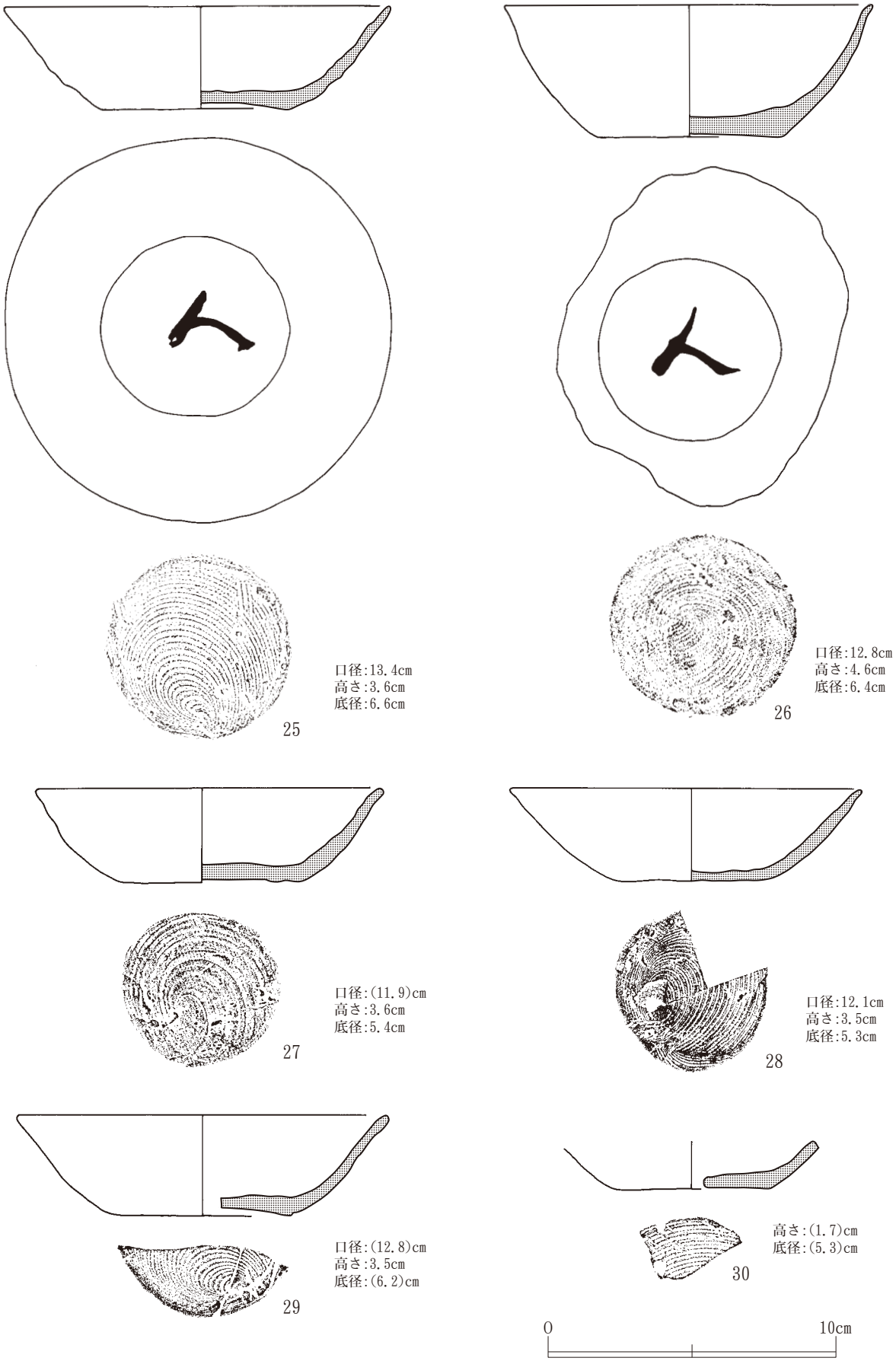


口径:(12.2)cm
高さ:3.4cm
底径:5.5cm

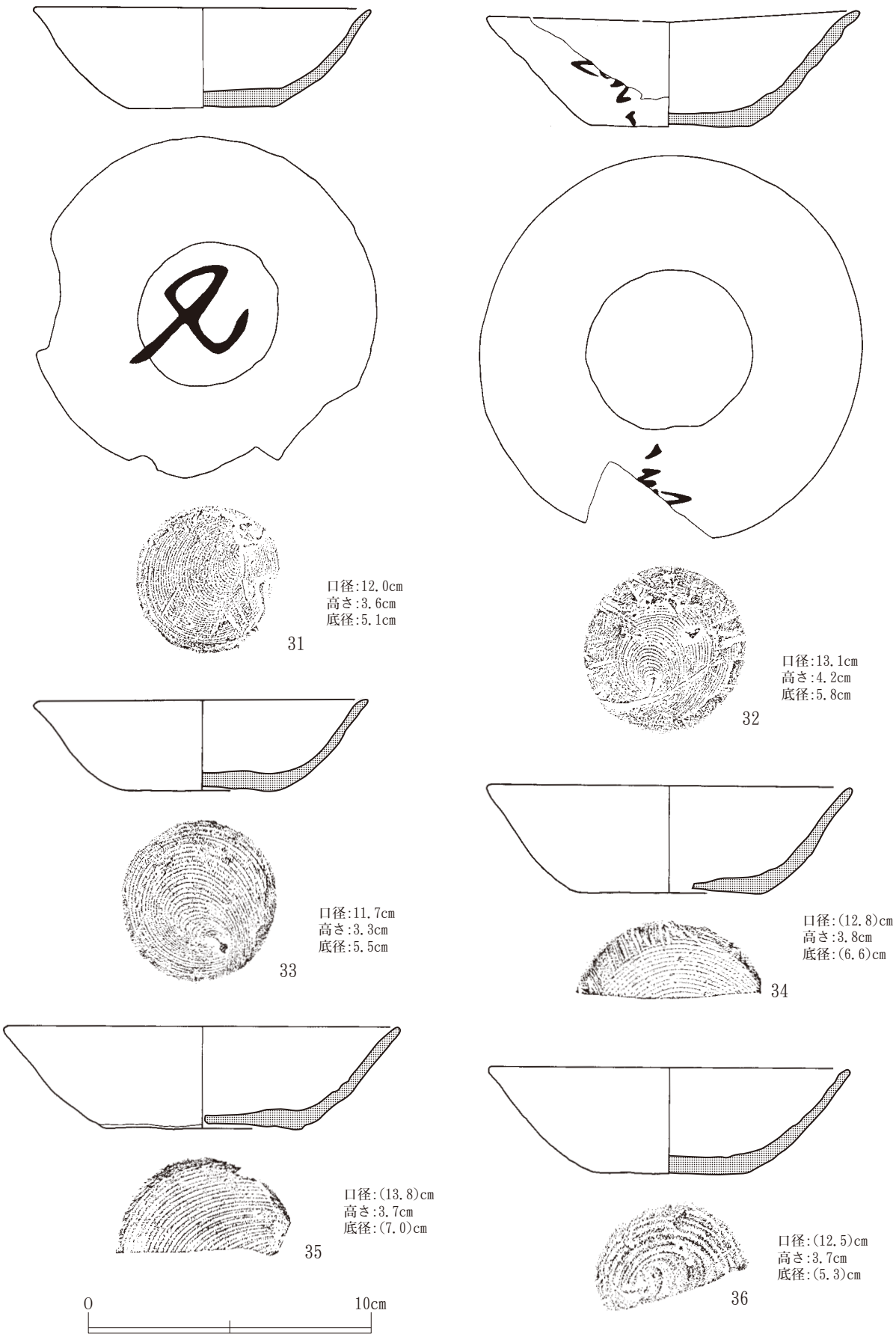
24

0　　10cm

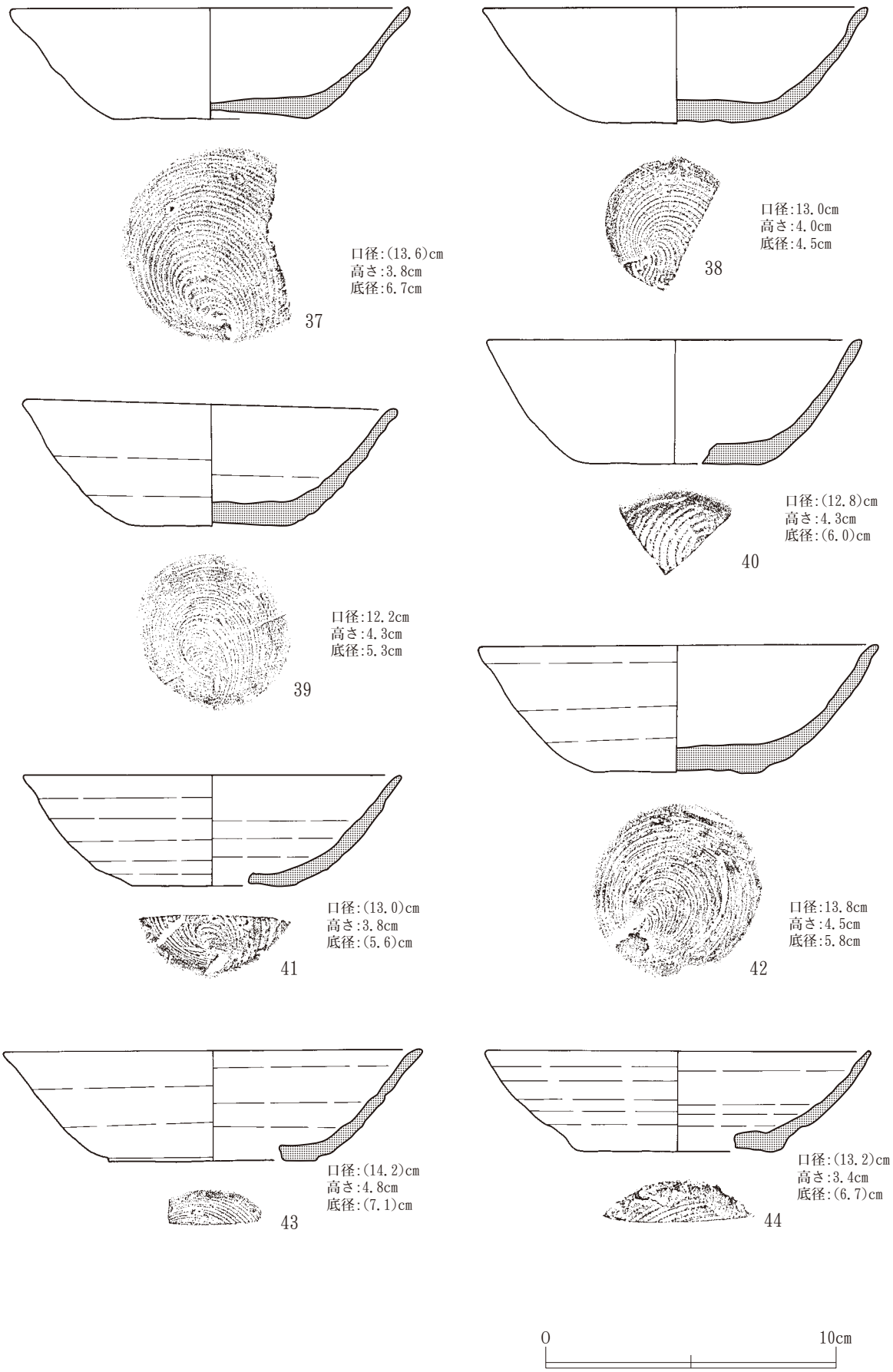
第26図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（４）



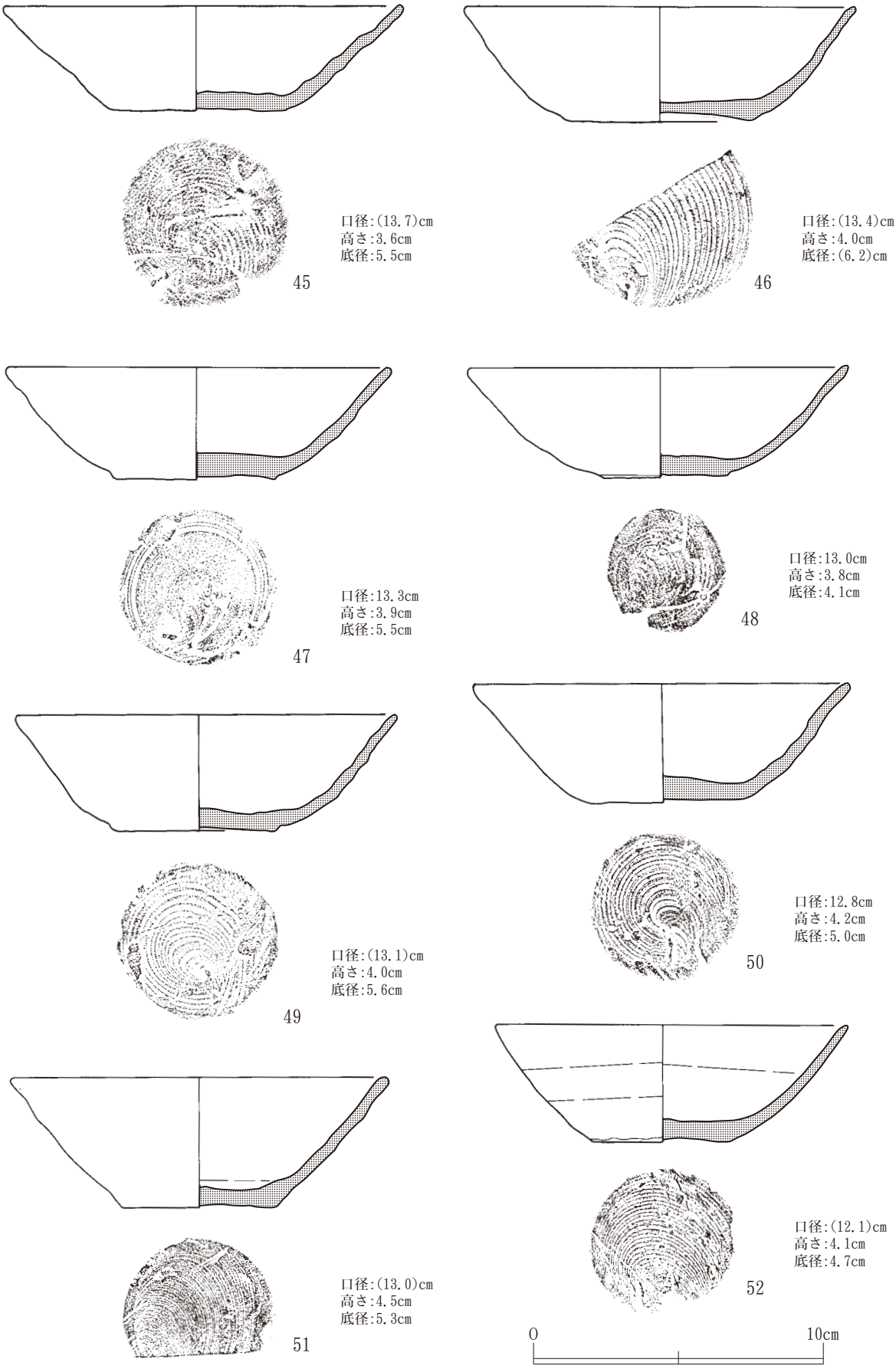
第27図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（５）



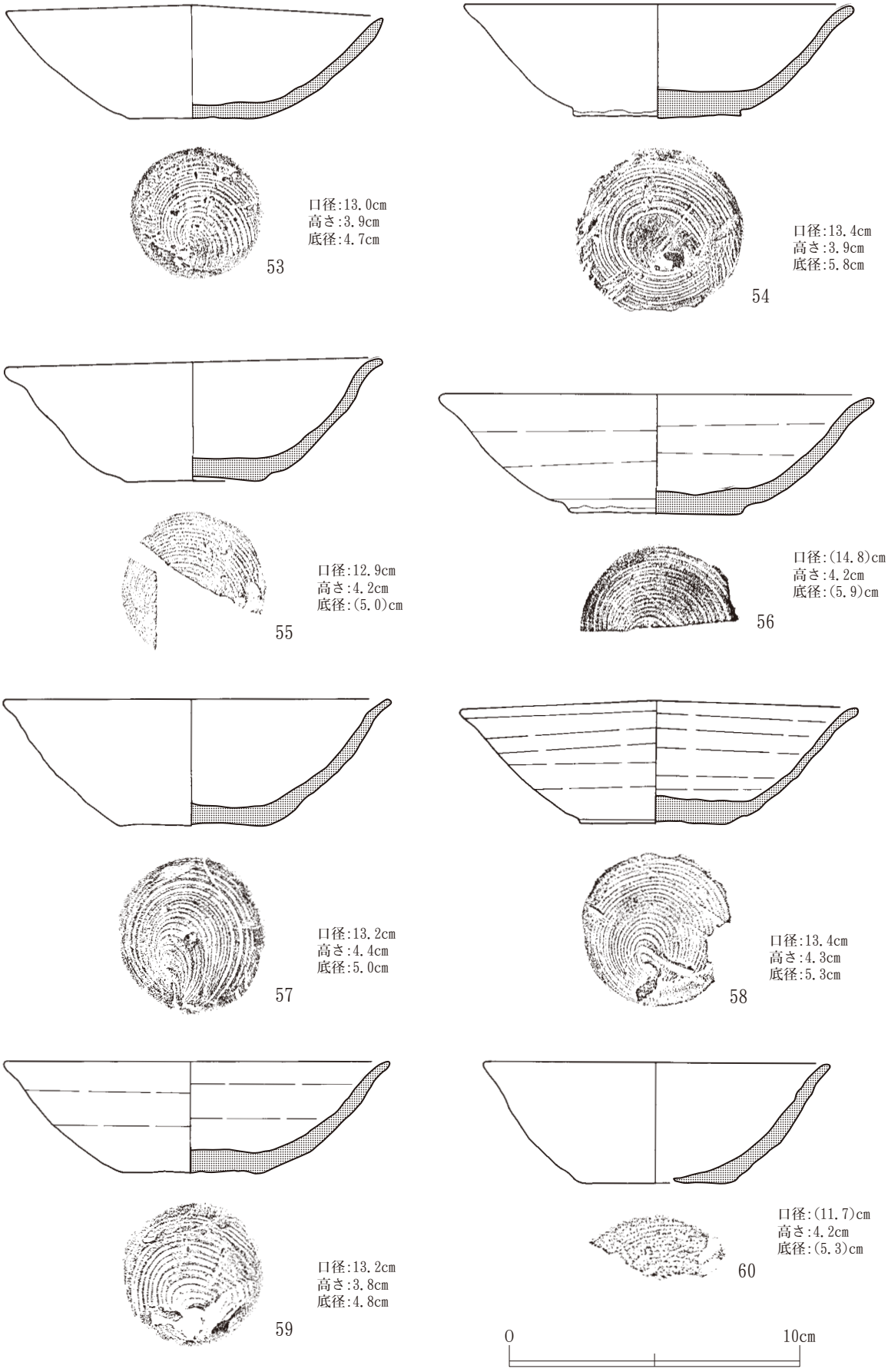
第28図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（６）



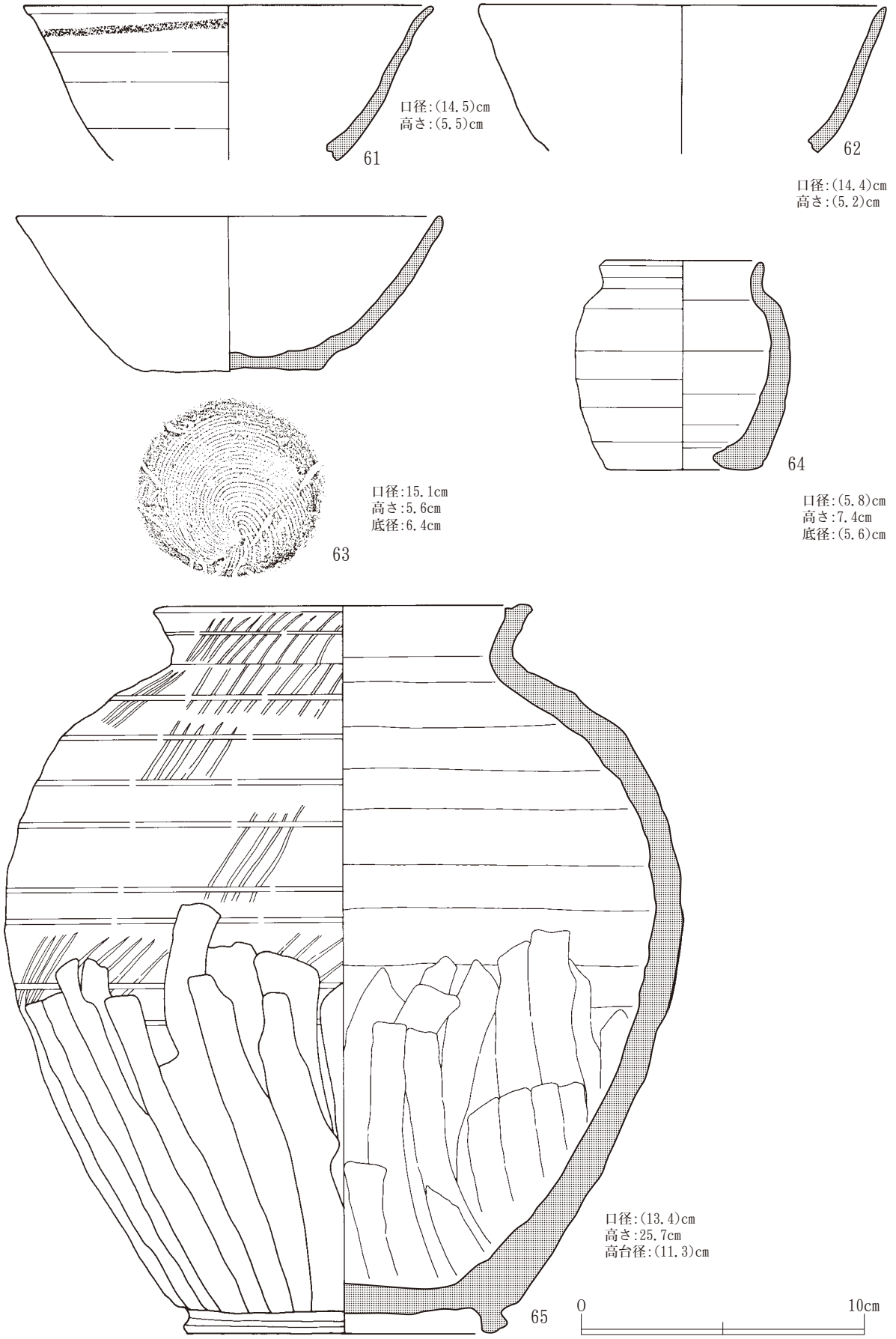
第29図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（７）



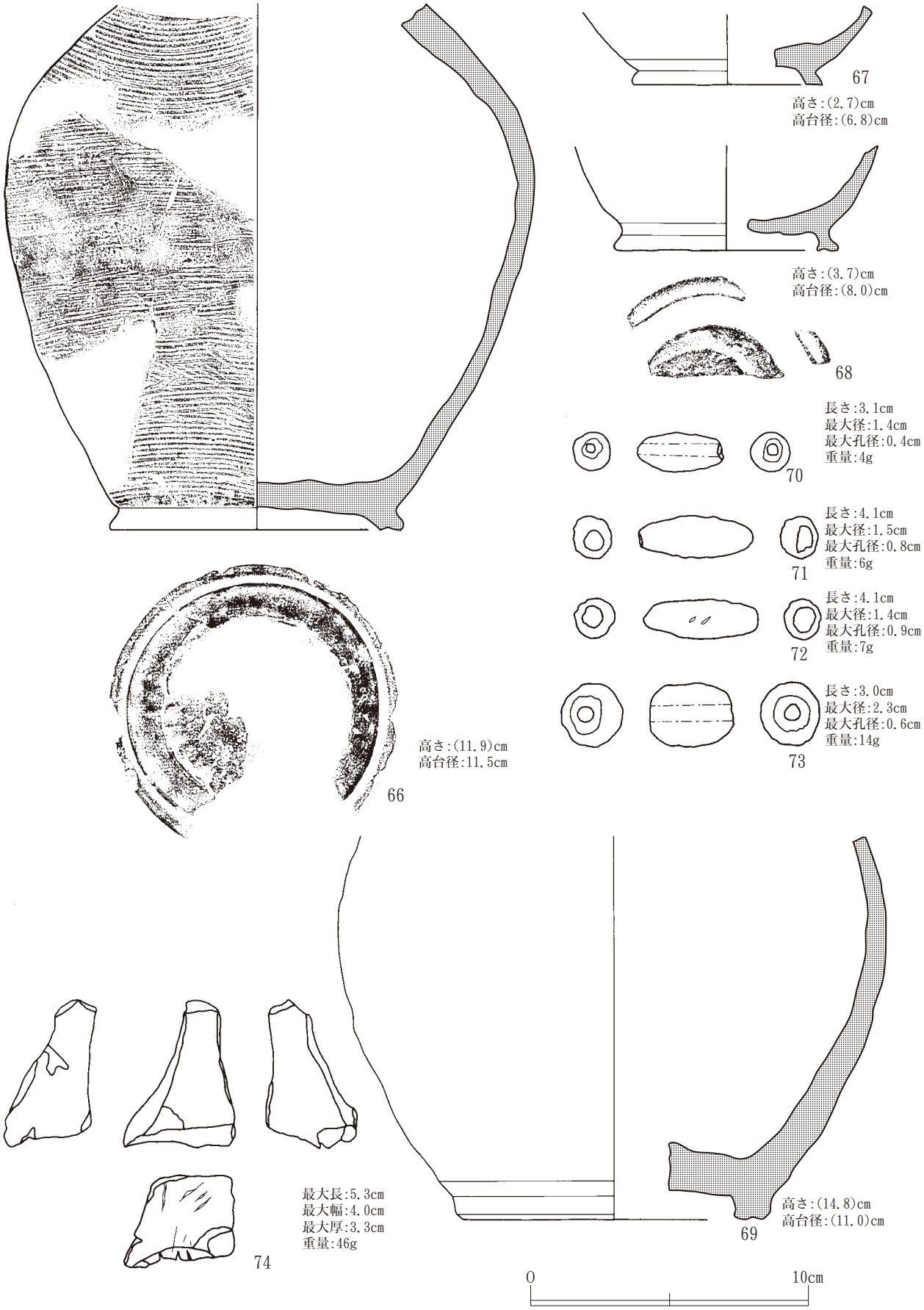
第30図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（８）



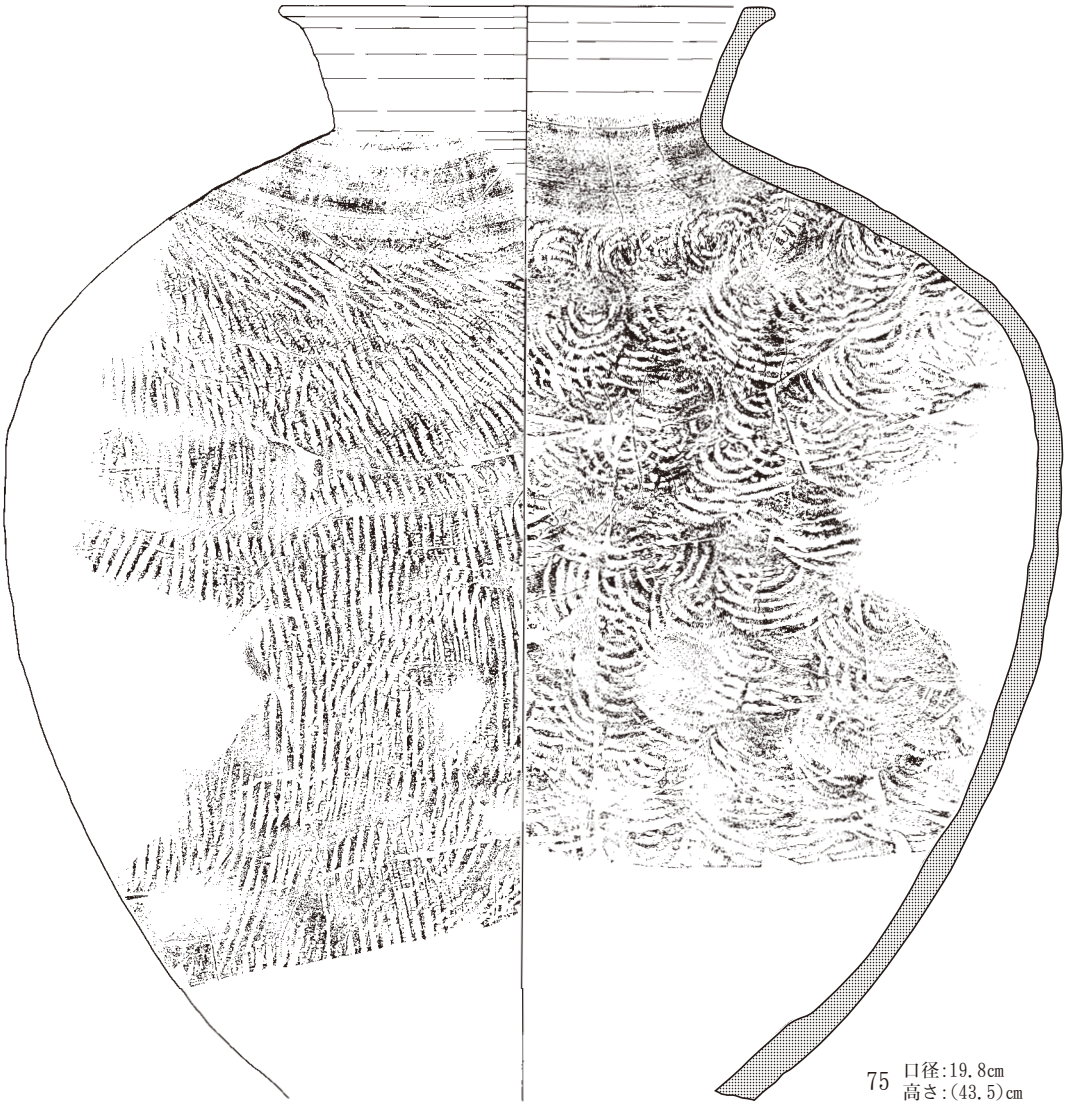
第31図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図（９）

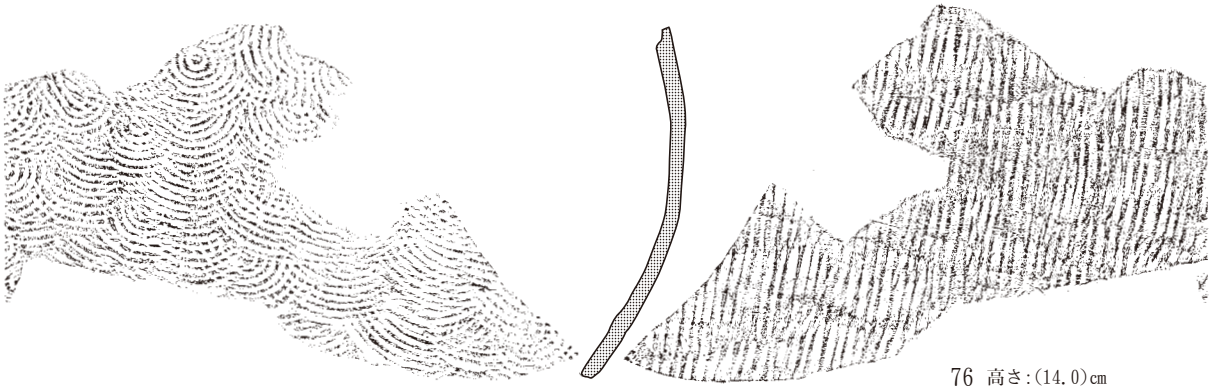


第32図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図(10)



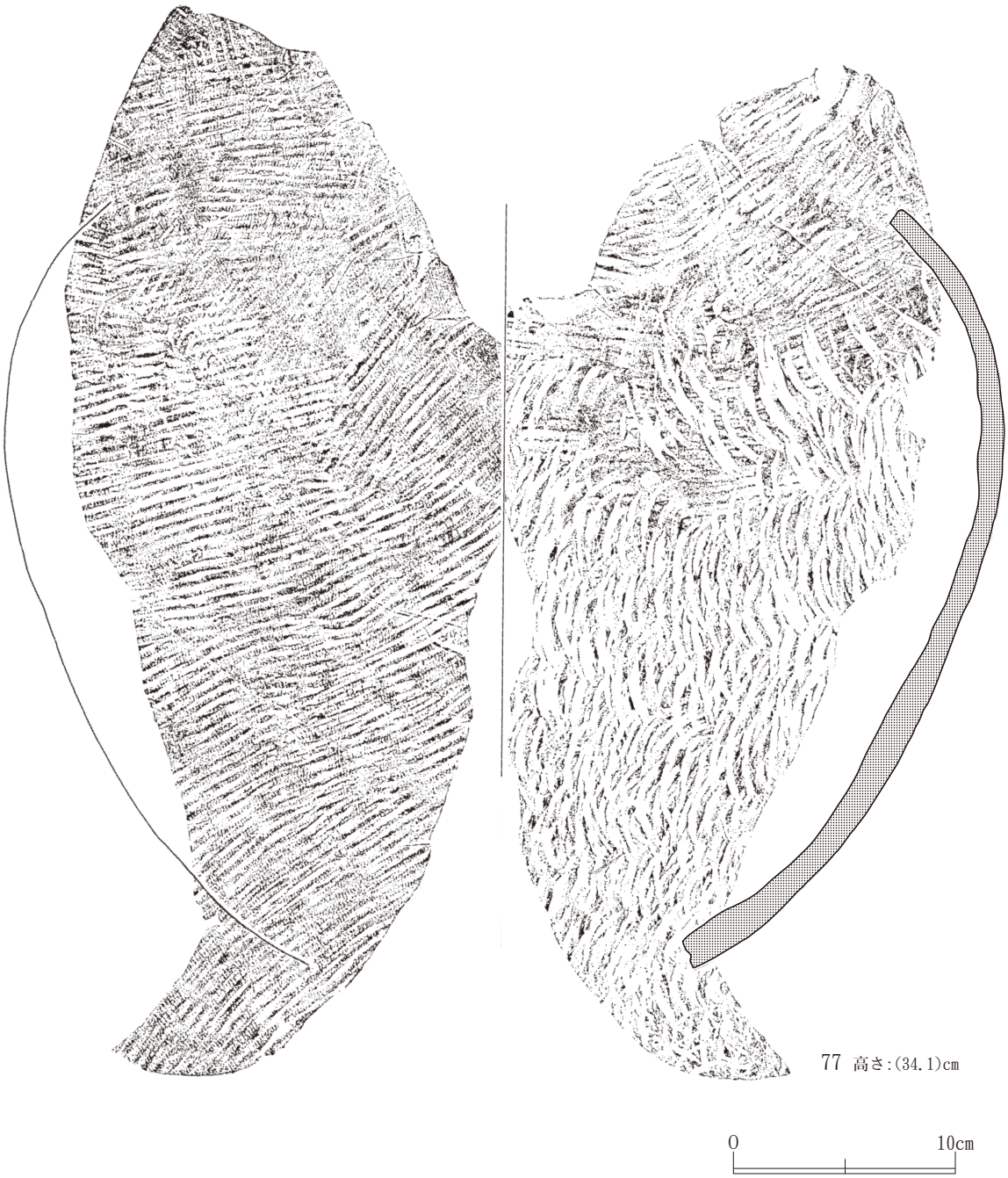
第33図　ＳＬ60河道跡出土須恵器、土錘、砥石実測図(11)



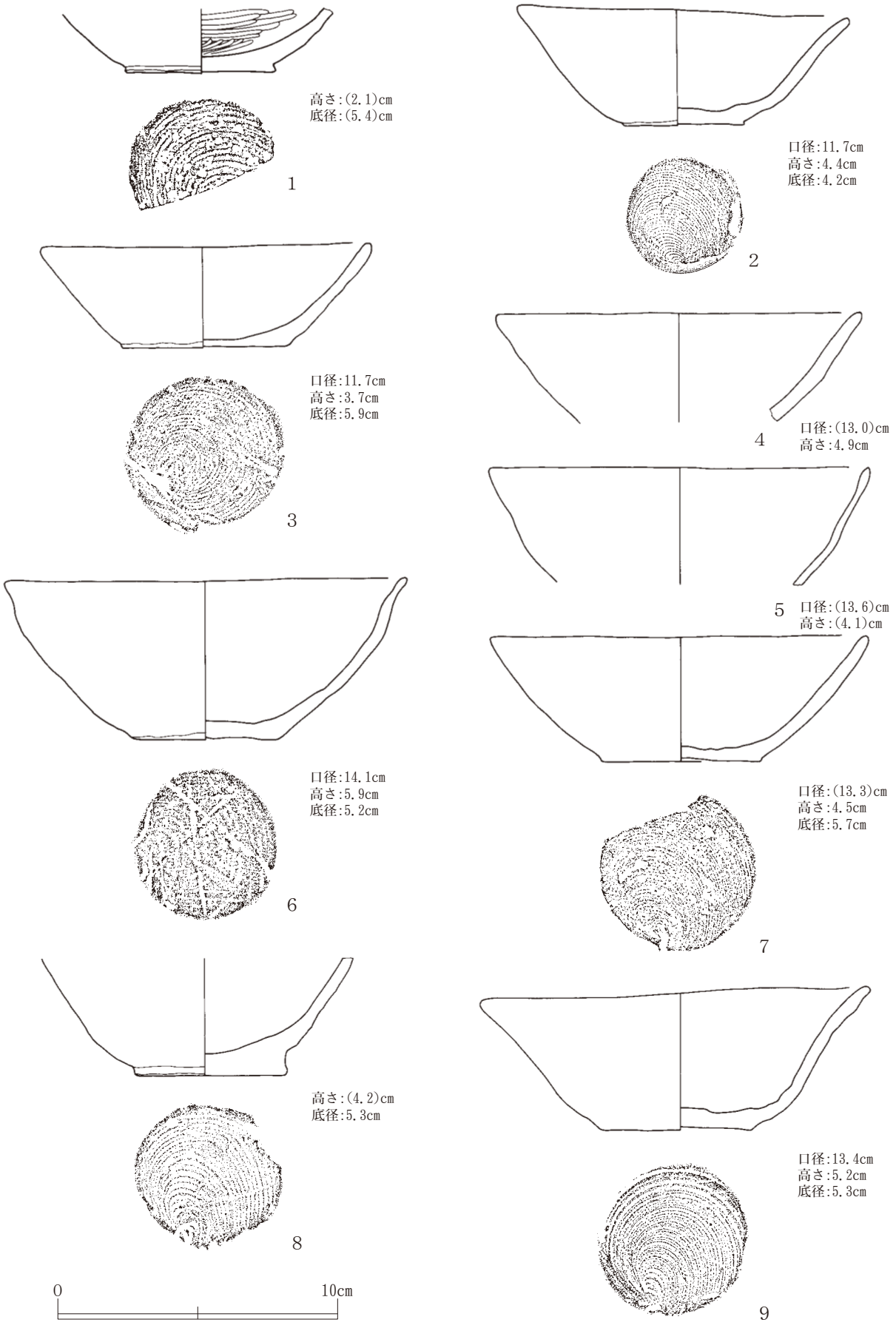


0　10cm

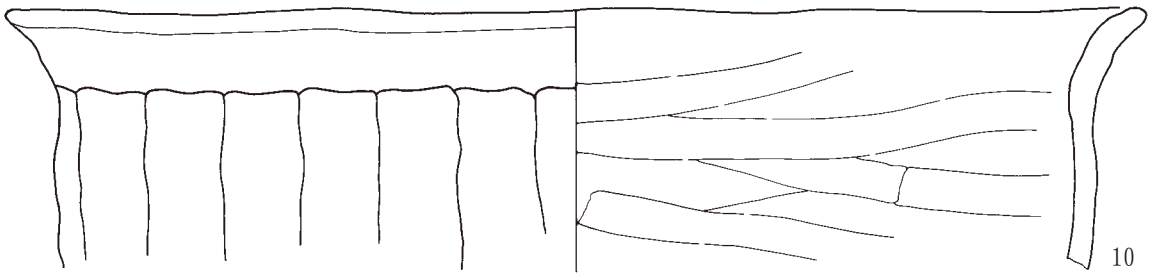
第34図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図(12)



第35図　ＳＬ60河道跡出土須恵器実測図(13)

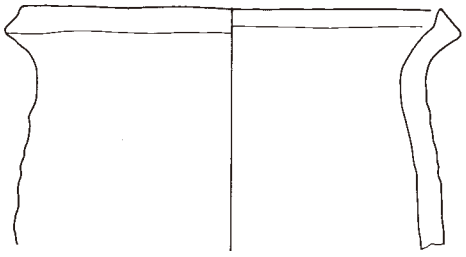


第36図　ＳＬ83河道跡出土土師器実測図（１）



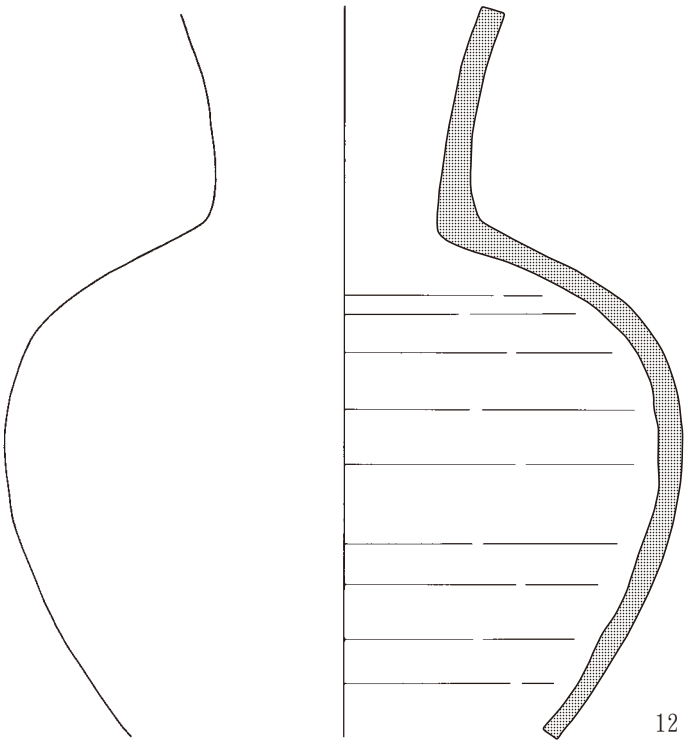
10

口径:(29.9)cm
高さ:(6.9)cm



11

口径:(11.4)cm
高さ:(5.8)cm

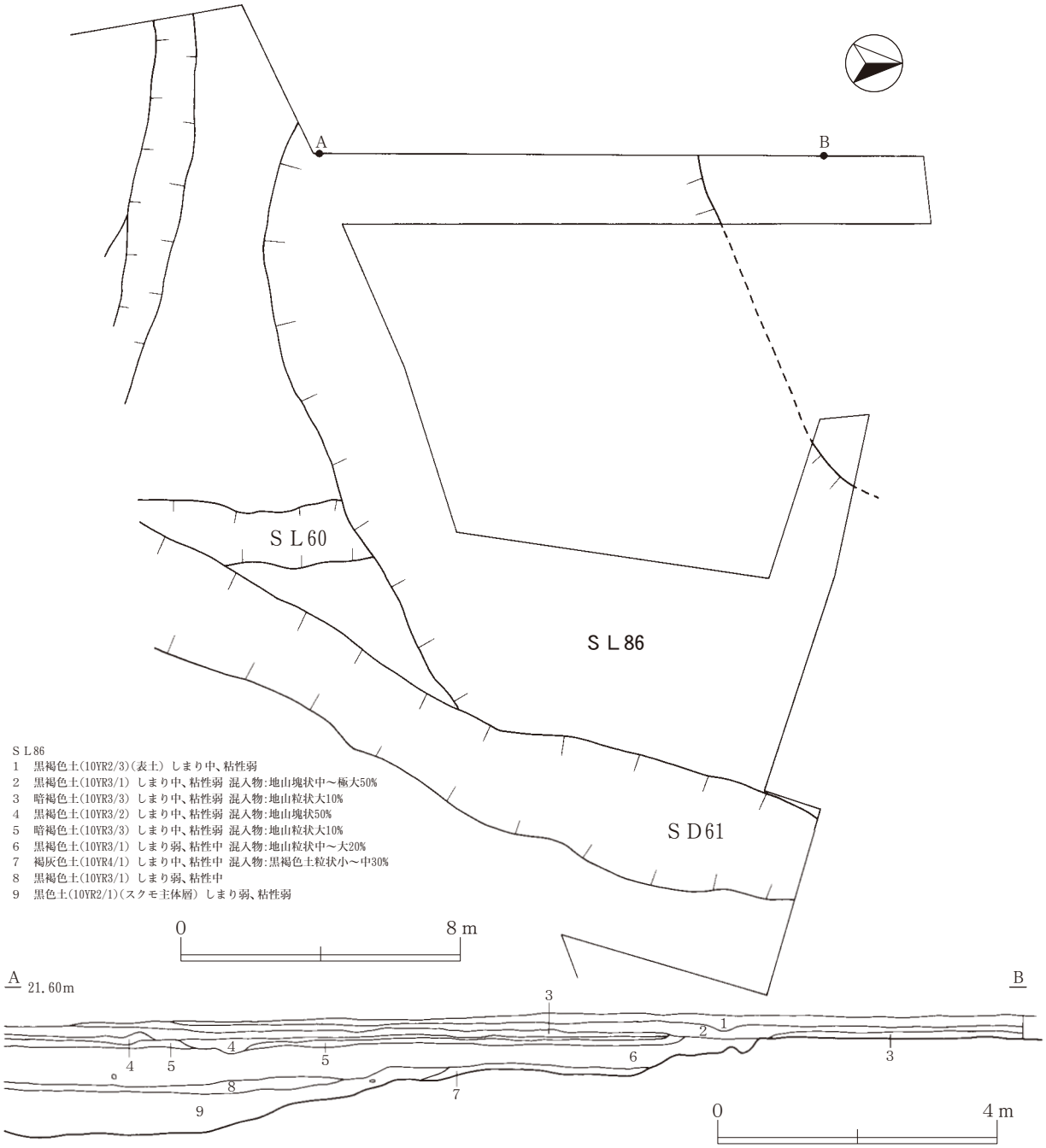


12

高さ:(19.1)cm

0 10cm

第37図　ＳＬ83河道跡出土土師器、須恵器実測図(２)



第38図　ＳＬ86河道跡実測図

２　遺構外出土遺物

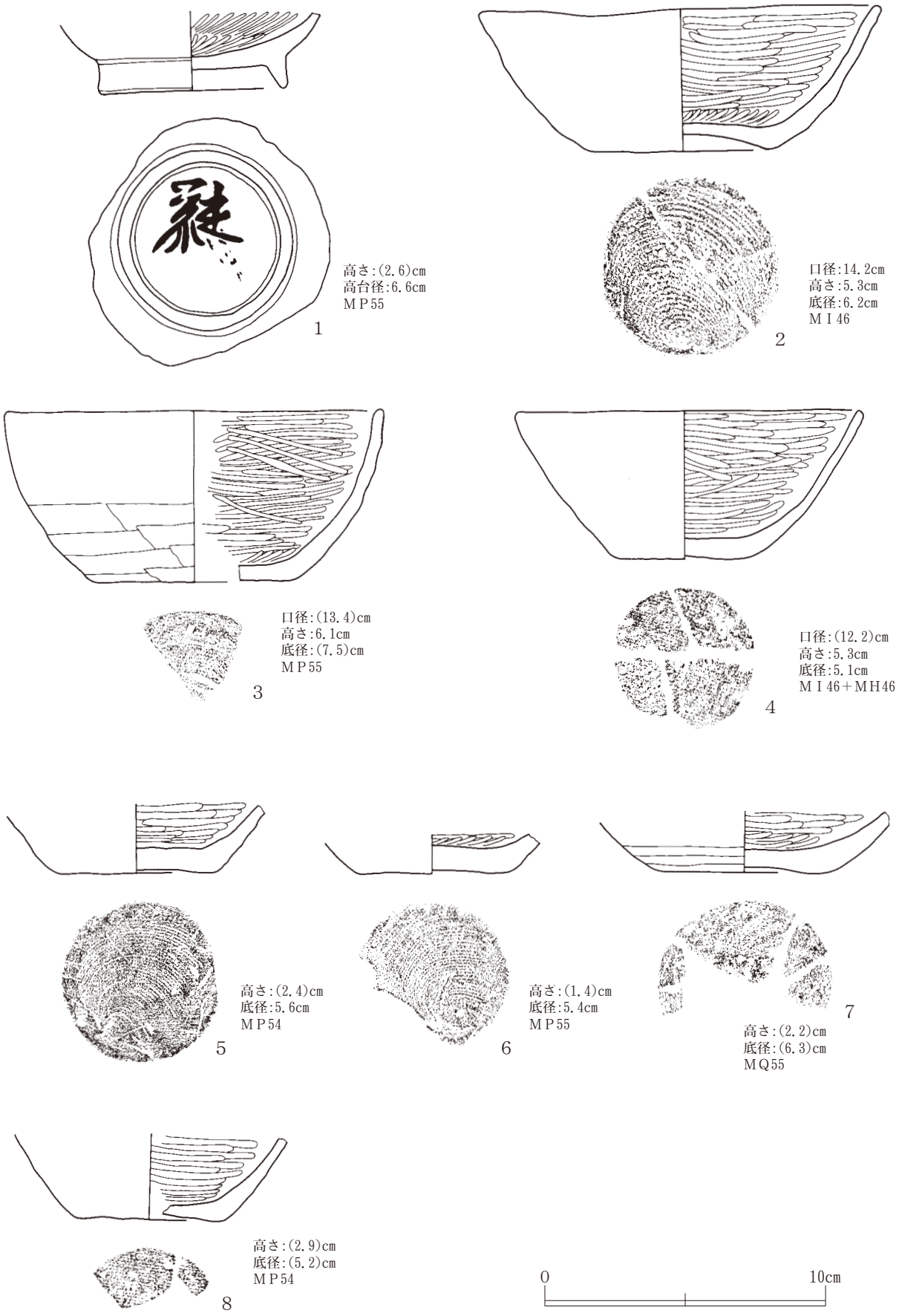
遺構外からは、土師器と須恵器の破片が中コンテナ(規格54×34×10cm)で約６箱分出土した。

(１)土師器(第39～41図、図版４－７)

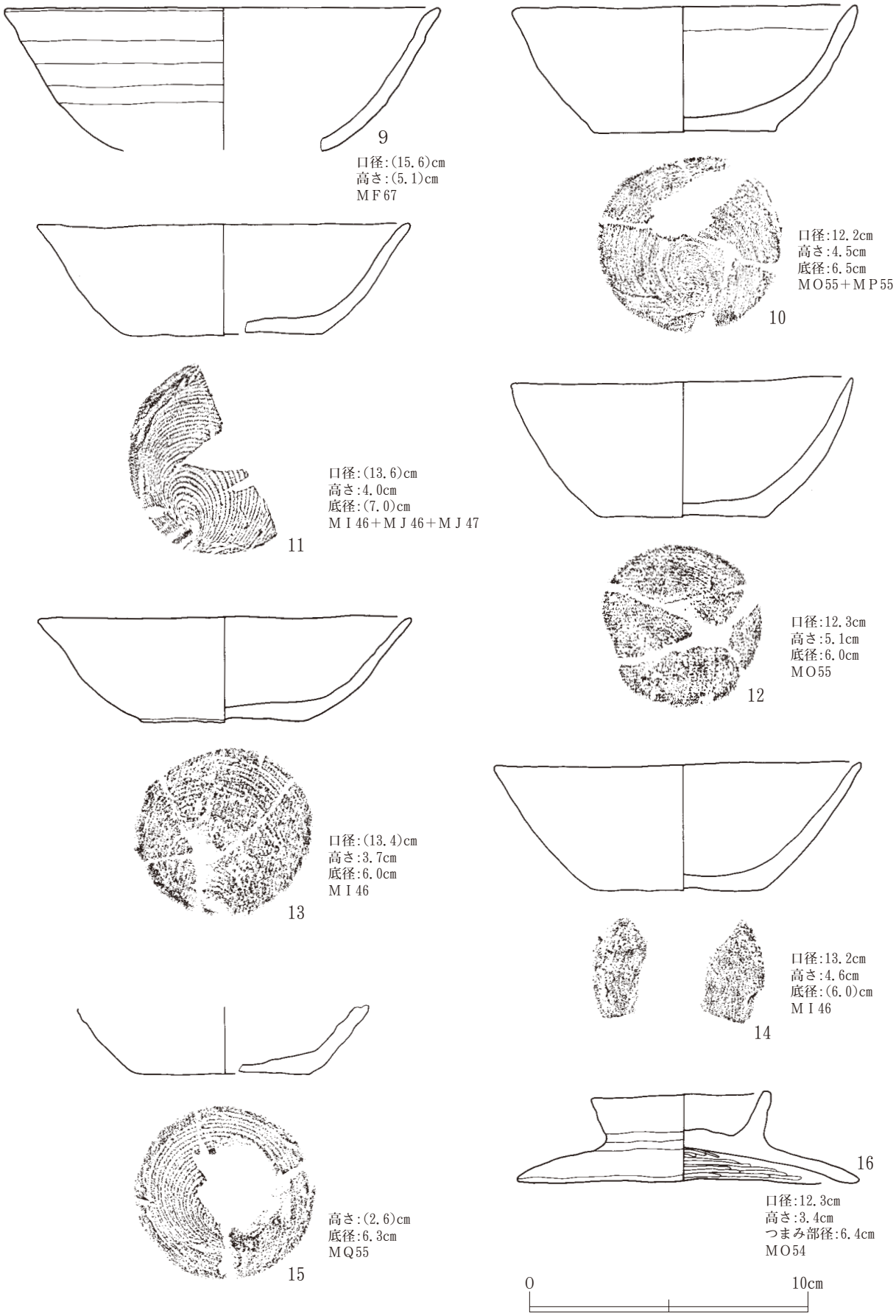
出土した土師器の器種は、高台付坏、坏、蓋、甕などである。１は高台付坏、２～15は坏、16は蓋の破片である。これらはロクロで成形されており、ロクロからの切り離しは回転糸切りである。また、１～８と16の内面はヘラミガキが施されて、黒色処理されている。17～19は甕の破片である。なお、１は底部下面に文字が記された墨書土器である。

(２)須恵器(第42～44図)

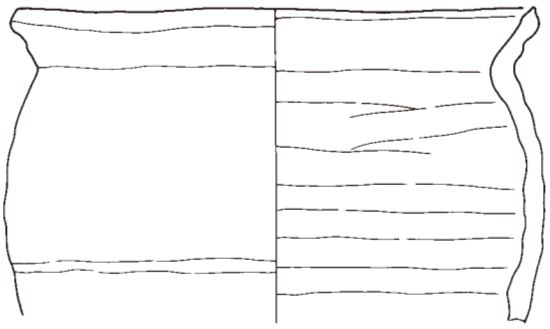
出土した須恵器の器種は、高台付坏、坏、甕、壺などである。１～18・20は坏の破片で、19は小型



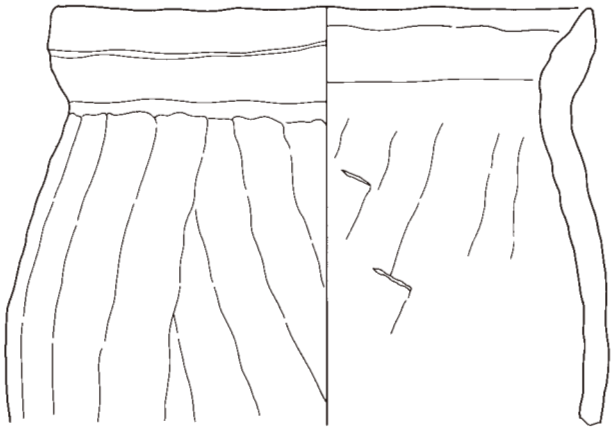
第39図　遺構外出土土師器実測図（１）



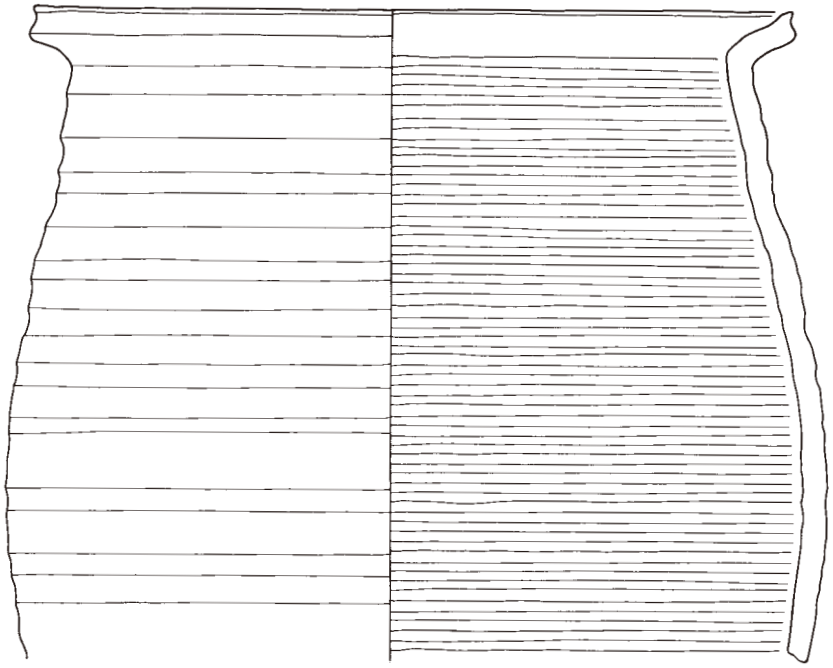
第40図　遺構外出土土師器実測図（２）



口径:13.7cm
高さ:(8.3)cm
17 ＭＦ67



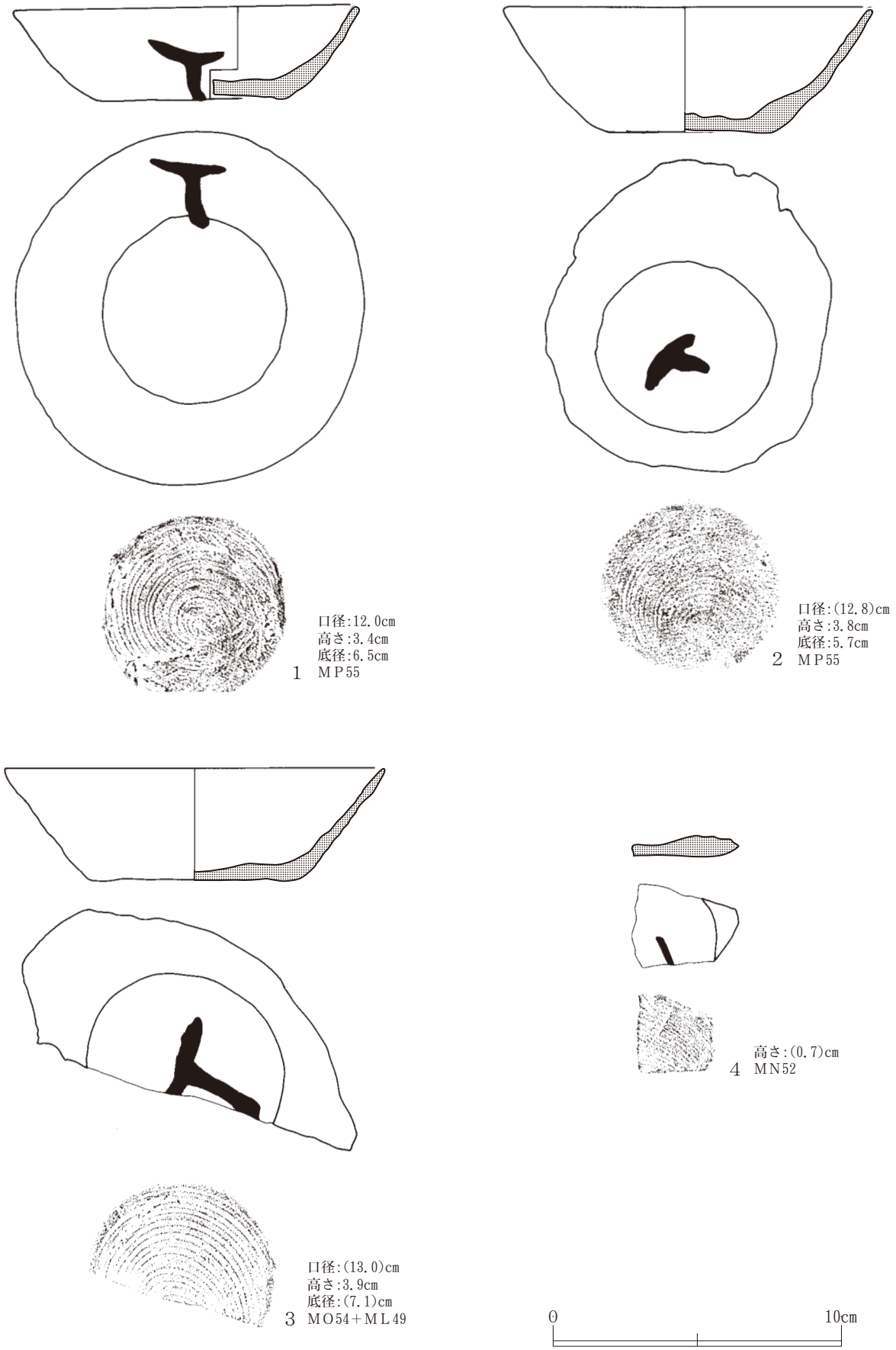
口径:14.4cm
高さ:(11.1)cm
18 ＭＦ67



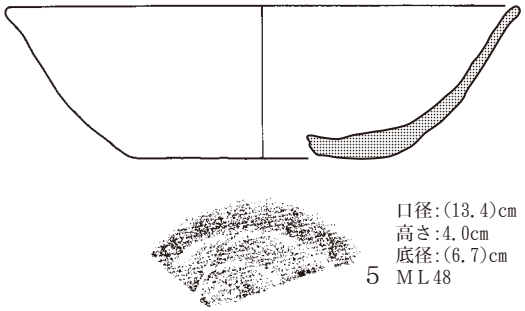
口径:21.0cm
高さ:(17.2)cm
19 ＭＣ44＋ＭＤ46

0 10cm

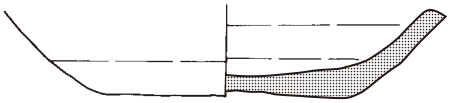
第41図　遺構外出土土師器実測図（３）

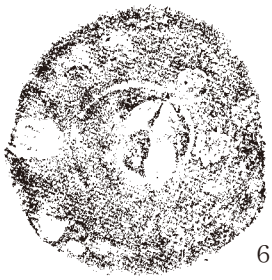


第42図　遺構外出土須恵器実測図（１）

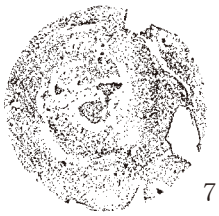


口径:(13.4)cm
高さ:4.0cm
底径:(6.7)cm
5 ＭＬ48

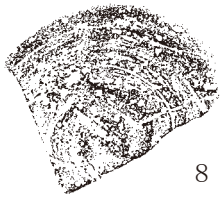




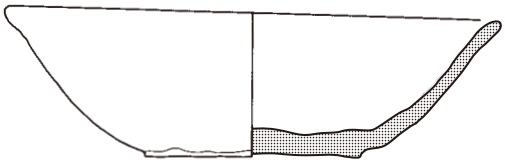
口径:(2.4)cm
底径:6.5cm
6 ＭＮ55＋ＭＮ56

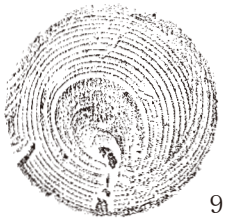


高さ:(1.8)cm
底径:5.0cm
7 ＭＯ53

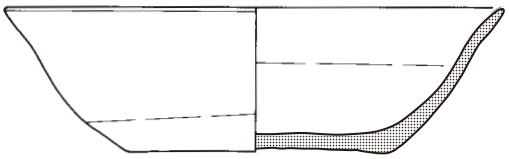


口径:(1.4)cm
底径:(6.4)cm
8 排土

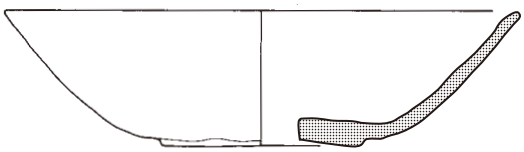


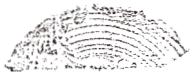


口径:13.0cm
高さ:5.0cm
底径:5.6cm
9 ＭＨ46＋ＭＨ47

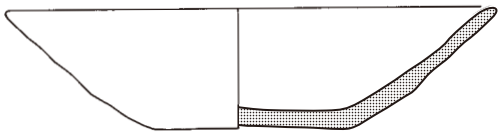


口径:(13.3)cm
高さ:3.8cm
底径:(6.9)cm
10 ＭＮ55＋ＭＯ54





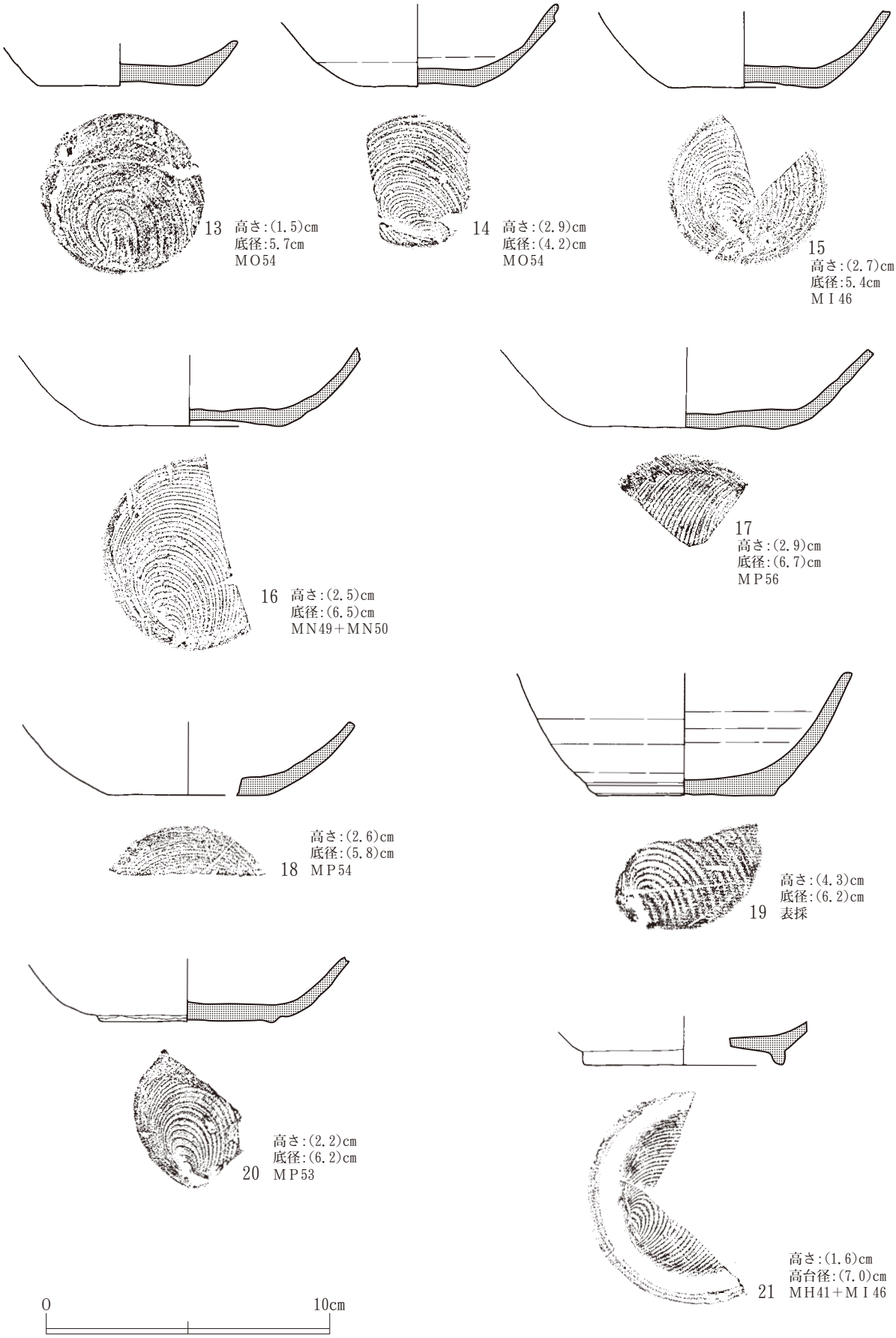
口径:(13.6)cm
高さ:3.6cm
底径:(5.2)cm
11 ＭＭ49



口径:(12.9)cm
高さ:3.2cm
底径:5.1cm
12 ＭＯ55＋ＭＰ54

0　　10cm

第43図　遺構外出土須恵器実測図（２）



第44図　遺構外出土須恵器実測図（３）

の壺の底部片と思われる。21は高台付坏の破片である。これらの須恵器はロクロ成形されており、ロクロからの切り離しは回転糸切り(１～４と９～21)と回転篦切り(５～８)がある。また、１～４は胴部外面(１)や、底部下面(２～４)に文字が記された墨書土器である。

第３節　近世以降の遺構と遺物

１　検出遺構と遺物

(１)井戸跡

ＳＥ65井戸跡(第45図)

ＭＣ35グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。周辺にはＳＥ66・67・68・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(東－西)0.95ｍ×短軸(北－南)0.93ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.0ｍである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は２層に分けられた。0.5～２㎝大の地山塊が両層ともに混在していることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

ＳＥ66井戸跡(第45図)

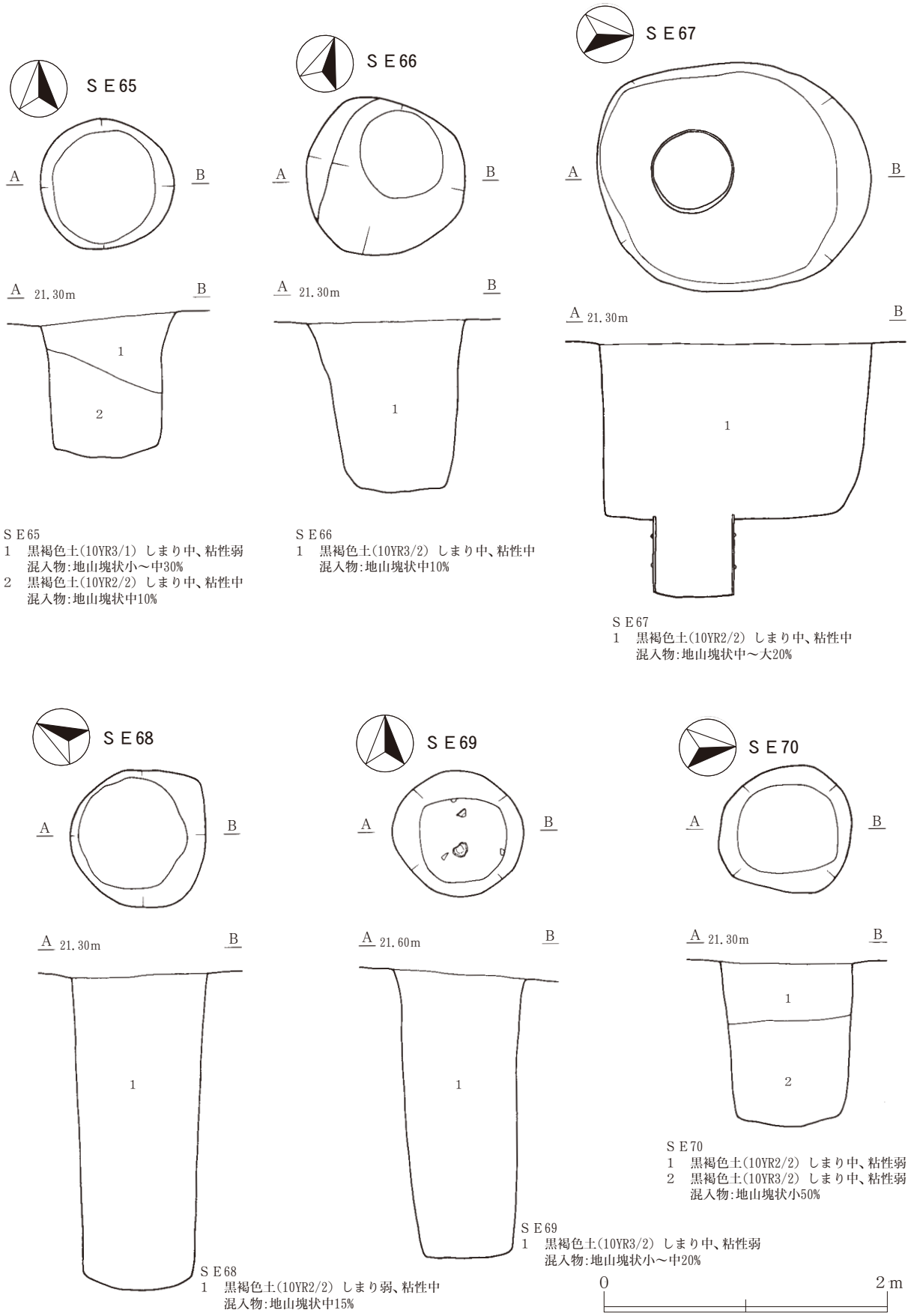
ＭＢ35グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。周辺にはＳＥ65・67・68・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(北東－南西)1.15ｍ×短軸(北西－南東)1.14ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.2ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。１～２㎝大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも少量の水が湧出している。

ＳＥ67井戸跡(第45図)

ＭＢ35グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。周辺にはＳＥ65・66・68・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(北東－南西)1.98ｍ×短軸(北西－南東)1.7ｍの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.23ｍである。底面は平坦であり、底面中央より東寄りには径0.6ｍ、底面からの深さ0.54ｍの掘り込みがある。この掘り込みには、井戸枠として用いられた曲げ物が埋設されている。曲げ物の大きさは径58㎝・器高56㎝である。壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は１層である。１～５㎝大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。また現在でも水が湧出している。なお、本遺構の底面から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は370±30yrＢＰ(1450～1520AD、1590～1620AD)であった。

ＳＥ68井戸跡(第45図)

ＭＢ・ＭＣ36グリッドの第Ⅴ層上面で検出した。周辺にはＳＥ65・66・67・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(東－西)1.0ｍ×短軸(北－南)0.98ｍの円形を呈し、検出面からの深さは2.23ｍである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は１層である。１～２㎝大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は陶磁器の破片(皿)が１



ＳＥ65
1　黒褐色土(10YR3/1) しまり中、粘性弱
　　混入物:地山塊状小～中30%
2　黒褐色土(10YR2/2) しまり中、粘性中
　　混入物:地山塊状中10%

ＳＥ66
1　黒褐色土(10YR3/2) しまり中、粘性中
　　混入物:地山塊状中10%

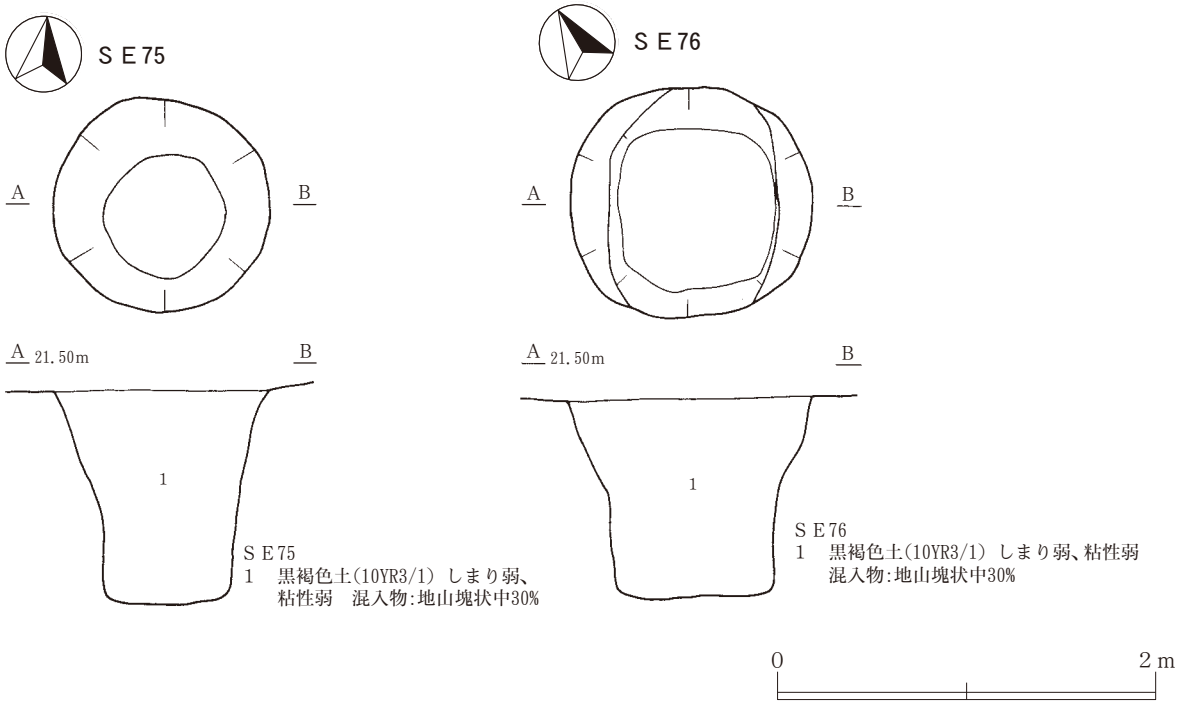
ＳＥ67
1　黒褐色土(10YR2/2) しまり中、粘性中
　　混入物:地山塊状中～大20%

ＳＥ68
1　黒褐色土(10YR2/2) しまり弱、粘性中
　　混入物:地山塊状中15%

ＳＥ69
1　黒褐色土(10YR3/2) しまり中、粘性弱
　　混入物:地山塊状小～中20%

ＳＥ70
1　黒褐色土(10YR2/2) しまり中、粘性弱
2　黒褐色土(10YR3/2) しまり中、粘性弱
　　混入物:地山塊状小50%

第45図　ＳＥ65～ＳＥ70井戸跡実測図



第46図　ＳＥ75・76井戸跡実測図

点出土した(第47図１)。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

ＳＥ69井戸跡(第45図)

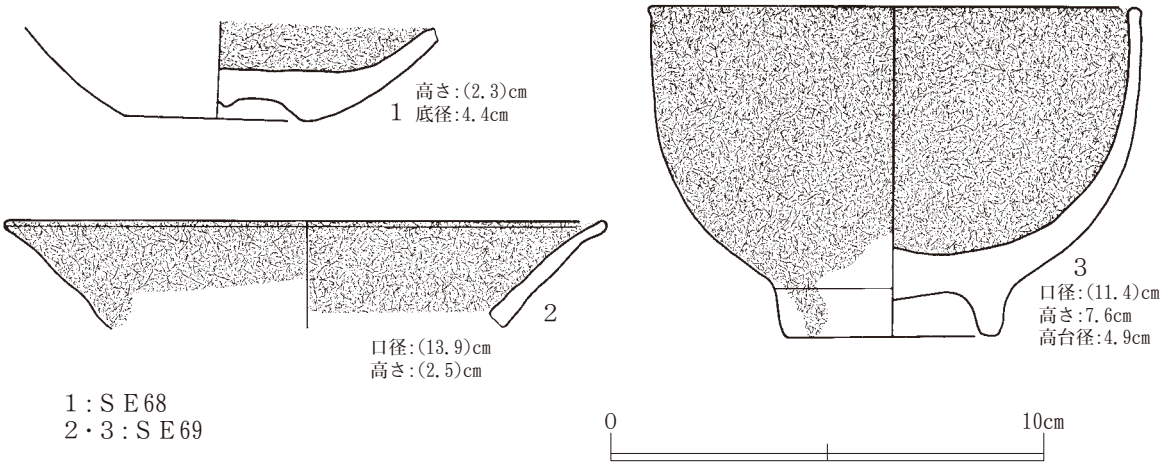
ＭＤ35グリッドの第Ｖ層上面で検出した。周辺にはＳＥ65・66・67・68・70井戸跡がある。平面形は長軸(北西－南東)0.92ｍ×短軸(北東－南西)0.85ｍの円形を呈し、検出面からの深さは2.02ｍである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は１層である。0.5～２㎝大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は陶磁器の破片(皿と碗)が２点出土した(第47図２・３)。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

ＳＥ70井戸跡(第45図)

ＭＢ35グリッドの第Ｖ層上面で検出した。周辺にはＳＥ65・66・67・68・69井戸跡がある。平面形は長軸(北東－南西)0.93ｍ×短軸(北西－南東)0.92ｍのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは1.15ｍである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は２層に分けられた。両層には0.5～２㎝大の地山塊が混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

ＳＥ75井戸跡(第46図)

ＭＣ49グリッドの第Ｖ層上面で検出した。周辺にはＳＥ76井戸跡が隣接する。平面形は長軸(北西－南東)1.1ｍ×短軸(北東－南西)1.1ｍの円形を呈し、検出面からの深さは1.08ｍである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層である。１～２㎝大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思わ



第47図　ＳＥ68・69井戸跡出土陶磁器実測図

れる。また現在でも少量の水が湧出している。

ＳＥ76井戸跡(第46図)

ＭＣ49・50グリッドの地山面で検出した。周辺にはＳＥ75井戸跡が隣接する。平面形は長軸(東－西)1.25m×短軸(北－南)1.24mの円形を呈し、検出面からの深さは1.01mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直であり、それから北西側と南東側はやや緩やかで小さな段差が認められ、外傾しながら立ち上がるが、井戸本来の堀り込みであるかは定かではない。堆積土は１層である。１～２cm大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも少量の水が湧出している。

(２)溝跡

ＳＤ26溝跡(第48図)

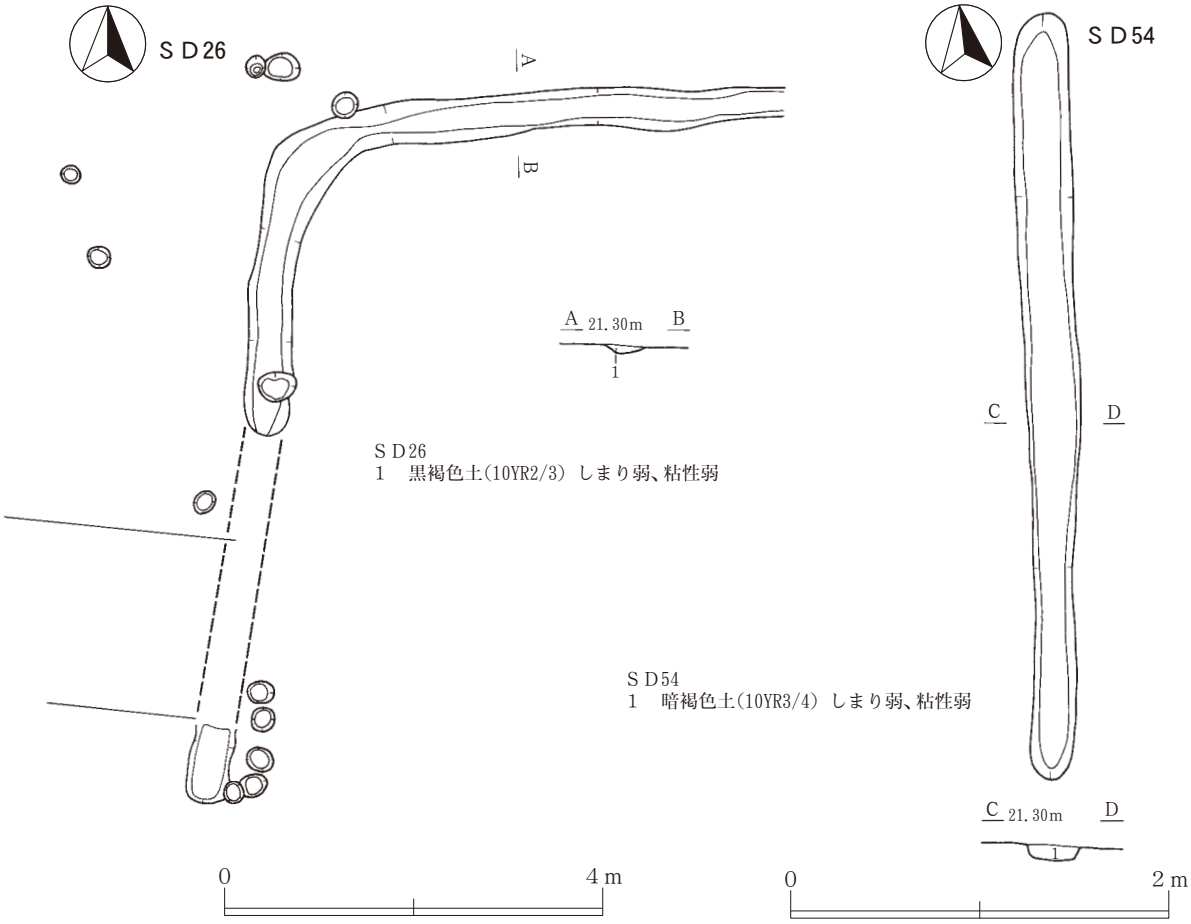
ＭＧ67・68・69、ＭＦ69グリッドの第Ｖ層上面で検出した。南－北、西－東にＬ字状に曲がりながら延びる溝跡で、南－北は途中で途切れて南端に至る。東端は後の整地で失っていて検出できなかった。ＳＫＰ27・28・37柱穴様ピットと重複し、本遺構が古い。検出した範囲で長さ12.08m、幅0.7m、検出面からの深さは0.1mである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

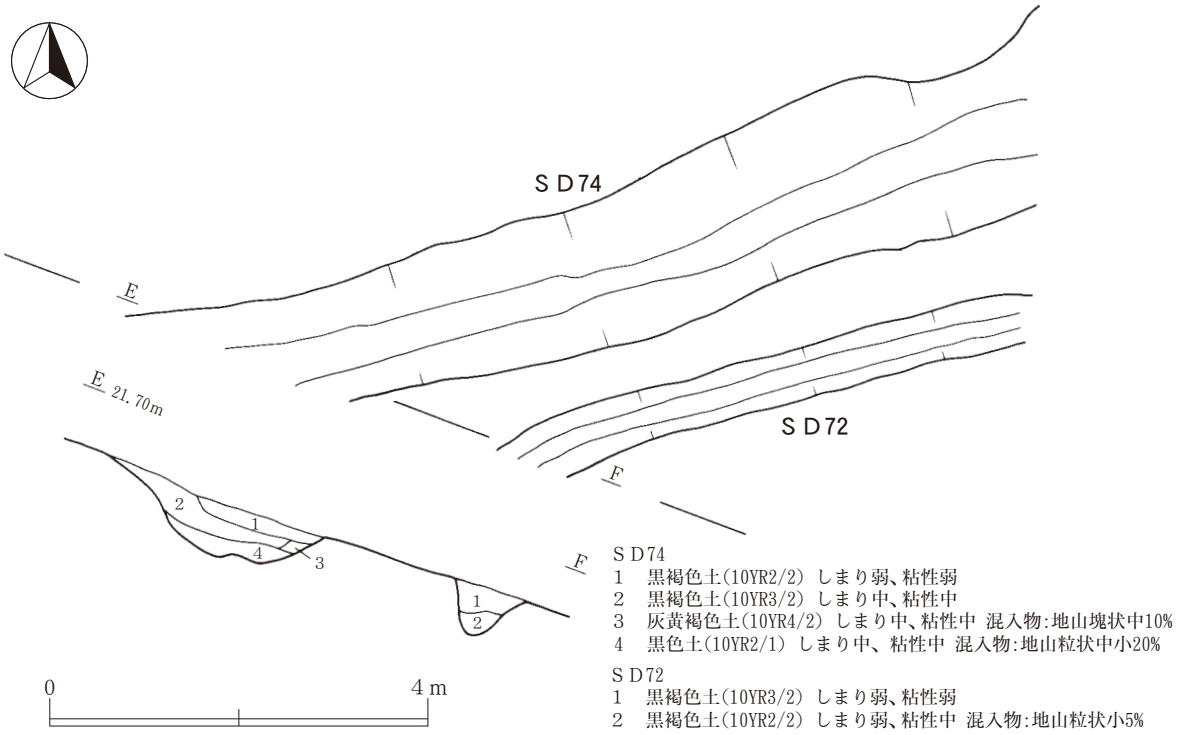
ＳＤ54溝跡(第48図)

ＭＨ67・68グリッドの第Ｖ層上面で検出した。北－南に延びる溝跡で、検出した範囲で長さ4.03m、幅0.3m、検出面からの深さは0.08mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

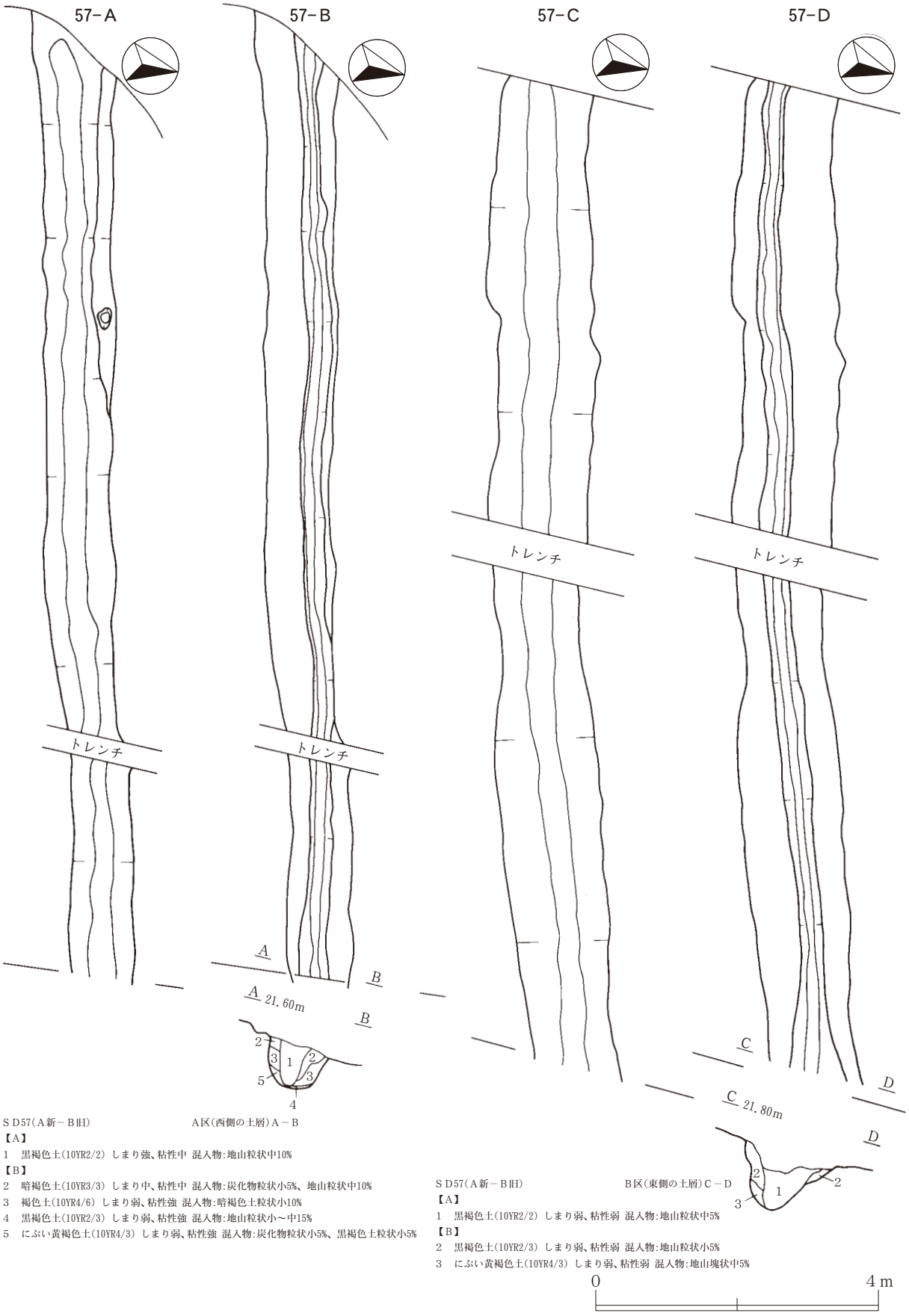
ＳＤ57溝跡(第49図)

ＭＡ38、ＭＢ37・38、ＭＣ37・38、ＭＤ37、ＭＥ37、ＭＦ36・37、ＭＧ36・37、ＭＨ36、ＭＩ36グ





第48図　ＳＤ26・54・72・74溝跡実測図



ＳＤ57（Ａ新－Ｂ旧）　　Ａ区（西側の土層）Ａ－Ｂ

【Ａ】

1　黒褐色土（10YR2/2）しまり強、粘性中 混入物：地山粒状中10%

【Ｂ】

2　暗褐色土（10YR3/3）しまり中、粘性中 混入物：炭化物粒状小5%、地山粒状中10%

3　褐色土（10YR4/6）しまり弱、粘性強 混入物：暗褐色土粒状小10%

4　黒褐色土（10YR2/3）しまり弱、粘性強 混入物：地山粒状小～中15%

5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり弱、粘性強 混入物：炭化物粒状小5%、黒褐色土粒状小5%

ＳＤ57（Ａ新－Ｂ旧）　　Ｂ区（東側の土層）Ｃ－Ｄ

【Ａ】

1　黒褐色土（10YR2/2）しまり弱、粘性弱 混入物：地山粒状中5%

【Ｂ】

2　黒褐色土（10YR2/3）しまり弱、粘性弱 混入物：地山粒状小5%

3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまり弱、粘性弱 混入物：地山塊状中5%

第49図　ＳＤ57溝跡実測図

リッドの第Ｖ層上面で検出した。調査区南側を北東－南西にほぼ直線的に延びる溝跡で、北東端と南西端はそれぞれ調査区外に延伸している。本遺構は、遺構内で新旧で重複しており、それぞれ新しい溝跡をＡ、古い溝跡をＢと表記した。検出した範囲で長さ34.4ｍである。新しい溝跡Ａの幅は0.3ｍ～0.4ｍで、検出面からの深さは0.56ｍである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。古い溝跡Ｂの幅は0.7ｍ～1.5ｍで、検出面からの深さは0.64ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きはやや急である。堆積土は５層に分けたが、新しい溝跡Ａに切られていることもあり、定かではない。

遺物は新しい溝跡Ａで土師器坏の破片、土師器甕の破片、須恵器甕の破片、陶磁器の破片などが16点、古い溝跡Ｂで土師器坏の破片が１点出土した。

ＳＤ61溝跡(第４図)

ＭＬ57・58・59、ＭＭ56・57・58・59、ＭＮ54・55・56、ＭＯ54・55、ＭＰ54・55、ＭＱ54・55、ＭＲ55グリッドの第Ｖ層上面で検出した。北東－南西、南東－北西にＬ字状に曲がりながら延びる溝跡で、その北東端と北西端はそれぞれ調査区外に延伸している。ＳＬ60・86河道跡と重複し、本遺構が新しい。検出した範囲で長さ約25ｍ、幅1.4ｍ～2.0ｍ、検出面からの深さは0.3ｍ～0.55ｍである。底面は平坦であり、壁の傾きは急である。堆積土は１層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は主にＳＬ60河道跡と交わるＭＯ54グリッドの底部から土師器坏の破片、土師器蓋の破片、須恵器坏の破片、須恵器甕の破片、陶磁器の破片などが現代(昭和時代)のゴミと混じって多量に出土した。そのうち遺物を53点掲載した(第50～55図)。

ＳＤ72溝跡(第48図)

ＬＫ・ＬＬ・ＬＭ40、ＬＫ41グリッドの第Ｖ層上面で検出した。北東－南西にＳＤ74溝跡と平行に隣接して直線的に延びる溝跡で、北東端と南西端はそれぞれ調査区外に延伸している。検出した範囲で長さ約5.8ｍ、幅0.5ｍ～0.6ｍ、検出面からの深さは0.54ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は２層に分けられた。整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器甕の破片１点と陶磁器の破片１点が出土した。

ＳＤ74溝跡(第48図)

ＬＭ40、ＬＫ・ＬＬ・ＬＭ41グリッドの第Ｖ層上面で検出した。北東－南西にＳＤ72溝跡と平行に隣接して直線的に延びる溝跡で、北東端と南西端はそれぞれ調査区外に延伸している。検出した範囲で長さ約9.2ｍ、幅1.24ｍ～1.88ｍ、検出面からの深さは0.54ｍである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は４層に分けられた。整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器坏の破片１点と陶磁器の破片２点が出土した。

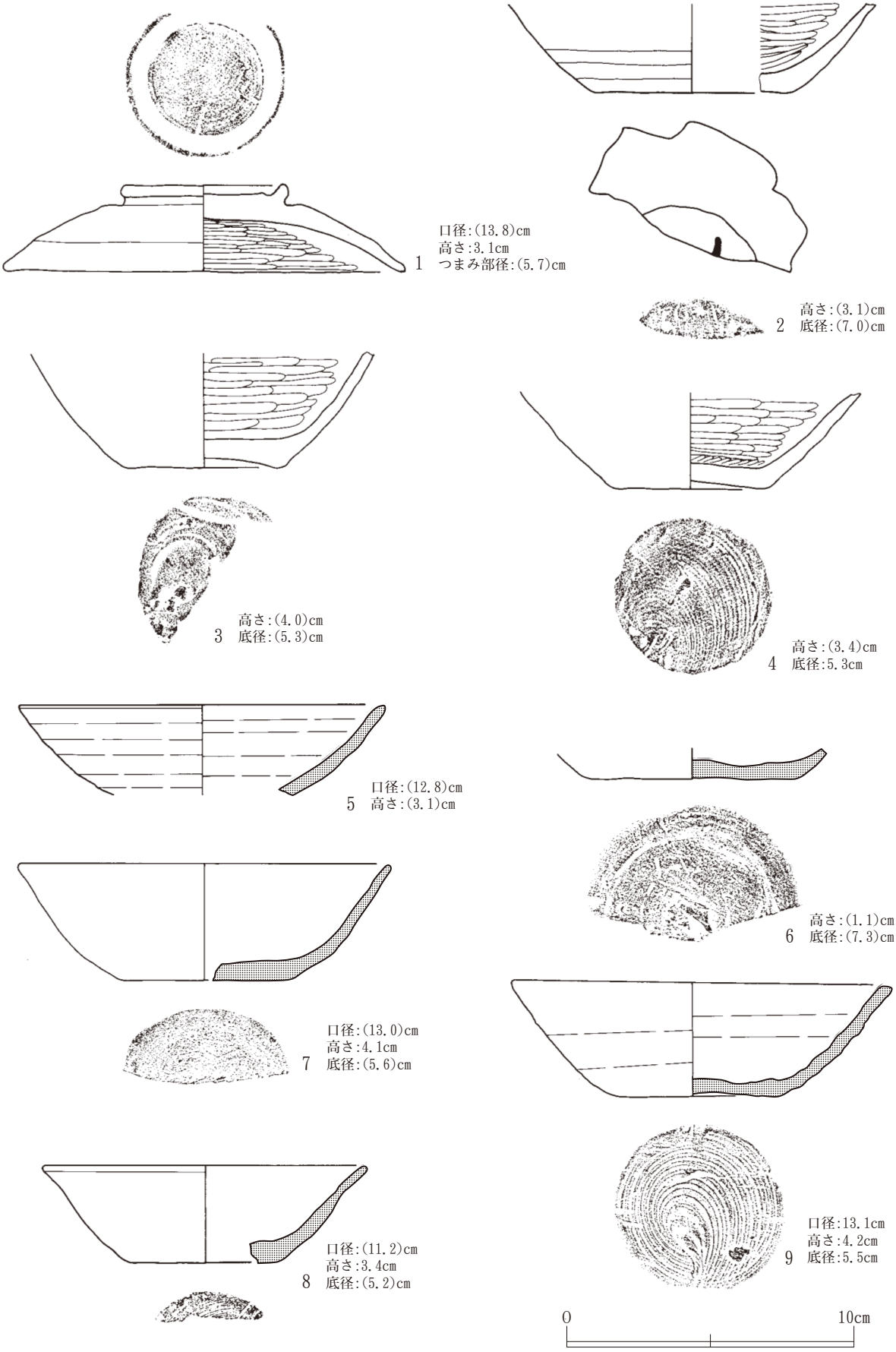
(３)柱穴様ピット(第４図)

柱穴様ピットは調査区北端部で51基、東部で４基の計55基を検出した。平面形は円形と楕円形を呈し、規則的な配列は認められず、柱痕跡も確認できなかった。堆積土は黒褐色土(10ＹＲ2/3)～黒褐

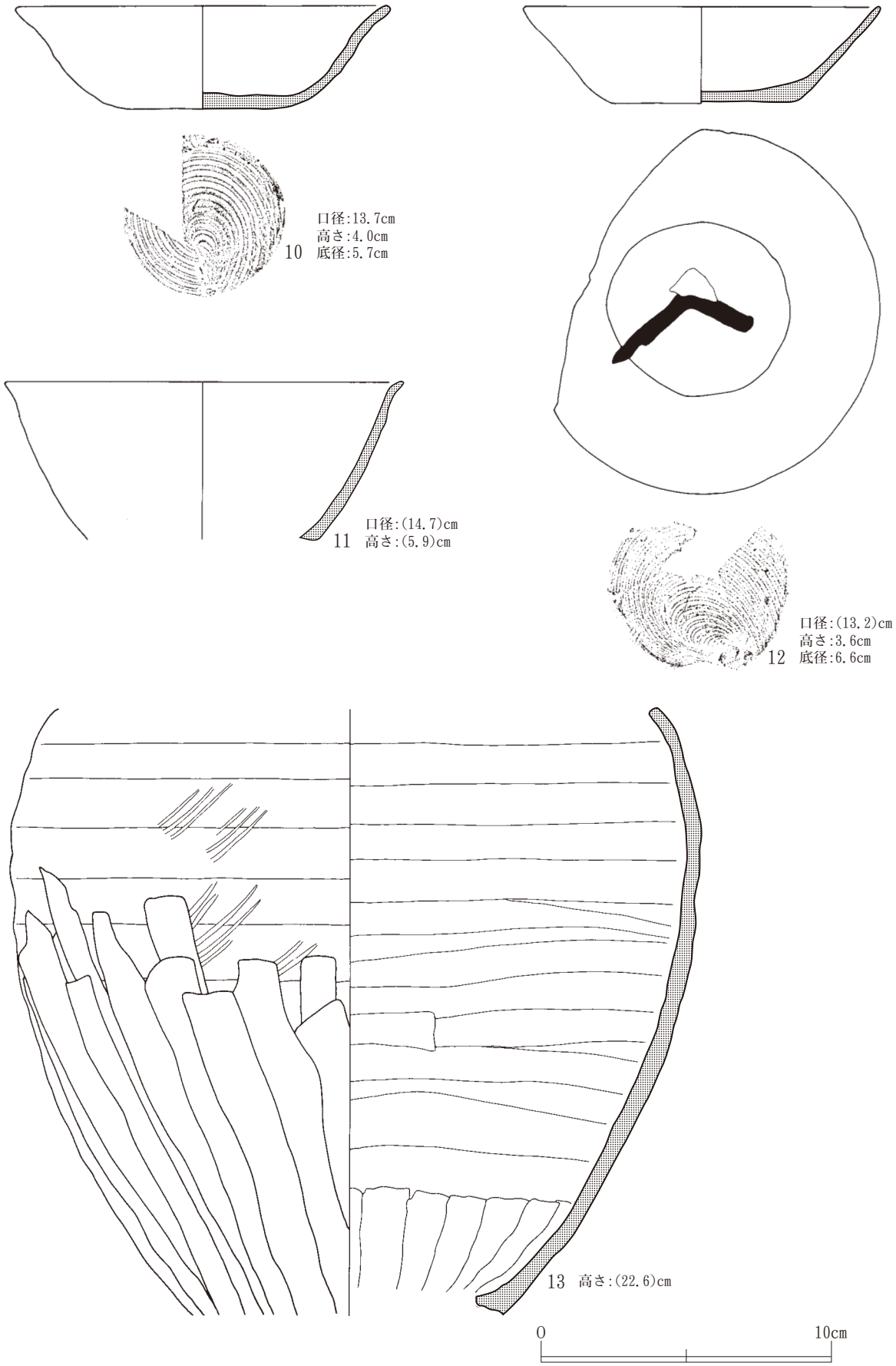
第１表　柱穴様ピット観察表

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸(cm)	大きさ 短軸(cm)	大きさ 深さ(cm)	底面の標高(m)	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸(cm)	大きさ 短軸(cm)	大きさ 深さ(cm)	底面の標高(m)
1	ＭＩ70	楕円形	23	22	17	21.01	30	ＭＩ67	円形	24	23	21	21.01
2	MH・MI 70	(楕円形)	(42)	22	7	21.11	31	MH・MI 67	円形	24	23	30	20.91
3	MH70	楕円形	30	26	38	20.98	32	MG68	楕円形	24	20	6	21.07
4	MH70	楕円形	38	34	11	21.06	33	MF68	楕円形	27	26	11	20.95
5	MH70	楕円形	30	25	5	20.69	34	MG68	楕円形	30	22	13	21.01
6	MH70	楕円形	21	18	19	21.02	35	MG67	楕円形	26	22	14	21.04
7	MH 69・70	楕円形	26	24	11	20.99	36	MG67	楕円形	26	25	15	21.02
8	MG・MH 70	楕円形	31	24	24	20.94	37	MG67	円形	20	20	18	21.02
9	MH70	円形	22	21	7	21.1	38	MG67	円形	24	24	14	21.04
10	MH 69・70	円形	26	25	5	21.15	40	MG67	円形	22	22	23	20.96
11	MH70	円形	20	20	10	21.1	41	MG67	(楕円形)	31	22	23	20.96
12	MH70	円形	20	18	17	21	42	MG67	円形	17	15	16	21.14
13	MG70	円形	29	28	16	20.99	43	MG66	円形	24	22	17	21.02
14	MG70	楕円形	23	20	15	20.99	44	MG67	楕円形	21	20	25	20.92
15	MG70	楕円形	24	22	23	20.92	45	MF・MG 66	楕円形	25	19	17	21
16	MG70	不整楕円形	22	20	13	21.06	46	MF66	楕円形	28	27	14	20.97
17	MG・MH 70	楕円形	32	30	5	21.16	47	MG66	楕円形	30	18	16	21
18	MF 69・70	楕円形	34	28	25	20.87	48	MG66	楕円形	27	26	17	21
19	ＭＩ69	楕円形	26	20	16	21.05	49	MG66	楕円形	30	24	20	21.1
20	MH69	円形	22	20	7	21.13	50	MG66	楕円形	28	25	13	21.06
21	MG・MH 69	円形	24	23	9	21.09	51	MG65	(楕円形)	(28)	(24)	13	21.05
22	MG69	円形	20	18	21	20.96	52	MG65	(楕円形)	(20)	(12)	18	21.03
23	MG69	円形	24	22	17	20.99	53	MG65	円形	22	20	16	21.04
24	MG69	円形	22	22	16	20.99	79	ＬN45	楕円形	49	42	18	19.93
25	MG69	楕円形	36	28	18	20.96	80	ＬO46	楕円形	43	39	14	19.94
27	MG68	不整楕円形	40	34	21	20.96	81	ＬO46	円形	32	31	14	20.01
28	MG69	楕円形	30	27	27	20.87	82	ＬN47	楕円形	50	41	20	19.84
29	ＭＩ67	円形	20	19	18	21.04							

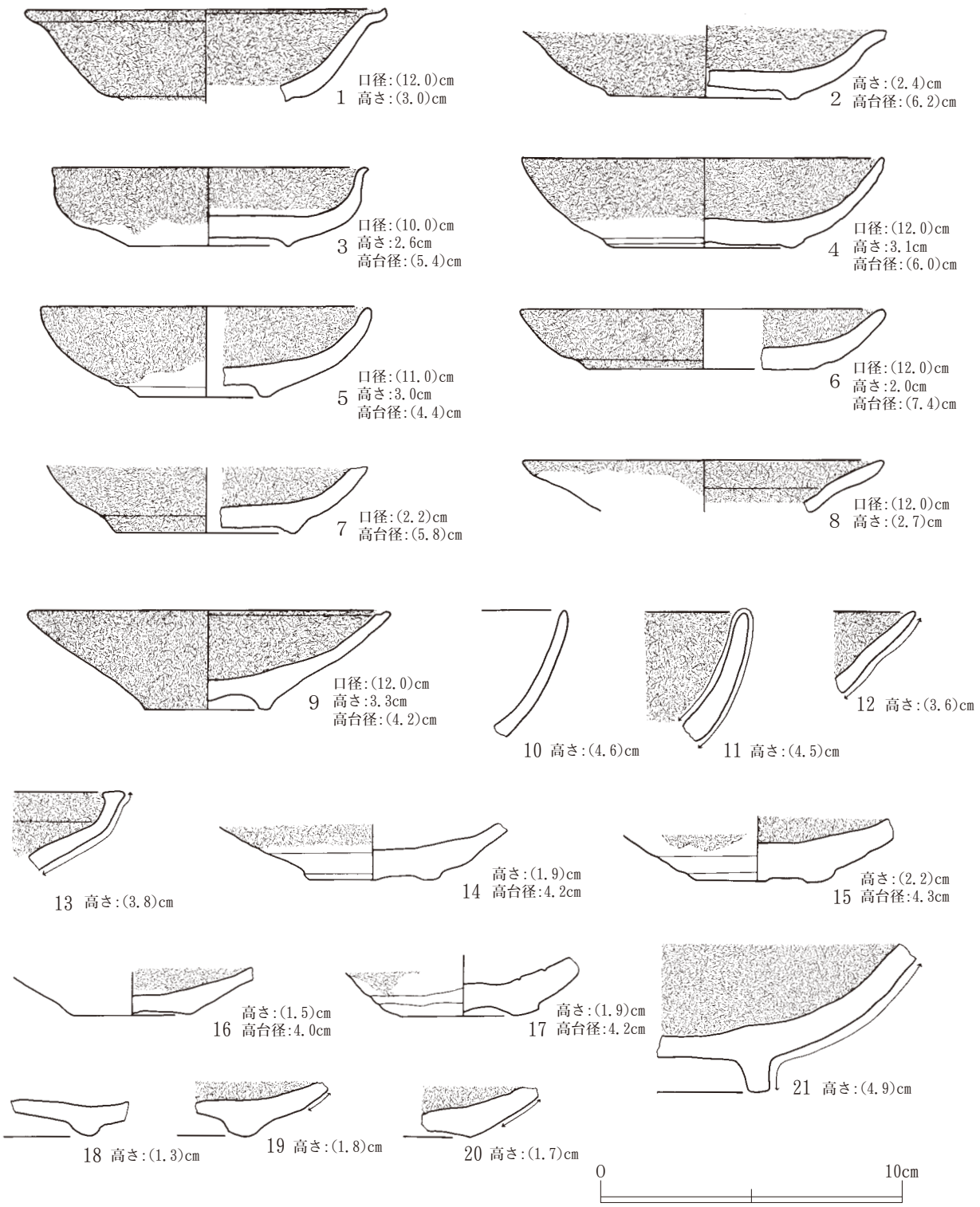
色土(10ＹＲ3/2)で、よくしまっている単一層である。遺物は北端部の柱穴様ピット２基から、それぞれ陶磁器片が１点出土した。個々の柱穴様ピットについては第１表にまとめた。



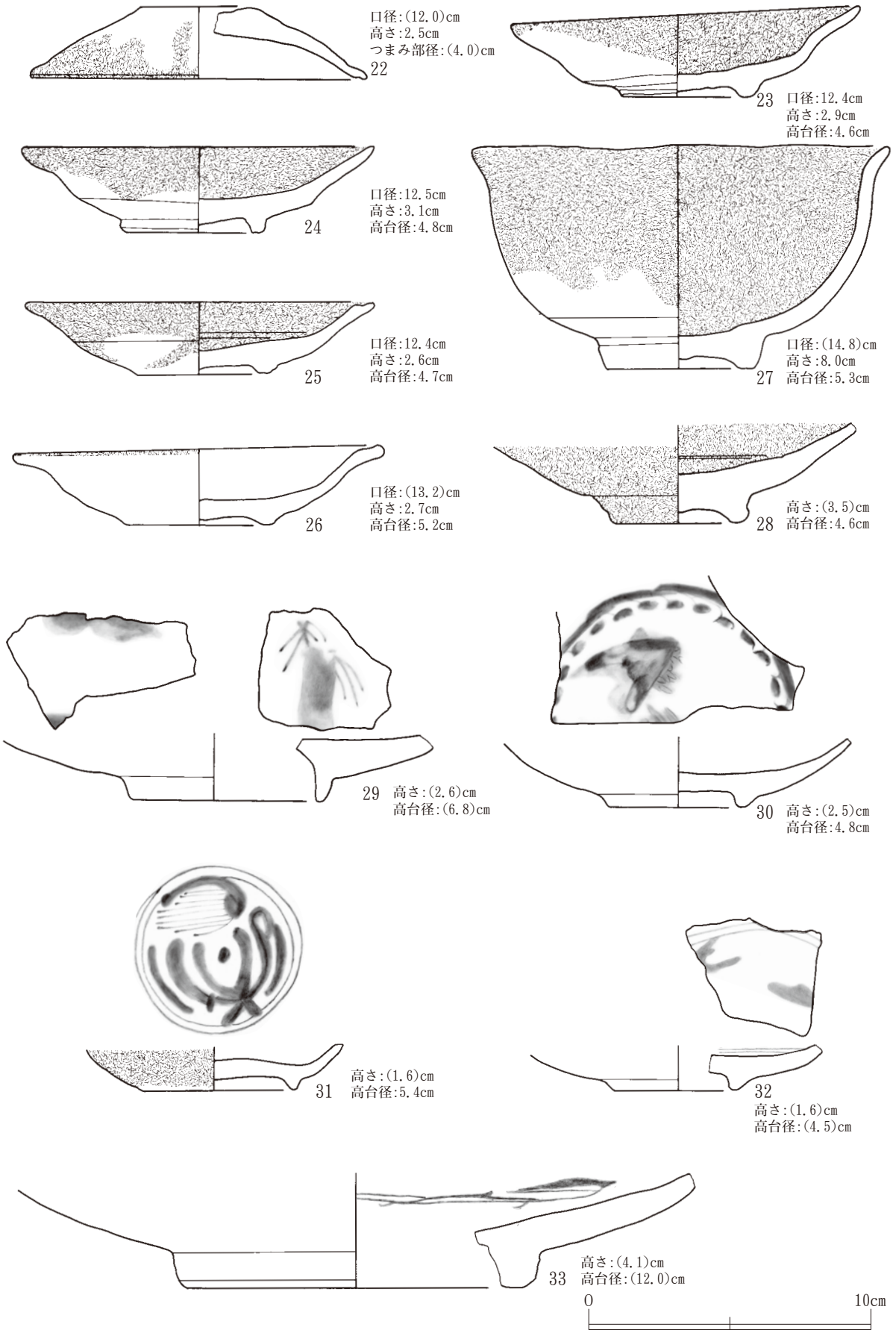
第50図　ＳＤ61溝跡出土土師器、須恵器実測図（１）



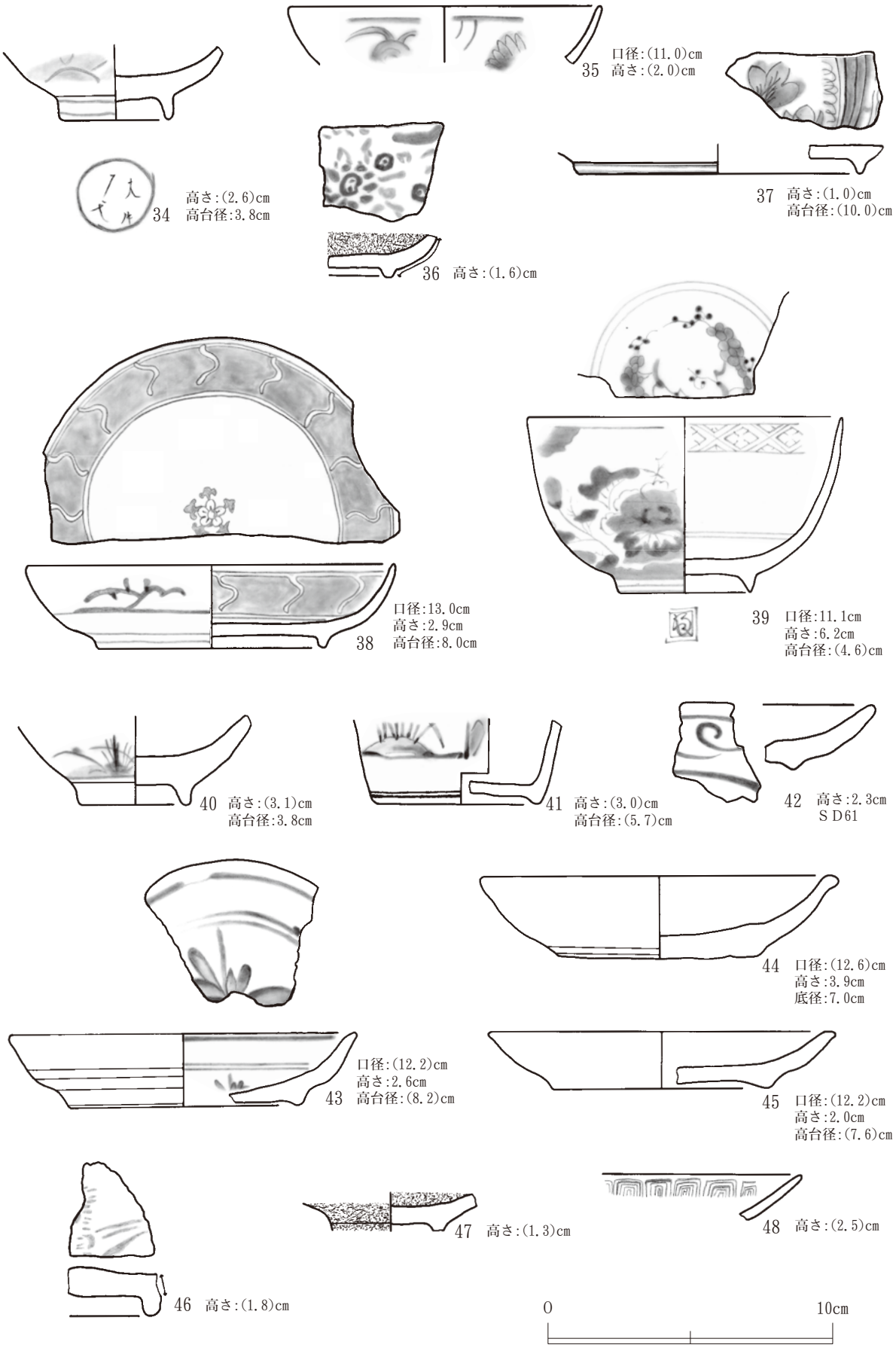
第51図　ＳＤ61溝跡出土須恵器実測図（２）



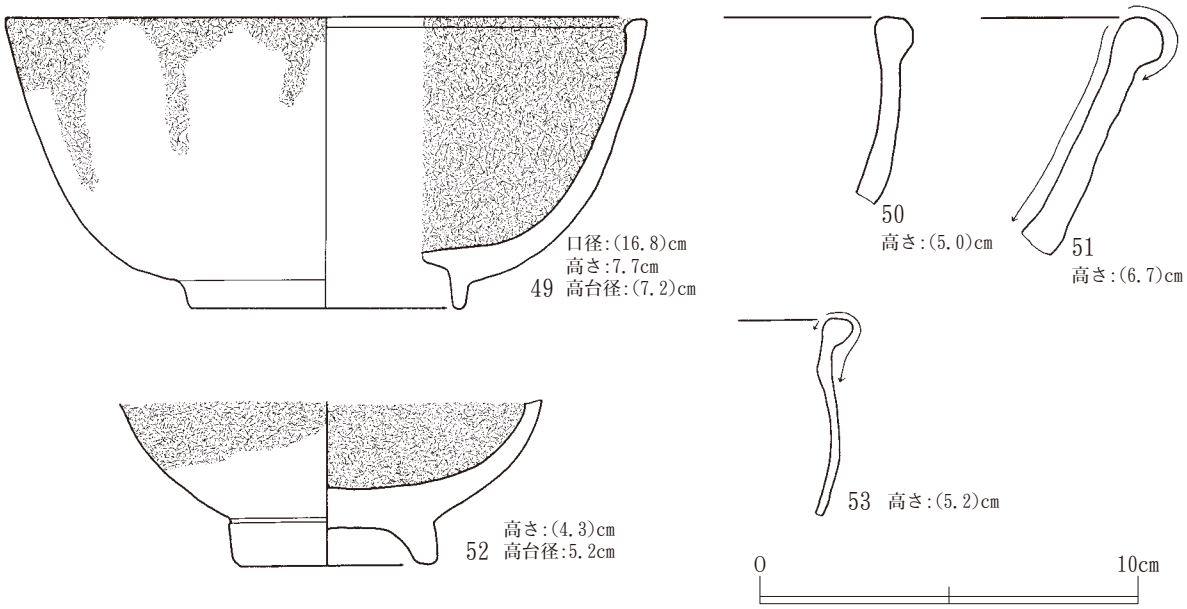
第52図　ＳＤ61溝跡出土陶磁器実測図（１）



第53図　ＳＤ61溝跡出土陶磁器実測図（２）



第54図　ＳＤ61溝跡出土陶磁器実測図（３）

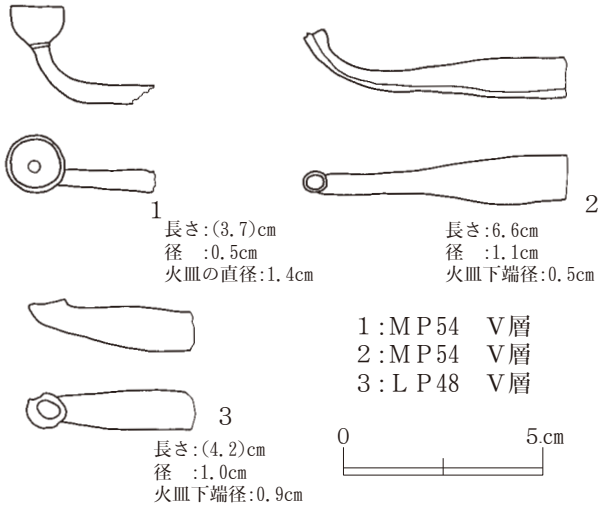


第55図　ＳＤ61溝跡出土陶磁器実測図（４）

２　遺構外出土遺物

遺構外からは、陶磁器や煙管などが中コンテナ(規格54×34×10cm)で１箱分ほど出土した。

出土した陶磁器はすべて破片であり、その器種は碗、皿、甕、壺などである。煙管(第56図)は銅製で、残っている部位は火皿や首部である。



第56図　遺構外出土煙管実測図

第３章　まとめ

沖田遺跡の発掘調査は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係った遺跡中央部について実施した。調査の結果、縄文時代、平安時代、近世などの遺構と遺物を検出した。

【検出遺構】

縄文時代の遺構は、配石遺構が１基である。時期は本遺構周囲から出土した遺物から縄文時代後期に属するものと考えられる。また、配石の在り方やその下部に何等の施設を伴わない点から墓とは違う性格が考えられる。

平安時代の遺構は、掘立柱建物跡１棟、土坑４基、焼土遺構１基、河道跡３条である。これらの遺構のうち、土坑からは土師器・須恵器や焼土などが混在して出土したことから、ゴミ穴として使われていたと考えられる。また、調査区南東から北西にかけて延びる河道跡（ＳＬ60）と、調査区北側で東西に延びる河道跡（ＳＬ86）には915年に十和田火山が噴火した時の火山灰が堆積しており、その上から多くの土師器と須恵器が出土した。このことから、土師器や須恵器は火山灰降下後に河道内に投棄されたことが窺われる。なお、南東から北西にかけてみつかった河道跡（ＳＬ60）からは「寺」「人」「兄」などの文字が記された墨書土器が出土した。

近世以降の遺構は、井戸跡８基および溝跡５条、柱穴様ピット55基である。これらのうち、井戸跡は出土した遺物から江戸時代に作られたものと考えられる。

【出土遺物】

出土遺物は縄文時代後期の土器、平安時代の土師器・須恵器・土錘・砥石、近世以降の陶磁器・煙管などであり、出土遺物のうちで最も多かったのは平安時代の遺物で、次いで近世（江戸時代）、縄文時代の順である。平安時代の遺物では土師器が、須恵器より多く出土している。

平安時代の土師器坏に「寺」の文字が記された墨書土器が３点（第14図１～３、図版３－７・８、図版４－１）あった。このうち第14図２には「人」の文字も併記されている。県内では「寺」の墨書土器が鹿角市の小平遺跡（土師器坏１点）、鹿角市の一本杉遺跡（土師器坏１点）、北秋田市鷹巣の胡桃館遺跡（須恵器坏２点）、美郷町千畑の厨川谷地遺跡（土師器坏１点）、横手市の十二牲Ｂ遺跡（須恵器坏１点）、秋田市の秋田城跡（14点以上）、由利本荘市の上谷地遺跡（土師器坏１点）、由利本荘市の新谷地遺跡（土師器坏１点）の８遺跡で出土している。また、「人」の文字が記された墨書土器が９点（第14図２、第25図16・17、第26図20・21、第27図25・26、第42図１・２、図版４－２～６・８）出土した。同様に秋田市の秋田城跡17次調査（１点）、秋田市の秋田城跡54次調査（１点）、由利本荘市西目の井岡遺跡（６点）の３遺跡でも出土している。このほか「兄」（第28図31、図版４－６）と判読できないもの（第39図１、図版４－７）などを含めて、合計23点の墨書土器が出土した。

以上、検出した遺構と出土遺物から沖田遺跡は、９世紀後半から10世紀前半の平安時代の集落の一部であったと考えられる。また、「寺」と記された墨書土器がみつかったことから、その当時、集落の近くにはお寺などの施設があったと推測される。このほか縄文時代および近世（江戸時代）にも人々が利用した場所であることがわかった。

1　遺跡全景（西から）

2　遺跡全景（真上）

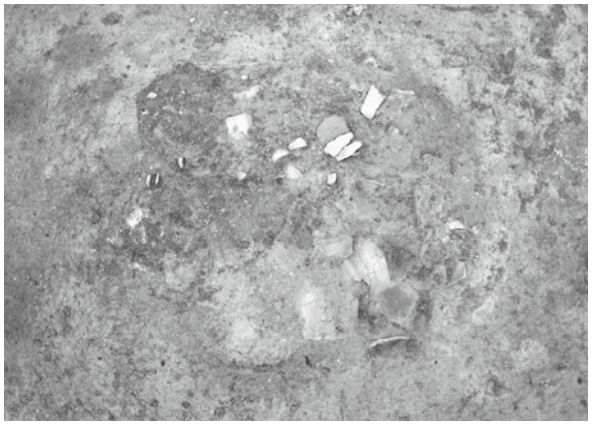
図版2

1　ＳＱ78配石遺構（北から）

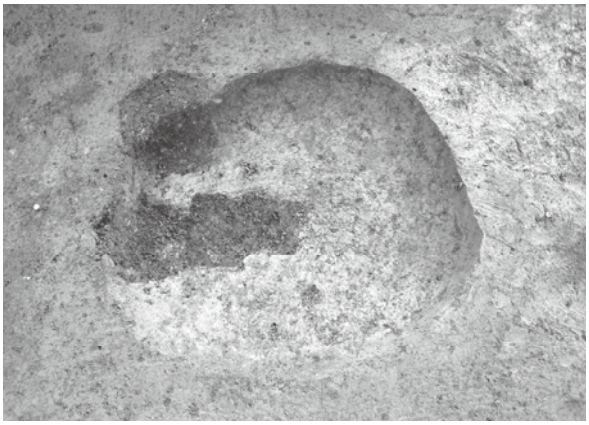
2　ＳＢ63掘立柱建物跡（北西から）

3　ＳＫ64土坑遺物出土状況（北東から）

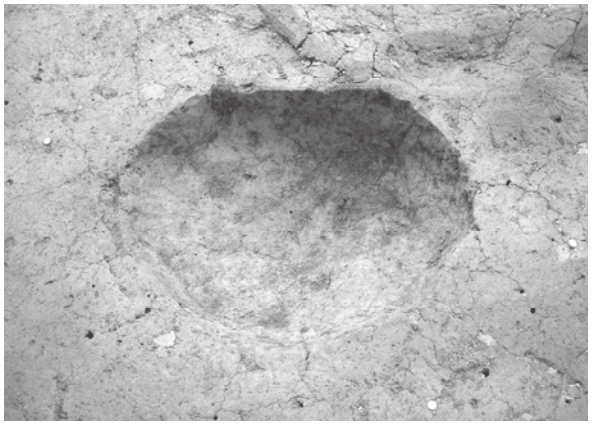
4　ＳＫ64土坑完掘状況（北東から）



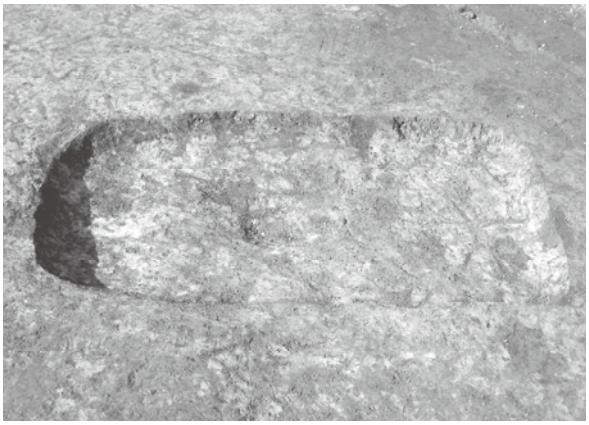
5　ＳＫ85土坑遺物出土状況（北から）



6　ＳＫ85土坑完掘状況（北から）



7　ＳＫ77土坑完掘状況（北から）



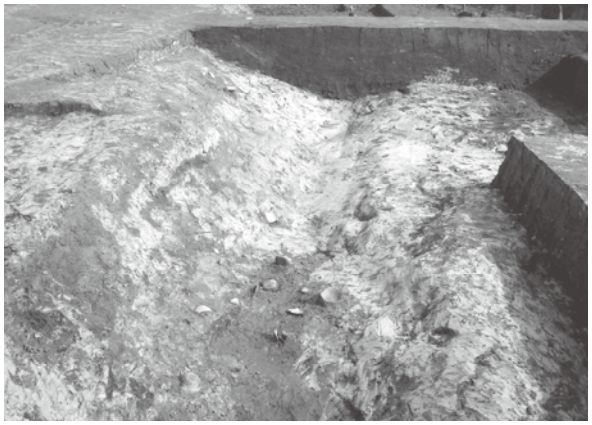
8　ＳＮ84焼土遺構（南東から）

1　ＳＬ60河道跡確認状況（北西から）

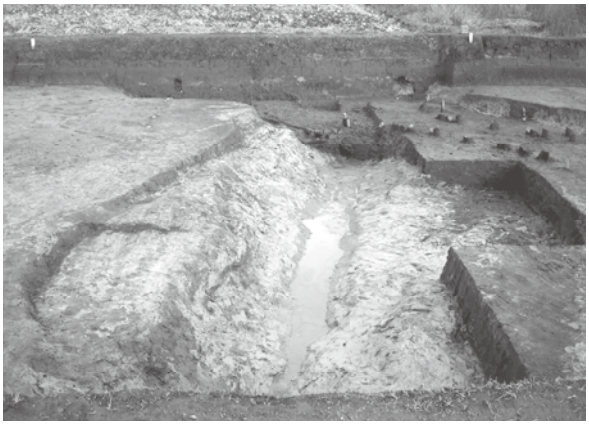
2　ＳＬ60河道跡完掘状況（北西から）

3　ＳＬ60河道跡遺物出土状況（東から）

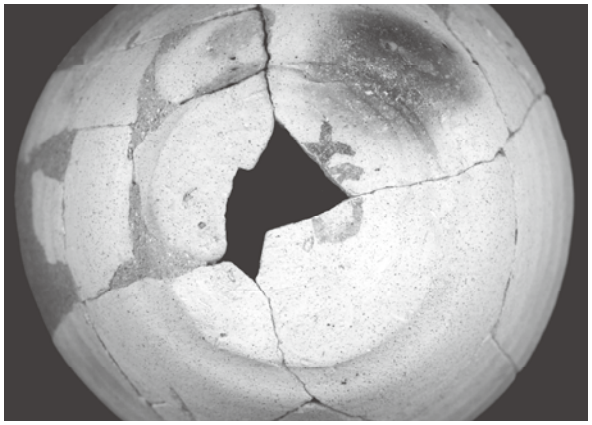
4　ＳＬ60河道跡完掘状況（南東から）



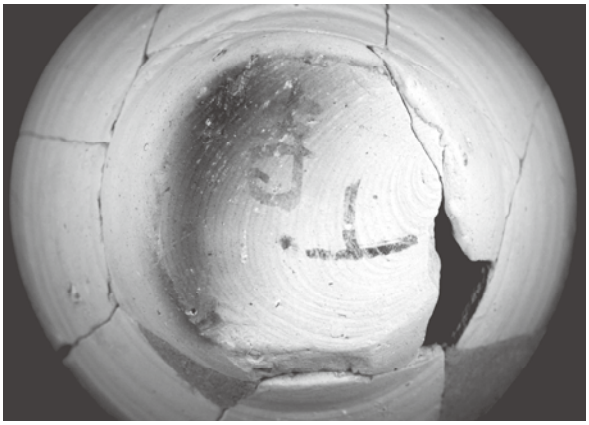
5　ＳＬ83河道跡遺物出土状況（西から）



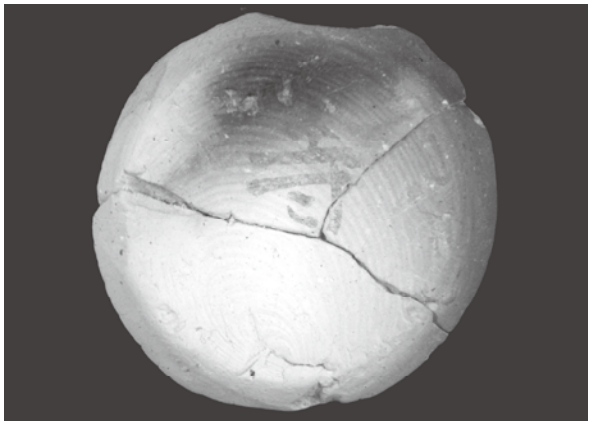
6　ＳＬ83河道跡完掘状況（西から）



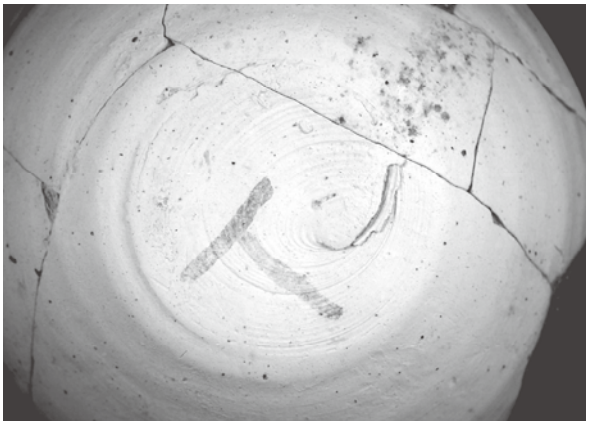
7　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第14図１）



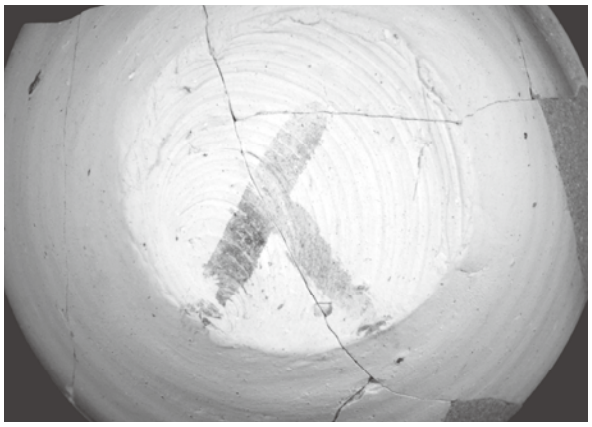
8　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第14図２）



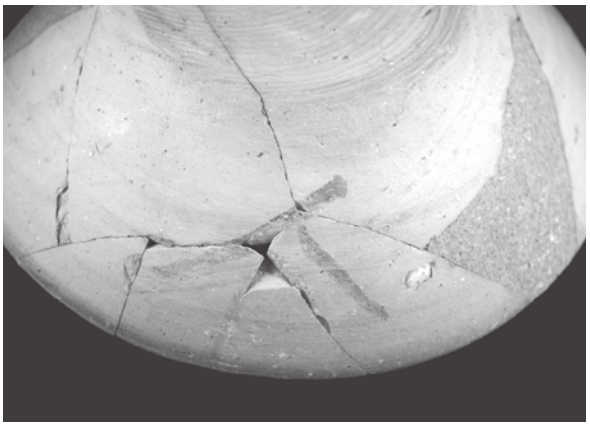
1　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第14図３）



2　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第25図16）



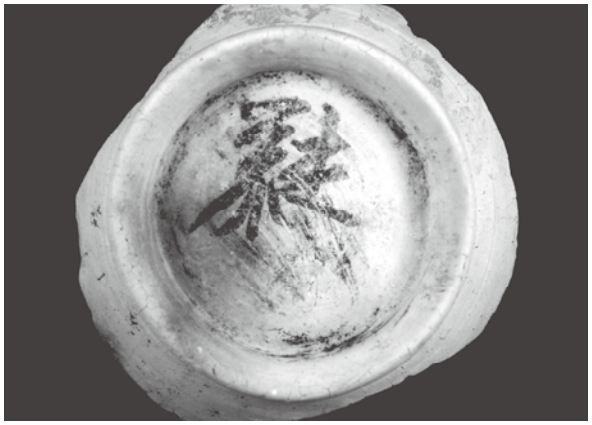
3　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第26図20）



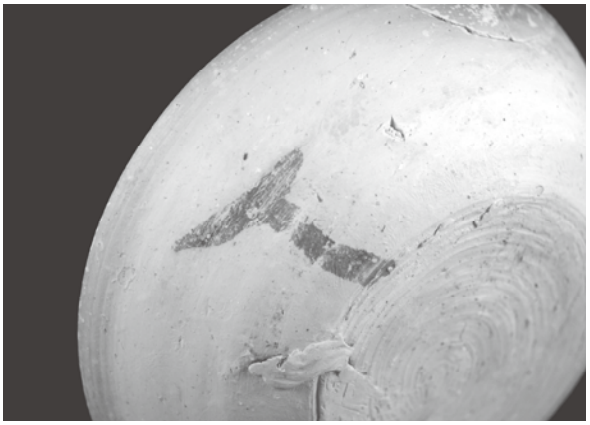
4　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第26図21）

5　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第27図25）

6　ＳＬ60河道跡出土墨書土器（第28図31）



7　遺構外出土墨書土器（第39図１）



8　遺構外出土墨書土器（第42図１）

沖 田 Ⅱ 遺 跡

（７ＯＴⅡ）

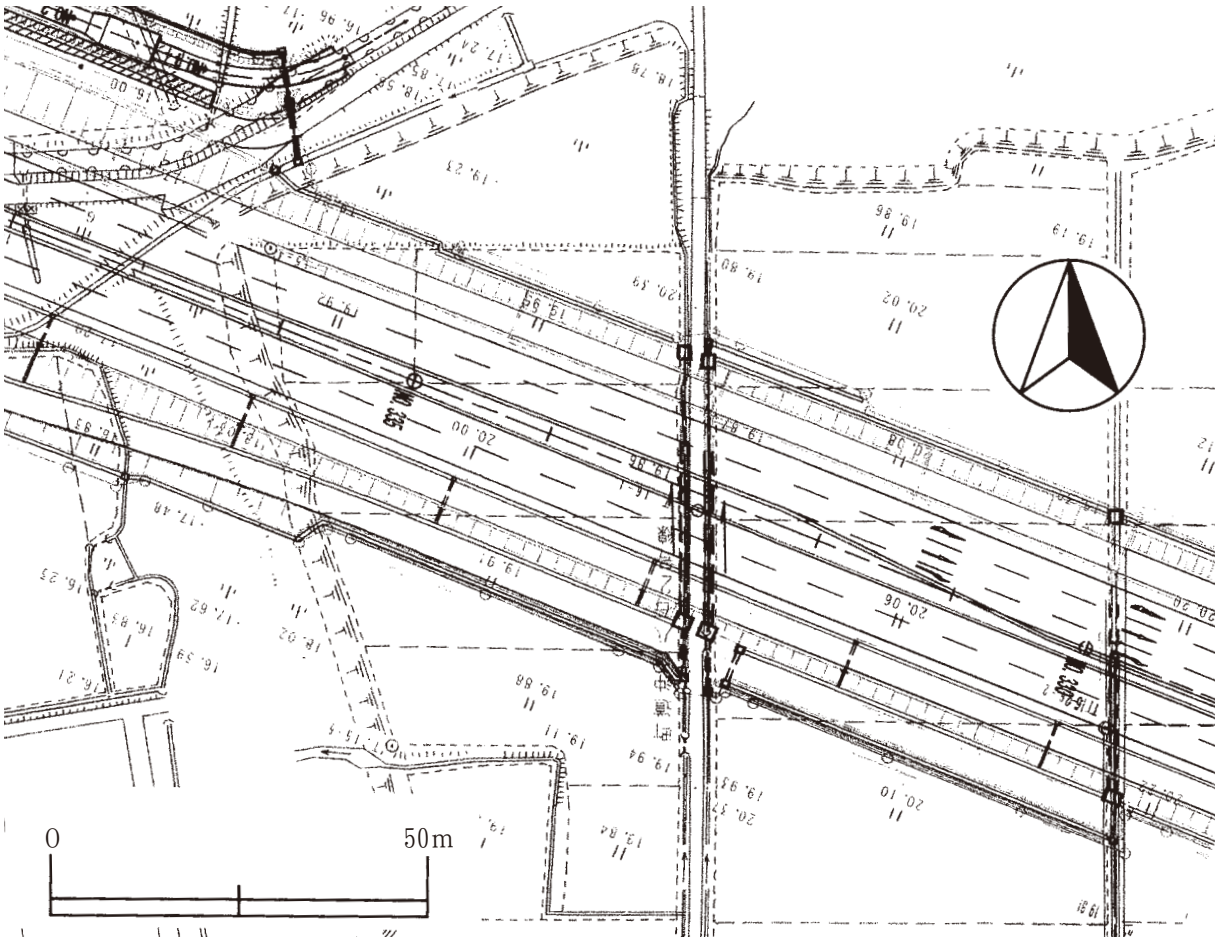
第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

沖田Ⅱ遺跡は、ＪＲ奥羽本線神宮寺駅から北西約3.0kmに位置し、遺跡の南方を西流する雄物川右岸に形成された標高約20ｍの河岸段丘上に立地している。雄物川は古来幾度となく氾濫を繰り返し、遺跡周辺には旧河道や砂堆地、河原、氾濫平野などが散在する。遺跡の北側一帯には丘陵地が広がり、北東には雄物川の残存湖である大浦沼がある。また、南東には姫神山や神宮寺嶽の連なる姫神山山地を望む。遺跡の南東には、平成19年度に調査した沖田遺跡、さらに南東には平成18年度に調査を行った布田谷地遺跡がある。

遺跡の現況は休耕田で、ほぼ平坦であるが、第二次大戦後に開墾され水田造成されるまでは周囲より少し高い微高地となっていた。粘質の強い黄橙色粘土が厚く堆積していたことから、この微高地形の成因は、遺跡西側を流れる雄物川の旧河道に向かって遺跡を挟んで二筋の小河川が流れ込んでおり、この小河川に挟まれた区域に、運ばれた土砂が堆積したものと推察される。

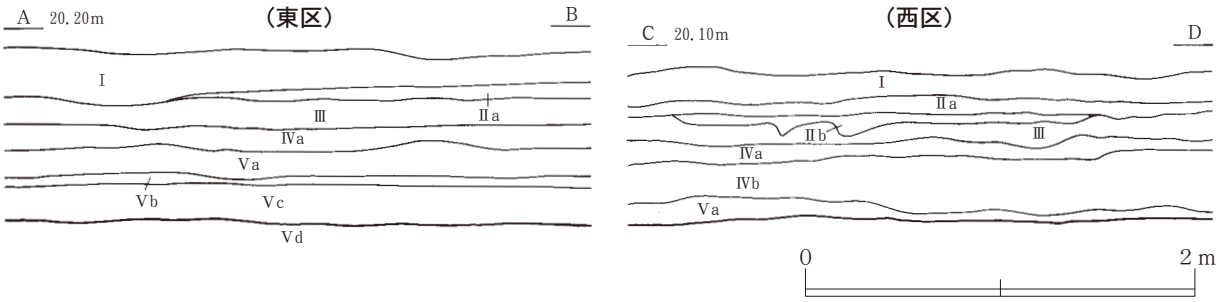
遺跡西側下方の雄物川旧河道と遺跡の現地表面とは2.5ｍの比高差があり、北側は隣接する現水路(旧小河川)に向かって傾斜しており、最大2.5ｍの比高差がある(第１図)。



第１図　沖田Ⅱ遺跡発掘調査対象範囲図

遺跡内を南北に走る市道沖田八石２号線により調査区が二分されており、市道の東西で東区と西区に区分した。東区は本道路建設事業による買収前まで水田耕作が行われていた区域であったが、西区に比べて水位が高く、旧地形が低かったことを物語っている。調査区の基本土層は東区・西区に設けた深掘りトレンチで５層に分層できた(第２図)。

発掘調査の結果、沖田Ⅱ遺跡は近世の集落跡であることがわかった。



東区・西区基本土層
Ⅰ　黒褐色土(10YR3/3) しまり中、粘性弱
　混入物:褐色土塊状小～大5%、炭化物粒状極小～小5%　※表土
Ⅱa にぶい黄褐(10YR4/3) しまり中、粘性中
　混入物:褐色酸化土粒状極小～小5%
　※遺物包含層、遺跡の各所で失われている。近代の田の跡や溝などに残っている茶土。
Ⅱb 黒褐色土(10YR3/2) しまり強、粘性弱
　混入物:褐色土粒極小1%未満、炭化物粒状極小1%未満
　　明褐色焼土塊状小1%未満
Ⅲ　にぶい黄橙色粘土(10YR6/3) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～小15%　※遺構検出面
Ⅳa 黒色粘土(10YR2/1) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～小15%、炭化物粒状極小10%
　※炭化物が多量に入ったスクモ層。東区では間隔が狭く筋状に分かれるが一括で処理
Ⅳb 黒色粘土(10YR2/1) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～小15%、炭化物粒状極小10%
Va にぶい黄橙色粘土(10YR7/3) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～大15%
　※まじりけの少ない白粘土層、いわゆる地山
Vb にぶい黄橙色粘土(10YR6/3) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～大15%、炭化物粒状小～大3%
　※炭化物が混じり若干暗い層
Vc にぶい黄橙色粘土(10YR7/3) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～大15%
Vd オリーブ色粘土(10Y5/2) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～小5%
　※いわゆる青ねば粘土。酸化するとVa・Vcと同じ白色になる。

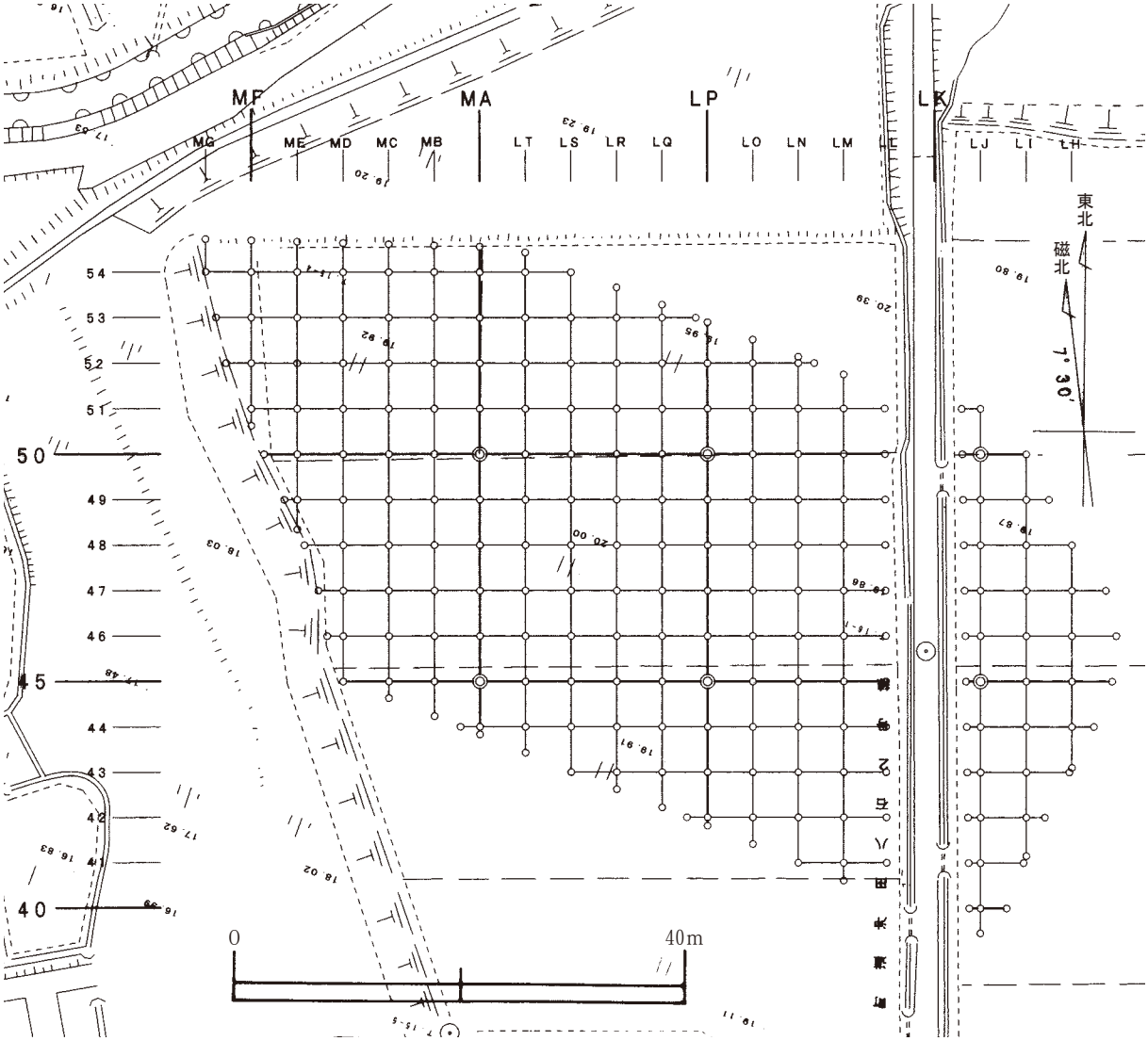
第２図　沖田Ⅱ遺跡基本土層図

第２節　調査の方法

沖田Ⅱ遺跡では計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。調査区内の一般国道13号神宮寺バイパス建設の道路中心杭(NO.335、Ｘ＝－54924.6909、Ｙ＝－37538.8373)をグリッド原点ＭＡ50として、この杭から国家座標第Ｘ系座標北を求め、このラインを南北基線､これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って４×４ｍのグリッドを設定し、グリッド原点ＭＡ50を起点に、東西方向には東から西へ４ｍごとに「ＬＫ・ＬＬ・・・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・ＭＲ・ＭＳ」という２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４ｍごとに「33・34・・・48・49・50・・・69・70」という２桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４ｍ間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した(第３図)。

調査は確認調査の結果に基づき、西区から行った。包含層の掘り下げ及び遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は1/20を原



第３図　沖田Ⅱ遺跡グリッド設定図

則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には35㎜モノクロ・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラを使用した。

第３節　調査の経過

沖田Ⅱ遺跡の発掘調査は、平成20年６月９日から９月10日まで実施した。以下に各週ごとの調査経過を記述する。

【第１週】６月９日～６月13日

９日、発掘機材の搬入と環境整備を行った。その後西区(市道より西側)の草刈りを行った。確認調査時の埋め戻し土から、16～17世紀代と思われる肥前陶磁器片・珠洲系の擂鉢片が数点出土した。

【第２週】６月16日～６月20日

確認調査時に設定した第15、16、17トレンチの掘り起こしを行った。また第15トレンチの一部を深掘りし、断面観察を行ったところ、厚さ15㎝の暗褐色土下から確認調査時の遺構検出面と思われる褐

色土層が、10㎝程堆積しており、その下は粘土層、植物腐敗によると思われる黒炭が混入した粘質土層、そして地山と思われる灰白色の粘土層を確認した。

早めにトレンチを掘り起こし、遺構検出作業に進めるように努力した。また各トレンチの層位を確認しながら作業を行った。

【第３週】６月23日～６月27日

西区の確認調査時に設定されたトレンチの掘り起こしを完了した。北西端のＭＦ54グリッドより順次掘り下げ、グリッドごとに精査を行った。また遺跡範囲を平面図に作成した。

精査を行なった北西部52ラインの北部分より、確認調査時の検出も含め、柱穴跡を数十基確認した。円形のものと方形大小の３種類を確認した。また遺物包含層であるⅡ層は残存している箇所は少なく、しかもかなり薄い状況であった。

遺構の上面はかなり削られ薄く底面が残っている状況のため、精査は慎重に行った。また掘り上げた後もすぐに不明確になってしまうことが予想されるため、グリッドごとに掘り下げと精査を行った。

【第４週】６月30日～７月４日

北西端のＭＦ54グリッドより順次南東方向へ掘り下げ、グリッドごとに柱穴の確認図面及び完掘平面図を作成した。

粗堀り・清掃を終えたグリッドで100基を超える柱穴跡を確認した。柱穴跡の形状は数種類あった。また、ＭＢ52グリッドでかまど状遺構を１基確認した。他にも焼土堆積が見られた。

遺物包含層と思われたⅡ層だが、土の様子から客土の可能性も考えられ、検討を要した。

【第５週】７月７日～７月11日

ＭＢライン以西の遺構検出作業と調査を行った。ＭＡ～ＭＣの48～49グリッドにて、溝跡によって区画されている場所を確認した。遺構埋土の主体となっているのは黒褐色土であるが、遺構検出面の下層と同色であり、深い遺構については見極めが困難で、精査では十分に注意する必要があった。

遺構の精査と同時に粗掘りを進めていたが、調査工程の進捗状況がやや遅れ気味で再度工程の計画を立て直した。また、熱中症に気をつけながら作業を進めた。

【第６週】７月14日～７月18日

50ライン以東の粗掘り、かまど状遺構（ＳＯ100）の調査、50ライン以西の検出遺構に付き確認状況の実測を行った。

ＭＢ53グリッドにてかまど状遺構を検出。これにより本遺跡のかまど状遺構は３基となった。またＭＡ50グリッド近辺から西側に延びる最大幅１ｍの溝跡を確認した。

遺跡全体の内容を把握するため、表土除去・遺構検出作業を優先して進めることにしたが、いかに円滑に作業を進めるか苦慮した。

【第７週】７月22日～７月25日

部分的に市道までの掘り下げが完了し、遺構が数基確認できたため残りの表土も早く掘り下げる必要があった。

南北49～53ラインは、東西ＬＭラインまで粗掘りが完了した。その際、柱穴や土坑などの遺構を検出した。柱穴に関しては、西区西側と同様に残りは良好なものが多かった。

【第８週】７月28日～８月１日

ＭＣ52・53グリッドの精査終了。遺跡中央部の遺構検出面上層の堆積層を除去し、遺構検出を行った。

市道より西側の調査範囲ＬＴ～ＬＱ49グリッド以北には、遺構掘り込み面と思われる灰白色粘土層が失われていたので、この付近での遺構検出の可能性は低いと判断した。

【第９週】８月４日～８月８日

ＭＡライン以西の遺構精査と図化作業および、かまど状遺構の精査を行った。

現在かまど状遺構を７基確認したが、煙道の方角は、南側が２基、東側が２基、西側が１基、北側が２基であり、規則性・統一性は見られなかった。

遺構精査は作業の効率化と迅速化も考えながら進めた。

【第10週】８月18日～８月21日

雨天が続いたため、西区の南東部の表土除去及び北東部の精査を中心に行った。また、かまど状遺構、溝跡、柱穴様ピットの精査を実施した。

当初、開墾・掘削されて遺構がないと思われていた西区の東側にも柱穴様ピットと溝跡が多数確認された。

【第11週】８月25日～８月29日

西区の表土除去、遺構検出作業をほぼ終了し、かまど状遺構、溝跡、柱穴様ピットの精査を継続した。東区の表土除去、遺構検出も東区全体の半分程まで進んだ。

ＬＳ53グリッドに２基、ＬＴ51グリッドにかまど状遺構１基を新たに検出したが、１基は遺存状態が悪かった。

西区の遺構検出作業がほぼ終わり、当初の推定どおり市道近くには遺構がほとんどないことがわかった。西区の検出遺構の精査を急ぐとともに、東区の表土除去、遺構検出作業を進めることとした。

【第12週】９月１日～９月５日

東区の表土除去、遺構検出作業を終了。西区のかまど状遺構の精査がほぼ終了した。新たに検出した井戸跡の精査も行った。また、柱穴様ピットの精査を継続し平面図作成を進めた。５日には全体写真の撮影を行った。

井戸跡を新たに４基検出したが、幸い底面が浅く速やかに精査を終えた。

主な遺構の精査はほぼ終了したが、平面図の作成が若干残った。

【第13週】９月８日～９月10日

全ての遺構精査と実測を完了した。発掘機材を搬出して調査の全工程を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター南調査班で行った。出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測・採択・トレースなどを行った。また、遺構図面については、発掘現場で実測した実測図をもとに第２原図を作製し、それをトレースした。自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

第２章　調査の記録

第１節　遺構と遺物

１　検出遺構と遺物

本遺跡は、微高地に形成された近世の集落跡であるが、戦後に開田された際に上部を削平されたため、遺存状態は不良であった。遺構種別毎の数値は、掘立柱建物跡18棟、かまど状遺構９基、井戸跡４基、焼土遺構２基、土坑４基、柱列４条、溝跡22条、河道跡２条、性格不明遺構１基、柱穴様ピット501基である(付図)。

掘立柱建物跡に付属すると判断されたかまど状遺構は４基であり、井戸跡の覆い屋と想定される掘立柱建物跡が１棟ある。また、周囲を巡る溝跡をもつ掘立柱建物跡もある。

(１)掘立柱建物跡

ＳＢ01掘立柱建物跡(第４図)

《位置・確認》ＭＣ50グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＳ－87°－Ｅである。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間1.9m(Ｐ１－Ｐ２)、梁行１間1.15m(Ｐ１－Ｐ３)である。庇は付かない。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ02掘立柱建物跡(第４図)

《位置・確認》ＬＯ48・ＬＲ48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－88°－Ｅである。ＳＡ824柱列と重複するが新旧は不明である。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間3.0m(Ｐ７－Ｐ９、1.4m＋1.6m)、梁行１間1.61m(Ｐ４－Ｐ７)である。庇は北側と南側に0.3～0.6mの幅で付く。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》Ｐ２より陶器が１点出土した(第29図４)。

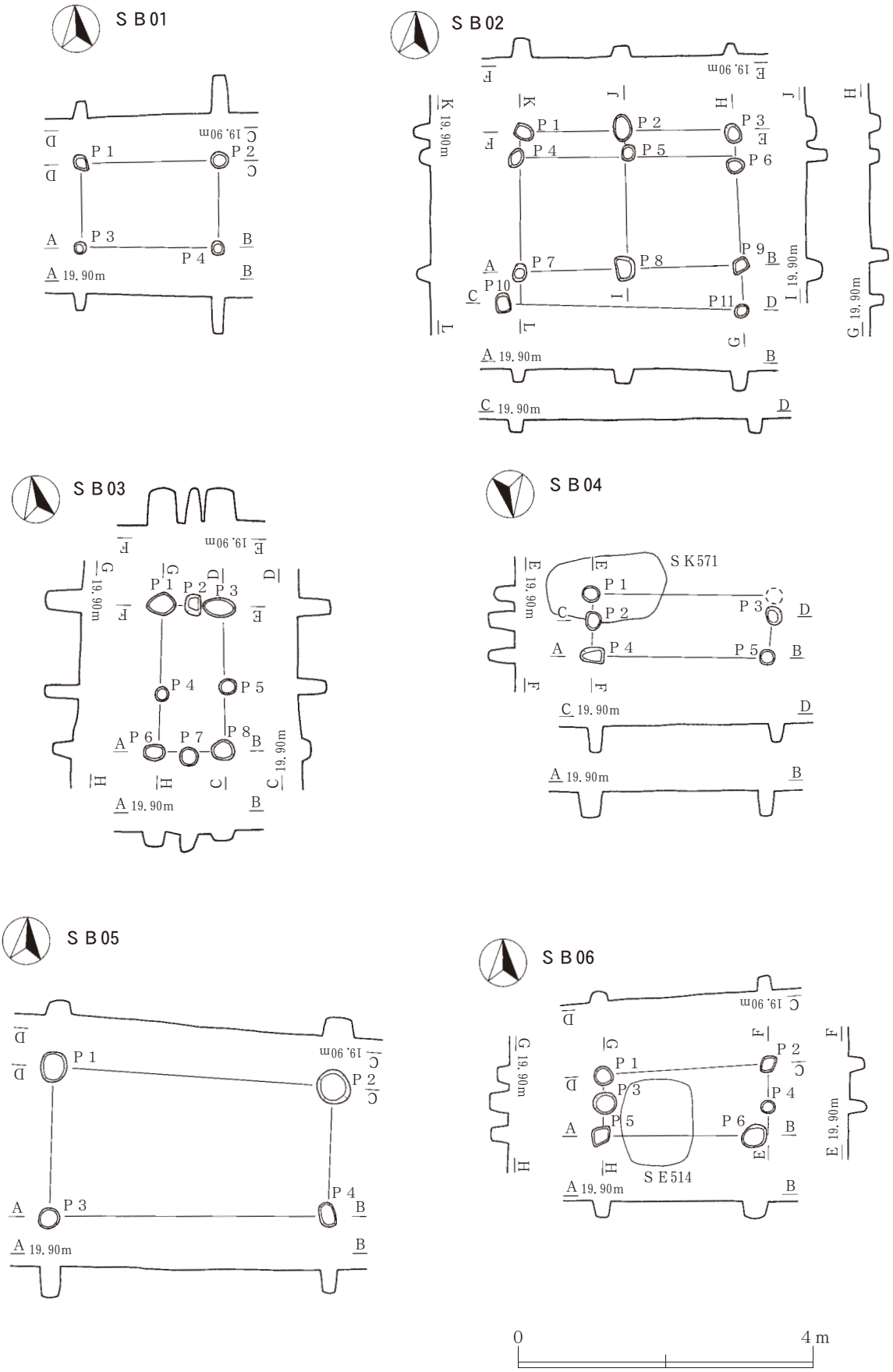
ＳＢ03掘立柱建物跡(第４図)

《位置・確認》ＭＡ52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－13°－Ｅである。ＳＢ05掘立柱建物跡プランと重複するが新旧関係は不明である。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間2.0m(Ｐ３－Ｐ８、1.2m＋0.8m)、梁行２間0.9m(Ｐ６－Ｐ８、0.42m＋0.48m)である。庇は付かない。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第４図　ＳＢ01～06掘立柱建物跡実測図

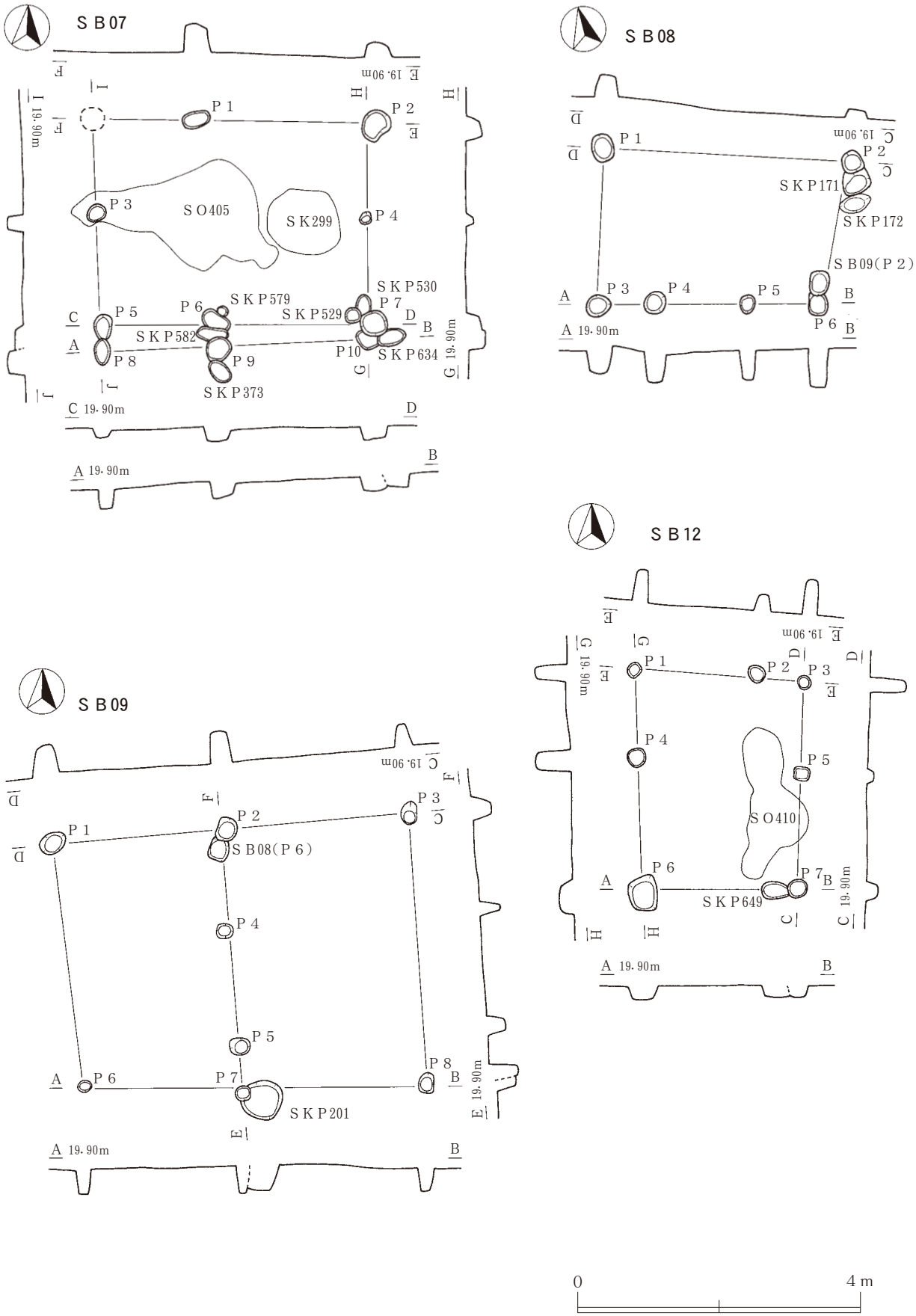
ＳＢ04掘立柱建物跡(第４図)
《位置・確認》ＬＳ49・ＬＲ49グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－82°－Ｅである。ＳＫ571土坑と重複するが本建物跡が新しい。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間2.4m(Ｐ４－Ｐ５)、梁行２間0.9m(Ｐ１－Ｐ４、0.41m＋0.49m)である。庇は付かない。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ05掘立柱建物跡(第４図)
《位置・確認》ＭＡ52・ＬＴ52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－88°－Ｅである。ＳＢ03掘立柱建物跡プランと重複するが、新旧関係は不明である。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間3.8m(Ｐ１－Ｐ２)、梁行１間2.06m(Ｐ１－Ｐ３)である。庇は付かない。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ06掘立柱建物跡(第４図)
《位置・確認》ＬＲ46グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－89°－Ｅ　である。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間2.25m(Ｐ１－Ｐ２)、梁行２間0.84m(Ｐ１－Ｐ５、0.4m＋0.44m)である。庇は付かない。
《付属施設》ＳＥ514井戸跡が本建物跡プラン内に存在するが、付属するものかあるいは重複関係にあるものか不明である。
《出土遺物》Ｐ５から柱材片を検出した。

ＳＢ07掘立柱建物跡(第５図)
《位置・確認》ＬＳ48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－88°－Ｅである。本建物跡プラン内にＳＫ299土坑が存在するが付属するものかあるいは重複関係にあるものか不明である。また、ＳＯ405かまど状遺構とも重複するが本建物跡が新しい。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間3.82m(Ｐ５－Ｐ７、1.64m＋1.18m)、梁行２間2.84m(Ｐ２－Ｐ７、1.36m＋1.48m)である。庇は南側に0.38mの幅で付く。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ08掘立柱建物跡(第５図)
《位置・確認》ＭＢ48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－76°30′－Ｅである。ＳＢ09掘立柱建物跡やＳＫＰ171・172柱穴様ピットと重複するが本建物跡が古い。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行３間3.12m(Ｐ３－Ｐ６、0.82m＋1.34m＋0.96m)、梁行１間



第５図　ＳＢ07～09・12掘立柱建物跡実測図

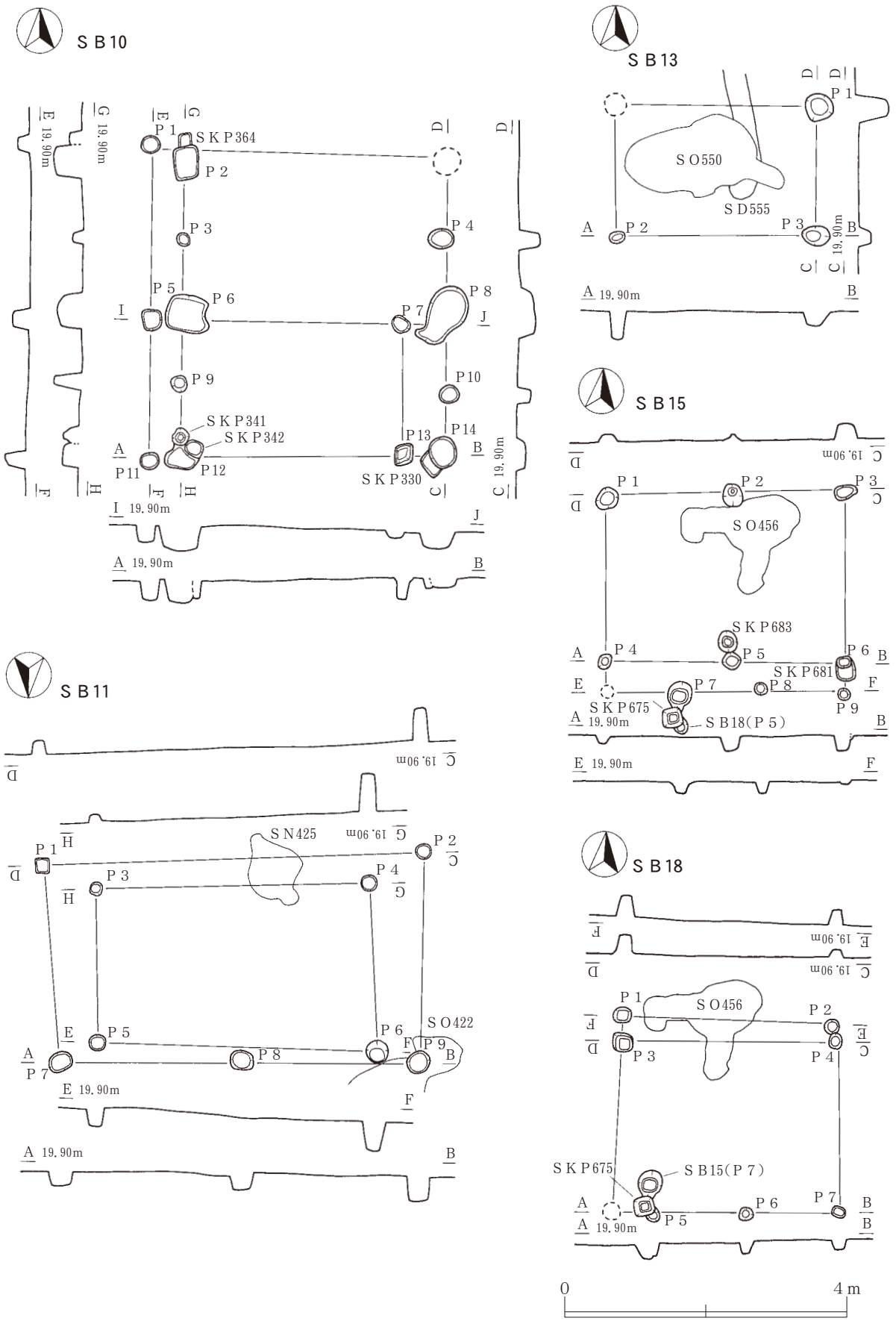
2.16m（Ｐ１－Ｐ３）である。庇は付かない。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》Ｐ４より陶磁器片が１点出土した。

ＳＢ09掘立柱建物跡（第５図）
《位置・確認》ＭＡ47・ＭＢ47グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－86°－Ｅである。ＳＢ08掘立柱建物跡プランやＳＫＰ201柱穴様ピットと重複するが、本建物跡が新しい。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間5.06m（Ｐ１－Ｐ３、2.44m＋2.62m）、梁行１間3.46m（Ｐ１－Ｐ６）である。庇は付かない。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ10掘立柱建物跡（第６図）
《位置・確認》ＬＲ51・ＬＱ51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－１°－Ｅである。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行４間4.41m（Ｐ２－Ｐ12、1.31m＋1.1m＋0.96m＋1.04m）、梁行１間3.8m（Ｐ12－Ｐ14）である。庇は西側に0.44mの幅で付く。桁行２間で間仕切りがあり、南側の間では東側に幅0.61mの仕切りもある。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ11掘立柱建物跡（第６図）
《位置・確認》ＬＳ53・ＬＲ53グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－88°－Ｅである。ＳＮ425焼土遺構と重複するが新旧関係は不明である。また、ＳＯ422かまど状遺構とも重複するが本建物跡が新しい。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間3.9m（Ｐ３－Ｐ４）、梁行１間2.44m（Ｐ４－Ｐ６）である。庇は４面に付き、幅は東側と西側が0.66m～0.7m、北側と南側が0.21m～0.38mである。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ12掘立柱建物跡（第５図）
《位置・確認》ＬＴ47・48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－１°30′－Ｅである。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間3.16m（Ｐ１－Ｐ６、1.24m＋1.92m）、梁行２間2.42m（Ｐ１－Ｐ３、1.74m＋0.68m）である。庇は付かない。
《付属施設》ＳＯ410かまど状遺構が付属する（かまど状遺構については次項目で記述する）。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第６図　ＳＢ10・11・13・15・18掘立柱建物跡実測図

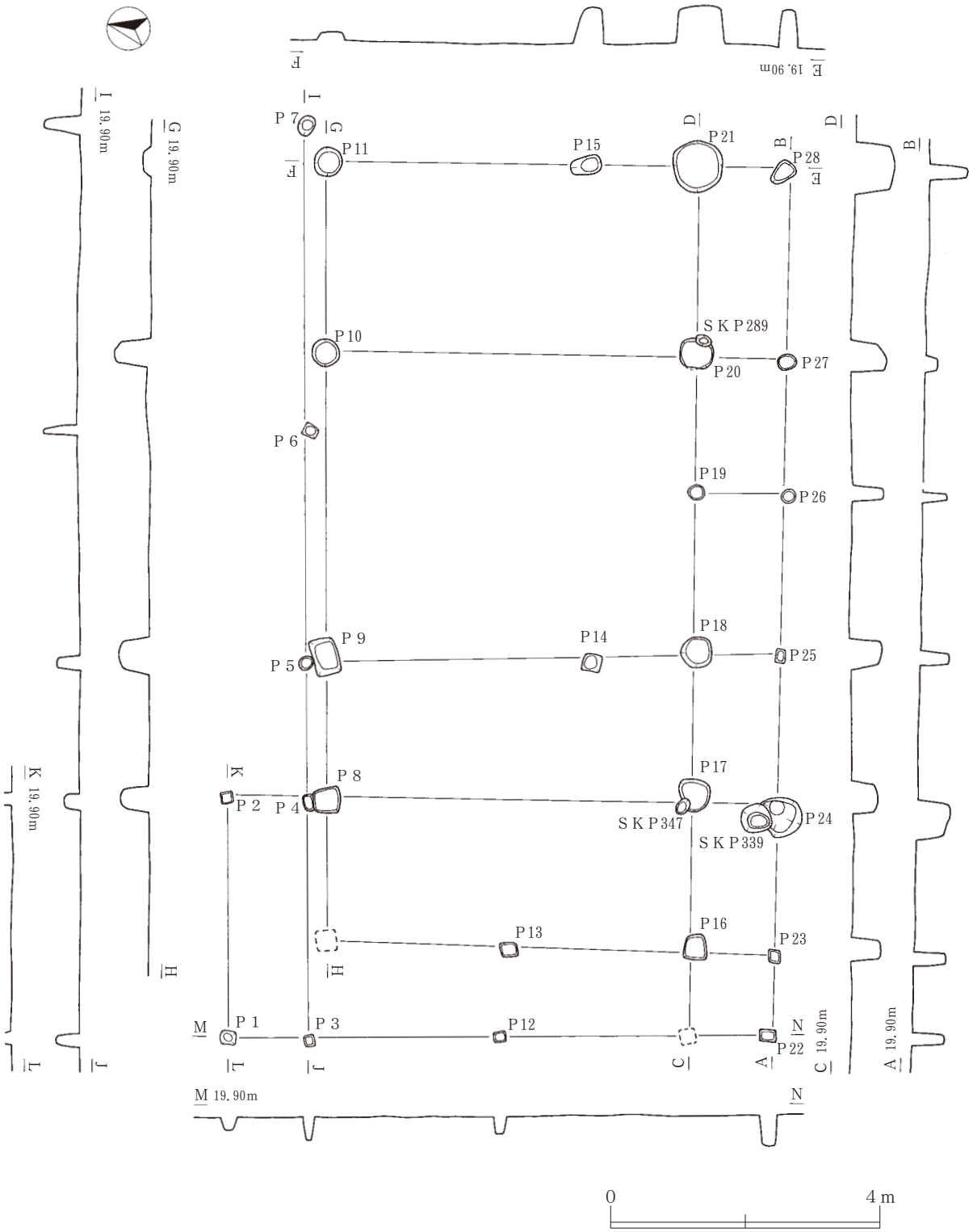
ＳＢ13掘立柱建物跡(第６図)
《位置・確認》ＭＡ・ＬＴ50・51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－89°－Ｅである。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間2.82m(Ｐ２－Ｐ３)、梁行１間1.86m(Ｐ１－Ｐ３)である。庇は付かない。
《付属施設》ＳＯ550かまど状遺構が付属する(かまど状遺構については次項目で記述する)。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ14掘立柱建物跡(第８図)
《位置・確認》ＭＡ48・ＭＢ48、ＭＡ49・ＭＢ49グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－86°－Ｅである。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間4.2m(Ｐ１－Ｐ３、1.02m＋3.18m)、梁行２間3.02m(Ｐ３－Ｐ11、1.56m＋1.46m)である。
《付属施設》本建物跡の西側、南側、南東側には建物跡プランを囲むように幅0.16m～0.22mの溝が巡っていた。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ15掘立柱建物跡(第６図)
《位置・確認》ＬＳ51・ＬＴ51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－84°－Ｅである。ＳＢ18掘立柱建物跡プランと重複するが本建物跡が古い。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行２間3.36m(Ｐ１－Ｐ３、1.8m＋1.56m)、梁行１間2.42m(Ｐ３－Ｐ６)である。南側に0.44mの幅で３間の庇が付く。
《付属施設》ＳＯ456かまど状遺構が付属する(かまど状遺構については次項目で記述する)。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＢ16掘立柱建物跡(第７図、図版１－２)
《位置・確認》ＭＢ51・ＭＣ51・ＭＤ51・ＭＥ51・ＭＢ52・ＭＣ52・ＭＤ52・ＭＥ52・ＭＢ53・ＭＣ53・ＭＤ53・ＭＥ53グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－80°－Ｅである。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行５間11.62m(Ｐ16－Ｐ21、2.22m＋2.2m＋2.4m＋2.0m＋2.8m)、梁行２間5.5m(Ｐ11－Ｐ21、3.88m＋1.62m)である。
《付属施設》東側を除く３面に庇(幅は北側0.3m、南側1.28m、西側1.3m)が、北西側には幅1.22mの張り出しが付く。
《出土遺物》Ｐ７より陶器が１点出土した(第29図３)。

ＳＢ17掘立柱建物跡(第８図)
《位置・確認》ＭＢ51・52、ＭＣ51・52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はＮ－１°30′－Ｗである。



第７図　ＳＢ16掘立柱建物跡実測図

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間4.42m（Ｐ１－Ｐ４）、梁行２間4.3m（Ｐ４－Ｐ６、2.12m＋2.18m）である。庇はない。

《付属施設》ＳＯ100かまど状遺構が付属する（かまど状遺構については次項目で記述する）。

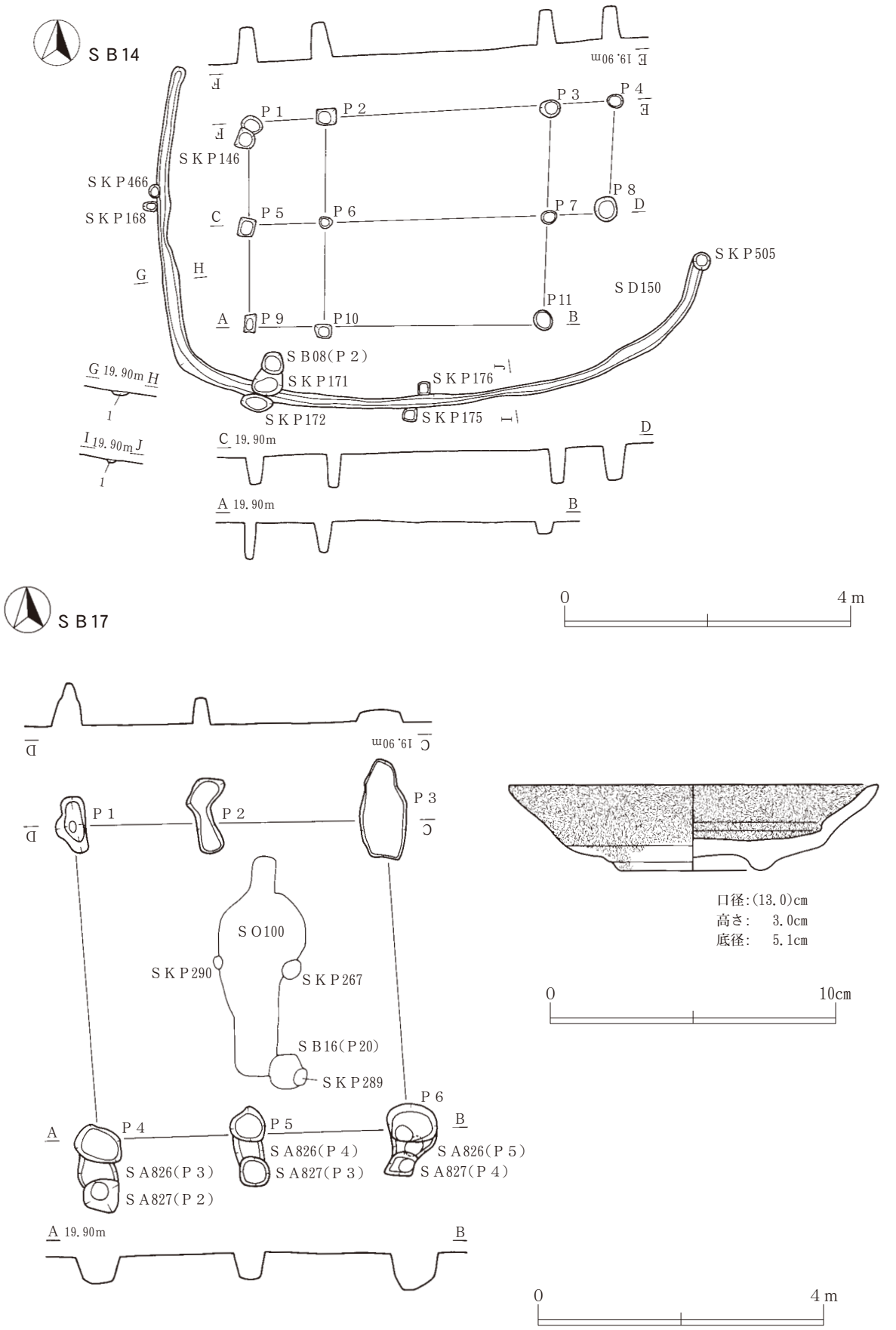
《出土遺物》Ｐ３より陶器皿１点が出土した（第８図）。

ＳＢ18掘立柱建物跡(第６図)
《位置・確認》ＬＳ51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方向はＮ－86°－Ｅである。ＳＢ15掘立柱建物跡プラン並びにＳＯ456かまど状遺構と重複するが本建物跡が新しい。
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行１間3.01m(Ｐ３－Ｐ４)、梁行１間2.44m(Ｐ４－Ｐ７)である。庇は北側に幅0.4mで付く。
《付属施設》付属施設は確認できなかった。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

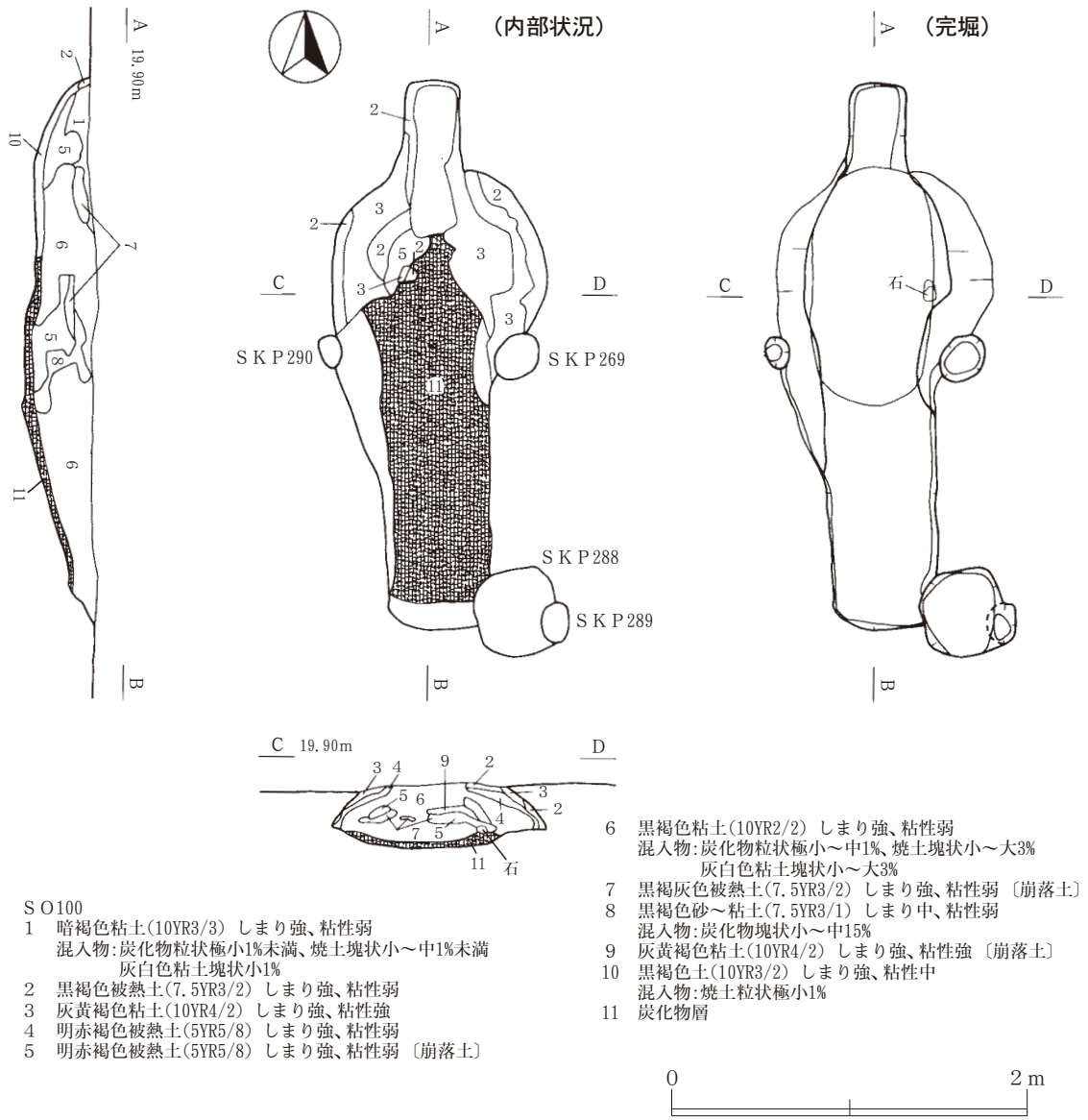
(２)かまど状遺構
ＳＯ100かまど状遺構(第９図、図版２－３～５)
《位置・確認》ＭＢ51・52グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。
《重複》ＳＫＰ269・288・290柱穴様ピットと重複するが、柱穴様ピットが本遺構よりも新しい。
《平面形・規模・方向》かまどは長軸1.84m(北－南)、短軸1.03m(東－西)で、柄鏡形を呈する。長軸1.33m、短軸1.21mの不整楕円形の燃焼部と長さ1.27m、幅0.63mの長方形の前庭部(焚口)、長さ0.47m、幅0.32mの長方形の煙道部から構成されていた。煙道部はかまど長軸線上に造られていた。確認面から0.36m掘り下げ、かまど本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構していたが上部構造は滅失していた。燃焼部・前庭部の底面には炭化物が0.04～0.07mの厚さで堆積していた。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＯ261かまど状遺構(第10図、図版２－８・３－１)
《位置・確認》ＭＡ54グリッドのⅢ層上面で明黄褐色粘土・灰黄褐色粘土の広がりを確認した。
《重複》ＳＫＰ262柱穴様ピットと重複するが、柱穴様ピットが本遺構よりも新しい。
《平面形・規模・方向》かまどは長軸2.4m(北西－南東)、短軸0.9m(北東－南西)でイチジク形を呈し、長軸1.38m、短軸0.9mの不整楕円形の燃焼部・前庭部(焚口)と、長さ0.63m、幅0.35mの煙道部から構成されていた。煙道部は長軸に対し南東側に20度傾いて付けられていた。確認面から0.39m掘り下げて構築していたが、かまど本体と煙道部の上面は削平されていた。粘土で架構した上部構造の基礎部分を確認したにとどまる。燃焼部・前庭部の底面には炭化物が0.02～0.03mの厚さで堆積していた。
《出土遺物》陶磁器片が１点出土した。
《特記事項》底面に堆積する炭化物を含む土層(16層)を年代測定し、95.4%の確率で紀元前406～366年という暦年数値を得た。この年代値は、地山層の堆積年代を示している可能性が高く、遺構の構築年代ではない。

ＳＯ405かまど状遺構(第11図、図版３－２・３)
《位置・確認》ＬＳ48グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。現代の水田の畦がかまど本体部分にあたり、煙道部と前庭部は上部を削平され、炭化物が広範囲に広がっていた。



第８図　ＳＢ14・17掘立柱建物跡及びＳＢ17掘立柱建物跡柱穴出土陶器実測図



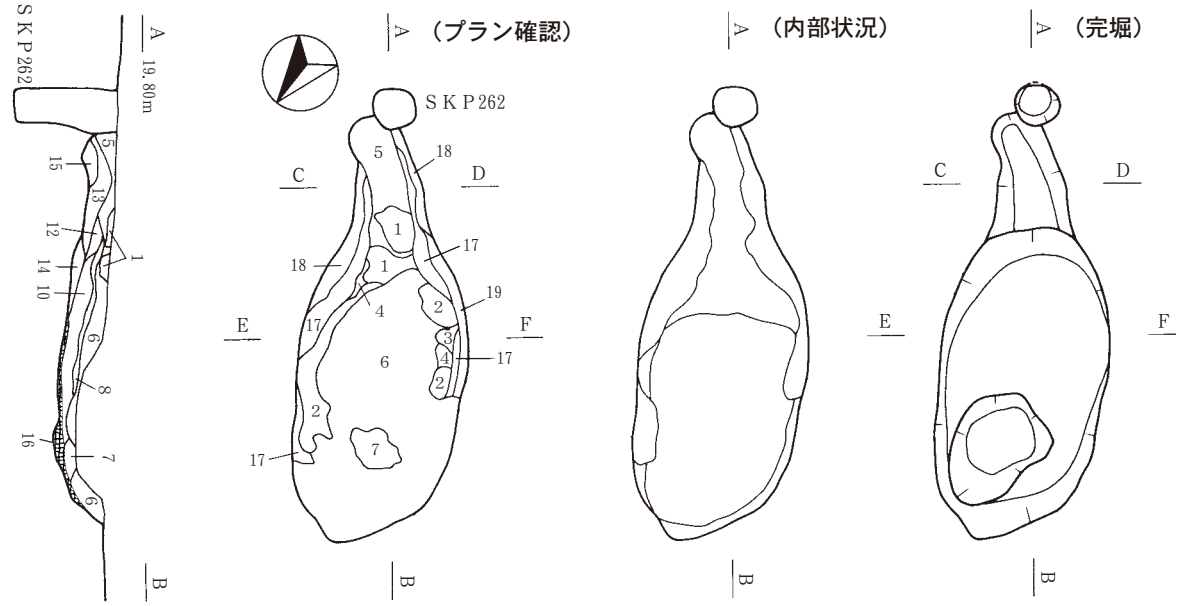
第９図　ＳＯ100かまど状遺構実測図

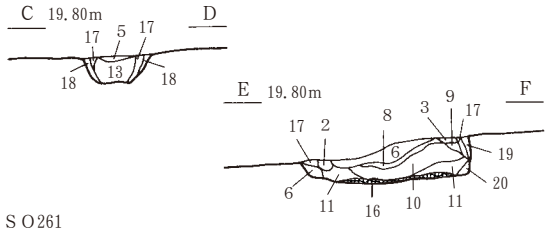
《重複》なし

《平面形・規模・方向》かまどは長軸2.4m(東－西)、短軸1.3m(北－南)で、長軸0.95m、短軸1.2mの不整楕円形の燃焼部と長軸1.05m、短軸0.65mの半楕円形の前庭部(焚口)、長さ0.5m、幅0.32mの煙道部から構成されていた。煙道部はかまど長軸から南西側に45度傾いて付けられていた。確認面から0.32m掘り下げ、かまど本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構したと考えられるが上部構造は滅失していた。燃焼部には４枚の炭化物層が0.02～0.07mの厚さで堆積していた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《特記事項》底面に堆積する９層の上面に堆積する炭化物層(８層)を年代測定し、76.4%の確率で1,492～1,603年、19.0%の確率で1,615～1,643年という暦年数値を得た。





ＳＯ261
1　明褐色粘土(7.5YR5/6) しまり強、粘性なし〔崩落土〕
　混入物:灰黄褐色粘土塊状小3%
2　明褐色粘土(7.5YR5/6) しまり強、粘性なし〔崩落土〕
　混入物:炭化物粒状極小1%、焼土塊状中～大30%、白色粘土粒状小1%
3　灰黄褐色粘土(10YR4/2) しまり強、粘性なし〔崩落土〕
　混入物:焼土塊状中～大15%
4　褐灰粘土(10YR4/1) しまり強、粘性弱〔崩落土〕
　混入物:炭化物粒状小～中1%、焼土粒状中2%、白色粘土粒状小1%
5　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔堆積土〕
　混入物:炭化物片中5%、焼土粒状小～中10%
6　灰黄褐色粘土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔堆積土〕
　混入物:炭化物粒状小～大30%、焼土塊状小～大20%、白色粘土塊状中5%
7　橙色焼土(7.5YR6/6) しまり強、粘性なし〔崩落土〕
8　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔堆積土〕
9　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔崩落土〕
　混入物:焼土粒状小～中5%
10　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔堆積土〕
　混入物:炭化物粒状中5%、焼土粒状小3%
11　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔堆積土〕
　混入物:炭化物片中5%、焼土粒状小～中5%、白色粘土塊状小3%
12　明褐色土(7.5YR5/6) しまり強、粘性なし〔崩落土・焼土〕
13　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性中〔煙道部崩落土〕
　混入物:炭化物片中5%、焼土塊状中～大30%
14　暗褐色土(7.5YR3/3～4) しまり強、粘性中〔堆積土〕
　混入物:炭化物粒状小1%、焼土粒状小1%、白色粘土粒状小1%
15　オリーブ黒色土(5Y3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状小1%、白色粘土粒状小1%
16　炭化物層
17　褐色粘土(7.5YR4/6) しまり強、粘性なし〔構築土〕
　混入物:灰黄褐色粘土塊状小5%
18　褐色土(7.5YR4/4) しまり強、粘性なし〔構築土〕
19　暗褐色土(7.5YR3/4) しまり強、粘性なし〔構築土〕
20　暗褐色土(7.5YR3/3～4) しまり強、粘性なし〔構築土〕

ＳＫＰ262
1　灰黄褐色土(10YR4/2) しまり強、粘性弱
　混入物:炭化物粒極小1%、灰白色粘土塊状小2%

0　2m

第10図　ＳＯ261かまど状遺構実測図

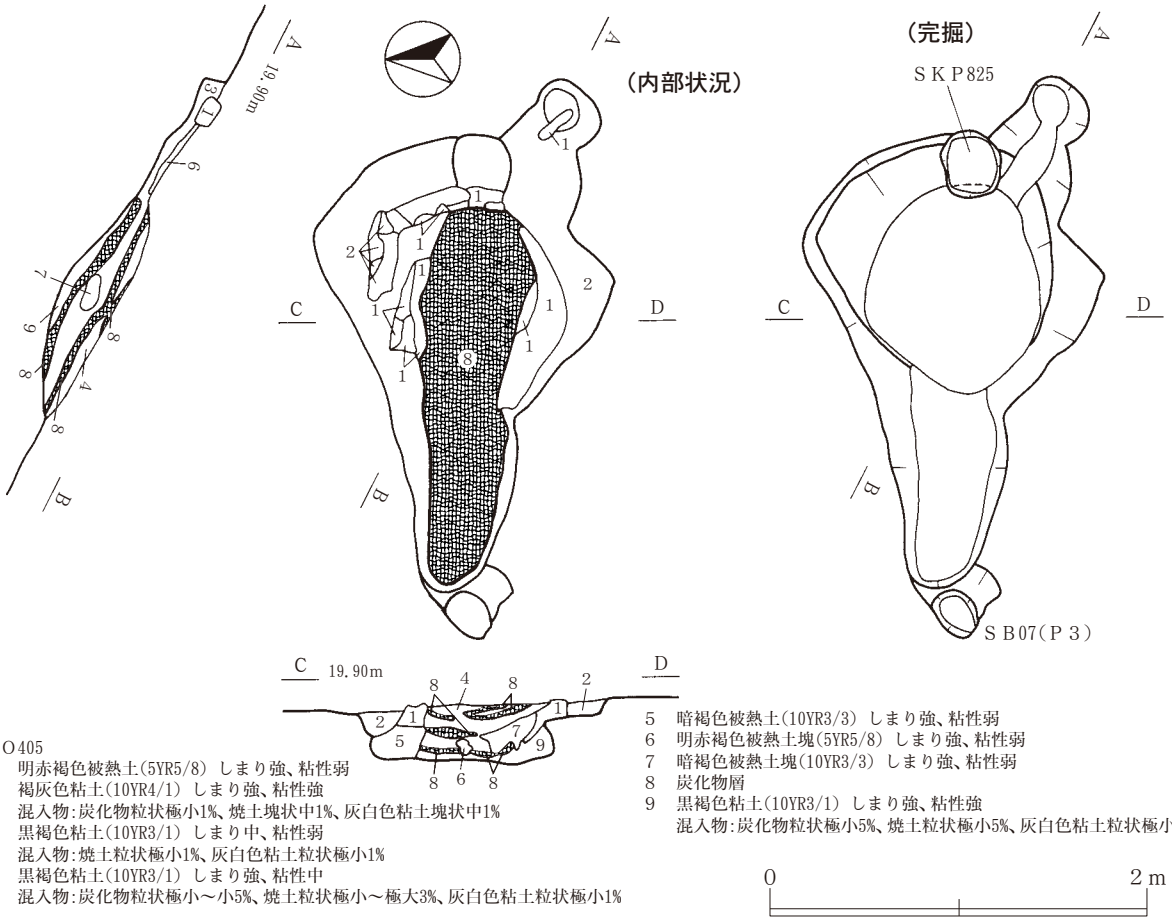
ＳＯ410かまど状遺構(第12図、図版２－６・７)

《位置・確認》ＬＴ47・48グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。

《重複》なし

《平面形・規模・方向》かまどは長軸1.4m(北東－南西)、短軸1.0m(北西－南東)で、長軸0.95m、短軸0.88mの不整楕円形の燃焼部と長軸0.86m、短軸0.53mの半楕円形の前庭部(焚口)、長さ0.42m、幅0.37mの煙道部から構成されていた。煙道部はかまど長軸から南西側に45度傾いて付けられていた。かまどは確認面から0.4m掘り下げられており、保存状態は良好で、内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構していた。燃焼部の底面には炭化物が0.03～0.05mの厚さで堆積していた。

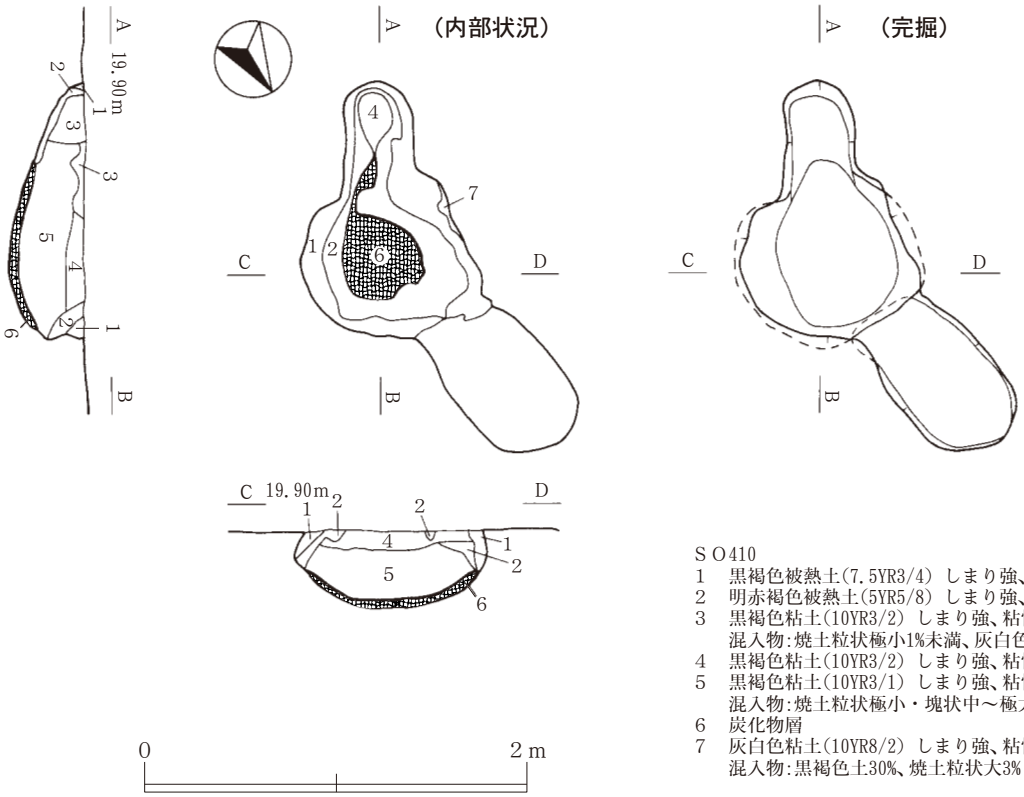
《出土遺物》遺物は出土しなかった。



ＳＯ405
1　明赤褐色被熱土(5YR5/8) しまり強、粘性弱
2　褐灰色粘土(10YR4/1) しまり強、粘性強
　混入物:炭化物粒状極小1%、焼土塊状中1%、灰白色粘土塊状中1%
3　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり中、粘性弱
　混入物:焼土粒状極小1%、灰白色粘土粒状極小1%
4　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり強、粘性中
　混入物:炭化物粒状極小～小5%、焼土粒状極小～極大3%、灰白色粘土粒状極小1%
5　暗褐色被熱土(10YR3/3) しまり強、粘性弱
6　明赤褐色被熱土塊(5YR5/8) しまり強、粘性弱
7　暗褐色被熱土塊(10YR3/3) しまり強、粘性弱
8　炭化物層
9　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり強、粘性強
　混入物:炭化物粒状極小5%、焼土粒状極小5%、灰白色粘土粒状極小5%

0　2 m

第11図　ＳＯ405かまど状遺構実測図



ＳＯ410
1　黒褐色被熱土(7.5YR3/4) しまり強、粘性弱
2　明赤褐色被熱土(5YR5/8) しまり強、粘性弱
3　黒褐色粘土(10YR3/2) しまり強、粘性強
　混入物:焼土粒状極小1%未満、灰白色粘土塊状小3%
4　黒褐色粘土(10YR3/2) しまり強、粘性強
5　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり強、粘性強
　混入物:焼土粒状極小・塊状中～極大5%
6　炭化物層
7　灰白色粘土(10YR8/2) しまり強、粘性強
　混入物:黒褐色土30%、焼土粒状大3%

0　2 m

第12図　ＳＯ410かまど状遺構実測図

ＳＯ411かまど状遺構(第13図)

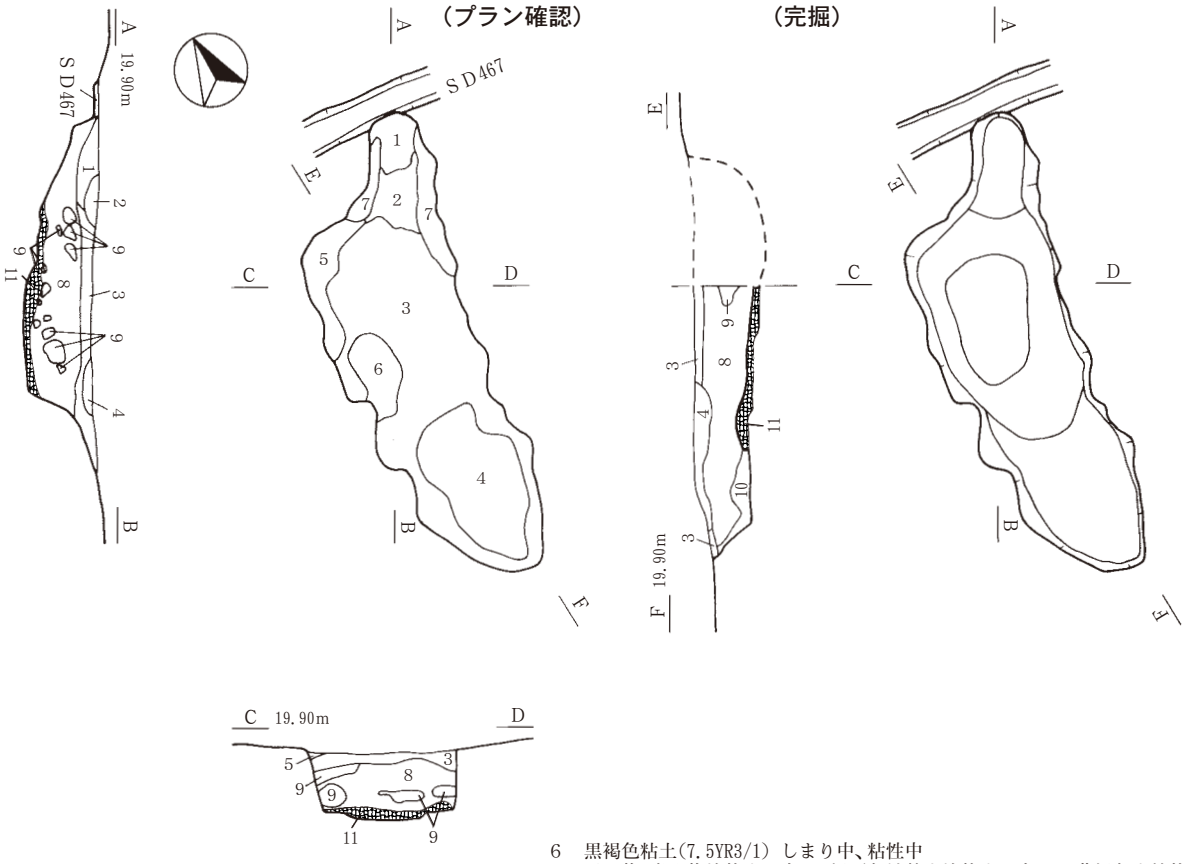
《位置・確認》ＬＳ45グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。

《重複》ＳＤ467溝跡と重複するが、本遺構が新しい。

《平面形・規模・方向》かまど本体は長軸2.0ｍ(北－南)、短軸0.8ｍ(東－西)で、長楕円形を呈する。掘り込みプランから長軸1.26ｍ、短軸0.8ｍの不整楕円形の燃焼部と長軸0.84ｍ、短軸0.68ｍの半楕円形の前庭部(焚口)、長さ0.58ｍ、幅0.36ｍの煙道部から構成されていることが確認された。煙道部はかまど長軸方向から30度東側に傾いて付けられていた。確認面から0.36ｍ掘り下げられており、かまど本体の保存状態は良好で、内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構していた。かまど底面には炭化物が0.05～0.08ｍの厚さで堆積していた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《特記事項》底面に堆積する炭化物層(11層)を年代測定し、92.4％の確率で1,438～1,492年、3.0％の確率で1,602～1,610年という暦年数値を得た。



ＳＯ411
1　黒褐色粘土(7.5YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状小～中2%、明褐色土塊状大1%
2　明褐色被熱土(7.5YR5/6) しまり中、粘性弱
　混入物:炭化物粒状小～中1%、黒褐色粘土塊状極大10%
3　黒褐色粘土(7.5YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状極小～中1%、明褐色土塊状大1%、
　　にぶい黄橙 塊状大3%
4　黒褐色粘土(7.5YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物塊状大20%、明褐色土塊状小～中2%、
　　にぶい黄橙塊状極小1%
5　褐灰色粘土(10YR6/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状小1%、明褐色土粒状小～中1%、
　　黒褐色粘土塊状小～中20%
6　黒褐色粘土(7.5YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物塊状小～大5%、褐灰色被熱土塊状小～大10%、黄褐色土粒状
　　小～中1%
7　褐灰色被熱土(10YR5/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状小～中2%、黒褐色粘土(7.5YR3/1) 塊状大～極大10%、
　　明褐色土粒状小～中1%
8　褐灰色粘土(10YR5/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状小～中20%、褐色土粒状小1%
9　明褐色被熱土(7.5YR5/6) しまり中、粘性弱（崩落）
　混入物:炭化物粒状小～中1%、黒褐色粘土塊状大～極大10%
10　灰黄褐粘土(10YR4/2) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物塊状大～極大5%、褐色土粒状小～中1%
11　炭化物層

0　2ｍ

第13図　ＳＯ411かまど状遺構実測図

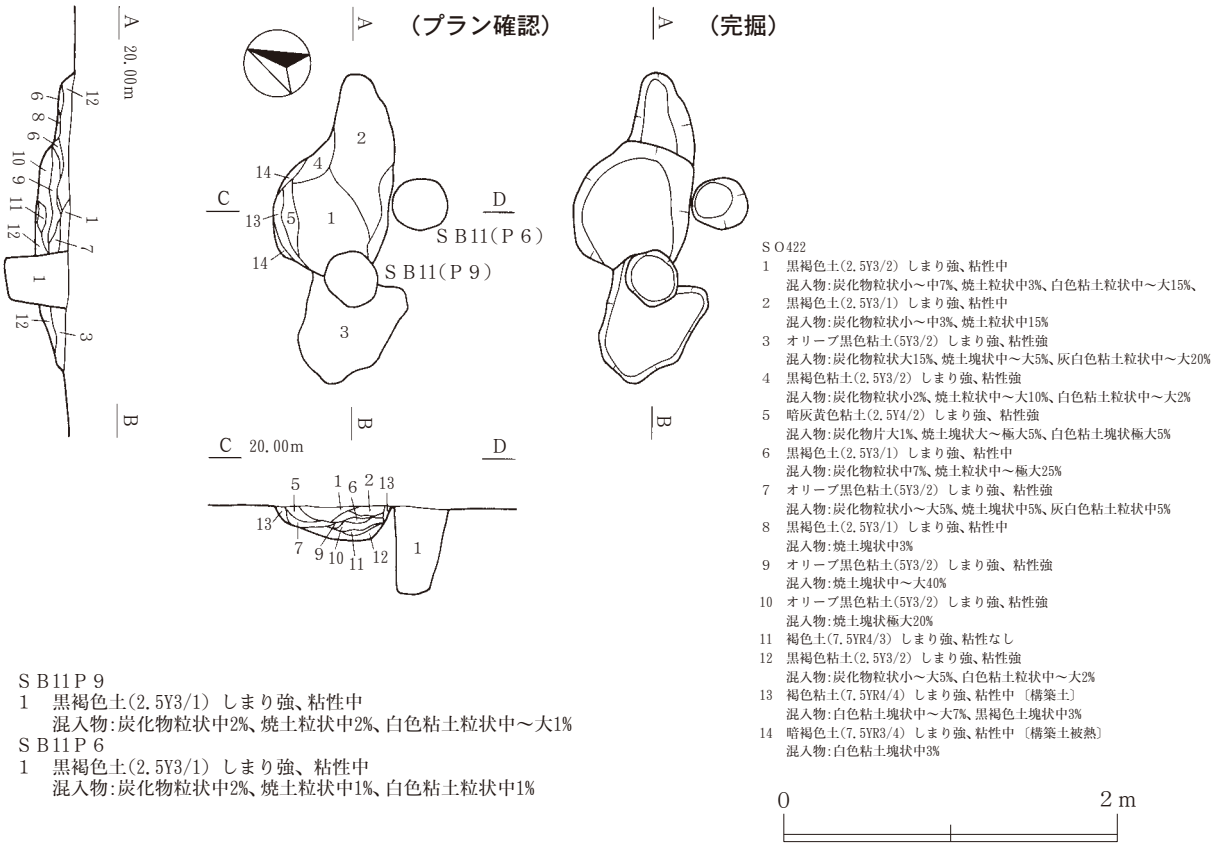
ＳＯ422かまど状遺構(第14図)

《位置・確認》ＬＳ53グリッドのⅢ層上面で焼土と黒褐色土の広がりを確認した。

《重複》ＳＢ11掘立柱建物跡の柱穴Ｐ９と重複するが、本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》長軸0.78m、短軸0.67mの不整な楕円形の燃焼部と長軸0.55m、短軸0.62mの不整楕円形の前庭部、長さ0.43m、幅0.4mの半楕円形の煙道部からなるかまどは長軸1.9m(北東－南西)、短軸0.7m(北西－南東)の規模である。確認面から0.2m掘り下げられていたが全体のほぼ２/３が削平され上部構造は滅失していた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第14図　ＳＯ422かまど状遺構実測図

ＳＯ455かまど状遺構(第15図、図版３－４)

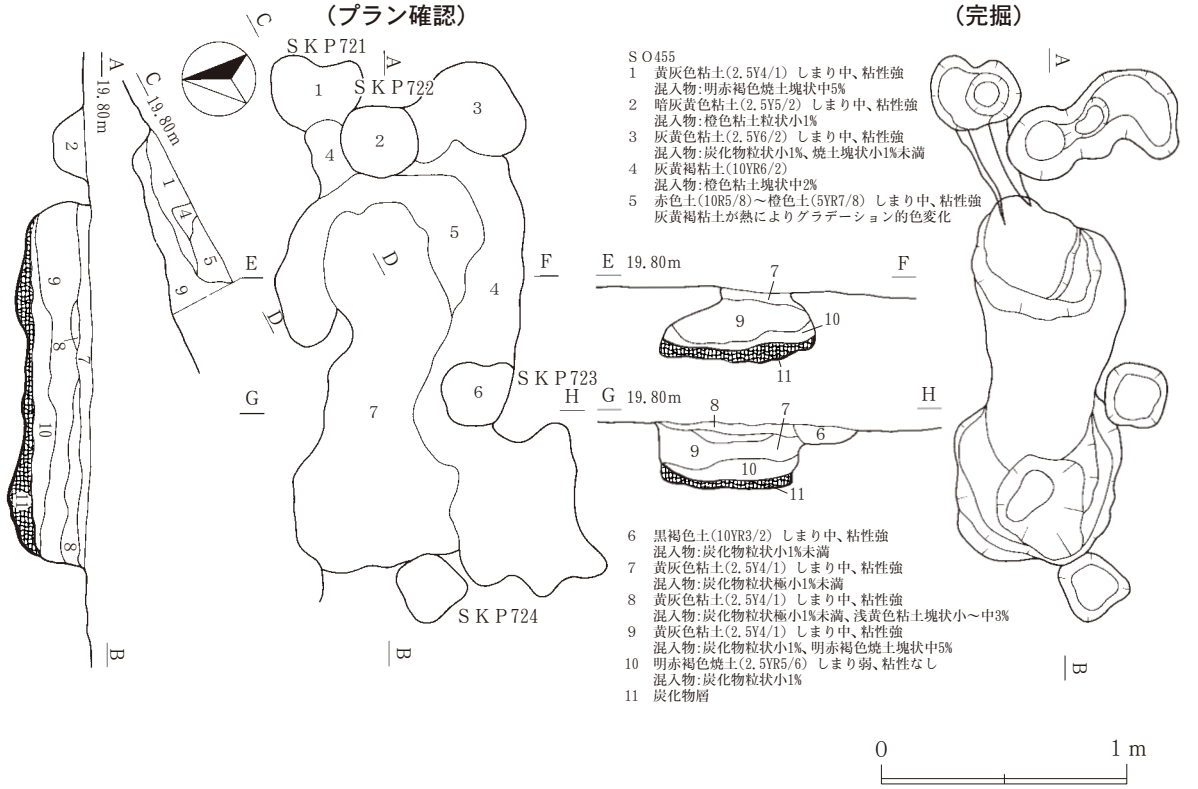
《位置・確認》ＬＳ52グリッドのⅢ層上面で赤色土と黄灰色粘土、黒褐色土の広がりを確認した。

《重複》ＳＫＰ721～724柱穴様ピットと重複するが、いずれの柱穴様ピットよりも古い。

《平面形・規模・方向》長軸0.8m、短軸0.6mの不整な楕円形の燃焼部と直径0.62～0.64mの不整円形の前庭部からなるかまど本体は長軸1.4m(東－西)、短軸0.6m(北－南)で、確認面から0.28～0.33m掘り下げ、かまど本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構したと考えられるが上部構造はほとんど滅失していた。長さ0.52m、幅0.14～0.22mの煙道部がかまど長軸に対し北側に26度傾いて付けられていた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

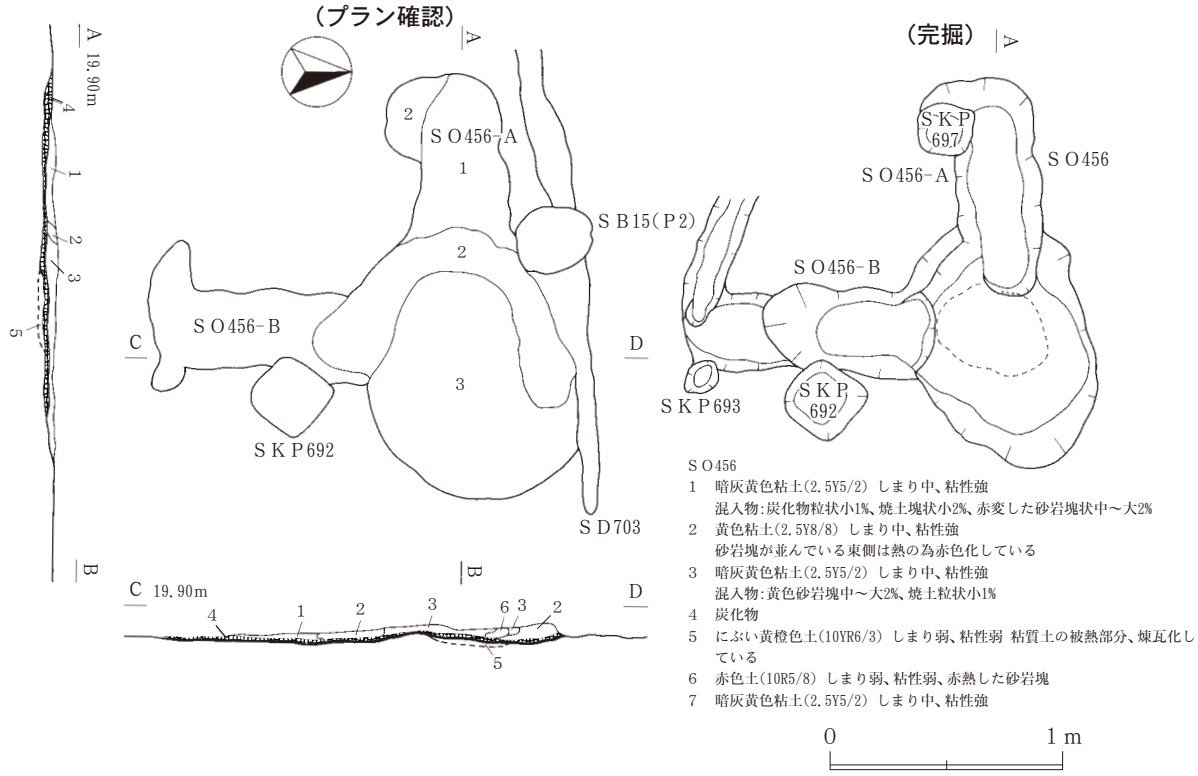
《特記事項》底面に堆積する炭化物層(11層)を年代測定し、95.4%の確率で1,480～1,635年という暦年数値を得た。



第15図　ＳＯ455かまど状遺構実測図

ＳＯ456かまど状遺構(16図)

《位置・確認》ＬＳ51グリッドのⅢ層上面で赤色砂岩塊と暗灰黄色粘土の広がりを確認した。

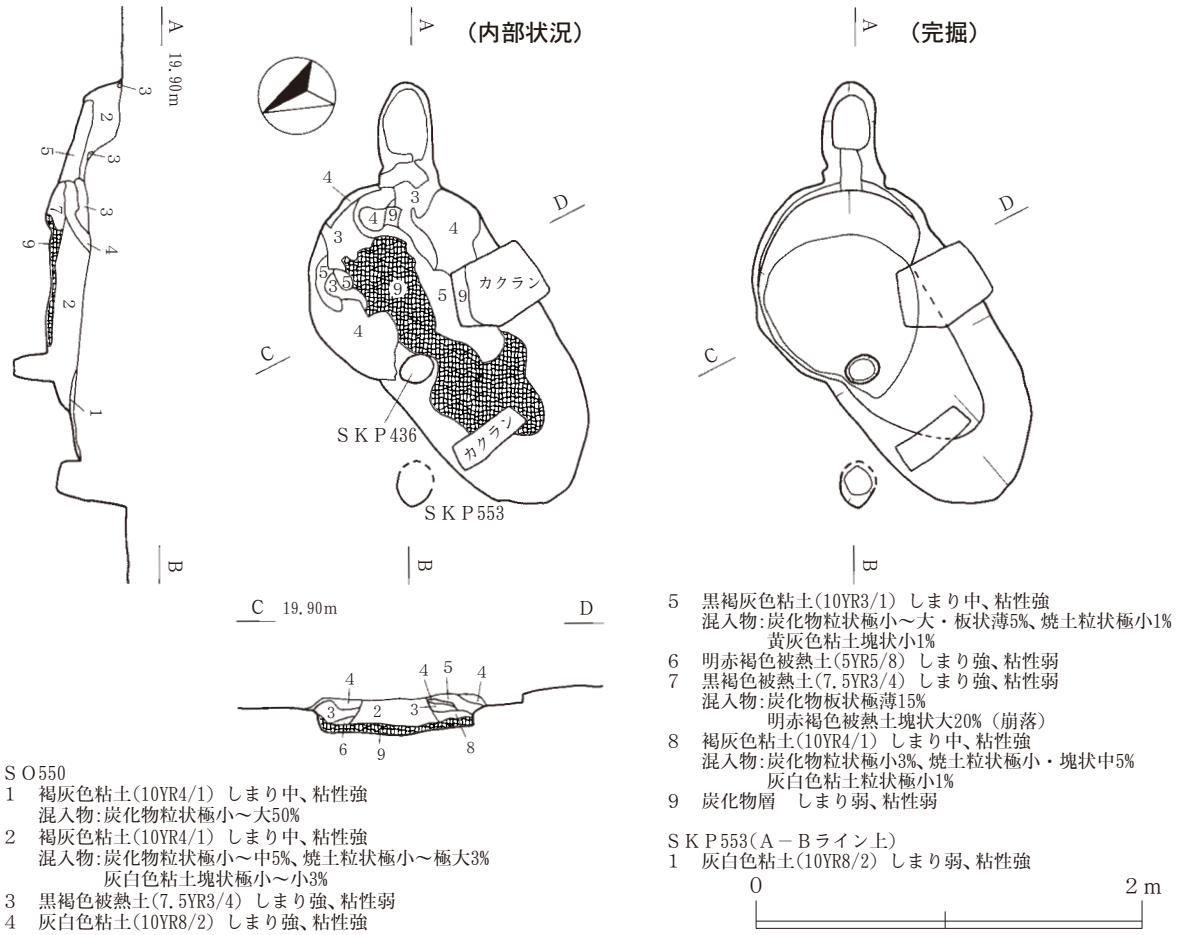


第16図　ＳＯ456かまど状遺構実測図

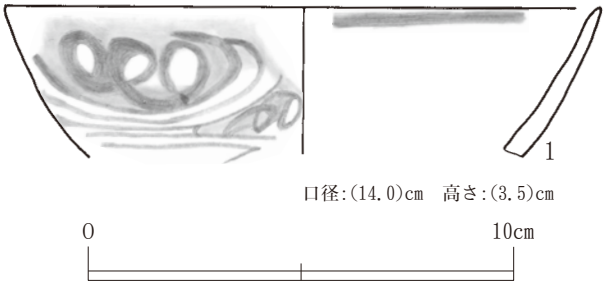
《重複》ＳＫＰ692・693・697柱穴様ピットと重複するが、いずれの柱穴様ピットよりも古い。
《平面形・規模・方向》当初南北方向のかまど状遺構（ＳＯ456－Ｂ）として構築されたが、燃焼部をそのままに煙道部の主軸を86度変更し、東西方向のかまど状遺構（ＳＯ456－Ａ）として造り替えていた。

ＳＯ456－Ａは、長軸1.0m、短軸0.75mの楕円形の燃焼部と長さ0.69m、幅0.37mの隅丸長方形の煙道部からなる本体は長軸1.69m（東－西）、短軸0.75m（北－南）で、確認面から0.05～0.07m掘り下げ、燃焼部と煙道部の境界には馬蹄形に赤色砂岩塊が並べられていた。燃焼部底面は、高熱により地山粘質土が煉瓦化していた。かまど本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構したと考えられるが上部構造は滅失していた。

ＳＯ456－Ｂは、燃焼部をＳＯ456－Ａ構築時に改変されている可能性があるが南側に長さ1.09m、



第17図　ＳＯ550かまど状遺構実測図



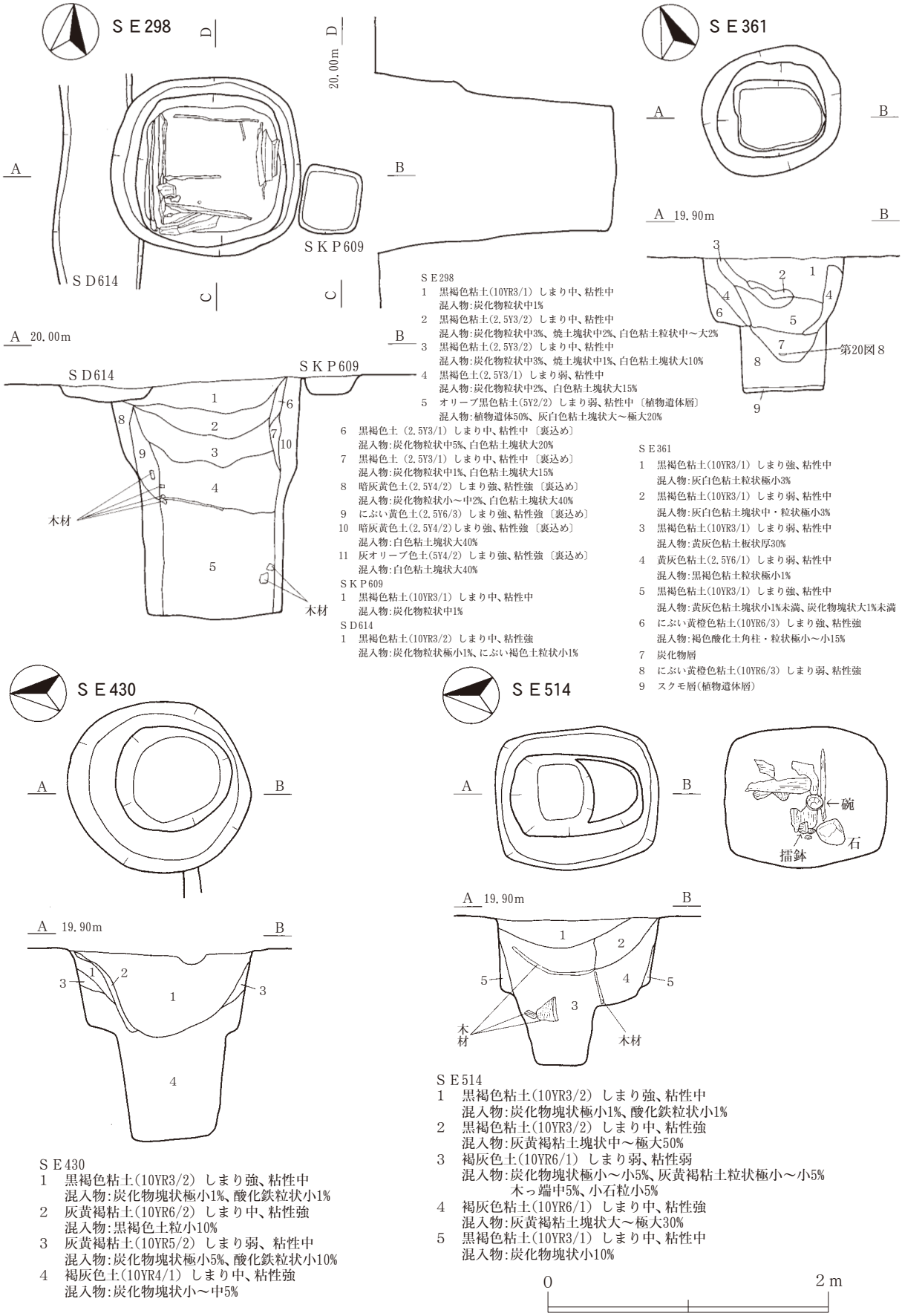
第18図　ＳＯ550かまど状遺構出土磁器実測図

幅0.37ｍの隅丸長方形の煙道部が付設されている。煙道部底面は二段になっていた。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＯ550かまど状遺構(第17図、図版３－５)
《位置・確認》ＬＴ50・51、ＭＡ50・51のⅢ層面にて煙道部分のみ検出した。その後ＳＫＰ545柱穴様ピットの壁面で焼土塊が見つかり、かまど状遺構本体を確認した。ＳＢ13掘立柱建物跡の内部に設置されたものと判断した。
《重複》ＳＫＰ436・545柱穴様ピットと重複するが、本遺構が古い。
《平面形・規模・方向》本体は長軸1.84ｍ(東－西)、短軸1.03ｍ(北－南)で楕円形を呈する。確認面から0.25ｍ掘り下げ、かまど本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で地山面より上部に架構したと考えられるが上部構造は滅失していた。かまど底面には炭化物が0.03～0.05ｍの厚さで堆積していた。長さ0.56ｍ、幅0.28ｍの煙道部が、かまど長軸に対し南側に35度傾いて付けられていた。
《出土遺物》底面から肥前磁器碗(Ⅱ期)の口縁部破片１点が出土した(第18図)。

(３)井戸跡
ＳＥ298井戸跡(第19図、図版３－６～８)
《位置・確認》ＬＴ53グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。
《重複・覆い屋》ＳＤ614溝跡と重複するが、本遺構が古い。上屋と思われるものは確認できなかった。
《平面形・規模》確認平面は隅丸方形を呈し、長軸1.35ｍ(東－西)、短軸1.3ｍ(北－南)、確認面からの深さは1.7ｍである。およそ0.7ｍの深さで段差が設けられ、方形の木枠が残っていた。
《枠・施設》長軸0.96ｍ(東－西)、短軸0.8ｍ〔残存値〕(北－南)、厚さ0.02ｍの方形の木枠である。
《出土遺物》煙管の雁首と吸口(第20図２)、及び17世紀前半の肥前磁器(初期伊万里)碗(第20図１)、擂鉢(第20図４)、瓦質土器、須恵器甕片が出土した。

ＳＥ361井戸跡(第19図、図版４－１)
《位置・確認》ＬＴ52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。
《重複・覆い屋》ＳＢ05掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係は不明である。また西側にＳＢ03掘立柱建物跡があるが、規模から見てＳＥ361井戸跡の上屋施設の可能性がある。
《平面形・規模》確認平面は楕円形を呈し、長軸1.02ｍ(北西－南東)、短軸0.88ｍ(北東－南西)、確認面からの深さは0.95ｍである。およそ0.5ｍの深さで段差が設けられ、そこから長軸0.63ｍ(北西－南東)、短軸0.55ｍ(北東－南西)方形の掘り込みで底部に達する。
《堆積土の状況》廃棄の際に黒褐色土で一括して埋め戻していた。４・５層は井戸を作った際の裏込土と思われる。
《枠・施設》なし。ＳＥ298井戸跡同様、木枠をはめていたものと考えられる。
《出土遺物》大窯時代と思われる瀬戸美濃産灰釉陶器皿が出土した(第20図８)。



ＳＥ298
1　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状中1%
2　黒褐色粘土(2.5Y3/2) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状中3%、焼土塊状中2%、白色粘土粒状中～大2%
3　黒褐色粘土(2.5Y3/2) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状中3%、焼土塊状中1%、白色粘土塊状大10%
4　黒褐色土(2.5Y3/1) しまり弱、粘性中
　混入物:炭化物粒状中2%、白色粘土塊状大15%
5　オリーブ黒色粘土(5Y2/2) しまり弱、粘性中〔植物遺体層〕
　混入物:植物遺体50%、灰白色粘土塊状大～極大20%
6　黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり中、粘性中〔裏込め〕
　混入物:炭化物粒状中5%、白色粘土塊状大20%
7　黒褐色土 (2.5Y3/1) しまり中、粘性中〔裏込め〕
　混入物:炭化物粒状中1%、白色粘土塊状大15%
8　暗灰黄色土(2.5Y4/2) しまり強、粘性強〔裏込め〕
　混入物:炭化物粒状小～中2%、白色粘土塊状大40%
9　にぶい黄色土(2.5Y6/3) しまり強、粘性強〔裏込め〕
10　暗灰黄色土(2.5Y4/2)しまり強、粘性強〔裏込め〕
　混入物:白色粘土塊状大40%
11　灰オリーブ色土(5Y4/2) しまり強、粘性強〔裏込め〕
　混入物:白色粘土塊状大40%

ＳＫＰ609
1　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物粒状中1%

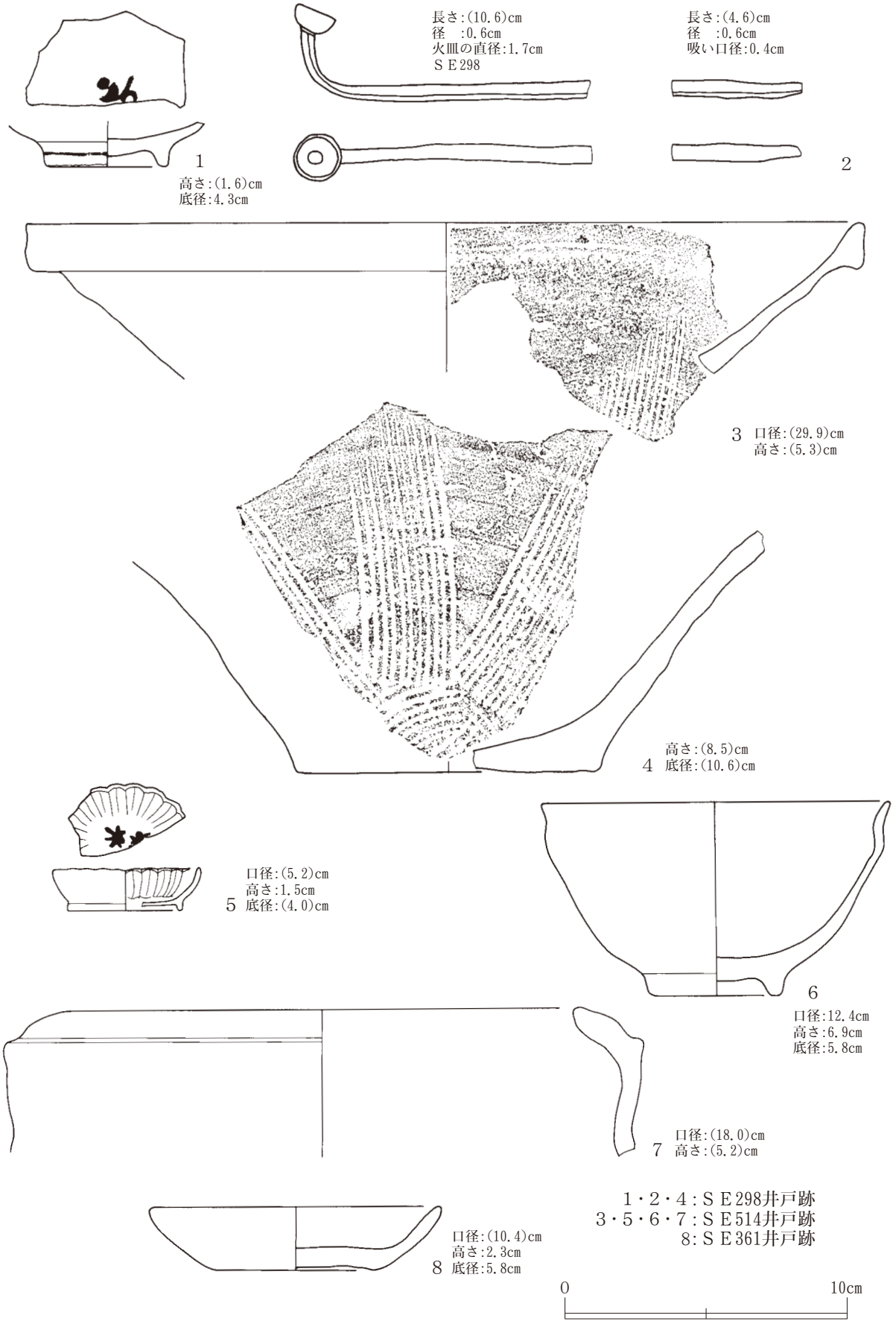
ＳＤ614
1　黒褐色粘土(10YR3/2) しまり中、粘性強
　混入物:炭化物粒状極小1%、にぶい褐色土粒状小1%

ＳＥ361
1　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり強、粘性中
　混入物:灰白色粘土粒状極小3%
2　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり弱、粘性中
　混入物:灰白色粘土塊状中・粒状極小3%
3　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり弱、粘性中
　混入物:黄灰色粘土板状厚30%
4　黄灰色粘土(2.5Y6/1) しまり弱、粘性中
　混入物:黒褐色粘土粒状極小1%
5　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり強、粘性中
　混入物:黄灰色粘土塊状小1%未満、炭化物塊状大1%未満
6　にぶい黄橙色粘土(10YR6/3) しまり強、粘性強
　混入物:褐色酸化土角柱・粒状極小～小15%
7　炭化物層
8　にぶい黄橙色粘土(10YR6/3) しまり弱、粘性強
9　スクモ層(植物遺体層)

ＳＥ430
1　黒褐色粘土(10YR3/2) しまり強、粘性中
　混入物:炭化物塊状極小1%、酸化鉄粒状小1%
2　灰黄褐粘土(10YR6/2) しまり中、粘性強
　混入物:黒褐色土粒小10%
3　灰黄褐粘土(10YR5/2) しまり弱、粘性中
　混入物:炭化物塊状極小5%、酸化鉄粒状小10%
4　褐灰色土(10YR4/1) しまり中、粘性強
　混入物:炭化物塊状小～中5%

ＳＥ514
1　黒褐色粘土(10YR3/2) しまり強、粘性中
　混入物:炭化物塊状極小1%、酸化鉄粒状小1%
2　黒褐色粘土(10YR3/2) しまり中、粘性強
　混入物:灰黄褐粘土塊状中～極大50%
3　褐灰色土(10YR6/1) しまり弱、粘性弱
　混入物:炭化物塊状極小～小5%、灰黄褐粘土粒状極小～小5%
　　木っ端中5%、小石粒小5%
4　褐灰色粘土(10YR6/1) しまり中、粘性強
　混入物:灰黄褐粘土塊状大～極大30%
5　黒褐色粘土(10YR3/1) しまり中、粘性中
　混入物:炭化物塊状小10%

第19図　ＳＥ298・361・430・514井戸跡実測図



第20図　ＳＥ298・361・514井戸跡出土煙管、陶磁器実測図

ＳＥ430井戸跡(第19図)

《位置・確認》ＬＳ・ＬＲ45グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複・覆い屋》ＳＤ467溝跡を切っている。上屋と思われるものは確認できなかった。

《平面形・規模》長軸1.3、短軸1.2mの略円形である。確認面からの最深部は1.4mである。

《堆積土の状況》確認平面は円形を呈し、長軸1.3m(北－南)、短軸1.2m(東－西)、確認面からの深さは1.4mである。およそ0.6mの深さで段差が設けられ、そこから長軸0.8m(北－南)、短軸0.7m(東－西)の楕円形の掘り込みで底部に達する。

《枠・施設》なし。

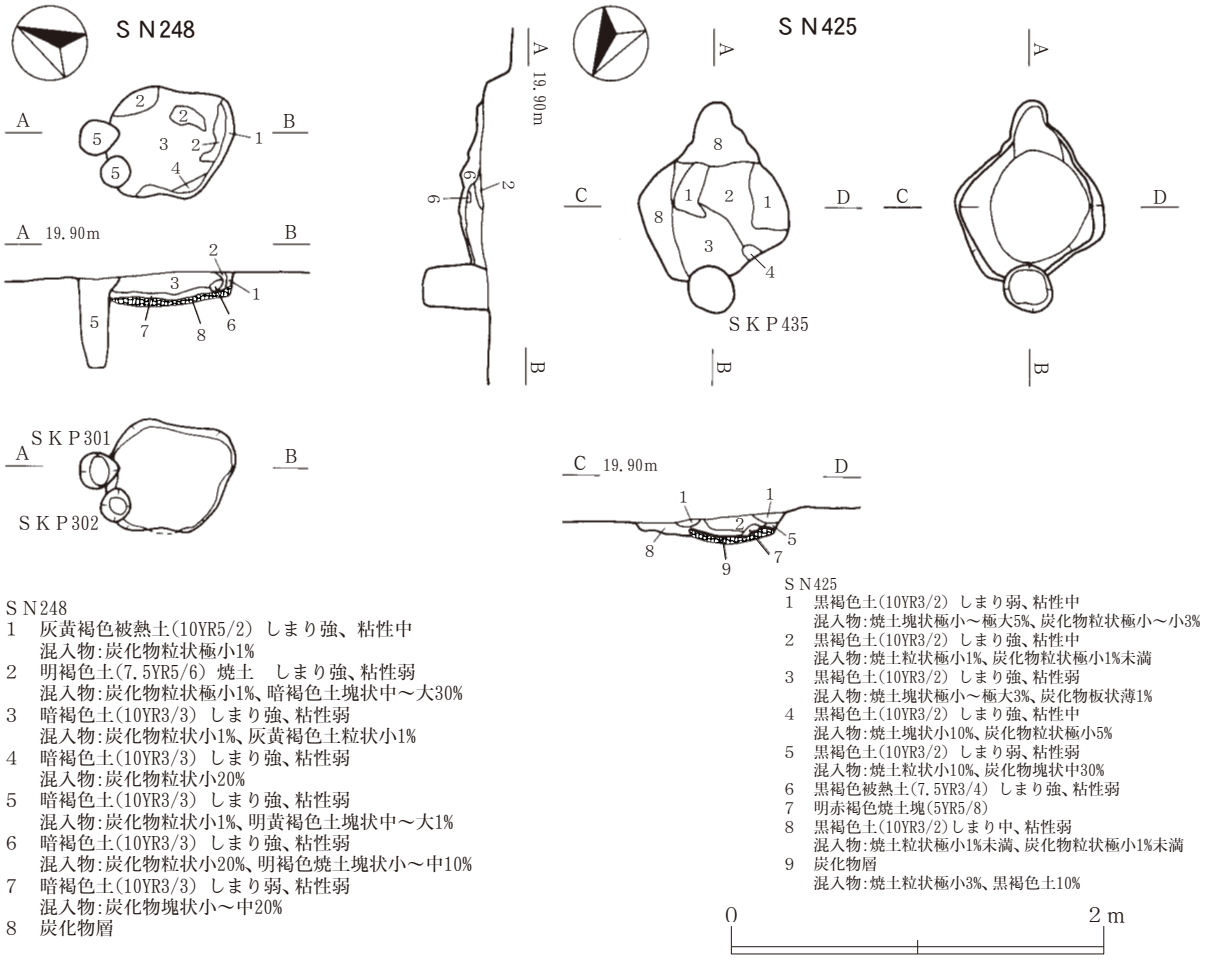
《出土遺物》底部より木箆や箸が出土した。

ＳＥ514井戸跡(第19図、図版４－２)

《位置・確認》ＬＰ46グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複・覆い屋》ＳＢ06掘立柱建物跡はＳＥ514井戸跡の上屋施設と考えられる。

《平面形・規模》確認平面は隅丸方形を呈し、長軸1.16m(北－南)、短軸1.0m(東－西)、確認面からの深さは1.0mである。0.4mの深さで段差が設けられ、長軸0.8m(北－南)、短軸0.7m(東－西)の楕円形の掘り込みで底部に達する。



ＳＮ248
1　灰黄褐色被熱土(10YR5/2) しまり強、粘性中
　混入物:炭化物粒状極小1%
2　明褐色土(7.5YR5/6) 焼土　しまり強、粘性弱
　混入物:炭化物粒状極小1%、暗褐色土塊状中～大30%
3　暗褐色土(10YR3/3) しまり強、粘性弱
　混入物:炭化物粒状小1%、灰黄褐色土粒状小1%
4　暗褐色土(10YR3/3) しまり強、粘性弱
　混入物:炭化物粒状小20%
5　暗褐色土(10YR3/3) しまり強、粘性弱
　混入物:炭化物粒状小1%、明黄褐色土塊状中～大1%
6　暗褐色土(10YR3/3) しまり強、粘性弱
　混入物:炭化物粒状小20%、明褐色焼土塊状小～中10%
7　暗褐色土(10YR3/3) しまり弱、粘性弱
　混入物:炭化物塊状小～中20%
8　炭化物層

ＳＮ425
1　黒褐色土(10YR3/2) しまり弱、粘性中
　混入物:焼土塊状極小～極大5%、炭化物粒状極小～小3%
2　黒褐色土(10YR3/2) しまり強、粘性中
　混入物:焼土粒状極小1%、炭化物粒状極小1%未満
3　黒褐色土(10YR3/2) しまり強、粘性弱
　混入物:焼土塊状極小～極大3%、炭化物板状薄1%
4　黒褐色土(10YR3/2) しまり強、粘性中
　混入物:焼土塊状小10%、炭化物粒状極小5%
5　黒褐色土(10YR3/2) しまり弱、粘性弱
　混入物:焼土粒状小10%、炭化物塊状中30%
6　黒褐色被熱土(7.5YR3/4) しまり強、粘性弱
7　明赤褐色焼土塊(5YR5/8)
8　黒褐色土(10YR3/2)しまり中、粘性弱
　混入物:焼土粒状極小1%未満、炭化物粒状極小1%未満
9　炭化物層
　混入物:焼土粒状極小3%、黒褐色土10%

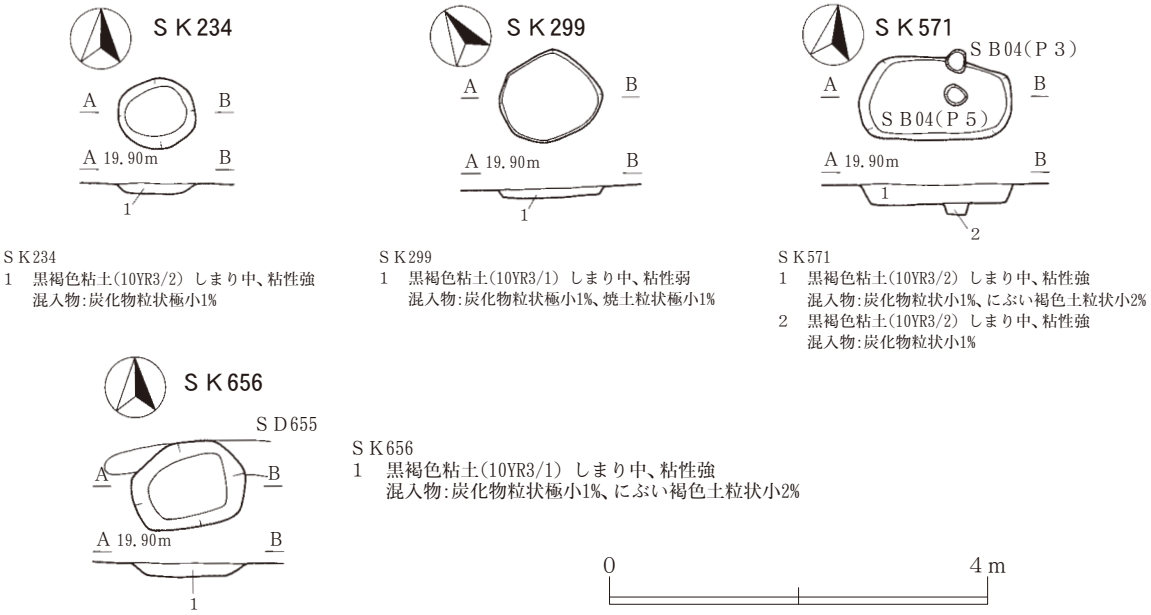
第21図　ＳＮ248・425焼土遺構実測図

《堆積土の状況》廃棄の際に黒褐色土で一括して埋め戻していた。２・４・５層は井戸を作った際の裏込土と思われる。また廃棄の際に抜き取った木枠の一部と思われる板材や杭などの破片が堆積土中に混じっていた。
《枠・施設》なし。ＳＥ298井戸跡同様、木枠をはめていたものと考えられる。
《出土遺物》陶器では肥前産の甕片（第20図７）、擂鉢（第20図３）、17世紀前半の天目型碗（第20図６）や磁器では18世紀の紅皿（第20図５）が出土した。

（４）焼土遺構

ＳＮ248焼土遺構（第21図）
《位置・確認》ＭＡ47グリッドのⅢ層上面で焼土塊と炭化物の広がりとして確認した。
《重複》ＳＫＰ301・302柱穴様ピットと重複するが、本遺構が古い。
《平面形・規模・方向》長軸0.85ｍ（北西－南東）、短軸0.6ｍ（北東－南西）で、確認面から0.2ｍ掘り下げられていた。底部には炭化物層が確認された。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＮ425焼土遺構（第21図）
《位置・確認》ＬＳ53グリッドのⅢ層上面で焼土塊と炭化物の広がりとして確認した。
《重複》ＳＫＰ435柱穴様ピットと重複するが、本遺構が古い。
《平面形・規模・方向》長軸1.2ｍ（北西－南東）、短軸0.8ｍ（北東－南西）で、確認面から0.2ｍ掘り下げられていたが、上部構造は滅失し焼土塊が散乱し南東側には炭の堆積を確認したので、小型のかまど状遺構だった可能性もある。
《出土遺物》遺物は出土しなかった。



ＳＫ234
1　黒褐色粘土（10YR3/2）しまり中、粘性強
　　混入物：炭化物粒状極小1%

ＳＫ299
1　黒褐色粘土（10YR3/1）しまり中、粘性弱
　　混入物：炭化物粒状極小1%、焼土粒状極小1%

ＳＫ571
1　黒褐色粘土（10YR3/2）しまり中、粘性強
　　混入物：炭化物粒状小1%、にぶい褐色土粒状小2%
2　黒褐色粘土（10YR3/2）しまり中、粘性強
　　混入物：炭化物粒状小1%

ＳＫ656
1　黒褐色粘土（10YR3/1）しまり中、粘性強
　　混入物：炭化物粒状極小1%、にぶい褐色土粒状小2%

第22図　ＳＫ234・299・571・656土坑実測図

（５）土坑

ＳＫ234土坑（第22図）

《位置・確認》ＭＣ48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》なし

《平面形・規模・方向》長軸0.86ｍ、短軸0.84ｍの楕円形を呈する。長軸は東－西方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.12ｍで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＫ299土坑（第22図）

《位置・確認》ＬＳ48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。西側に近接してＳＯ405かまど状遺構があり、ＳＯ405かまど状遺構と共にＳＢ07掘立柱建物跡に覆われる。

《重複》なし

《平面形・規模・方向》長軸1.22ｍ、短軸1.0ｍで、北東側と南東側隅が方形を呈する不整楕円形である。長軸は北西－南東方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.13ｍで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＫ571土坑（第22図）

《位置・確認》ＬＲ49グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》ＳＫＰ572・573柱穴様ピットと重複するが本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》長軸1.73ｍ、短軸0.9ｍで西側壁が張り出す長方形とも観察される。長軸は北東－南西方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.2ｍで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＫ656土坑（第22図）

《位置・確認》ＬＲ50グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》ＳＤ655溝跡と重複するが、本遺構が新しい。

《平面形・規模・方向》長軸1.23ｍ、短軸0.39ｍの不整な楕円形を呈する。長軸は東－西方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.16ｍで、底面はほぼ平坦である。

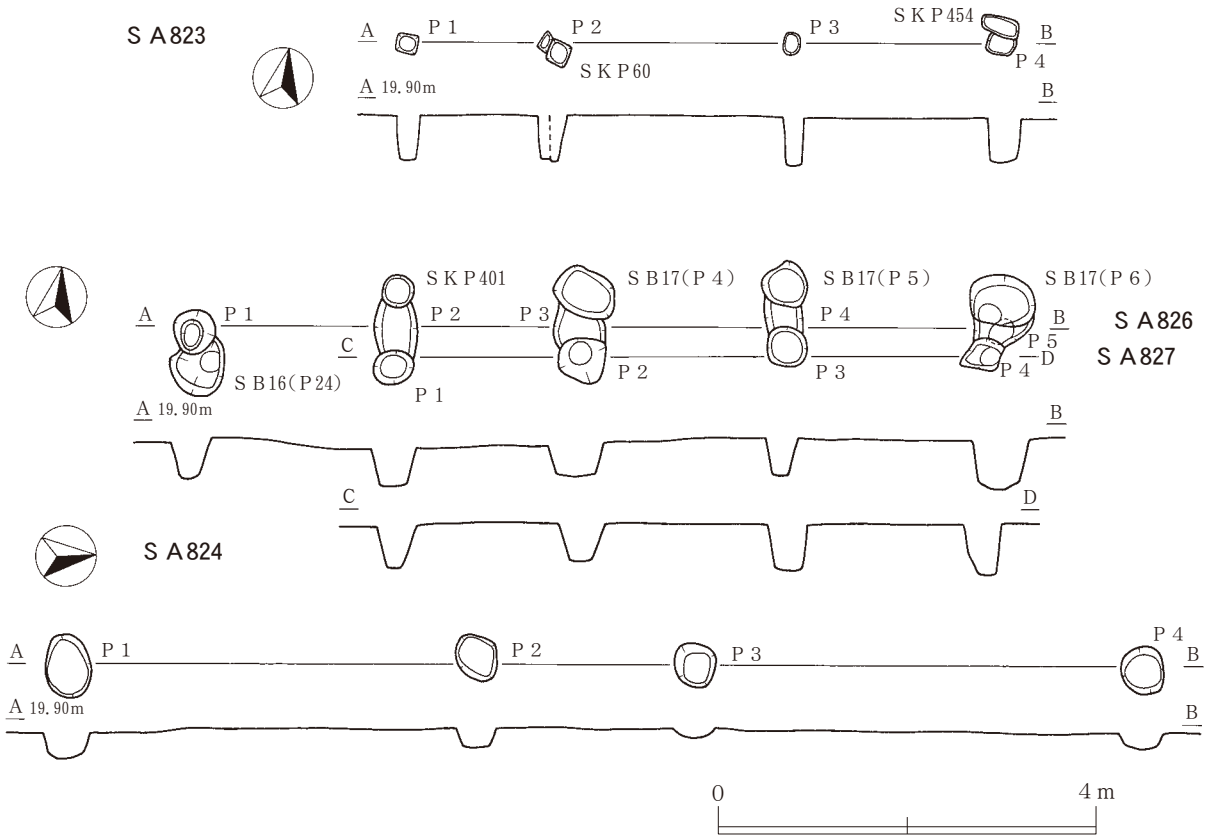
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

（６）柱列

ＳＡ823柱列（第23図）

《位置・確認》ＭＢ・ＭＣ51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北東－南西方向に３間の総長6.2ｍで、柱間距離はＰ１から1.5ｍ＋2.5ｍ＋2.2ｍである。



第23図　ＳＡ823・824・826・827柱列実測図

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＡ824柱列(第23図)

《位置・確認》ＬＱ45～48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北－南方向に３間の総長11.4ｍで、柱間距離はＰ１から4.3ｍ＋2.3ｍ＋4.8ｍである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＡ826柱列(第23図)

《位置・確認》ＭＢ・ＭＣ・ＭＤ51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北東－南西方向に４間の総長8.5ｍで、柱間距離はＰ１から2.2ｍ＋1.9ｍ＋2.1ｍ＋2.3ｍである。

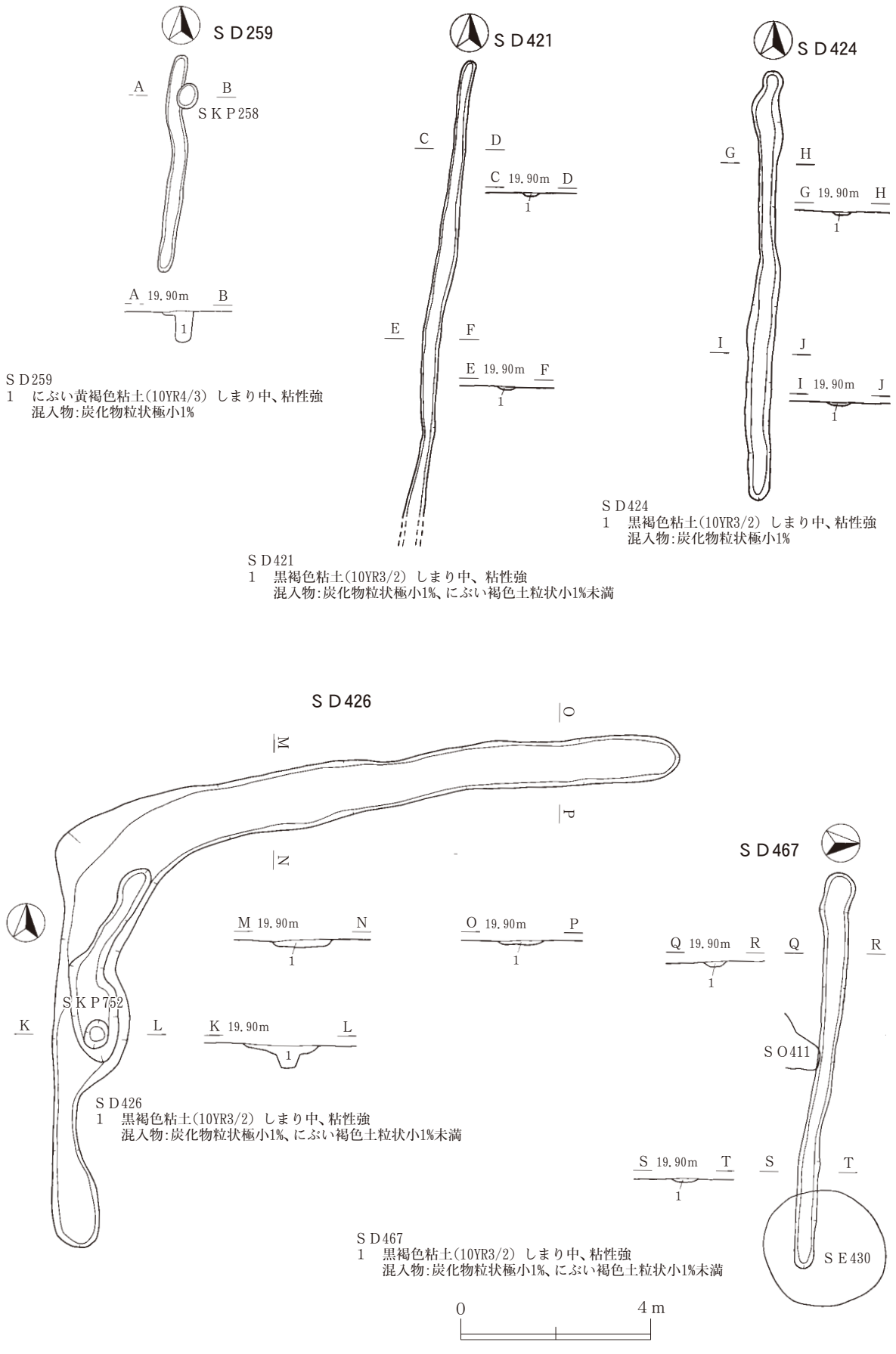
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

ＳＡ827柱列(第23図)

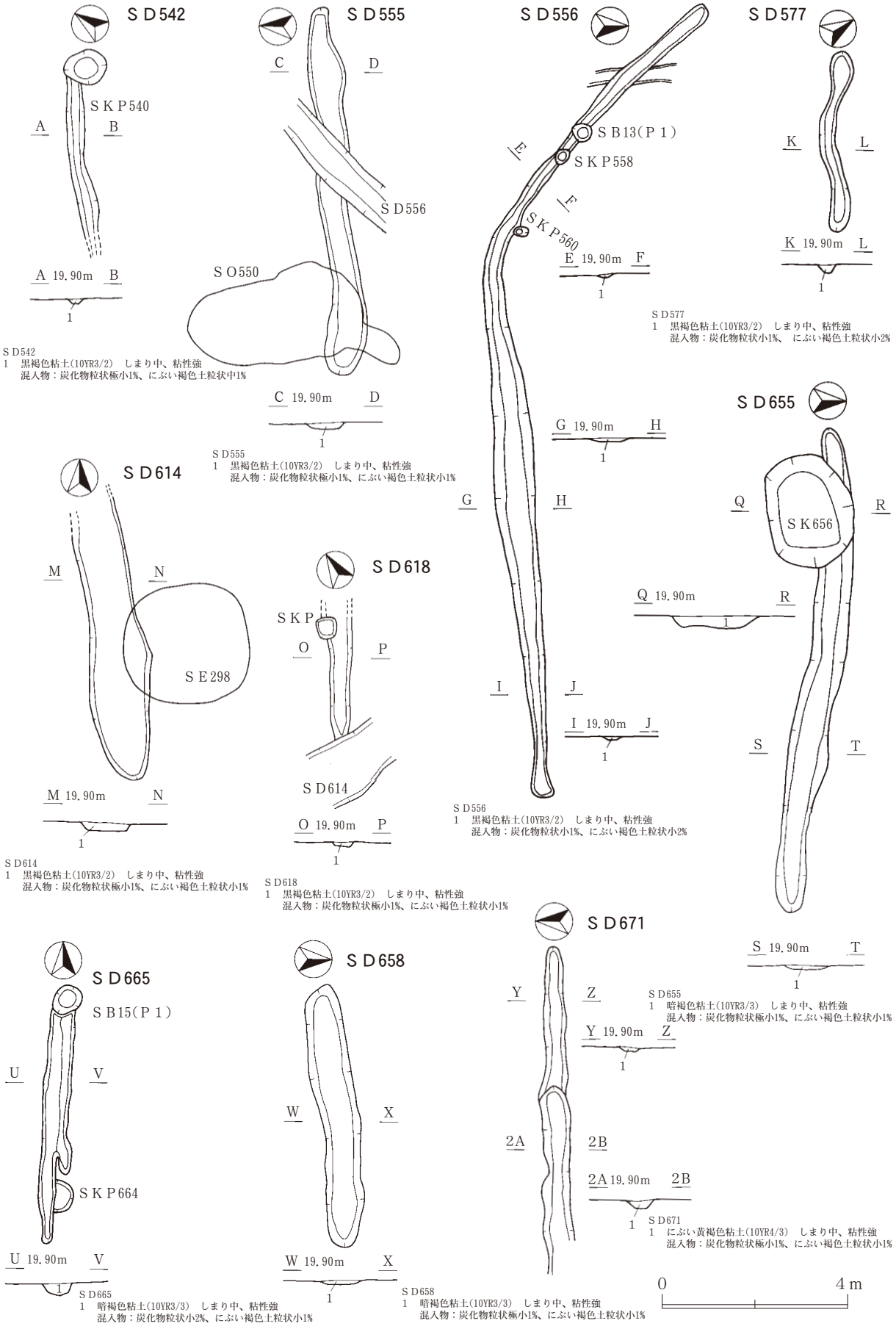
《位置・確認》ＭＢ・ＭＣ51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北東－南西方向に３間の総長6.3ｍで、柱間距離はＰ１から2.0ｍ＋2.2ｍ＋2.1ｍである。

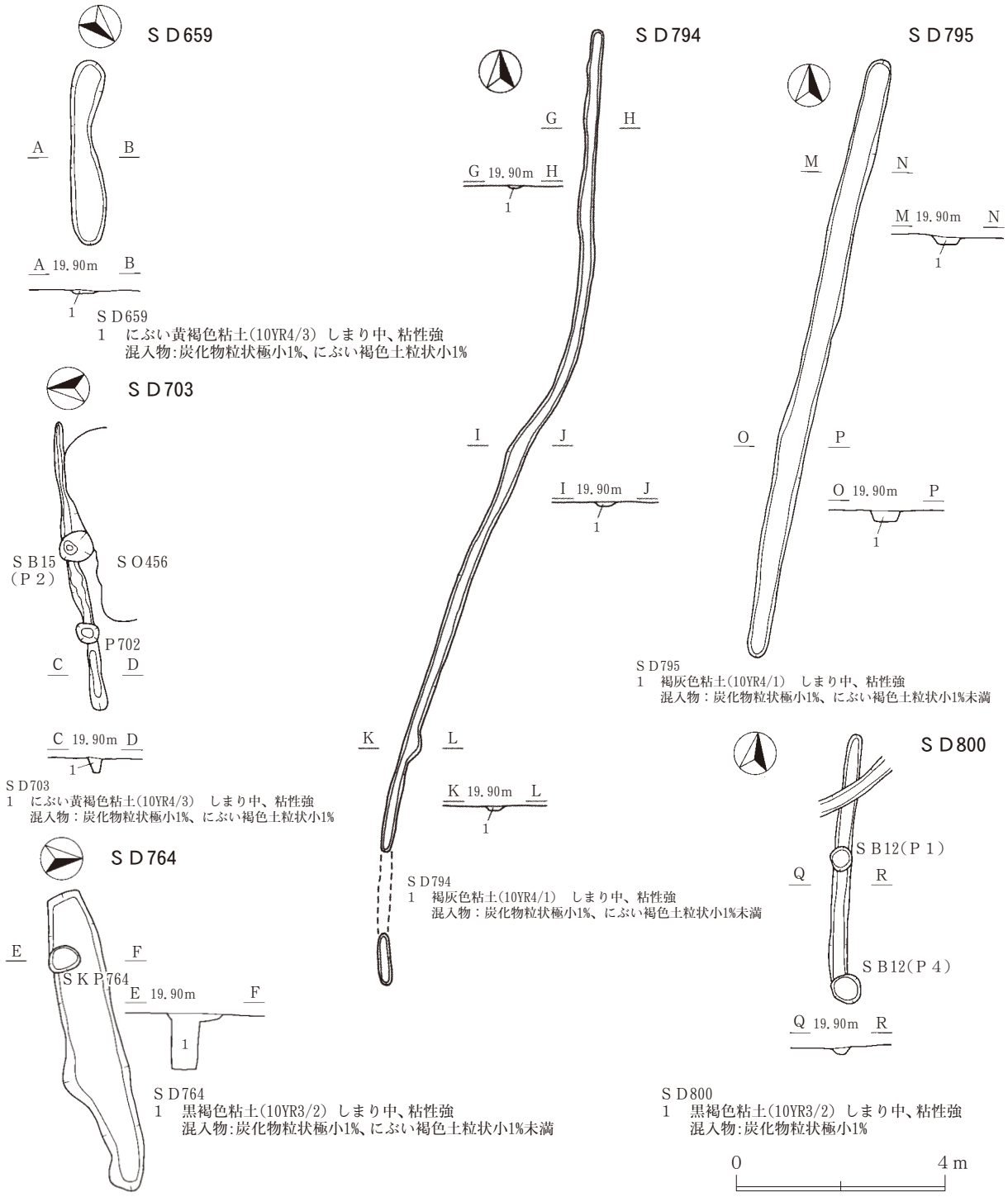
《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第24図　ＳＤ259・421・424・426・467溝跡実測図(１)



第25図　ＳＤ542・555・556・577・614・618・655・665・658・671溝跡実測図(２)



第26図　ＳＤ659・703・764・794・795・800溝跡実測図（３）

（７）溝跡（第24図～第26図）

溝跡は22条確認した。計測値等は第１表のとおりである。

《出土遺物》ＳＤ618溝跡より陶磁器15片が出土した（第27図１・３）。

（８）河道跡（付図）

河道跡は２条検出した。

《出土遺物》ＳＬ586河道跡より陶磁器３片が出土した（第27図２～４）。

第１表　溝跡観察表

遺構番号	検出グリッド	大きさ			出土遺物：点数
		長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	
ＳＤ150	ＭＡ48	12.03	0.19～0.26	0.10	—
ＳＤ259	ＬＴ45・46	2.30	0.15～0.20	0.32	—
ＳＤ421	ＬＴ45・46	4.86	0.11～0.22	0.04	—
ＳＤ426	ＬＳ46・47	8.27	0.24～1.11	0.24	—
ＳＤ467	ＬＳ45	4.18	0.17～0.32	0.06	—
ＳＤ424	ＬＴ46	4.52	0.16～0.30	0.04	—
ＳＤ542	ＬＴ50	1.77	0.15～0.22	0.06	—
ＳＤ555	ＬＴ51	3.91	0.19～0.43	0.07	—
ＳＤ577	ＬＱ49	1.94	0.12～0.25	0.10	—
ＳＤ556	ＬＴ51	9.26	0.12～0.45	0.04	—
ＳＤ614	ＬＴ52・53	3.07	0.50～0.68	0.10	—
ＳＤ618	ＭＡ53	1.29	0.15～0.27	0.06	陶磁器:15
ＳＤ655	ＬＲ50	5.25	0.23～0.45	0.14	—
ＳＤ658	ＬＲ50	2.83	0.35～0.47	0.04	—
ＳＤ659	ＬＱ50	1.75	0.19～0.35	0.04	—
ＳＤ665	ＬＴ51	2.48	0.11～0.33	0.14	—
ＳＤ671	ＬＳ51	3.53	0.18～0.34	0.10	—
ＳＤ703	ＬＳ51	2.76	0.05～0.17	0.14	—
ＳＤ764	ＬＲ45	2.90	0.30～0.65	0.54	—
ＳＤ794	ＬＮ47・48	9.37	0.11～0.18	0.04	—
ＳＤ795	ＬＮ47・48	5.77	0.20～0.28	0.10	—
ＳＤ800	ＬＴ48	2.28	0.10～0.18	0.06	

（９）性格不明遺構

ＳＸ404性格不明遺構（第28図）

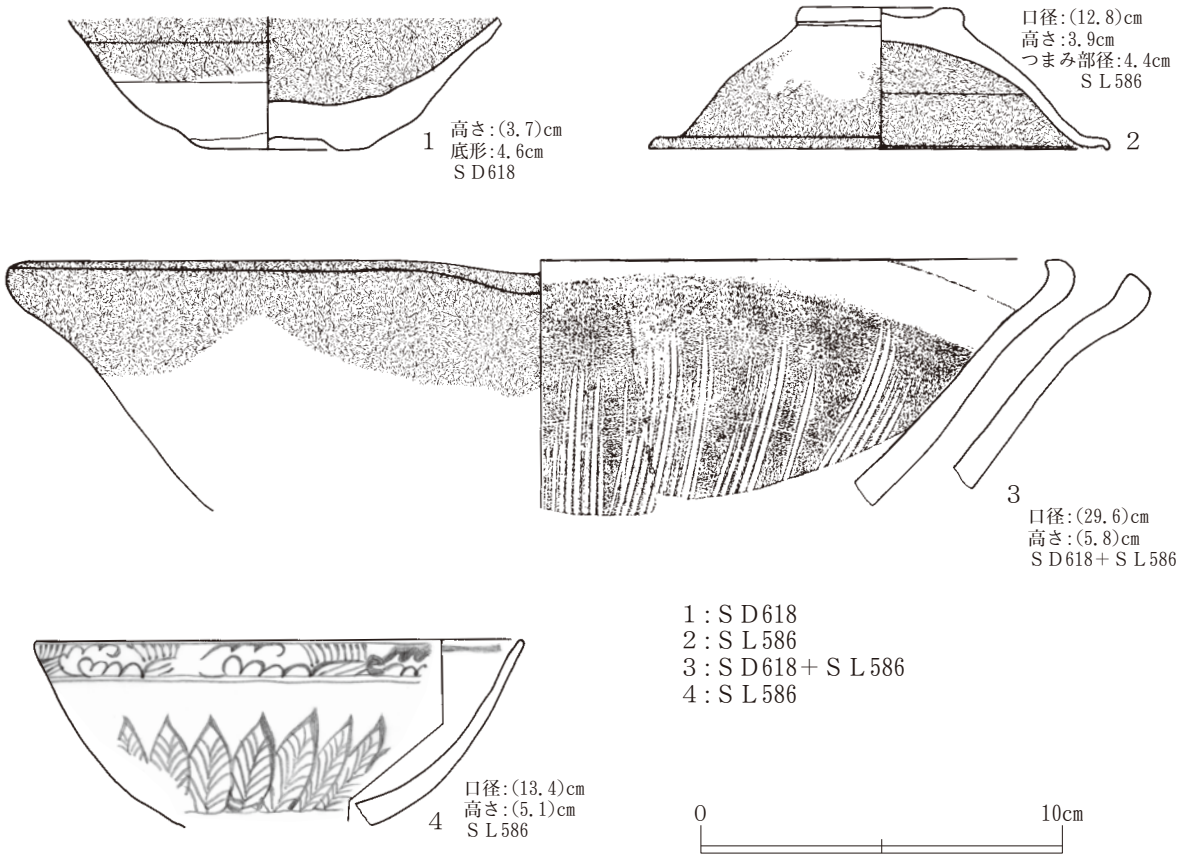
《位置・確認》ＬＱ50グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》なし。

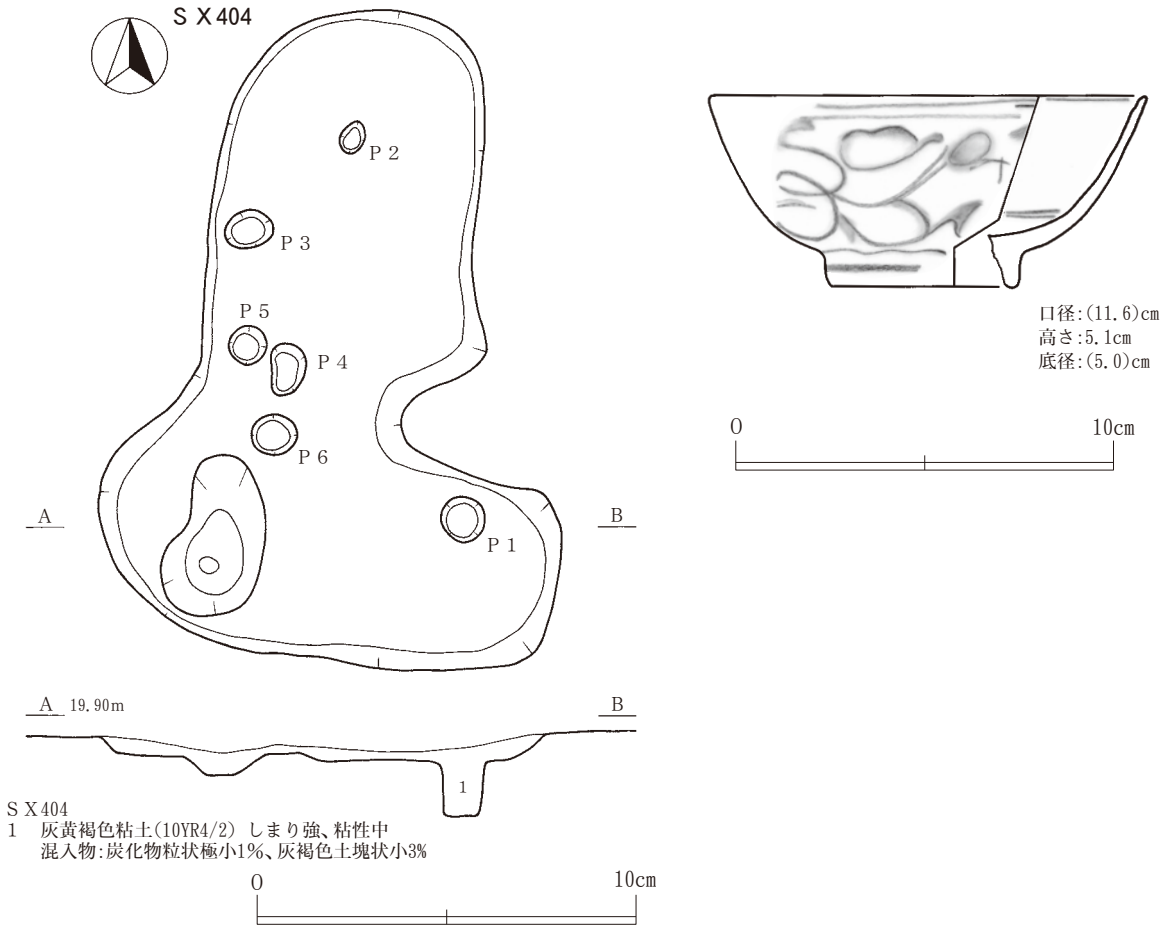
《平面形・規模・方向》長軸3.5m、短軸2.4mの東側に張り出しのある楕円形を呈する。長軸はほぼ北－南方向である。柱穴様ピット６基が確認された。柱穴様ピットは本遺構より古い。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.12mである。底面はほぼ平坦であるが南西隅に窪みがあり、焼土塊が確認された。

《出土遺物》磁器１片が出土した（第28図）。



第27図　ＳＤ618溝跡、ＳＬ586河道跡出土陶磁器実測図



第28図　ＳＸ404性格不明遺構と出土磁器実測図

第２表　柱穴様ピット観察表（１）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
002	ＭＥ52	楕円形	34	24	—	058	ＭＣ51	不整な楕円形	23	18	—
006	ＭＤ53	楕円形	23	18	—	060	ＭＣ51	長方形	24	21	—
007	ＭＤ53	方形	11	10	—	062	ＭＣ51	長方形	23	18	—
008	ＭＤ53	長方形	14	10	—	063	ＭＣ51	方形	16	16	—
009	ＭＣ54	方形	16	15	—	064	ＭＣ51	方形	18	18	—
010	ＭＤ53	長方形	18	15	—	065	ＭＤ51	円形	36	36	—
011	ＭＤ53	楕円形	24	14	陶磁器:2	068	ＭＢ53	楕円形	27	23	—
014	ＭＥ53	楕円形	20	17	—	069	ＭＢ53	楕円形	24	22	陶磁器:1
016	ＭＣ54	方形	18	18	—	070	ＭＢ53	長方形	40	30	—
017	ＭＣ53	長方形	28	26	—	071	ＭＣ51	不整な楕円形	16	14	—
019	ＭＣ53	楕円形	20	16	—	074	ＭＢ51	不整な楕円形	24	12	—
020	ＭＣ53	長方形	20	18	—	075	ＭＤ51	方形	15	14	—
021	ＭＣ53	（楕円形）	40	(35)	—	077	ＭＣ52	楕円形	36	30	—
022	ＭＣ53	楕円形	34	28	—	078	ＭＣ52	楕円形	33	16	—
024	ＭＣ53	円形	20	19	—	079	ＭＣ52	長方形	16	14	—
025	ＭＣ53	（楕円形）	25	(18)	—	080	ＭＣ52	長方形	16	14	—
026	ＭＣ53	楕円形	24	17	—	081	ＭＢ53	長方形	32	26	—
027	ＭＣ53	（長方形）	(20)	14	—	082	ＭＢ53	長方形	32	18	—
028	ＭＣ53	長方形	30	27	—	083	ＭＢ53	（楕円形）	28	(20)	—
030	ＭＣ53	楕円形	28	26	—	084	ＭＢ53	楕円形	50	40	陶磁器:1
031	ＭＣ53	（楕円形）	(28)	18	—	085	ＭＢ53	長方形	33	26	—
032	ＭＣ53	（楕円形）	(26)	24	—	087	ＭＣ52	長方形	18	13	—
033	ＭＣ53	長方形	28	18	陶磁器:2	088	ＭＣ52	長方形	25	18	—
037	ＭＤ52	長方形	19	15	—	089	ＭＣ52	長方形	37	30	—
038	ＭＤ52	長方形	32	30	—	090	ＭＢ50	円形	20	20	—
039	ＭＣ53	楕円形	42	37	—	091	ＭＢ51	円形	22	21	—
040	ＮＤ52	方形	22	21	—	093	ＭＢ50	長方形	40	36	—
041	ＭＥ51	楕円形	20	15	—	094	ＭＢ50	長方形	45	18	—
042	ＭＥ51	（楕円形）	(22)	20	—	095	ＭＢ50	長方形	22	20	—
043	ＭＤ52	楕円形	32	25	—	096	ＭＢ50	長方形	22	19	—
045	ＭＣ53	円形	26	26	—	097	ＭＢ50	長方形	17	14	—
046	ＭＣ53	長方形	28	23	—	099	ＭＢ51	楕円形	33	27	—
047	ＭＤ52	方形	26	25	—	101	ＭＢ50	不整な楕円形	35	30	—
049	ＭＣ52	楕円形	30	25	—	102	ＭＢ50	長方形	34	18	—
050	ＭＣ52	楕円形	33	29	—	103	ＭＢ50	楕円形	22	18	—
051	ＭＣ52	長方形	24	20	—	104	ＭＡ50	楕円形	35	26	—
052	ＭＤ52	長方形	22	20	—	107	ＭＢ51	楕円形	20	18	—
053	ＭＤ52	長方形	30	19	—	108	ＭＢ52	楕円形	22	18	—
054	ＭＤ51	長方形	20	17	—	109	ＭＢ51	長方形	20	14	—
055	ＭＤ50	長方形	22	15	—	110	ＭＢ51	楕円形	30	27	—
057	ＭＣ51	楕円形	45	36	—	111	ＭＡ51	（長方形）	(28)	24	—

第３表　柱穴様ピット観察表（２）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
112	ＭＡ51	不整な楕円形	37	28	—	171	ＭＡ48	（楕円形）	43	(35)	—
113	ＭＡ51	楕円形	37	35	—	172	ＭＡ48	楕円形	46	24	—
114	ＭＡ51	楕円形	30	25	—	173	ＭＡ48	長方形	80	52	—
115	ＭＡ51	楕円形	39	25	—	175	ＭＡ48	長方形	22	20	—
116	ＭＡ51	楕円形	27	20	—	176	ＭＡ48	長方形	22	18	—
117	ＭＡ50	長方形	22	15	—	179	ＭＡ49	楕円形	20	18	—
119	ＭＣ53	円形	10	10	—	180	ＭＢ49	長方形	20	17	—
120	ＭＣ52	楕円形	21	18	—	187	ＭＡ48	長方形	24	15	—
123	ＭＣ51	楕円形	25	19	—	191	ＭＣ48	楕円形	45	37	—
125	ＭＤ52	（楕円形）	34	(30)	—	193	ＭＣ49	楕円形	31	25	—
126	ＭＤ52	長方形	26	20	—	198	ＭＣ50	楕円形	26	24	—
127	ＭＤ52	方形	20	20	—	201	ＭＣ47	楕円形	58	55	—
128	ＭＤ52	楕円形	28	23	—	202	ＭＡ48	長方形	19	16	—
129	ＭＢ51	方形	15	14	—	203	ＭＡ47	（楕円形）	24	(20)	—
130	ＭＡ51	長方形	17	14	—	204	ＭＡ47	(不整な楕円形)	27	21	—
131	ＭＡ50	長方形	24	20	—	206	ＭＡ47	楕円形	23	19	—
132	ＭＤ50	長方形	38	22	—	207	ＭＡ47	楕円形	26	22	—
135	ＭＥ53	（長方形）	(15)	15	—	208	ＭＡ47	（楕円形）	36	(30)	—
136	ＭＢ51	（長方形）	33	(32)	—	209	ＭＡ47	円形	18	18	—
137	ＭＢ51	楕円形	27	25	—	210	ＭＡ47	円形	23	22	—
138	ＭＢ52	円形	16	15	—	211	ＭＡ47	長方形	28	25	—
142	ＭＢ49	楕円形	23	18	—	213	ＭＡ47	楕円形	40	36	—
143	ＭＢ49	長方形	26	24	—	214	ＭＡ47	（楕円形）	18	(17)	—
144	ＭＢ49	（楕円形）	23	(9)	—	222	ＭＢ50	長方形	28	12	—
146	ＭＢ49	不整な楕円形	33	32	—	223	ＭＢ50	長方形	20	16	—
147	ＭＢ49	楕円形	24	20	—	226	ＭＤ50	長方形	22	18	—
149	ＭＢ49	方形	32	31	—	227	ＭＣ49	不整な楕円形	24	15	—
151	ＭＡ49	楕円形	25	20	—	228	ＭＣ49	長方形	22	20	—
152	ＭＡ49	楕円形	30	27	—	229	ＭＣ49	楕円形	22	20	—
154	ＭＡ49	楕円形	31	22	—	230	ＭＣ49	長方形	20	16	—
155	ＭＡ48	長方形	48	32	—	231	ＭＣ49	不整な長方形	20	17	—
158	ＭＡ48	長方形	17	14	—	232	ＭＣ49	方形	25	24	—
159	ＭＡ48	楕円形	25	22	—	237	ＭＣ48	長方形	20	17	—
160	ＭＡ48	長方形	25	22	—	238	ＭＣ49	長方形	25	20	—
161	ＭＡ49	楕円形	30	20	—	239	ＭＣ49	長方形	27	20	—
162	ＭＡ49	長方形	23	20	—	240	ＭＣ49	（楕円形）	(30)	22	—
163	ＭＡ49	楕円形	20	20	—	241	ＭＣ49	円形	22	21	—
165	ＭＡ49	長方形	19	17	—	242	ＭＣ49	楕円形	45	38	—
166	ＭＡ49	楕円形	26	22	—	245	ＭＣ49	楕円形	32	24	—
168	ＭＢ48	長方形	25	15	—	249	ＭＢ50	方形	28	28	—
169	ＭＢ48	楕円形	25	18	—	257	ＬＴ46	楕円形	20	18	—

第４表　柱穴様ピット観察表（３）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
258	ＬＴ46	楕円形	30	22	—	354	ＬＲ48	楕円形	18	17	—
262	ＭＡ53	楕円形	23	21	—	355	ＬＲ48	楕円形	30	21	—
264	ＭＡ53	円形	18	18	—	356	ＬＲ48	楕円形	30	25	—
265	ＭＡ53	楕円形	32	28	陶磁器:1	357	ＬＲ48	楕円形	26	21	—
267	ＭＡ53	（楕円形）	26	(23)	—	359	ＬＲ48	（長方形）	(30)	30	—
268	ＭＡ53	楕円形	22	20	—	362	ＬＲ52	円形	28	28	—
269	ＭＢ52	楕円形	29	22	—	366	ＬＲ52	（楕円形）	(25)	18	—
273	ＬＳ48	円形	21	20	—	367	ＬＲ52	円形	30	30	—
277	ＬＴ49	楕円形	27	25	—	372	ＬＳ47	楕円形	25	23	—
289	ＭＢ51	楕円形	24	16	—	373	ＬＳ48	楕円形	41	27	—
290	ＭＢ51	楕円形	20	13	—	374	ＬＳ47	楕円形	27	25	—
292	ＭＡ52	楕円形	26	22	—	375	ＬＳ47	円形	25	24	—
295	ＭＡ52	円形	28	28	—	377	ＬＱ48	不整な楕円形	34	24	—
301	ＭＡ47	楕円形	23	19	—	380	ＬＱ48	楕円形	30	28	—
302	ＭＡ47	円形	17	17	—	382	ＬＲ52	楕円形	48	30	—
303	ＭＢ53	楕円形	27	25	—	383	ＬＲ52	（楕円形）	20	(17)	—
304	ＭＢ53	楕円形	30	26	—	386	ＬＲ52	円形	21	20	—
305	ＭＢ53	（楕円形）	(26)	24	—	387	ＬＲ52	長方形	56	30	陶磁器:1
306	ＭＢ54	（楕円形）	18	(16)	—	388	ＬＲ52	（楕円形）	32	(28)	—
307	ＭＢ54	円形	21	20	—	390	LR・LS52	長方形	45	40	—
310	ＭＢ54	円形	20	20	—	392	ＬＱ52	長方形	13	11	—
311	ＭＢ54	楕円形	36	29	—	400	ＭＥ51	楕円形	22	20	—
320	ＭＡ52	楕円形	26	22	—	401	ＭＣ51	楕円形	35	33	—
321	ＭＡ52	長方形	16	14	—	402	ＭＣ51	（楕円形）	(56)	48	—
322	ＭＡ52	長方形	22	20	—	408	ＭＢ51	楕円形	30	27	陶磁器:1
323	ＭＡ52	楕円形	34	29	—	413	ＭＡ52	長方形	30	21	—
326	ＭＡ52	楕円形	38	36	—	417	LS・LT51	（楕円形）	22	(17)	—
327	ＭＡ52	楕円形	64	40	—	418	ＬＲ52	長方形	20	18	—
329	ＬＱ51	方形	20	20	—	419	ＬＱ48	楕円形	24	19	—
335	ＬＱ52	楕円形	42	35	—	420	ＬＴ49	楕円形	68	54	陶磁器:1
336	ＬＱ52	楕円形	35	32	陶磁器:1	423	ＭＢ51	楕円形	36	25	陶磁器:1
339	ＬＱ51	楕円形	33	25	—	427	ＬＴ50	長方形	23	18	—
340	ＬＱ51	円形	20	20	—	429	ＭＡ50	楕円形	22	13	—
345	ＭＣ54	楕円形	31	29	—	434	ＬＱ45	円形	34	33	—
346	ＭＢ53	楕円形	30	26	—	435	ＬＳ53	楕円形	26	24	—
347	ＭＤ51	楕円形	24	20	—	436	ＬＴ51	楕円形	18	15	—
349	ＭＤ51	楕円形	20	17	—	451	ＭＤ51	長方形	23	21	—
350	ＭＤ51	楕円形	26	18	—	452	ＭＢ52	楕円形	56	47	—
351	ＬＲ48	楕円形	33	26	—	453	ＭＢ51	楕円形	38	30	—
352	ＬＲ48	楕円形	30	20	—	454	ＭＢ51	（楕円形）	30	(23)	—
353	ＬＲ48	長方形	25	20	—	457	ＭＢ47	楕円形	50	40	—

第５表　柱穴様ピット観察表（４）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
459	ＭＢ47	楕円形	30	20	—	523	ＬＰ45	楕円形	133	65	—
461	ＭＢ47	長方形	18	14	—	524	ＬＰ45	楕円形	23	14	—
462	ＭＢ48	長方形	25	13	—	525	ＬＰ45	楕円形	38	25	—
464	ＭＢ49	方形	20	20	—	526	ＬＰ45	長方形	20	17	—
466	ＭＢ49	円形	19	18	—	527	ＬＰ45	円形	25	24	—
468	ＭＡ48	楕円形	26	23	—	528	ＬＰ45	長方形	20	18	—
469	ＭＡ48	楕円形	25	18	—	529	ＬＳ48	楕円形	25	22	—
471	ＬＳ46	楕円形	18	15	—	530	ＬＳ48	（楕円形）	(26)	23	—
472	ＬＳ46	長方形	39	32	—	531	ＬＲ48	楕円形	25	20	—
473	ＬＳ46	円形	15	15	—	534	ＬＲ48	楕円形	23	20	—
474	ＬＲ46	楕円形	25	23	—	535	ＬＲ48	（楕円形）	(28)	25	—
475	ＬＲ46	楕円形	35	23	—	537	ＬＴ50	楕円形	36	30	—
476	ＬＲ46	不整な楕円形	68	28	—	538	ＬＴ50	楕円形	36	25	—
477	ＬＲ46	楕円形	54	30	—	539	ＬＴ50	楕円形	24	20	—
478	ＬＲ46	楕円形	30	25	—	540	ＬＴ50	不整な楕円形	47	38	—
479	ＬＲ46	方形	70	70	—	541	ＬＴ50	楕円形	20	16	—
480	ＬＲ46	不整な長方形	33	30	—	543	ＭＡ50	楕円形	44	31	—
481	ＬＲ46	楕円形	19	13	—	545	ＬＴ50	楕円形	26	22	—
485	ＬＱ46	楕円形	23	20	—	546	ＬＴ50	円形	20	20	—
487	ＬＱ46	楕円形	47	30	—	547	ＬＴ50	楕円形	20	18	—
488	ＬＱ46	円形	28	28	—	548	ＬＴ50	楕円形	27	21	—
489	ＬＱ46	長方形	85	75	陶磁器:1、須恵器:1	549	ＬＴ50	楕円形	20	18	—
490	ＬＱ46	楕円形	20	18	—	553	ＭＡ51	楕円形	33	24	—
491	ＬＱ46	楕円形	40	36	—	554	ＭＡ51	楕円形	26	21	—
492	ＬＲ48	楕円形	27	25	—	558	ＬＴ51	楕円形	40	30	—
493	ＬＲ48	（楕円形）	(20)	18	—	559	LT50・51	楕円形	24	18	—
494	ＬＲ48	楕円形	25	20	—	560	ＬＴ50	楕円形	32	22	—
495	ＬＲ49	楕円形	23	15	—	561	ＬＴ50	楕円形	21	19	—
498	ＬＴ51	楕円形	34	21	—	565	ＬＱ48	楕円形	26	24	—
499	ＭＡ49	楕円形	23	18	—	566	ＬＲ49	楕円形	25	20	—
504	ＬＴ49	長方形	60	55	—	567	ＬＲ49	楕円形	24	20	—
505	ＬＴ49	楕円形	26	23	—	569	ＬＲ48	楕円形	47	25	—
506	ＬＴ49	楕円形	30	28	—	570	ＬＳ48	楕円形	27	22	—
507	ＬＴ49	楕円形	36	31	—	578	ＬＳ48	長方形	34	25	—
508	ＬＴ49	楕円形	44	35	—	579	ＬＳ48	（楕円形）	(15)	12	陶磁器:1
509	ＬＴ49	楕円形	18	14	—	582	ＬＳ48	（楕円形）	48	(30)	—
515	ＬＲ46	方形	26	25	—	585	ＭＡ50	楕円形	20	16	—
516	ＬＲ46	長方形	90	65	—	587	ＬＲ47	楕円形	22	20	—
520	ＬＲ46	楕円形	25	20	—	590	ＭＡ52	円形	16	15	—
521	ＬＲ46	楕円形	18	16	—	591	ＭＡ52	不整な楕円形	28	24	—
522	ＬＲ46	楕円形	20	18	—	593	ＭＡ52	長方形	28	20	—

第６表　柱穴様ピット観察表（５）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
594	ＭＡ52	長方形	24	18	—	660	ＬＱ50	楕円形	25	22	—
595	ＭＡ51	楕円形	21	17	—	661	ＬＳ50	楕円形	25	21	—
596	ＭＡ51	方形	20	20	—	662	ＬＱ50	不整な楕円形	25	22	—
597	ＬＴ52	長方形	53	35	—	664	ＬＴ51	（楕円形）	33	(22)	—
599	ＬＴ52	楕円形	44	33	—	667	ＬＴ51	楕円形	20	18	—
600	ＬＴ52	長方形	30	24	—	668	ＬＳ51	方形	36	35	—
601	ＬＴ52	楕円形	26	23	—	669	ＬＳ51	楕円形	23	20	—
602	ＬＴ52	楕円形	30	23	—	670	ＬＳ51	長方形	30	28	—
603	ＬＴ52	（楕円形）	44	(36)	—	675	ＬＳ51	方形	31	30	—
604	ＬＴ52	楕円形	28	26	—	680	ＬＳ51	楕円形	19	17	—
605	ＬＴ52	円形	25	24	—	681	ＬＳ51	（楕円形）	29	(25)	—
607	ＬＴ53	不整な楕円形	26	23	—	683	ＬＳ51	楕円形	35	30	—
608	ＬＴ53	楕円形	32	26	—	684	ＬＳ51	不整な楕円形	28	20	—
609	ＬＴ53	長方形	48	42	—	685	ＬＳ51	（楕円形）	43	(33)	—
611	ＬＴ53	長方形	32	28	—	686	ＬＳ51	楕円形	19	16	—
612	ＬＴ53	楕円形	43	34	—	687	ＬＳ51	楕円形	27	25	—
613	ＬＴ53	長方形	83	75	—	688	ＬＳ51	楕円形	18	16	—
615	ＭＡ53	楕円形	27	22	—	689	ＬＳ51	楕円形	33	26	—
616	ＭＡ53	長方形	27	23	—	690	ＬＳ51	楕円形	33	29	—
617	ＭＡ53	長方形	24	22	—	691	ＬＳ51	楕円形	22	16	—
620	ＭＢ51	長方形	24	20	—	692	ＬＳ51	長方形	32	30	—
621	ＭＣ51	楕円形	28	26	—	693	ＬＳ51	楕円形	18	14	—
622	ＭＢ51	円形	25	24	—	694	ＬＳ51	楕円形	17	15	—
623	ＭＢ51	楕円形	20	15	—	697	ＬＳ51	長方形	25	22	—
624	ＭＢ51	楕円形	21	15	—	700	ＬＳ51	楕円形	25	20	—
625	ＭＢ51	楕円形	22	13	—	702	ＬＳ51	楕円形	23	19	—
626	ＭＢ51	楕円形	26	21	—	704	ＬＲ51	楕円形	23	21	—
629	ＭＢ51	長方形	40	33	—	705	ＬＲ51	長方形	23	18	—
630	ＭＢ52	円形	20	19	—	706	ＬＲ51	方形	20	20	—
631	ＭＢ52	長方形	20	18	—	707	ＬＲ51	長方形	30	25	—
632	ＭＢ52	円形	21	20	—	708	ＬＲ51	長方形	20	15	—
633	ＭＢ53	楕円形	20	18	—	709	ＬＲ51	円形	27	26	—
634	ＬＲ48	（楕円形）	43	(23)	—	710	ＬＲ51	楕円形	27	25	—
638	ＬＱ48	長方形	23	20	—	711	ＬＲ51	楕円形	22	20	—
639	ＬＲ48	楕円形	20	16	—	712	ＬＲ51	楕円形	24	20	—
640	ＬＲ49	楕円形	18	16	—	713	ＬＲ51	楕円形	18	15	—
641	ＬＳ49	楕円形	23	20	—	714	ＬＲ51	方形	15	15	—
642	ＬＳ49	楕円形	25	23	—	717	ＬＲ52	楕円形	15	13	—
646	ＬＴ48	長方形	22	20	—	718	ＬＲ52	楕円形	25	20	—
647	ＬＴ47	長方形	19	16	—	720	ＬＲ52	円形	28	28	—
649	ＬＴ47	（楕円形）	(40)	27	—	721	ＬＳ52	楕円形	18	16	—

第７表　柱穴様ピット観察表（６）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
722	Ｌ Ｓ52	円形	30	30	—	772	Ｌ Ｑ45	楕円形	70	48	—
723	Ｌ Ｓ52	楕円形	30	26	—	773	Ｌ Ｑ45	長方形	30	25	—
724	Ｌ Ｓ52	方形	27	27	—	774	Ｌ Ｑ45	方形	30	30	—
725	Ｌ Ｓ53	楕円形	24	18	—	775	Ｌ Ｑ45	楕円形	23	14	—
728	Ｌ Ｓ53	楕円形	26	23	—	776	Ｌ Ｑ44	楕円形	29	25	—
729	Ｌ Ｓ53	楕円形	43	37	—	777	Ｌ Ｑ44	円形	22	21	—
730	Ｌ Ｓ53	方形	21	20	—	778	Ｌ Ｑ44	楕円形	44	28	—
732	Ｌ Ｓ53	不整な楕円形	25	21	—	779	Ｌ Ｐ44	方形	20	19	—
733	Ｌ Ｓ53	円形	35	35	—	780	Ｌ Ｐ44	円形	16	15	—
734	Ｌ Ｒ53	楕円形	24	20	—	781	Ｌ Ｐ44	円形	17	16	—
736	Ｌ Ｒ53	長方形	25	20	—	782	Ｌ Ｑ43	楕円形	30	25	—
737	Ｌ Ｒ53	長方形	30	25	—	783	Ｌ Ｑ43	楕円形	27	20	—
738	Ｌ Ｒ53	（楕円形）	40	(30)	—	784	Ｌ Ｐ43	円形	21	20	—
739	Ｌ Ｒ53	楕円形	24	18	—	785	Ｌ Ｐ43	楕円形	23	18	—
742	Ｌ Ｒ53	円形	20	20	—	786	Ｌ Ｐ43	円形	18	18	—
743	Ｌ Ｒ53	円形	32	32	—	787	Ｌ Ｐ42	円形	18	18	—
744	Ｌ Ｒ53	楕円形	30	22	—	788	Ｌ Ｐ42	不整な楕円形	25	19	—
745	Ｌ Ｑ53	楕円形	21	16	—	789	Ｌ Ｐ42	不整な楕円形	25	22	—
747	Ｌ Ｐ52	楕円形	30	23	—	790	Ｌ Ｐ42	楕円形	20	18	—
748	Ｌ Ｑ47	楕円形	24	20	—	791	Ｌ Ｐ42	長方形	33	20	—
749	Ｌ Ｑ48	楕円形	32	25	—	792	Ｌ Ｐ42	楕円形	25	18	—
750	Ｌ Ｑ46	長方形	60	46	—	793	Ｌ Ｐ42	楕円形	20	17	—
751	Ｌ Ｓ46	楕円形	39	20	—	796	LQ43 南	楕円形	20	17	—
752	Ｌ Ｓ46	楕円形	30	25	—	797	Ｌ Ｔ47	楕円形	40	29	—
753	Ｌ Ｓ46	楕円形	43	36	—	801	Ｌ Ｍ51	円形	21	20	—
754	Ｌ Ｓ46	（楕円形）	24	(15)	—	802	Ｌ Ｍ51	楕円形	31	26	—
755	Ｌ Ｒ45	円形	26	25	—	803	LM51 東	楕円形	24	21	—
756	Ｌ Ｒ45	楕円形	26	23	—	804	LM51 東	楕円形	48	30	—
757	Ｌ Ｒ45	楕円形	40	32	—	805	Ｌ Ｍ50	楕円形	28	26	—
758	Ｌ Ｒ45	方形	25	24	—	806	Ｌ Ｍ50	楕円形	18	16	—
759	Ｌ Ｒ45	長方形	25	22	—	807	Ｌ Ｍ50	楕円形	20	18	—
760	Ｌ Ｒ45	楕円形	22	19	—	808	Ｌ Ｍ50	楕円形	45	40	—
761	Ｌ Ｒ45	楕円形	29	20	—	809	Ｌ Ｍ50	楕円形	20	18	—
762	Ｌ Ｒ45	楕円形	33	25	—	810	Ｌ Ｍ50	（楕円形）	38	(20)	—
763	LR45・46	円形	20	20	—	811	Ｌ Ｍ50	楕円形	28	25	—
765	Ｌ Ｒ44	楕円形	18	16	—	812	LM50 東	円形	20	20	—
766	Ｌ Ｒ43	楕円形	20	18	—	813	Ｌ Ｍ49	長方形	22	18	—
767	Ｌ Ｒ43	楕円形	25	21	—	814	Ｌ Ｍ49	楕円形	25	18	—
768	Ｌ Ｒ44	方形	13	12	—	815	Ｌ Ｍ49	楕円形	22	20	—
769	Ｌ Ｑ46	楕円形	29	25	—	816	Ｌ Ｍ49	方形	17	17	—
770	Ｌ Ｑ46	不整な楕円形	30	25	—	817	Ｌ Ｍ48	楕円形	26	20	—

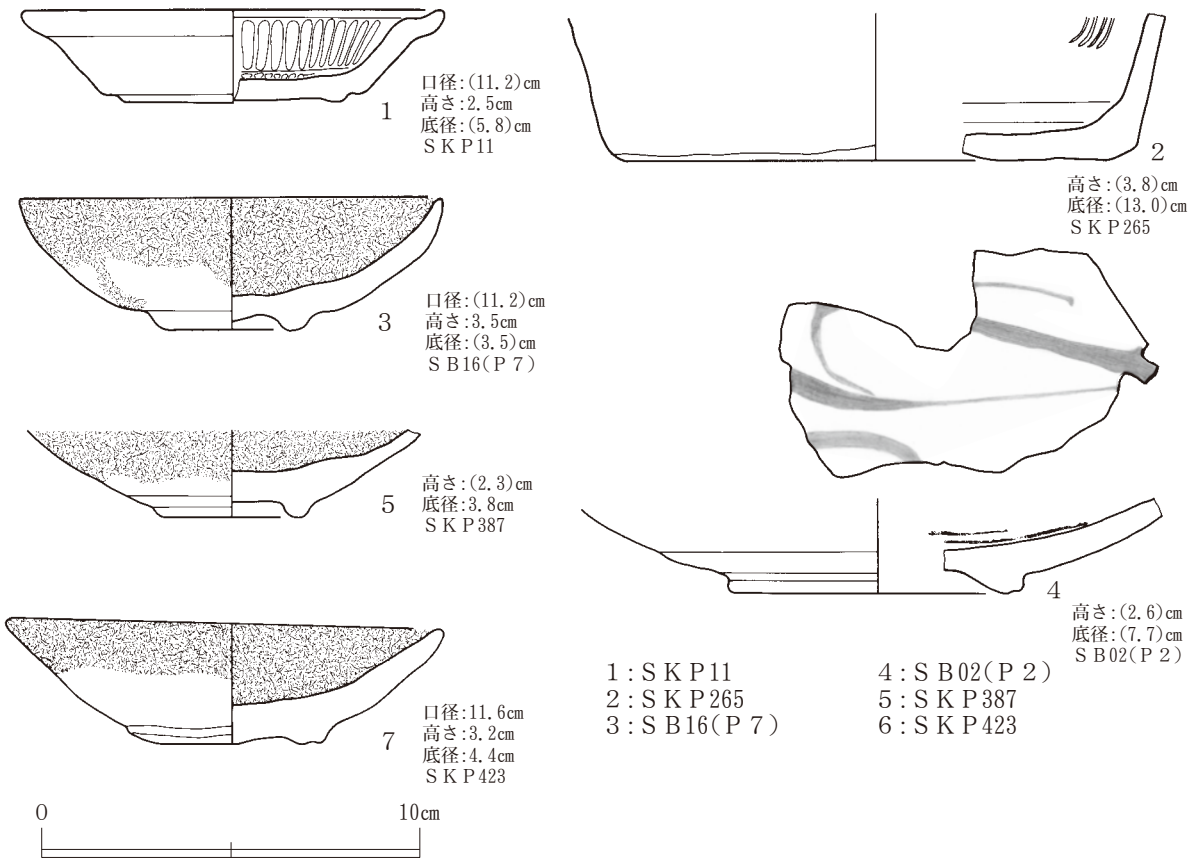
第８表　柱穴様ピット観察表（７）

ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数	ＳＫＰ番号	検出グリッド	平面形	大きさ 長軸（cm）	大きさ 短軸（cm）	出土遺物：点数
818	ＬＭ48	円形	21	20	—	825	ＬＳ48	楕円形	35	32	—
819	ＬＭ48	長方形	25	20	—	828	ＭＤ51	長方形	20	15	—
820	ＬＭ48	長方形	23	18	—	829	ＭＣ53	方形	30	30	—
821	ＬＭ47	長方形	22	20	—	830	ＭＣ53	長方形	33	30	—
822	ＬＳ51	楕円形	35	30	—						

(10)柱穴様ピット(付図)

調査時に確認した柱穴様ピットは656基であるが、その後に掘立柱建物跡の柱穴となったものもあり、最終的には501基である。計測値等は第２表～第８表のとおりである。

《出土遺物》ＳＫＰ11柱穴様ピットより陶磁器片２点〔その内の１点(第29図１、図版４－３)〕、ＳＫＰ265柱穴様ピットより陶磁器１点(第29図２)、ＳＫＰ387柱穴様ピットより陶磁器片１点(第29図５)、ＳＫＰ423柱穴様ピットより陶磁器片１点(第29図６、図版４－４)が出土した。



第29図　ＳＢ02(Ｐ２)・16(Ｐ７)掘立柱建物跡、ＳＫＰ11・265・378・387・423柱穴様ピット出土陶磁器実測図

２　遺構外出土遺物

遺構外からは、中・近世陶磁器と、古代の土師器・須恵器などが中コンテナで７箱分出土した。

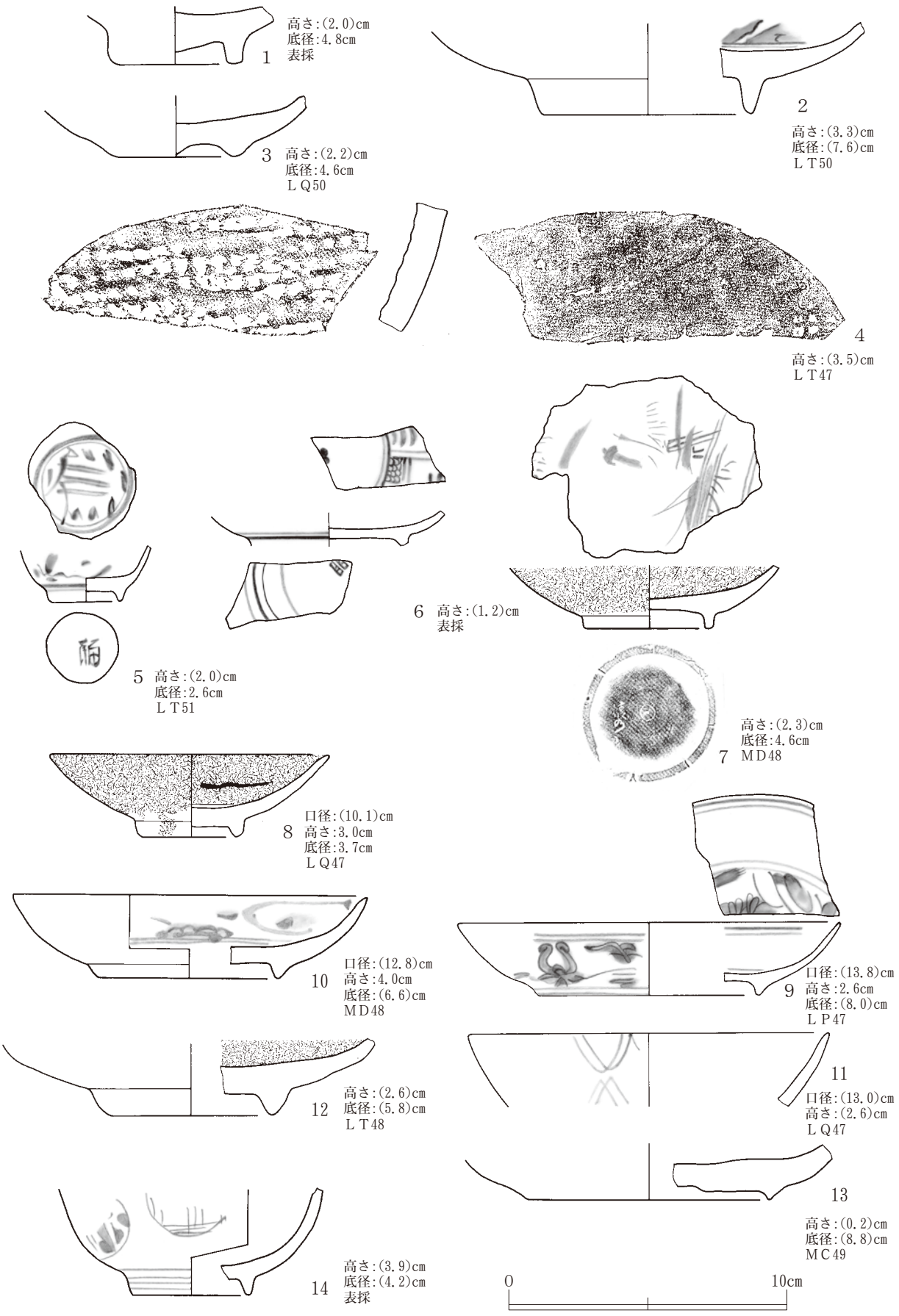
(１)肥前陶磁器

陶器は、16世紀末～17世紀初頭に生産された胎土目積みと砂目積み段階の皿(第30図３)が多数出土したほか、内側に波状叩き痕や格子目状叩き痕(第30図４)のある瓶・甕類(第31図25・26)、17世紀後半～18世紀前半にかけ京焼の影響を受けた京焼風陶器(第30図７)、内側に銅緑釉、外側に透明釉を掛分け、見込み蛇目釉剥する内野山窯産の皿(第30図12)などが出土した。

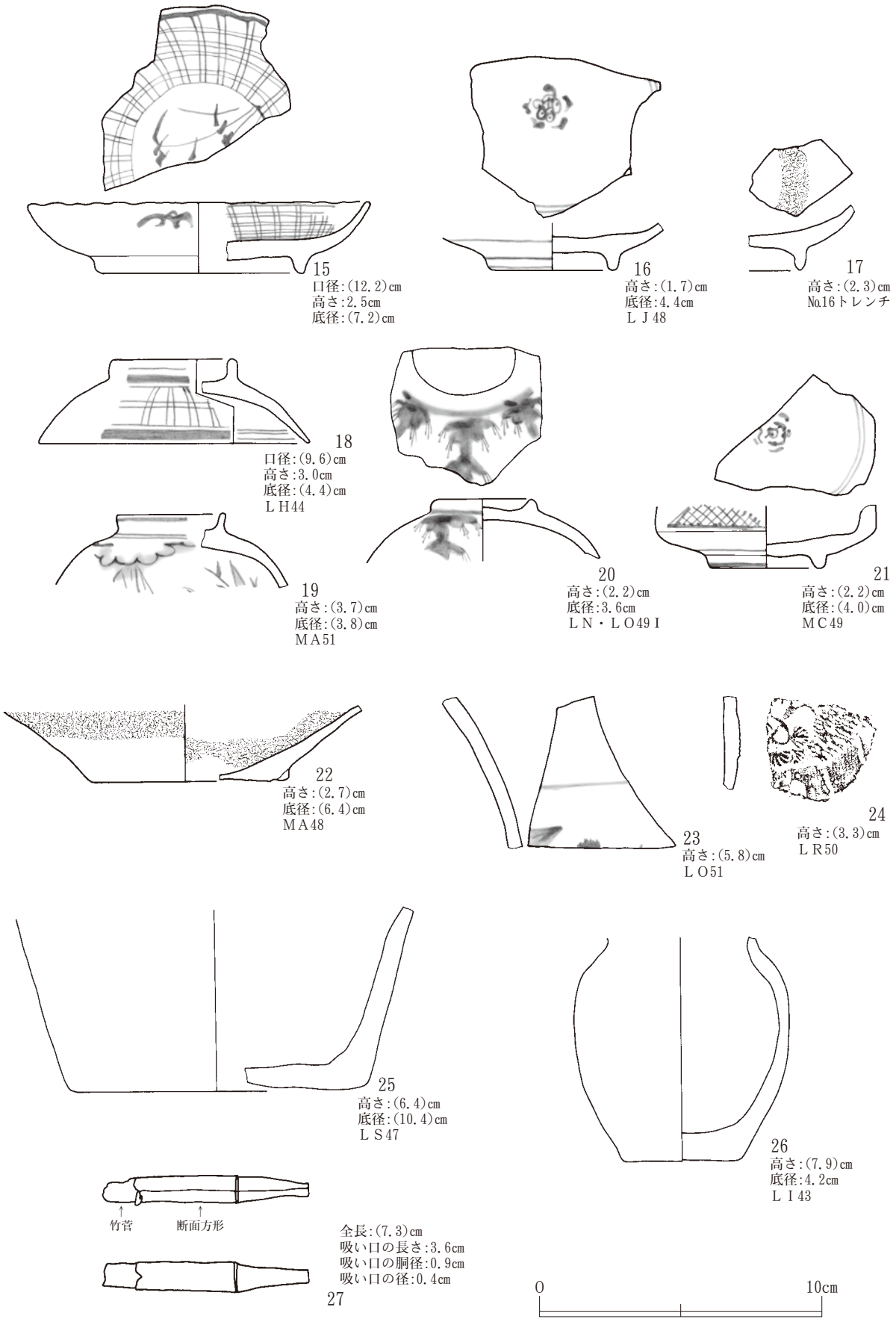
一方磁器は、磁器生産が始まった17世紀初頭に作られた通称「初期伊万里」碗・皿(第30図１・２)をはじめ、17世紀後半に見込みを蛇目釉剥する皿(第30図８)や素地が厚手で飴色の「くらわんか」手と呼ばれた粗略で安価な波佐見産の碗(第30図14)・皿(第30図11)が、また海外輸出用に生産された「芙蓉手」皿(第30図６)や見込みに「五花弁」を押したコンニャク印判の技法を使用した皿(第31図16)、19世紀に流行した端反碗蓋(第31図19・20)などが出土した。

(２)その他の遺物

江戸時代初頭の瀬戸美濃陶器や中国産と思われる皿(第30図９)、江戸時代後期の関西系行平鍋(第31図22)などの陶器類、貝風呂などの土製品、煙管(第31図27)や寛永通宝などの金属製品、砥石、八世紀の土師器や須恵器の甕・坏が出土した。



第30図　遺構外出土陶磁器実測図（１）



第31図　遺構外出土陶磁器、煙管実測図（２）

第３章　まとめ

沖田Ⅱ遺跡は、旧雄物川沿いの標高20～21ｍの微高地上に立地する近世の集落跡である。遺跡のある北楢岡は、江戸時代には羽州街道の宿場駅が存在していた。そのため沖田Ⅱ遺跡は北楢岡宿場との関連が考えられ、近世秋田の地方の人々の暮らしを探るための重要な遺跡である。

１　文献から見る北楢岡

遺跡周辺の羽州街道は、道筋が現在の国道13号線とほぼ同じであった。北楢岡という地名の初見は『梅津政景日記』元和六(1620)年九月条に「北なら岡」、また菅江真澄『月の出羽路』によると、もとは「神宮寺新町村」、後に「新町」と称したと記されている。これは羽州街道の整備により、神宮寺村の新町として北楢岡(1660年)が誕生したことを示している。以後宿場の月当番を神宮寺とともに半月交替で務めることとなった。

２　検出遺構

(１)掘立柱建物跡及び柱列跡

掘立柱建物跡18棟、柱列跡４条を確認した。天明八(1778)年に幕府巡検使に同行して来秋した古川古松軒は『東遊雑記』で、「此辺の家を見るに、建てやうもかわりて、一家も残りなく土間住居なり」と記していることから、これらの掘立柱建物跡は土間床に藁壁の粗末な造りであったと思われる。掘立柱建物跡の主軸は18棟中３棟(ＳＢ01・16・14)が北東－南西で、10棟(ＳＢ02・04～07・09・11・13・15・18)が東－西、他に４棟(ＳＢ03・10・12・17)北－南、１棟(ＳＢ08)が北西－南東であるが、重複する掘立柱建物跡が少なく、主軸による具体的な掘立柱建物跡の編年は不明である。掘立柱建物跡の間尺は基本的に、江戸時代前期には６尺３寸(1.91ｍ)や６尺５寸(1.97ｍ)などが主流だが、検出された掘立柱建物跡群はそのいずれにも属せず、木材の規格性もない。ＳＢ16掘立柱建物跡は他の掘立柱建物跡より比較的大きく、この集落の村役的な人物が住んでいた可能性がある。またＳＤ150・556・426溝跡、ＳＬ195河道跡はそれぞれ屋敷区画の役割をしていたと思われる。

(２)かまど状遺構

かまど状遺構は中世の遺構とされてきたが、沖田Ⅱ遺跡の調査により、近世にも使用されていたことが明らかとなった。９基(１基は作り替え)が確認され、煙道、燃焼部本体、焚口部からなる。同様の遺構が、近隣では岳遺跡、薬師遺跡でも確認されているが、形状は岳遺跡のかまど状遺構に似て、燃焼部を中心とした煙道部と焚口部が直線でなく、広角度をもつものがほとんどである。また煙道の向きは、南１、南東３、南西１、東２、北東１、北１である。ＳＯ456は煙道が南→西へ作り替えられているが、その他は明確な時期差を捉えることができない。また煙道の方向にも規則性を見ることができない。

(３)井戸跡

井戸跡は、４基確認した。径1.0～1.3ｍ、深さ1.0～1.7ｍと同規模で比較的浅い掘り込みで、確認面から0.4～0.7ｍの深さで段差があり、そこからさらに掘りこまれている。ＳＥ298井戸跡では木枠が残存していた。ＳＥ514井戸跡からは数点の遺物が出土し、この中には完形の天目型肥前陶器碗(江戸時代初期)があった。その出土状況から廃棄儀礼が行われたと考えられる。また久保田城下(秋田

市)遺跡である古川堀反町遺跡でも井戸跡が２基検出されたが、上級武士の屋敷跡らしく、井戸は桶の底を抜いたものを数段重ねた構造で、廃棄儀礼として、砂や巨岩で井戸を埋め戻した状態も明確であった。しかし沖田Ⅱ遺跡の生活者は被支配階級であり、儀礼も簡略化し、一気に埋め立てた様子がうかがえ、支配階級と被支配階級の儀礼に対しての認識の違いを読み取ることができる。

３　出土遺物

瀬戸美濃陶器は、大窯時代と思われる見込み部分を釉剥した灰釉陶器皿や稜花皿が出土している。

肥前陶器(唐津焼)は、16世紀末～17世紀後半に生産された胎土目積み段階(1580～1610年)、砂目積み段階(1610～1640年)の皿が数多く出土し、砂目積み段階には、口縁部Ｎ字状溝縁皿(1610～1630年)やＳＥ298井戸跡からは天目型碗が出土した。17世紀後半～18世紀初頭にかけ、京焼の影響を受けた京焼風陶器碗や、18世紀前半の内野山窯産の皿も出土している。一方、甕・壺類は、内側の叩き成形痕が波状と格子目状の二種類を確認した。1630年頃を境に、波状から格子目状へ移行する。

肥前磁器は、1610～1650年代のものを特に「初期伊万里」と呼び、その時代の碗や皿の他、17世紀後半になると波佐見産の安価な見込蛇目釉剥ぎの白磁や青磁、「くらわんか」手の碗・皿が出土している。しかし18世紀も後半になると遺物の出土数が極端に減少する。19世紀に流通する端反碗蓋や江戸時代後期の関西系行平鍋、在地系土製品である貝風呂なども出土しているが、18世紀前半以前ほどの出土量はなく、遺構内出土もないことから、他所から持ち込まれたものと推測される。また出土する近世陶磁は、比較的安価な大量生産品であり、久保田城下遺跡と出土遺物の内容差が歴然である。

金属製品では「寛永通宝」や煙管が出土していた。煙管は、ＳＥ298井戸跡から出土した雁首は火皿が補強され首部と接合していたり、遺構外から出土した吸口も肩部があることから18世紀前半以前のものと推測される。

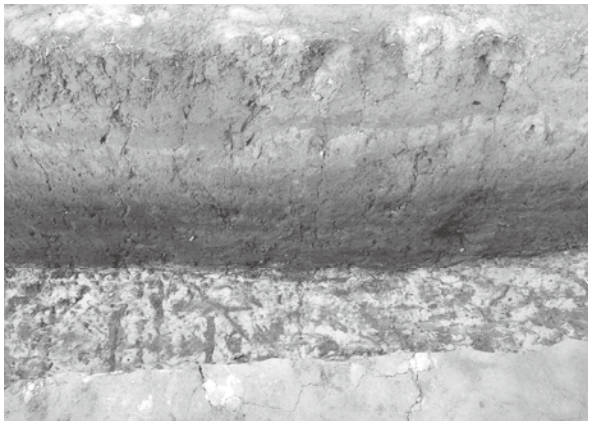
以上から、沖田Ⅱ遺跡は、16世紀後半～18世紀前半に集落が存在し、その後突如この集落を捨て、いずこかへ移り住んだと考える。その原因は、調査中でも柱穴底部に達する前に水脈に当たるという水はけの悪さである。また18世紀後半には、数度の洪水により東隣の神宮寺でも、この時期廃村に追い込まれた村がある。北楢岡も同様に考えられ、遺物の出土状況とも一致する。

引用・参考文献

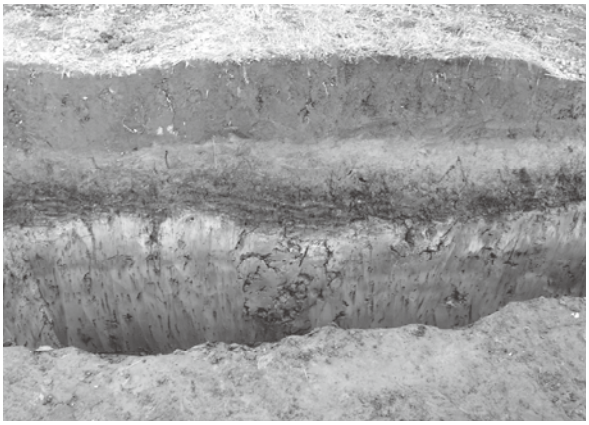
秋田県教育委員会『歴史の道調査報告Ⅷ　南部羽州街道』秋田県文化財調査報告書第141集　1986(昭和61)年
「角川日本地名大辞典」編集委員会『角川地名大辞典　５　秋田県』角川書店　1980(昭和55)年
秋田市『秋田市史　第十五巻　美術・工芸編』2000(平成12)年
秋田県教育委員会『薬師遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第388号　2005(平成17)年
小林克「岳下遺跡検出の窯跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号　1995(平成７)年
秋田県教育委員会『古川堀反町遺跡－秋田中央警察署改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第435集　2008(平成20)年
大橋康二『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニューサイエンス社1989(平成元)年
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000(平成12)年
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房　2001(平成13)年

1　**遺跡全景**（東から）

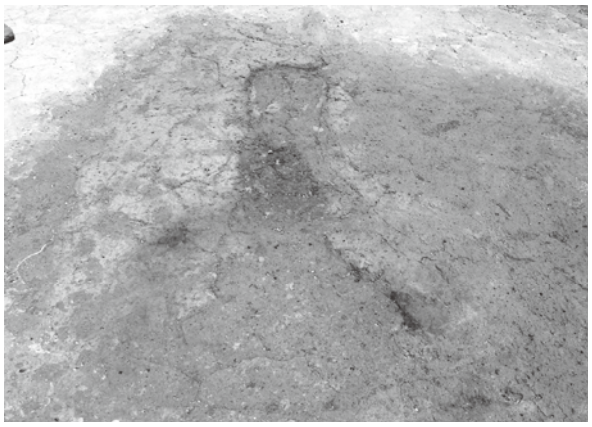
2　**西区近景**（南西から）



1　西区基本土層（南から）



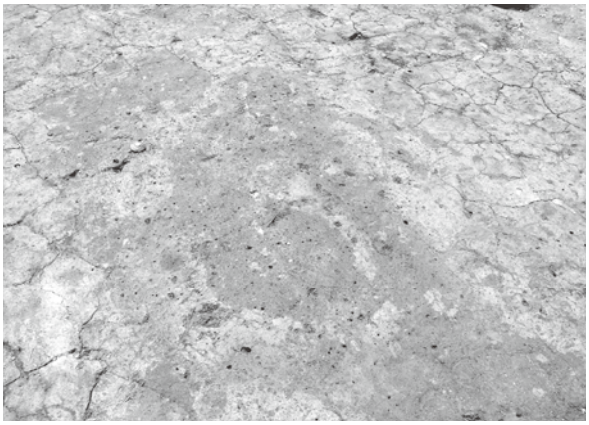
2　東区基本土層（西から）



3　ＳＯ100かまど状遺構確認状況（南から）

4　ＳＯ100かまど状遺構断面（南から）

5　ＳＯ100かまど状遺構完掘状況（南から）

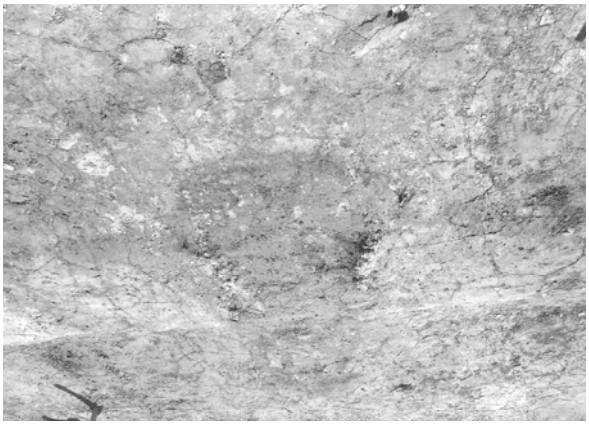


6　ＳＯ410かまど状遺構確認状況（南西から）

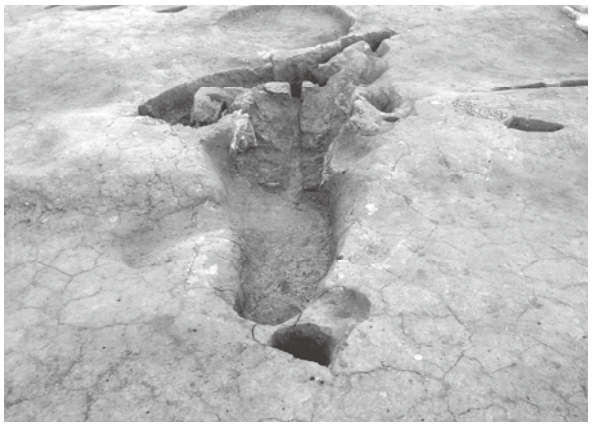
7　ＳＯ410かまど状遺構断面（北東から）

8　ＳＯ261かまど状遺構断面（北西から）

1　ＳＯ261かまど状遺構完掘状況（北西から）



2　ＳＯ405かまど状遺構確認状況（西から）



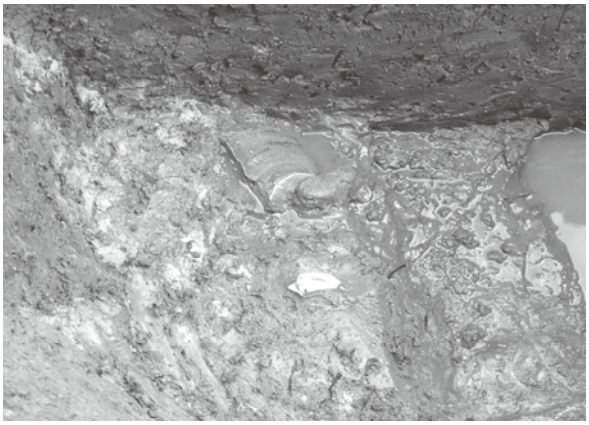
3　ＳＯ405かまど状遺構完掘状況（西から）

4　ＳＯ455かまど状遺構確認状況（西から）

5　ＳＯ550かまど状遺構完掘状況（西から）

6　ＳＥ298井戸跡断面（南から）

7　ＳＥ298井戸跡完掘状況（南から）

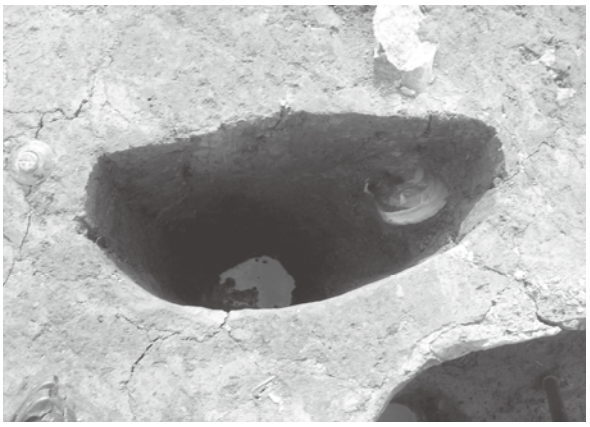


8　ＳＥ298井戸跡遺物出土状況（南から）

1　ＳＥ361井戸跡完掘状況（南から）

2　ＳＥ514井戸跡遺物出土状況（西から）

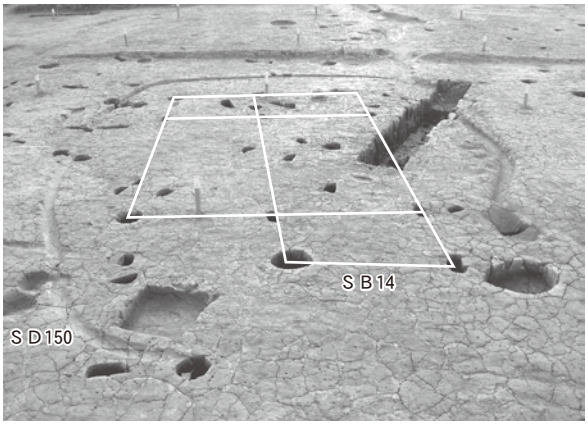
3　ＳＫＰ11柱穴様ピット遺物出土状況（西から）



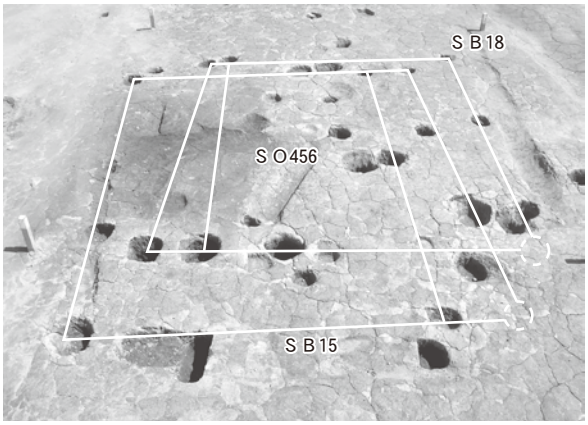
4　ＳＫＰ423柱穴様ピット遺物出土状況（東から）

5　西区南側（西から）

6　ＳＤ794・795溝跡完掘状況（南から）



7　ＳＢ14掘立柱建物跡、
ＳＤ150溝跡完掘状況（東から）



8　ＳＢ15・18掘立柱建物跡、
ＳＯ456かまど状遺構完掘状況（西から）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	おきたいせき・おきたにいせき
書　　名	沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡
副　書　名	一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅲ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第443集
編 著 者 名	栗澤光男・山村　剛・菅原博志
編 集 機 関	秋田県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20　TEL 0187-69-3331
発行年月日	西暦2009年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おきたいせき 沖田遺跡	あきたけんだいせん 秋田県大仙 しきたならおかあざ 市北楢岡字 おきたばんち 沖田60番地 ほか 外	05212	45－22	39° 30′ 08″	140° 24′ 11″	20070531 ～ 20071115	8,040㎡	一般国道13号神宮寺バイパス建設事業
おきたにいせき 沖田Ⅱ遺跡	あきたけんだいせん 秋田県大仙 しきたならおかあざ 市北楢岡字 おきたばん 沖田387番 ちほか 地外	05212		39° 30′ 25″	140° 23′ 36″	20080609 ～ 20080910	2,900㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
沖田遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 平安時代 近世以降	配石遺構 掘立柱建物跡 土坑 焼土遺構 河道跡 井戸跡 溝跡 柱穴様ピット	1基 1棟 4基 1基 3条 8基 5条 55基	縄文土器 土師器・須恵器 墨書土器 陶磁器・煙管	十和田ａ火山灰が推積する河道跡から、「寺」「人」「兄」などの文字が記された墨書土器が出土した。
要　約	平安時代の集落跡の一部と考えられる。					

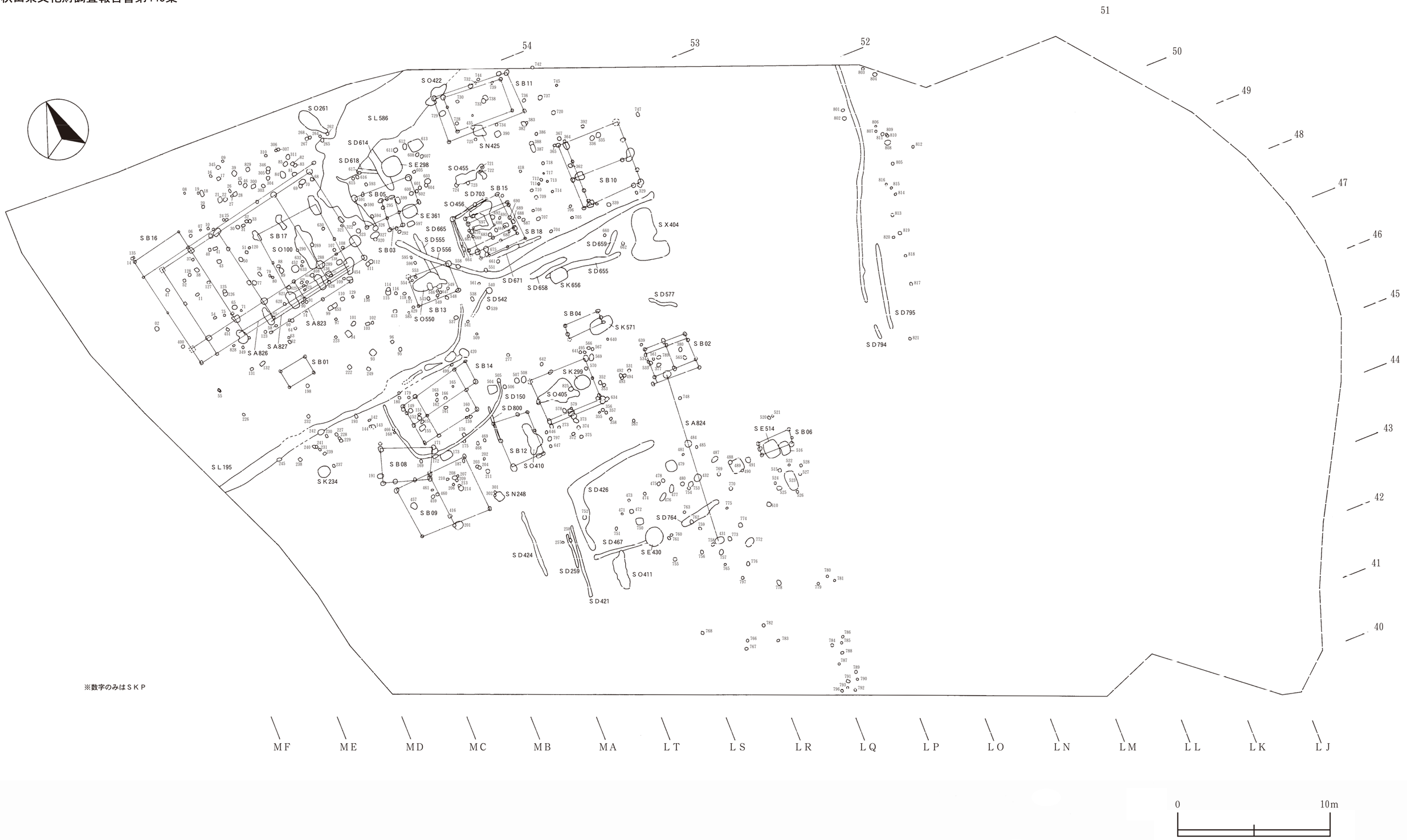
所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
沖田Ⅱ遺跡	散布地 集落跡	平安時代 江戸時代	掘立柱建物跡 かまど状遺構 焼土遺構 井戸跡 土坑 柱列 溝跡 河道跡 柱穴様ピット 性格不明遺構	18棟 9基 2基 4基 4基 4条 22条 2条 501基 1基	土師器・順恵器 陶磁器・煙管	江戸初期の陶磁器が多く出土した。
要　約	江戸時代の集落跡と考えられる。					

秋田県文化財調査報告書第443集

沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡

－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－

印刷・発行　平成21年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331　FAX(0187)69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話(018)860-5193
印　　刷　株式会社フロム・エー



付図　沖田Ⅱ遺跡遺構配置図